
王寺町文化財調査報告書 第19集

西安寺跡

発掘調査報告書

一舟戸神社境内編一



写真1 塔東面の側柱礎石列（第3次南から）



写真2 金堂東面の側柱礎石列（第4次北から）



写真3 塔基壇と礎石（第7次北から）





刊行によせて



王寺町長 平井 康之

このたび、これまで史跡の保存と活用をめざして取り組んできた西安寺跡における発掘調査の成果を総括し、『西安寺跡発掘調査報告書―舟戸神社境内編―』を刊行する運びとなりました。

西安寺跡は、今の舟戸神社付近にあった寺院の遺跡であり、創建は飛鳥時代にまでさかのぼると考えられてきました。河内と大和を結ぶ重要な交通路であった大和川と接するようにあり、聖徳太子が建立したという46か寺の1つに数えられています。

平成27年（2015）2月、西安寺跡にあたる舟戸神社の境内地を初めて発掘してみると、立派な礎石が据えられた塔跡が発見されました。当時、王寺町文化財保護審議会の会長に就任していただいていた菅谷文則先生（奈良県立橿原考古学研究所 所長）も現地をご覧になり、西安寺跡の遺跡の重要性と保存を熱く語られていたことを思い出します。

その後、誠に残念ながら、菅谷先生は令和元年（2019）6月に亡くなりましたが、先生の遺志を受け継いで西安寺跡の調査を続けてきた結果、塔跡が法隆寺五重塔にも匹敵する大きさであることや、聖徳太子が建立した法隆寺若草伽藍と同じ木型でつくられた軒瓦も使用されていたことなどが明らかになりました。

平成31年（2019）2月22日には、西安寺跡が奈良県指定史跡に指定されました。さらに今後は、国指定の史跡に指定されるように活動を続け、遺跡の保存に万全を期したいと思います。また、保存と同時に、王寺町の西安寺跡がどのような寺院であったのかを多くの人に知ってもらえるように、遺跡の整備と活用も進めていきたいと思っています。

最後になりましたが、発掘調査では、舟戸神社をはじめとする土地所有者様や周辺自治会の方々にご協力をいただき、文化庁・奈良県の文化財部局や西安寺跡史跡整備活用委員会の先生方からは多大なご指導・ご助言を賜りました。記して感謝申し上げますとともに、これからも引き続きご協力、ご指導くださいますようお願い申し上げます。

目次

第1章	はじめに	11
1	地理的環境	(福井彩乃) 13
2	歴史的環境	(福井) 14
3	西安寺に関する文献史料	(岡島永昌) 18
第2章	調査の概要	21
1	確認調査を始めるまで	(櫻井 恵) 23
2	これまでの確認調査	(櫻井) 24
3	西安寺跡の層序	(櫻井) 31
第3章	検出遺構	37
1	塔	(櫻井 恵) 39
2	金堂	(櫻井) 52
3	回廊	(櫻井) 68
4	金堂の北方	(櫻井) 76
第4章	出土遺物	83
1	軒丸瓦	(櫻井 恵) 85
	i 素弁蓮華文 / ii 単弁蓮華文 / iii 忍冬蓮華文 / iv 複弁蓮華文 / v 重圈文 / vi 梵字文 / vii 巴文	
2	軒平瓦	(櫻井) 106
	i 無文 / ii 三重弧文 / iii 唐草文 / iv 近世瓦	
3	丸瓦	(福井彩乃) 124
	i 行基丸瓦 / ii 玉縁丸瓦	
4	平瓦	(福井) 134
	i 桶巻作り平瓦 / ii 一枚作り平瓦	
5	道具瓦	(櫻井) 143
	i 鴟尾 / ii 鬼瓦 / iii 雁振瓦 / iv 隅木蓋瓦 / v 埴 / vi 線刻・刻印瓦	
6	土器	(櫻井) 154
	i 塔・金堂周辺出土 / ii 回廊出土 / iii 金堂の北方出土 / iv 主要伽藍周辺の出土	
7	その他の遺物	(櫻井) 160
	i 建築部材 / ii 金属製品 / iii 壁土 / iv 凝灰岩	

第5章	まとめ	165
1	出土瓦から見た寺院造営の画期	(櫻井 恵) 167
2	伽藍の復元と推移	(岡島永昌) 176
3	西安寺跡の歴史的意義	(岡島) 186
第6章	付論	191
1	西安寺出土重弧紋軒平瓦の系譜と年代	(大脇 潔) 193
2	西安寺跡の石材の石種と採石推定地	(奥田 尚) 201
3	出土柱材(木製灯籠)の樹種同定	(福田さよ子) 205
第7章	資料	209
1	調査体制	211
2	西安寺跡史跡整備活用委員会	215
3	掲載図表一覧	218
4	掲載写真一覧	220
5	参考文献	226

凡例

- 本書は、王寺町文化財調査報告書第19集として刊行する西安寺跡において実施した遺跡範囲確認調査の総合報告書である。
- 本書で報告するのは、平成26年(2014)度の第3次調査から令和3年(2021)度の第11次調査までであり、おおむね舟戸神社境内において実施しているため、副題を舟戸神社境内編とした。
- 調査回数ごとに王寺町文化財調査報告書として刊行しているため、別途、参照されたい。
- 本書で使用する座標数値は世界測地系、水準地はT.P.値(東京湾平均海面値)に基づく。
- 土層及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖23版」による。
- 本書第6章には、西安寺跡史跡整備活用委員会委員の大脇潔氏(奈良文化財研究所 名誉研究員)、石材及び樹種に関して調査協力を依頼した奥田尚氏(奈良県立橿原考古学研究所 特別指導研究員)、福田さよ子氏(奈良県立橿原考古学研究所 共同研究員)からの寄稿を掲載した。
- 出土遺物をはじめ調査に関するすべての記録は、王寺町において保管している。
- 本書は、王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 係長の岡島永昌、同係 会計年度任用職員 櫻井恵、同係 会計年度任用職員 福井彩乃が執筆し、目次にその分担を示した。編集は岡島が担当した。表紙デザインは福井による。

第1章

はじめに

- 1 地理的環境
- 2 歴史的環境
- 3 西安寺に関する文献史料

1 地理的環境

■ **王寺町の位置** 王寺町は奈良県の北西部にあり、奈良盆地の河川の水を1つにまとめる大和川の左岸に位置する。東に河合町、東南に上牧町、南に香芝市、大和川を挟んで北に三郷町、斑鳩町と接している。西は生駒山地と金剛山地に挟まれた亀の瀬と呼ばれる溪谷を抜けると大阪府柏原市が広がっており、大阪府と奈良県の府県境になっている。

王寺町は地形的に、河合町から延びる馬見丘陵の北端で砂礫・粘土の大阪層群からなる東部丘陵、町域を北流する葛下川と北を西流する大和川の沿岸で沖積層が堆積する東部低地、二上山火山群の北への延長である西部高地、東部低地と西部高地との漸移地帯で大阪層群からなる西部丘陵に分けられる。

■ **西安寺跡の立地** 西安寺跡は王寺町の北東部にあり、東部丘陵の北端にあたる標高80mの舟戸山の西麓、舟戸山の谷筋が広がる傾斜地に立地する。現在では舟戸神社が鎮座しており、境内には西安寺跡の堂塔の遺構がある。舟戸神社を中心とする東西約110m、南北約120mの範囲を周知の埋蔵文化財包蔵地としている。

舟戸神社の境内は周囲の土地から1～2m程度高く、最高所は標高45.5mである。境内の東側には舟戸山の傾斜を利用した耕作地が広がっており、隣接地は水田が営まれている。境内の西端には南北方向に流れる水路があり、この水路を境に西側では住宅地が広がっている。昭和40年代に宅地開発がされるまでは水田が営まれていた。南側の旧王寺北小学校は、標高67.5mの東部丘陵を造成して設置されたものであり、本来、西安寺の南側は丘陵の裾が間近に迫っていた。舟戸神社の北側には舟戸新池があり、さらに北方には大和川が流れている。舟戸新池は天理大学附属天理図書館に所蔵されている元文3年(1738)「御尋二付申上覚書」によると、享保7年(1722)に築造され、字名から「西安寺池」と呼称されていた。

舟戸地区は近世の王寺村の集落の1つであり、舟戸神社は舟戸地区の氏神である。天児屋根命あまのこやねのみことと久那戸大神くなののおおかみが祀られており、久那戸大神は道祖神と同じく道路や旅人などを守る神である。神社の創立は不明だが、境内の手水鉢に嘉永元年(1848)、石灯籠に嘉永3年(1850)の銘があり、江戸時代には信仰があった。



図1 王寺町の位置



図2 王寺町の地形区分

2 歴史的環境

■ **大和川と古代** 王寺町の北端には大和川が西流している。大和川は初瀬川を源流とし、佐保川、寺川、飛鳥川、曾我川、富雄川、竜田川、葛下川などの奈良盆地内を流れる河川の水を次々とまとめ、亀の瀬を通過して大阪湾に注がれる。宝永元年（1704）に川筋が付け替えられる以前は、石川との合流点付近から北西に流れ、淀川に合流していた。こうした地勢から、大和川は古代から難波津と飛鳥を結ぶ交通路として、重大な役割を担っていた。『日本書紀』推古天皇16年（608）に隋使の裴世清が難波津から海石榴市を経て飛鳥へと赴いたことが記されており、その経路に大和川が利用されたと考えられている。

王寺町の北東には舟戸・西岡遺跡（30）、南端には畠田古墳（47）がある。舟戸・西岡遺跡は舟戸山の標高70m以上の山頂一帯で遺物散布地が広がっており、平成9年（1997）の調査では弥生時代後期の住居跡が、平成13年（2003）の調査では古代の掘立柱建物跡が検出されている。奈良盆地を広く見渡せる眺望の良い丘陵上で、眼下に大和川が流れていることから、高地性集落で、集落と大和川の交通を監視する役割を担っていたと考えられている。

畠田古墳は7世紀初頭の円墳で、南に開口する両袖式横穴式石室をもつ。谷間の奥に立地しており、北西に山裾が迫り、南東は開かれて谷川が流れている。この地勢がのちの風水思想と合致することから、渡来人もしくは渡来文化の基礎的な知識をもつ人物が埋葬されていると考えられている。これら2つの遺跡から、王寺町は大和川を通じた外部とのつながりが色濃い地域にあったことが示唆される。

■ **飛鳥時代寺院と周辺の遺跡** 『日本書紀』推古天皇9年（601）、聖徳太子による斑鳩宮の造営を契機に大和川沿岸、葛下川沿岸には多くの寺院が建立された。

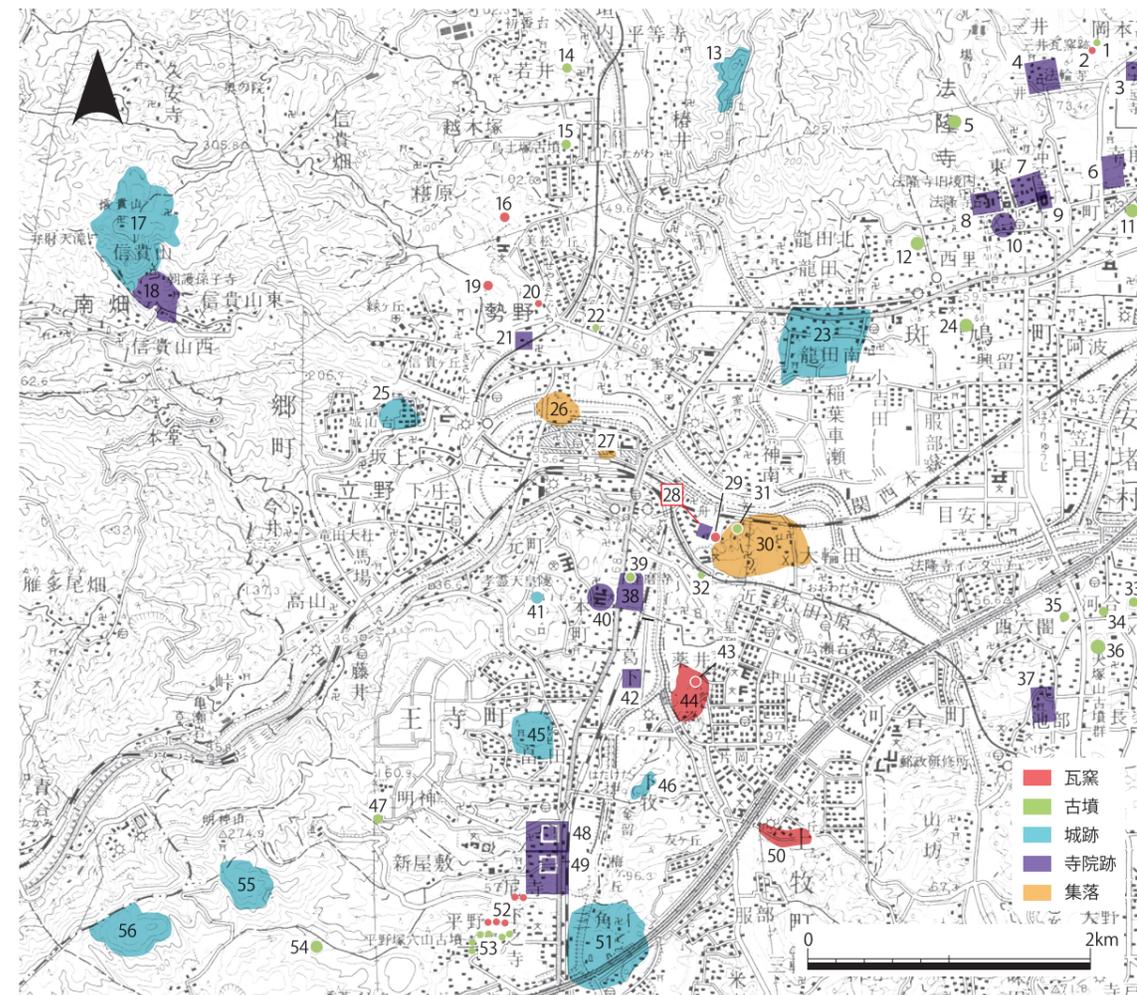
聖徳太子が暮らした斑鳩では、7世紀初頭に法隆寺若草伽藍（10）、7世紀前半に中宮寺（6）、法起寺（3）、法輪寺（4）、7世紀後半に法隆寺西院伽藍（8）が創建されている。聖徳太子が斑鳩に法隆寺若草伽藍を建立したのは、その地が大和川と竜田道が通る水陸交通の要衝であったからと考えられている。竜田道は、『日本書紀』推古天皇21年（613）に整備された難波津と飛鳥を結ぶ官道の1つで、難波津から斑鳩を結ぶ道とする考えがある。

大和川沿岸には、7世紀前半に平隆寺（21）、7世紀半ばから後半に長林寺（37）が創建されている。平隆寺跡は三郷町にあり、昭和44年（1969）・同49年（1974）の調査によって、四天王寺式伽藍配置の寺院とされている。中宮寺、奥山久米寺と同文の素弁8弁蓮華文軒丸瓦、中宮寺と同範の素弁9弁蓮華文軒丸瓦が出土し、創建瓦としている。平隆寺跡の北方にある丘陵地帯には今池瓦窯（16）、辻ノ垣内瓦窯跡（19）、上ノ御所瓦窯（20）があり、法隆寺や中宮寺など斑鳩にも供給していたと考えられている。長林寺跡は河合町にあり、昭和62年（1987）・同63年（1988）の調査によって、南向きの法起寺式伽藍配置の寺院とされている。素弁蓮華文軒丸瓦や忍冬唐草文軒平瓦などの瓦が多く出土している。また、「長倉寺瓦」とヘラ書きされた瓦が出土しており、長倉寺で使用している瓦の覚書といわれている。これらは法隆寺など斑鳩で用いられた瓦と類似するものが多いことから、三井瓦窯跡（2）から供給されたと考えられている。

大和川の支流で、町域を北流する葛下川沿岸には、7世紀前半に片岡王寺跡（40）、尼寺南廢寺（49）7世紀半ばから後半に尼寺北廢寺（48）が創建されている。この地域は片岡と称され、敏達天皇系の王族が拠点を置いていたとしており、片岡王寺跡、尼寺北廢寺、同南廢寺の創建に関わりがあると考えられている。また、これらの寺院の沿道は中近世で当麻街道と呼ばれる斑鳩と当麻方面を結ぶ街道に当たる。当麻街道は現在、推古天皇30年（622）に斑鳩で亡くなった聖徳太子の御遺体を大阪府太子町にある磯長墓まで運んだ「聖徳太子葬送の道」として、聖徳太子信仰の1つとなっている。

片岡王寺跡は王寺町にあり、『大和上代寺院志』によると、南向きの四天王寺式伽藍配置をもつ寺院で、明治20年（1887）まで基壇や礎石が遺存していた。現在、中心伽藍の位置には旧王寺小学校の校舎がある。平成20年（2008）に行った校舎敷地内での調査では、遺構の検出と遺物が出土したのみにとどまっており、詳細は不明。寺域東辺では飛鳥～平安の遺構が確認され、片岡王寺式と称される単弁16弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦が出土した。

尼寺北廢寺、同南廢寺は香芝市にあり、尼寺北廢寺は東向きの法隆寺式伽藍配置、尼寺南廢寺は南向きの法隆寺式伽藍配置をもつ寺院である。両廢寺ともに坂田寺6Aと同範の坂田寺式軒丸瓦が出土して



- 1 瓦塚1号墳 2 三井瓦窯跡 3 法起寺境内 4 法輪寺旧境内遺跡 5 仏塚古墳 6 中宮寺跡 7 斑鳩宮跡 8 法隆寺西院 9 法隆寺東院
- 10 若草伽藍跡 11 駒塚古墳 12 藤ノ木古墳 13 椿井城跡 14 西宮古墳 15 鳥土塚古墳 16 今池瓦窯 17 信貴山城跡 18 信貴山朝護孫子寺
- 19 辻ノ垣内瓦窯跡 20 上ノ御所瓦窯 21 平隆寺跡 22 勢野茶臼山古墳 23 龍田城跡 24 斑鳩大塚古墳 25 立野城 26 久度遺跡
- 27 久度南遺跡 28 西安寺跡 29 西安寺瓦窯 30 舟戸・西岡遺跡 31 古墳状隆起 32 岩才池北古墳 33 城山古墳 34 丸山古墳
- 35 高山塚1号墳 36 川合大塚山古墳 37 長林寺跡 38 達磨寺旧境内 39 達磨寺古墳群 40 片岡王寺跡 41 馬ヶ脊城跡 42 寺院推定地
- 43 粟井瀧ノ北遺跡 44 香滝・粟井遺跡 45 畠田城跡 46 片岡城跡 47 畠田古墳 48 尼寺北廢寺 49 尼寺南廢寺 50 下牧瓦窯跡
- 51 木辻城跡 52 平野窯跡群 53 平野古墳群 54 今泉古墳 55 送迎山城跡 56 七郷山城跡

図3 西安寺跡周辺の遺跡（1/50,000）

おり、その範傷の進行具合や南廢寺で坂田寺式5Aと同範の単弁蓮華文軒丸瓦、斑鳩寺213Bと同範の忍冬唐草文軒平瓦が出土したことから、7世紀前半に南廢寺で前身となる堂が建立され、のちに北廢寺が建立されたと考えられている。尼寺北廢寺、同南廢寺の南西には平野窯跡群（52）があり、瓦を供給していたとされている。

このように、これらの古代寺院は多くが大和川、葛下川に沿って、斑鳩につながる道を正面に建立されている。なかでも西安寺跡は大和川と当麻街道が交

差する位置にある。西安寺跡の東側には西安寺瓦窯（29）があり、西安寺の所用瓦を供給していたとされている。現在では住宅地になっており、遺構を確認できないが、瓦窯跡の南側にある瓦谷池で行った護岸工事で瓦が出土したという話が残っており、また、池の周辺で行った工事立会でも瓦片が出土している。



写真5 西安寺跡周辺航空写真（南から）



写真7 西安寺跡周辺航空写真（北から）



写真6 西安寺跡周辺航空写真（東から）



写真8 西安寺跡周辺航空写真（西から）

3 西安寺に関する文献史料

■ **関係史料** 西安寺に関する古文書・古記録は、9世紀から16世紀にかけて次の8件がある。いずれも寺院の創建由緒や伽藍・規模を示すものではないが、これらの史料を個別に紹介しつつ、西安寺を考えるうえで読み取れることを合わせて述べておきたい。なお、史料名は原則として『新訂王寺町史』資料編によっている。

- ① 『続日本後紀』天長10年(833)閏7月29日条
- ② 仁安3年(1168)「大和国大原吉宗田地売券」
- ③ 13世紀前半『古今目録抄(聖徳太子伝私記)』
- ④ 弘安4年(1281)「僧貞真陳状案」ほか
- ⑤ 文永・弘安期(1264～1288)「簡要類聚抄」
- ⑥ 正安4年(1302)『放光寺古今縁起』
- ⑦ 貞和3年(1347)「興福寺造営料大和国八郡段米田数并済否注進状」
- ⑧ 永正10年(1513)「西安寺北之坊興秀水田地作職売券」

■ ① 『続日本後紀』天長10年(833)条

『続日本後紀』は、天長10年(833)の仁明天皇の即位から嘉祥3年(850)の同天皇の崩御・葬儀に至る18年間の歴史を記している。貞観11年(869)に完成した。西安寺は天長10年(833)閏7月29日条に登場する。

太政官処分。在大和国広瀬郡西安寺。〈俗号久度。〉宜令僧綱撰之。

本史料でまず確認できるのは、天長10年(833)において西安寺という寺院が大和国の広瀬郡に存在したことである。法号が西安寺で、地名から俗に久度寺とも呼ばれた。このとき西安寺は太政官から処分され、僧綱が管轄するところとなった。京外の諸国寺院は国司が管轄するが、これによって西安寺は国大寺に準じた扱いとなり、東大寺や興福寺に並ぶ寺格を得た⁽¹⁾。なお、この記事は『続日本後紀』の現存写本には見えず、『類聚国史』に記載された逸文から補うことができる。

■ ② 仁安3年(1168)「大和国大原吉宗田地売券」

「大原吉宗田地売券」は、『平安遺文』に所収される筒井寛聖氏所蔵東大寺文書である。

謹解 申売買田地立券文事

合肆段者

四至〈限東際目 限南畔 限西畔 限北畔〉

在広瀬郡久戸十条寺岡一里卅五坪〈西安寺〉

「八幡宮御経之大札此文々写了、可無用」

右件田地、元者大原吉宗之先祖相伝之所領也、而依有負物米拾参石、僧玄菴限永年作手、本公驗相副渡進畢、仍為後日沙汰、放新券文之状、如件

仁安三年十一月十二日 大原吉宗(花押)

本史料は、仁安3年(1168)11月12日に「広瀬郡久戸十条寺岡一里卅五坪〈西安寺〉」に所在する4段の田地の作手(耕作権)が大原吉宗から僧玄菴に変更したことによる券文である。『新訂王寺町史』本文編では、久度(久戸)西安寺の田地を大原氏が相伝しており、竈神の久度神社を奉斎したのが渡来系氏族であると考えられることから、渡来系の大原史氏おほらのふひとが西安寺を創建したと評価している。奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』によれば、本史料に見える広瀬郡久度十条寺岡一里三十五坪に推定できるのは、西安寺の中心伽藍でなく北西にやや離れたところである。水田の四至は南・西・北が畔で東が際目であることからすると、12世紀において西安寺周辺に多くの水田が開かれていたことがうかがえる。注意すべきは、大原吉宗が借財を抱えて土地を手放していることであり、大原史氏が西安寺造営氏族であるならば、その勢力の衰退が垣間見える。

■ ③ 13世紀前半『古今目録抄(聖徳太子伝私記)』

『古今目録抄』は13世紀前半に法隆寺僧の顕真が聖徳太子に関する秘伝や法隆寺の寺誌をまとめたもので、『聖徳太子伝私記』とも呼ばれる。この『古今目録抄』に聖徳太子が建立したとする46か寺が列記されるが、ちょうど西安寺に該当する部分が欠失している。欠失部分を補うのは15世紀中頃に法隆寺僧の訓海によって撰述された『太子伝玉林抄』であり、ここでは『私注抄』に示される46か寺が列記されている。以下に『太子伝玉林抄』の関係部分のみを引用する。

私注抄云、四十六箇院者、〈有二種様〉。西安寺、同国、又云久度寺。

『私注抄』では、西安寺は熊凝寺に続く17番目

の寺として上げられ、『続日本後紀』の記事に基づくのか久度寺の俗号が記されている。『私注抄』は、逸書であるものの『俊巖抄』とも呼ばれ、顕真の甥である俊巖がまとめたものである。それまで早くは天平19年(747)の『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』に法隆寺、四天王寺、中宮寺、橘寺、広隆寺、法起寺、葛木寺の聖徳太子建立七寺と呼ばれる寺院が見えるが、13世紀に至って顕真が太子建立を46か寺とした。46の数字にしたのは、天喜2年(1054)に太子廟の付近から発見された「太子御記文」に太子造立伽藍の数として見えること、また、『日本書紀』の推古32年(624)9月条に示されるとおり、当時の寺院数が46だったことによるとされている⁽²⁾。顕真は、どのような歴史的根拠があって西安寺を太子建立寺院としたのだろうか。すでに顕真の時代に西安寺が斑鳩や聖徳太子と関係する伝承があったのか、検討したいところである。

■ ④ 弘安4年(1281)「僧貞真陳状案」ほか

この一件に関する史料には、「僧貞真陳状案」(『鎌倉遺文』所収春日神社文書)、「僧貞真陳状案(紙背文書)」(『春日神社文書』)、「大和西安寺住人訴状案」(『鎌倉遺文』所収春日神社文書)がある。長文にわたるので史料は引用しないが、弘安4年(1281)12月に興福寺一乗院領の西安寺住人等が湯屋山を僧貞真に押領されていることを訴え、同月に僧貞真が反論している。貞真によれば、問題の山は和光寺に伝領される大峯山であるという。『王寺町史』『新訂王寺町史』本文編ともに和光寺は放光寺の誤記であると評価しているが、史料には間違いなく「放光

寺」と記している部分もあって、一部だけ誤記をすのか判然としない。少なくとも13世紀後半に至って、西安寺に興福寺一乗院領の荘園が成立していたことは確実で、領有をめぐる争うほどに放光寺荘園と地理的に近接していたことが推定される。

■ ⑤ 文永・弘安期(1264～1288)「簡要類聚抄」

本史料は、文永(1264～1275)から弘安(1278～1288)の頃に一乗院の院主実信の周辺にいた行賢によって作成されたもので、全4巻からなっていたと推測されている⁽³⁾。このなかに一乗院の末寺が列記されており、放光寺と西安寺があげられている。「簡要類聚抄」は、興福寺大乘院門跡の尋尊の日記である『大乘院寺社雑事記』の文明11年(1479)5月13日条に「一乗院家領注文行賢五巻記」として写し取られ、そこにも放光寺・西安寺が見える。

■ ⑥ 正安4年(1302)『放光寺古今縁起』

本史料は、放光寺の僧審盛が撰述したものである。撰述の契機は、永承元年(1046)の雷火以来、荒廃の一途をたどっていた放光寺の復興であり、勧進のための縁起文としてまとめられた。現在知られるのは嘉吉3年(1443)の写本である。『放光寺古今縁起』には、同寺の草創や伽藍、法会のことなどが詳述されており、「夕梵晨鐘殿二字」の条に西安寺の名が見える。関係する部分だけを引用しておく。なお、原文にある訓点は省略した。

爰永承炎上取出其鐘、奉納寺庫、康平三年興福寺焼失時、奪取当寺鐘、其後從放光寺押取西安寺鐘訖、在今

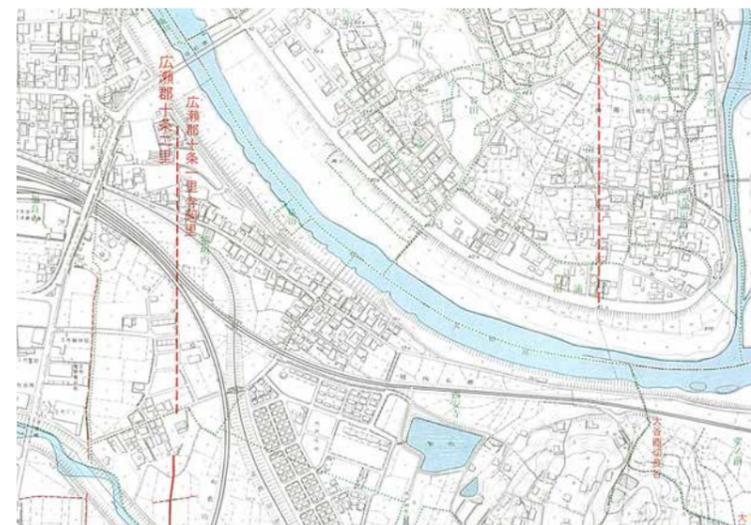


図4 『大和国条里復原図』関係部分(縮尺を1/10,000に調整)

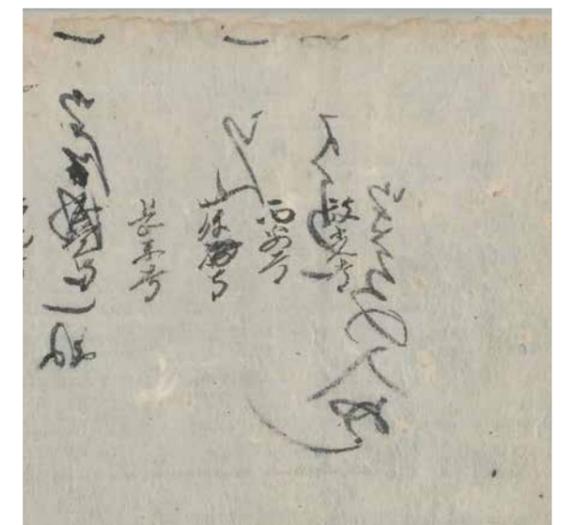


写真9 『大乘院寺社雑事記』文明11年5月13日条

同条によれば、かつて片岡王寺と呼ばれた放光寺伽藍には東西に3間二重の鐘楼があり、東を晨朝楼、西を夕梵楼といった。そして、永承元年（1046）の雷火の際に鐘を鐘楼から取り出し、寺庫に納めてあったが、康平3年（1060）の興福寺焼失で同寺から奪い取られたため、放光寺が西安寺の鐘をさらに奪い取り、今も所有しているという。奪い取られはしたが、11世紀半ばには西安寺に鐘があったことを示唆している。また、この記事から興福寺、放光寺、西安寺が濃密に結び付いている様子もうかがえる。

■ ⑦ 貞和3年（1347）「興福寺造営料注進状」

本史料には、貞和3年（1347）の興福寺一乗院領荘園における段米収取状況が報告されている。西安寺に関する箇所のみを引用しておく。

放光寺・西安寺・清水別所合柒拾町伍段
 段米二十一石一斗五升
 弁濟十八石三斗二升
 難渋二石八斗三升

これによると、放光寺・西安寺・清水別所のすべてが一乗院領の荘園であり、本来は別々に存在するもの一括して把握され、面積は合わせて70町5段と記されている。清水別所とは、『新訂王寺町史』本文編によれば、王寺町送迎^{ひるめ}の小字別所付近と香芝市今泉の小字清水付近との2説があり、弘安4年（1281）に大峯山の領有をめぐる放光寺と西安寺が争っていることから、これら3つの荘園が極めて近接していると考え、送迎別所付近にあった荘園であると見ている。また、応永34年（1427）「一乗院昭門講師段銭納帳」には放光寺荘園が38町7反、清水別所荘園が17町と記されており、貞和3年（1347）から面積が増減していないと仮定すれば、70町5段から差し引いて西安寺荘園の面積は14町8反であったとも思料されている。

■ ⑦ 永正10年（1513）「西安寺水田地作職売券」

本史料は、永正10年（1513）8月27日に西安寺北之坊興秀らが田地作職を窪田の興名房へ売り渡した際の券文である。

売渡申 水田地作新立券文之事
 合壹段者 窪田領之内字石庫ト云、自南四反

目ニ在之、公事物ハ奈良反米三升、其余无公事
 四至限 東ハ繩 南ハ地類 西ハ路 北ハ類地
 右件水田地、作主職元者、雖為円仙之母カ買得
 相伝之私領、円仙ニユツリ申スヲ、而今依有用
 事、直銭貳貫伍百文仁限永代窪田之興名房方衛
 令沽却事、実正明鏡也、設雖有天下一同之徳政
 等沙汰、於此下地者、不可有一言煩候、然而、
 雖可右券文相付先年動乱引失候間、不能其儀候、
 有本券文号輩ハ、可致盗人沙汰者也、若不思儀
 惣領家不可有胡乱候下地也、仍後代証文之状如
 件

永正十年 〱癸酉〱 八月廿七日
 西安寺 北之坊 興 秀（花押）
 延宝 興 籠（花押）
 北城 俊 真（花押）
 衛門太郎（花押）

ここで売り渡しの対象となった田地は面積が1段で、窪田領の「字石庫」にあると記される。窪田領とは現在の安堵町窪田と考えられ、『安堵町史』史料編下巻に所収される文禄4年（1561）「大和国平群郡窪田村御検地帳」に「石くら」の字名が確認できる。また、『大和国条里復原図』にも安堵町窪田において「石倉」の小字名が確認でき、本史料の「石庫」に当たると考えられる。この田地作職を西安寺の北之坊・延宝・北城の肩書をもつ者らが売却した。問題は彼らの肩書をどう解釈するかで、2つ考えられる。1つはそれらが西安寺の子院であると解釈し、16世紀前半において西安寺が寺院として存続していたとする見方で、もう1つは、肩書に併記される「西安寺」は地名であり、この時点で西安寺は廃寺になっていたとする見方である。本史料からだけではいずれかを判断することができないので、考古学的な調査成果を加味する必要がある。

[注：3 西安寺に関する文献史料]

- (1) 吉川真司「片岡四寺考証—片岡王寺・西安寺・尼寺南北廢寺—」52-53頁。
- (2) 飯田瑞穂『聖徳太子伝の研究』195頁、田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』321-322、324頁。
- (3) 京都大学文学部国史研究室『一乗院文書（抄）—京都大学国史研究室蔵—』28頁。

第2章 調査の概要

- 1 確認調査を始めるまで
- 2 これまでの確認調査
- 3 西安寺跡の層序

1 確認調査を始めるまで

■ **昭和初期の調査研究** 西安寺跡が舟戸神社に当たることについては、昭和初期に保井芳太郎氏、石田茂作氏によって周知された。保井氏は、文献に見られる西安寺（一名、久度寺）の地が、「西安寺」の字名が残る舟戸神社の境内を主要建造物の位置と考え、西安寺跡で飛鳥時代から鎌倉時代の軒丸瓦・軒平瓦等を多数収集し、そうした時代に西安寺が存在していたことを明らかにした。

保井・石田の両氏は西安寺の伽藍配置についても検討している。保井氏は、西安寺の字名が残る舟戸神社境内が、周囲に比べて約60～90cm高くなっており、そこに主要建造物があったと考えた。石田氏は、塔心礎と思われる径1間以上の礎石面の中央に径2尺あまりの円形穴を穿った石が狛犬の東方3間ぐらいいにあったことを地元の好事家である正光寺住職から聞き取り、拝殿の北東を塔の位置と考えた。また、拝殿の南側で礎石が破碎、散乱しているところを金堂跡と推定し、拝殿の西北にある東西方向に延びる帯状の高まりにも注目している。そして、舟戸神社周辺の地形と舟戸神社の西方約30mの田に「門脇」「馬場脇」の俗称が残っていることから、西安寺の伽藍を西面する法隆寺式伽藍配置の寺院と推定している。

石田氏の『飛鳥時代寺院址の研究』には、西安寺の礎石2個が掲載されている。旧王寺町役場に保管されていたものは、現在、旧王寺北小学校の敷地内で保管されているものと考えられる。また、もう1点の礎石は、王寺町舟戸に所在する正光寺でつくばいとして転用されたものと見られる。

■ **第1次・第2次の調査** 西安寺跡の第1次発掘調査は、昭和59年（1984）度に奈良県立橿原考古学研究所によって行われた。舟戸神社の西側で集合住宅の建設に伴うものである。その調査では、中世の井戸と調査区の西端で南北方向の溝が検出され、西安寺の築地塀の雨落溝ではないかと考えられた。三郷町にある平隆寺の発掘調査報告書には、調査時に測量された西安寺跡地形測量図が掲載されている。その後、舟戸神社周辺では、発掘調査されることはなかったが、平成23年（2011）度に西安寺跡の周知の埋蔵文化財包蔵地の南端で行われた擁壁工事に伴って多量の瓦の出土を確認した。平成26年（2014）度には、第1次調査地から道路を挟

んだ包蔵地の北西角に当たる場所で宅地開発が計画され、確認調査を実施している。素掘溝の他は顕著な遺構は認められず、瓦の出土もなく、第1次調査と第2次調査の間を走る南北方向の道路が西安寺の寺域を区画するものと考えられた。

以上のように、西安寺跡については確認調査以前の先行研究で伽藍配置が想定されていたものの、実際の状況はわからないままであった。



図5 石田氏が想定した伽藍配置



写真10 旧王寺北小学校内の礎石



写真11 正光寺の礎石

2 これまでの確認調査

■ 確認調査の開始 西安寺跡の発掘調査は平成26年（2014）度から範囲確認調査として王寺町教育委員会が開始し、令和3年（2021）度の第11次調査まで計9次の調査を実施した。平成28年（2016）度の第6次調査を終了した段階で、堂塔の遺構が良く残っていることから、西安寺跡史跡整備活用委員会を設置し、西安寺跡の保存活用のための発掘調査を実施している。平成31年（2019）4月に王寺町の組織改革により、文化財の担当係は教育委員会から町長部局へと移管されており、以下、調査主体は王寺町と表記する。

本節では、次数ごとに調査の状況と遺構の概略について述べていく。各次の調査報告書では、調査区をトレンチと表記しているが、本報告書では「区」に統一して使用する。

■ 第3次調査 王寺町では、保井・石田の両氏が考察したとおり、舟戸神社境内で中心伽藍の遺構の有無を確認する必要があると考え、国庫補助事業による遺跡範囲確認調査を実施することにした。調査地は、石田氏が塔跡を想定した場所、具体的には塔心礎があったとされる狛犬から東に約5.4m付近に1区、金堂跡を想定した本殿の南に2区の2か所に設定した。境内の社叢にあることも影響して、1

区は東西に長さ7.5m、南北に幅1.5m、2区は2.5m四方の狭小な調査区である。

1区では、瓦を多く含む造成土が堆積しており、造成土を除去すると調査区の南北の壁際で2個の礎石の一部を検出した。また、礎石の西側には不整形な土坑も検出できたので、調査区を東西長8.3m、南北幅2.5mに拡張し、樹木のある部分を除いて礎石の全体像がわかるよう検出を行った。その後、不整形の土坑は、その配置から心礎抜取穴、四天柱の礎石抜取穴であると考えられ、調査区の東端では、基壇外装上段の石列を検出することができ、塔跡であることが確定した。塔の平面規模は、検出した礎石間の寸法から柱間が2.15mの3間等間で、建物一辺6.45m（1尺を30cmとすれば21.5尺）、基壇一辺12.99m（同43.3尺）であり、地上式の心礎をもつことから、飛鳥時代末から奈良時代初め頃に創建されたと推定した。塔基壇上には炭・焼土を含む堆積層があり、基壇面と礎石に残る被熱の痕跡から塔基壇では火災があったと考えられた。

2区では、厚さ1.5mの近世の造成土が堆積していた。それより下層は粘土と砂が堆積し、湧水する状況となり、遺構や地山を検出することなく、舟戸神社本殿の南側は、石田氏の推定した金堂跡には当たらないことを確認した。

平成27年（2015）3月8日には、現地説明会

表1 西安寺跡におけるこれまでの発掘調査

次数	年度	期間	位置	面積	原因	機関
第1次	昭和59 (1984)	1984.4.18～4.23	舟戸神社西	約108㎡	集合住宅	奈良県立橿原考古学研究所
工事立会	平成23 (2011)	2011.9.11～20	舟戸神社南西	約124㎡	擁壁工事	王寺町教育委員会
第2次	平成26 (2014)	2014.12.25	包蔵地北西部	6㎡	宅地造成	王寺町教育委員会
第3次	平成26 (2014)	2015.2.16～3.12	1区 塔推定地 2区 金堂推定地	28.2㎡	範囲確認	王寺町教育委員会
第4次	平成27 (2015)	2016.2.1～2.24	金堂	23㎡	範囲確認	王寺町教育委員会
第5次	平成28 (2016)	2016.6.20～7.4	舟戸神社北西	56㎡	個人住宅	王寺町教育委員会
第6次	平成28 (2016)	2017.3.6～3.25	舟戸神社西 境内西端	30㎡	範囲確認	王寺町教育委員会
第7次	平成29 (2017)	2017.11.6～12.26	塔	70㎡	範囲確認	王寺町教育委員会
第8次	平成30 (2018)	2018.11.1～12.28	金堂	58㎡	範囲確認	王寺町教育委員会
第9次	令和元 (2019)	2019.11.6～12.20	1区 金堂北方 2区 東回廊 3区 金堂南面	85㎡	範囲確認	王寺町
第10次	令和2 (2020)	2020.11.9～12.17	1区 西回廊推定地 2区 塔南面・南回廊	20㎡	範囲確認	王寺町
第11次	令和3 (2021)	2022.1.24～2.22	金堂北面	9㎡	範囲確認	王寺町

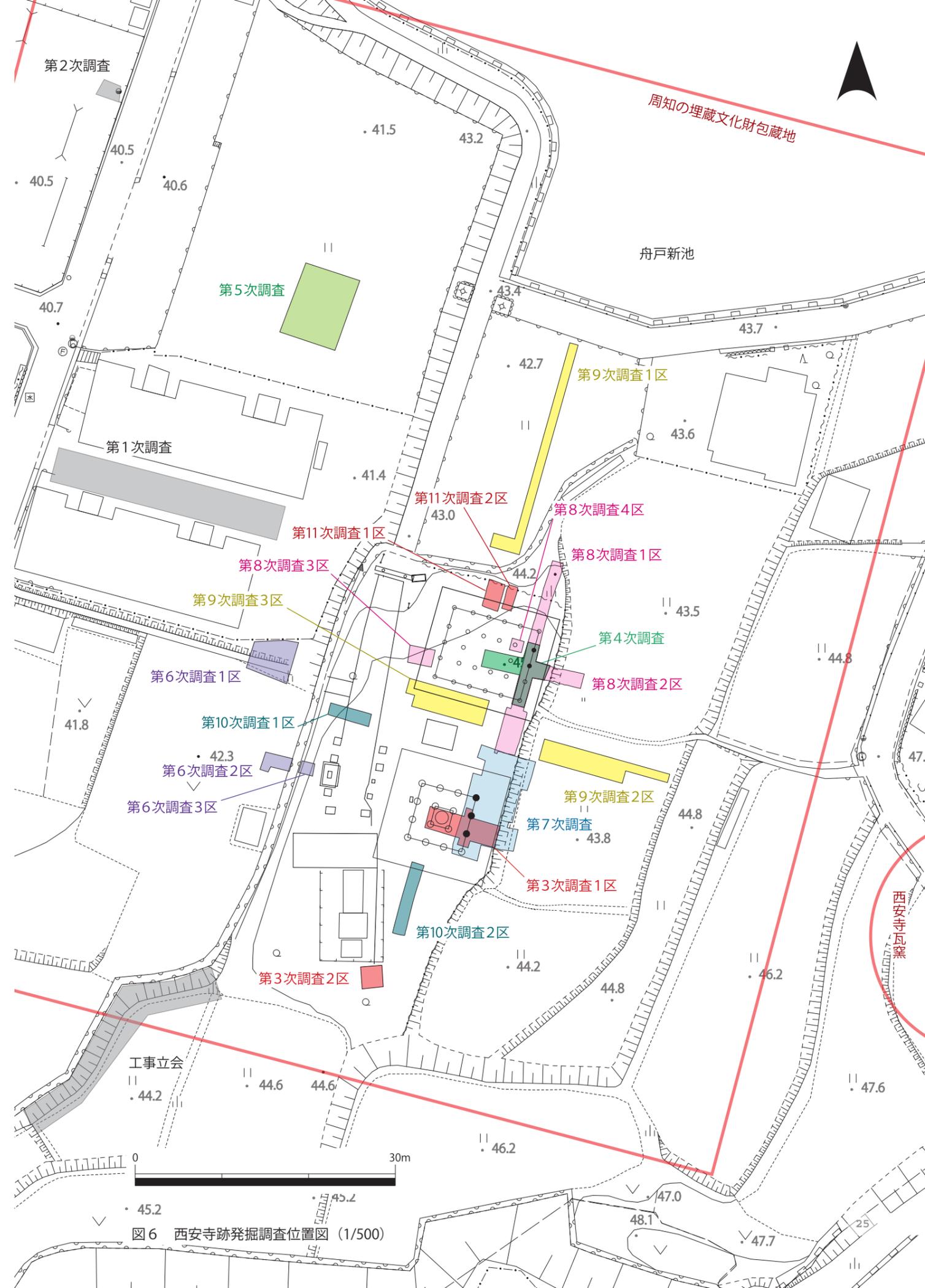


図6 西安寺跡発掘調査位置図 (1/500)



写真12 第3次調査で初めて確認された西安寺の礎石（塔跡）



写真13 第4次調査の金堂跡礎石検出作業

を行い、初めて西安寺跡の遺構が確認されたこともあり、800名の参加があった。

■ **第4次調査** 第4次調査では、第3次調査で確認できなかった金堂の位置を確認することを目的とした。塔跡から境内北端までは約24mの空間があり、境内の東面には2か所の屈曲がある。南側の屈曲部分は、復元した塔基壇の南東角に一致し、隣接する水田の畦が取り付いている。同様に畦が取り付く北側の屈曲部も建物の基壇の南東角の名残と考えられ、この部分に金堂を想定することができた。塔跡の北方約15mの地点に南北幅2m、東西長7.5mの調査区を設定した。

その結果、礎石1個、礎石採取穴、土坑を各1基、東面の基壇外装の石列を検出した。そして、礎石が南北に並ぶ可能性を考え、検出した礎石を中心として東西1.5mの幅で北へ1.95m、南へ3.5m調査区を拡張し、北側で礎石1個を検出した。また、礎石の確認できなかった南側では、丁寧な版築によって基壇が構築されていることを確認した。

検出した礎石2個は、塔の礎石よりも小さく、柱間は約1.9mと塔に比べて小規模な建物と推測できた。建物の平面プランを復元することはできなかったが、丁寧な基壇版築で構築された礎石建ての建物であるので、調査前に想定したとおり、金堂の遺構と判断した。

■ **第5次調査** 個人住宅の建設に伴う調査である。調査地は舟戸神社へ向かう参道の西側の畑地で、第1次調査地から北に約20mの地点に当たる。東西幅6.6m、南北長8.5mの調査区で、古代の整地土上と地山上の2面で遺構面を検出した。

古代の整地土上では、耕作痕跡と複数の溝、不明遺構を検出したが、具体的な用途はわからなかった。しかし、11世紀後半～12世紀初頭の瓦器碗が出土し、平安時代後期の人々の存在を示すものである。

地山上では、柱穴3基、自然流路を検出した。柱穴は建物にはならないものの一辺が50cmを超える方形のものであり、西安寺跡の関連遺構である可能性が高い。遺構の検出面は標高41.1m前後で、主要伽藍のある境内の地山面とは2m近く低い位置にあった。自然流路は調査区の北東方向から西へ蛇行し抜けていく。自然流路からは遺物の出土もなく、時期は不明である。

■ **第6次調査** 第6次調査では、舟戸神社の西側の状況を確認するために、3か所で調査区を設

定した。1区は石田氏が『飛鳥時代寺院址の研究』で注目した舟戸神社拜殿西北にある幅5.4m、長さ18mの帯状の芝地の部分に設定した。現在は舟戸神社への出入口として住民が利用する通路となっている。この通路には多くの瓦が散布しており、所々で花崗岩が露頭する。第3次、第4次調査の成果から、西面する法起寺式の伽藍配置を仮定すれば、この通路が参道の痕跡、花崗岩は門の礎石であるとも考えられた。東西幅1.5m、南北長5.0mの調査区であったが、検出した瓦が多量に混入する近代造成土の広がりを確認するため、東端で南北幅5.0m、西端で南北幅3.2m、東西長5.0mの調査区に拡張した。西安寺跡の参道と推測した通路は近代に造成されており、花崗岩の露頭は、畑地との境界に設置された石列が部分的に見えていたものであった。地山の標高は調査区の東端で42.3m、西端で41.8mと舟戸神社から西へ向かって低く傾斜していく。地山上では東西方向に延びる古代の溝と浅い土坑2基を検出した。

また、舟戸神社境内と神社西側の畑地の間には南北方向に流れる水路があり、水路を挟んで約1.5mの比高差があり、区画された地形に見える。そこで、水路を挟んで舟戸神社手水舎西側と畑地に調査区を設定し、旧地形の確認を行った。2区は畑地に設定した南北幅1.5m、東西長3.2mの調査区で、地山上には、井戸と思われる土坑の一部と水路がコンクリートで改修される以前の水路跡を検出した。3区は神社境内に設定した東西1.7m、南北1.5mの調査区である。舟戸神社の整備のために厚さ約1mの造成が行われている。地山上には約20cmの整地があり、その上面で土坑1基を検出した。

第6次調査では明確な遺構は確認できなかったが、境内と畑地の地山面には約50cmの比高差があり、舟戸神社西側の地山は低く傾斜していくことを確認した。とくに境内の西端にある水路は西安寺の中心伽藍を画するものと推定できた。

■ **第7次調査** 平成28年(2016)度からは、西安寺跡を貴重な文化財として保存・活用していくために西安寺跡史跡整備活用委員会を組織し、年次的に確認調査を実施していくこととした。

第7次調査の目的は、塔跡の基壇規模、創建年代を明確にすることである。これまでの調査から塔基壇の東半が遺構の残りが良いと予想されるので、第3次調査で確認した2個の礎石を含む東面側柱列、



写真14 第5次調査区と舟戸神社



写真15 第6次調査の古代溝と近代造成通路



写真16 第7次調査の現地説明会



写真17 第8次調査の報道発表

東面の基壇外装、基壇北東角が検出できるよう神社の東に隣接する水田にも調査区を設定した。

調査の結果、遺構の保存状況は良好で、東面側柱の礎石3個と礎石採取穴1基、北面から北東角を経て東面にかけて乱石積基壇外装を検出した。第3次調査より検出した礎石が1個増えたことにより、塔の初層は柱間2.25m、3間等間で一辺6.75mに修正された。礎石の柱座の中心から基壇外装までの距離が約3.3mあるので、基壇の一辺は13.35mとなる。ここで塔の造営尺は、切り良く計算できる1尺=30.0cmとなることが考えられた。

基壇上には、第3次調査でも確認した炭・焼土が堆積しており、すべてをふるいにかけて、洗浄作業を行ったが、仏具や壁画の痕跡が残る壁土は発見できなかった。平成29年(2017)12月9日に現地説明会を開催し、約500名が西安寺跡を訪れた。

■第8次調査 第8次調査は、第4次調査で礎石と版築による基壇を確認した金堂跡を調査した。1区は、基壇の南北両端を確認するために、第4次調査の調査区を南北両方向へ延長するかたちで設定した東西幅1.5m、南北長19.5mの調査区である。舟戸神社境内の北東角にある北方に延びる張り出し部分は建物の推定地から外れるが、「カワラヅカ」(瓦を廃棄した場所)と伝わるので調査の対象とした。2区は、第4次調査の東端で検出した基壇外装を含めた南北幅2.0m、東西長5.5mの神社境内から東側の水田に延びる調査区である。

調査は第4次調査区の再発掘から着手した。1区では礎石2個を再検出し、新たに礎石採取穴3基、南北両面の乱石積基壇外装を確認した。1区の南端では、基壇外装と南面基壇外周を検出するために調査区の幅を2.5mに広げ、南へ3.5m延長した。基壇外周は大量の瓦が堆積している状態で、丸瓦が組み合ったままのものがあり、屋根からすべり落ちたものがそのまま埋没したと考えられた。2区では、東面の基壇外装と溝を検出している。

北、南、東の3面で基壇外装が確認できたため、塔の中軸線を基準にして基壇の西端の位置を推定し、南北幅2.0m、東西長3.0mの3区を設定した。3区では、基壇版築を確認することができたが、基壇の西端は削平され、西面の基壇外装は残っていなかった。

基壇外装、礎石等を検出した段階で、西安寺跡史跡整備活用委員会を現地で開催し、検出遺構の検討

を行った。検出遺構から、南向きの四面庇建物であり、金堂跡に当たるといふ点で意見の一致は得られたものの、礎石2個の柱間と基壇の出の寸法だけでは、建物の規模を復元することは困難であった。そこで、庇部分の柱間を知るために身舎の北東隅の柱が推定できる位置に1.5m四方の4区を設定し掘削を行ったが、礎石は抜き取られており、採取穴を確認するに終わった。その結果、金堂跡の基壇は南北12.18m、東西は13.45mの規模で残存することを確認し、礎石と礎石採取穴から東西方向に棟をもつ桁行5間、梁行4間の建物であることが推定できた。平成28年(2016)12月22日の現地説明会には、270名の参加があった。

■第9次調査 第9次調査は、堂塔を囲む回廊、講堂の遺構の有無を確認し、西安寺の伽藍配置を明らかにするとともに、第8次調査で不確定であった金堂の東西長を確認するために実施した。1区と2区は塔の中軸線を基準に調査区を設定した。

1区は舟戸神社北側の水田に設定した東西幅1.0m、南北長25.0mの調査区で、塔の中軸線の延長上にある。版築のように層を重ねた整地とその整地土上に南北に並ぶ3基の柱穴、主柱の周りに4本の添柱が設置された柱根を検出し、柱穴は講堂または門の遺構、柱根は木製灯籠ではないかと推測している。

2区は神社東側の水田に設定した南北幅1.0m、東西長15.0mの調査区で、金堂と塔の中間地点に設定した。後に西側10m分を南側へ1.5m拡張している。幅4.8mの南北方向に延びる回廊基壇とその内外に雨落溝を検出した。

3区は金堂の中央間から基壇西端を推定する位置に設定した南北幅3.0m、東西長8.5mの調査区である。乱石積基壇外装は残りの良いところで3段が残っていたが、金堂基壇の南西角の石積みが残っていなかったため、調査区の北西角を一部拡張している。金堂の南面基壇外周では、瓦の堆積を検出しており、第8次調査で検出した瓦の堆積と一連のものと考えられる。

第9次調査は、それぞれの調査区が離れた位置にあったが、検出した遺構の配置から西安寺跡の伽藍の姿が明らかとなった。1区で検出した柱穴、柱根は直線上に並び、それまで推定していた塔の中軸線と誤差がわずかであることから、柱穴、柱根、塔心礎採取穴を結ぶラインを西安寺跡の中軸線とした。



写真18 第9次調査の現地説明会



写真19 第10次調査の現地説明会



写真20 第11次調査の保護砂による埋め戻し

検出した東回廊をこの中軸線で折り返すと、西回廊の外側雨落溝が舟戸神社西側にある用水路の位置に当たることが判明した。また、同じく中軸線で折り返すことで、金堂基壇の東西長は14.07mと推定できた。そして、東西方向に棟をもつ金堂と塔が南北方向の直線上に並び、その周囲に回廊がまわることから、西安寺は基本的には四天王寺式伽藍配置であると考えられるようになった。令和元年(2019)年12月8日に現地説明会を実施し、354名の参加を得た。

■第10次調査 第9次調査によって西安寺は四天王寺式伽藍配置と推定できたが、西安寺跡の立地

から通常の南向きの伽藍であるのかという課題があり、第10次調査は遺構の確認ができていない西回廊と南回廊の推定地で回廊または門の有無を調査し、伽藍の向きを明らかにすることを目的とした。

1区は西回廊が推定できる舟戸神社参道に設定した南北幅1.5m、東西長5.0mの調査区である。金堂基壇と塔基壇の中間地点から1.0m南寄りの位置で伽藍中軸線に直交させている。遺構面は削平を受け中近世の造成土が約1m堆積しており、地山と盛土による地業の堆積層は認められたが、回廊や門の基壇は確認できなかった。

2区は塔基壇南面から南回廊の推定地に設けた東西幅1.5m、南北長8.5mの調査区である。最も良好な状態で残る乱石積基壇外装を検出し、基壇外周には、13世紀後半～14世紀前半の整地土と基壇上から流れ込む炭や焼土混じりの土が堆積していた。調査区の南端では基壇の高まりとそれに並走する溝を検出し、基壇の高まりは南回廊と考えられたが、門の遺構は確認できなかったため、伽藍の向きを確定することはできなかった。

令和2年(2020)12月13日には、新型コロナウイルス感染症拡大防止の対策として、地元住民を対象として現地説明会を実施し、168名の参加があった。

■第11次調査 第9次調査で検出した柱穴、木製灯籠などから西安寺は北面する伽藍となる可能性もあった。そこで、第11次調査では金堂の北面で階段の遺構を確認すること目的とした。調査地は金堂の中央間に当たる基壇外装から基壇外周である。伽藍中軸線の西側に東西幅2.0m、南北長3.2mの1区、中軸線の東に幅30cmの畔を残して東西幅1.0m、南北長2.8mの2区を設定した。

乱石積基壇外装の石積みは2個が残るだけで、明確な階段遺構は確認できていない。石積みのない部分で断ち割り調査を行い、乱石積基壇外装の構築状況から乱石積は改修を行ったものであることを確認した。

新型コロナウイルス感染症の感染状況が好転しておらず、調査地も狭いため、地元住民を対象とした現場公開を行った。令和4年(2022)2月15～17日の3日間で92名の参加があった。

なお、いずれの調査においても重要な遺構を検出した場合は、保護のために遺構面を砂で覆ったうえで埋め戻している。

3 西安寺跡の層序

■層序の整理 これまで西安寺跡の層序については、各次の調査報告書において調査区ごとに番号を付けて報告してきた。今回の舟戸神社境内を中心にした報告書では、塔から金堂、金堂の北方にかけての南北方向の層位を基準に再整理し、層序を統一して報告する。各次の調査報告書との対照は表2のとおりである。

なお、基準にした塔から金堂の北方にかけての南北方向の位置から大きくはずれる調査区に関しては、必ずしも同じ堆積状況ではなくても、年代的に一致する層序に区分して整理した。各層の年代は主に土器で判断しているが、そのほとんどが小片のため年代を特定しきれていない。また、土器の出土がない場合は瓦の年代によって判断した。

■1層 表土。19世紀中頃～現在の堆積層。神社境内では腐葉土層、近代の造成土が堆積する。境内に隣接する水田では水田耕土が堆積する。

■2層 神社整備の造成土層で、境内全域に広がる。厚いところで1m近い堆積があり、瓦、焼土、須恵器、土師器、瓦質土器、陶器、寛永通宝が出土している。17世紀～19世紀中頃。

■3層 塔廃絶後の造成土で、塔から北側の範囲に堆積する。金堂北面の基壇外周では、瓦が帯状の堆積を繰り返す状況が認められ、15世紀末～17世紀の人為的なものである。

■4層 塔の基壇上から南面の基壇外周に堆積する炭・焼土層である。基壇上には10cm前後が堆積し、塔南面では基壇から外周になだれ込むかたちで堆積している。15世紀以降に火災があったと見られ、火災後は2層の造成が行われるまで、そのまま放置されている。

■5層 塔南面の基壇外周に堆積する2回目の塔修理に伴う整地土である。6層の水成堆積層の標高に合わせるように整地されている。13世紀後半～14世紀前半。

■6層 塔と金堂の間から塔の東面にかけて広がる水成堆積の砂層で、30～50cmの厚さがある。13世紀後半～14世紀前半の年代と見られ、層の上面で土坑を検出した。5層、6層上面は2回目の塔修理の基壇外周である。

■7層 塔と金堂の間から塔の東面にかけて堆積する粘土層で、金堂南面では転落した瓦が埋没し

ている。第7次調査では、厚さ約30cmの堆積を確認し、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、瓦器が出土しており、13世紀後半～14世紀前半の時期と見られる。

■8層 南回廊の内側の雨落溝が埋没した後に堆積した細粒砂混じりシルト。最大20cmの厚さがあり、11世紀末～12世紀前葉の土師器皿が出土しているが、上層の5層と下層の10層の年代から13世紀代の堆積と考えられる。

■9層 金堂の基壇外装の改修に伴う整地土、土坡、版築、裏込め土からなる。

■10層 塔南面の基壇外周に堆積する整地土で、古代に基壇周りが整備されたときのものと考えられる。単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が出土することから8世紀以降の堆積層である。

■11層 南回廊の基壇造成に伴う整地土。塔の建立に続く整備で7世紀末～8世紀初頭の構築と考えられる。

■12層 金堂北方に堆積する版築状の整地土。地山の傾斜に従って、厚さ64cmまでの堆積を確認している。土師器、須恵器、瓦が出土しており、7世紀後半の整地である。

■13層 塔基壇。基壇土と乱石積基壇外装の裏込め土を確認している。

■14層 金堂基壇。第4次調査で基壇の断ち割りを行い、4～10cmの厚さで12層を重ね、計60cmの厚さとなる版築が構築されていることを確認した。版築からの遺物の出土は認められなかった。

■15層 塔、金堂を中心とした寺域に施された地業盛土と考えられる。上面に干裂痕が認められ、盛土した後に天日で乾燥させたのではないかと推測される。塔、金堂の他、西回廊想定地からも検出しているため、地業の盛土と考えているが、地山である可能性も残る。

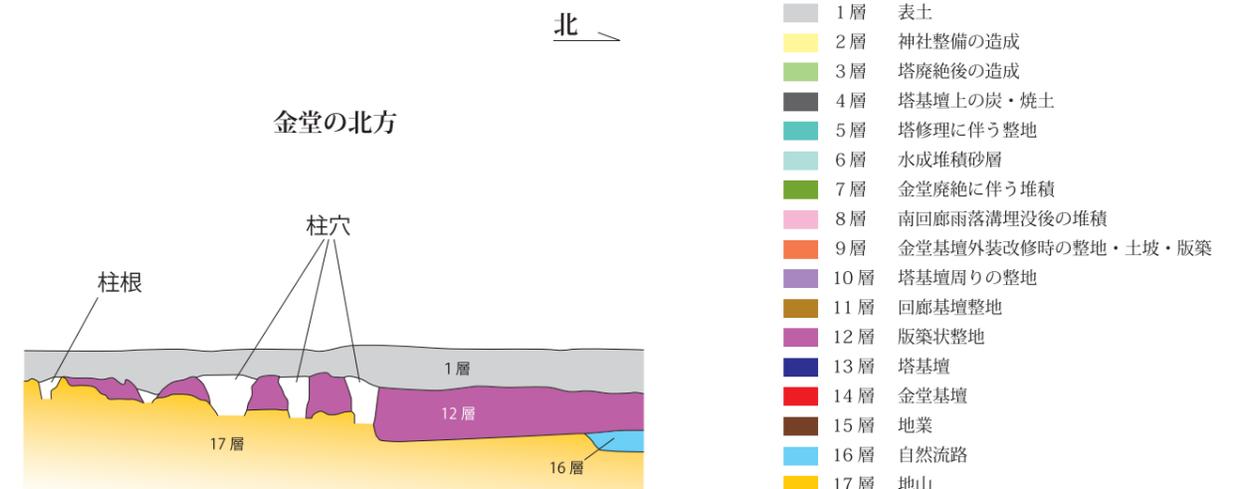
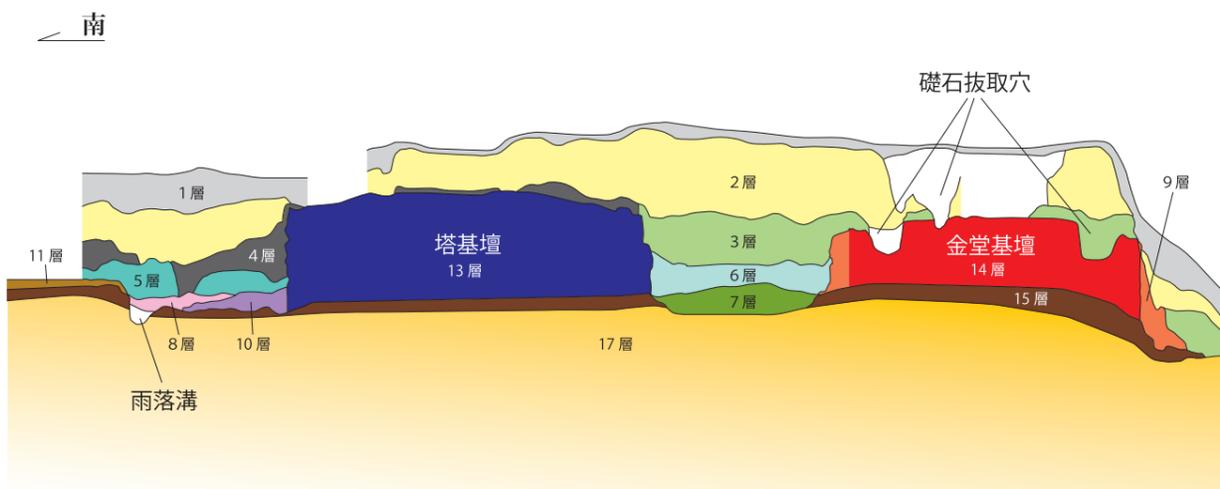
■16層 金堂北方の北端で確認した砂と粘土の互層。自然流路の堆積と考えられる。第1次調査、第5次調査でも自然流路が検出されており、西安寺創建以前のものと考えられる。

■17層 地山。各次の調査で検出した地山の標高を比較すると、東と南が高く西と北が低いのは現在の地形と同様だが、塔、金堂がある地点が南北に細長く微高地となっている。大和川から見ると舟戸山を背景にして、小高い場所に西安寺が造営されている。

表2 各次の調査報告との層序対照

本報告書	堆積状況	時期	第3次1区	第3次2区	第4次	第5次
1層	表土	19世紀中頃～現在	腐葉土	腐養土 近代盛土	表土 (腐葉土)	I
2層	神社整備の造成	17世紀～19世紀中頃	盛土 (高まり)	近世盛土	盛土	II～IV
3層	塔廃絶後の造成	15世紀末～17世紀				
4層	塔基壇上の炭・焼土	15世紀	炭			
5層	塔修理に伴う整地	13世紀後半～14世紀前半				
6層	水成堆積砂層	13世紀後半～14世紀前半				
7層	金堂廃絶に伴う堆積	13世紀後半～14世紀前半				
8層	南回廊雨落溝埋没後の堆積	13世紀代				
9層	金堂基壇外装改修時の整地・土坡・版築	10世紀				V
10層	塔基壇周りの整地	8世紀				
11層	回廊基壇整地	7世紀末～8世紀初頭				
12層	版築状整地	7世紀後半				
13層	塔基壇					
14層	金堂基壇	7世紀前半			基壇版築	
15層	地業	7世紀前半			暗褐色土	
16層	自然流路					
17層	地山	—				VI

第6次1区	第6次2区・3区	第7次	第8次	第9次1区	第9次2区	第9次3区	第10次1区	第10次2区	第11次	本報告書
表土	表土・耕土	I～III	I～II	I	I	I	I	I	I	1層
整地土	整地土	IV	III	II	II・III	II	II	II	II・III	2層
		V	IV・V			III	III	IV・V	3層	
	VI	VII		IV		III		4層		
			VIII	V		IV		5層		
				VI				6層		
			VII	VII						V
			VIII			V		VII	VII	9層
							VI・VII			10層
								VIII		11層
				III						12層
										13層
			VIII			V			VIII	14層
		X	IX				V		IX	15層
				IV						16層
地山	地山	XI	IX	V	IV	VI	VI	IX	X	17層



- 1層 表土
- 2層 神社整備の造成
- 3層 塔廃絶後の造成
- 4層 塔基壇上の炭・焼土
- 5層 塔修理に伴う整地
- 6層 水成堆積砂層
- 7層 金堂廃絶に伴う堆積
- 8層 南回廊雨落溝埋没後の堆積
- 9層 金堂基壇外装改修時の整地・土坡・版築
- 10層 塔基壇周りの整地
- 11層 回廊基壇整地
- 12層 版築状整地
- 13層 塔基壇
- 14層 金堂基壇
- 15層 地業
- 16層 自然流路
- 17層 地山

図7 基本層序模式図（縮尺及び縦横比率任意）



写真21 1層の表土と2層の神社造成土（第8次1区東壁）



写真24 4層の炭・焼土（第10次2区東壁）



写真27 7層の金堂廃絶時堆積（第9次3区南壁・東壁）



写真30 10層の塔基壇外周整地土（第10次2区東壁）



写真22 3層の瓦の带状堆積（第8次1区東壁）



写真25 5層の塔修理整地土（第10次2区西壁）



写真28 8層の南回廊雨落溝埋没後堆積（第10次2区東壁）



写真31 11層の南回廊基壇土（第10次2区東壁）



写真23 4層の炭・焼土（第3次北東から）



写真26 6層の水成堆積砂層（第8次1区東壁）



写真29 9層の金堂基壇外装改修（第11次1区西壁）



写真32 12層の版築状整地土（第9次1区西壁）



写真33 13層の塔基壇土（第3次1区北東から）



写真36 15層の地業盛土（第10次1区南壁）



写真34 14層の金堂基壇版築（第4次南から）



写真37 16層の自然流路（第9次1区西壁）



写真35 14層の金堂基壇版築（第4次東壁・南壁）



写真38 17層の地山（第6次2区北西から）

第3章

検出遺構

- 1 塔
- 2 金堂
- 3 回廊
- 4 金堂の北方

1 塔

■ **塔跡の調査** 塔跡では第3次調査1区、第7次調査、第10次調査2区で調査し、第7次調査では、第3次調査1区の東半を再発掘した。以上により塔基壇の約30%を調査した。舟戸神社の整備に伴う造成土が厚く堆積するため、基壇の東側およそ1/3の範囲で保存状態が良好で、造成土が堆積しなくなる西側は削平を受けているものと見られる。

■ **基壇** 図9~13。基壇面の標高は、礎石付近の最も高いところで44.74mで、基壇の高さは約1.2mである。基壇上では、礎石以外の床面の構築物は認められない。基壇の縁辺はやや削平され、基壇端に向かって検出面が傾斜している。そのため、基壇外装から内側50~60cm幅で基壇と裏込め土の境があり、裏込め土には凝灰岩の小片が混じることが確認できる。基壇上には10cm前後の炭・焼土が混じる4層が堆積しており、この堆積の原因となる火災によって、基壇面は全体的に赤く変色しており、第3次調査では、焼土が床面に張り付く状況を検出している。

基壇の構築方法については、遺構の残りが良いため、断ち割り調査を行っていないので不明であるが、基壇東面の土層断面では基壇下に14層の地業盛土、16層の地山が堆積することを確認しており、掘り込みの地業は行われてはいない。

■ **心礎抜取穴** 図10・11。塔基壇の中央で南北長1.3m、東西長1.54mの楕円形の土坑を検出した。この土坑の位置は、石田茂作氏が報告する塔心礎の位置とほぼ一致し、合わせてその周囲から4基の土坑が四天柱の配列位置で検出したことから、心礎抜取穴と考えられる。抜取穴からは根石と見られる石材が出土したが、原位置を保つものではなかった。

基壇上面は本来の高さから15cmほど削平されているものの、抜取穴の深さが30~40cmであることから、心礎は地上式であったと推測している。抜取穴を完掘した後に基壇表面を観察したが、明確な版築は確認できなかった。

■ **四天柱の礎石抜取穴** 図10・11。心礎抜取穴の周囲で4基の土坑を検出した。これらは心礎抜取穴を方形に取り囲む位置にあるため、四天柱の礎石抜取穴である。

四天柱礎石抜取穴1は隅丸方形で径1.35m以上ある。四天柱礎石抜取穴2は隅丸方形で南北長

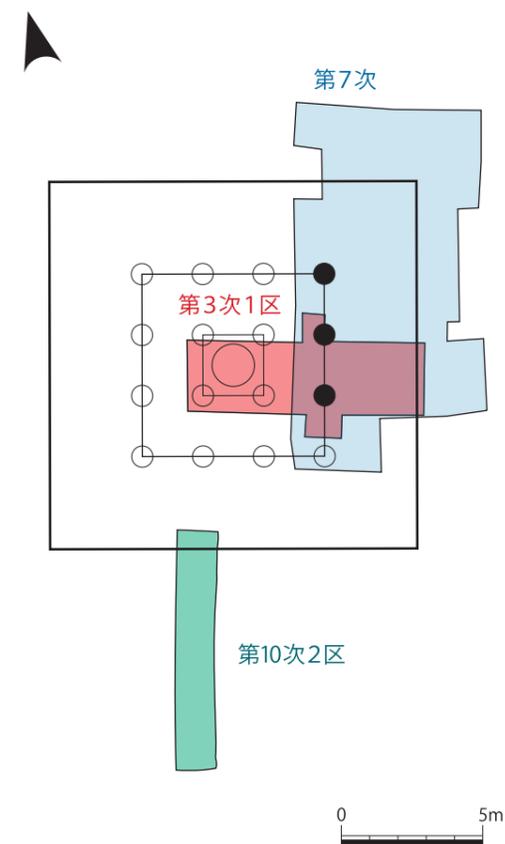


図8 塔跡調査位置図 (1/250)



写真39 塔心礎・四天柱抜取穴 (第3次1区西から)



52cm以上、東西長80cm以上ある。四天柱礎石抜取穴3は抜取穴2と連続しているため、形状、大きさは不明である。抜取穴3の底からは、拳大、人頭大の花崗岩5個を検出しているが、被熱の痕跡が認められることから、礎石が抜き取られたのちに混入したものである。礎石抜取穴4は不整な楕円形で、南北長1.45m、東西長2.16mである。

これらの四天柱礎石抜取穴の埋土は、心礎抜取穴と同じであることから、同時に抜き取られたと考えられる。

■ 側柱の礎石 図10。塔の東面の側柱に当たる礎石3個を検出した。検出した礎石はいずれも表面が被熱により赤く変色し、剥離しているところもある。柱座は部分的な造り出しであり、必ずしもそのかたちが明瞭ではない。

礎石1は南北長146.0cm、東西長106.0cmで、中央に径71.0cm（推定）、高さ5.0cmの柱座、南北両側に地覆座がある。北側の地覆座は明瞭な造り出しがなく、先端に向かって狭くなっている。先端の幅は約20cmで、地覆座の上面から一段下がっており、地覆石をのせる割り込みである。南側は幅29.0cm、長さ25.0cmの方形で地覆座を造り出し、先端は北側と同様に一段下げた割り込みの加工がある。石材は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石2は南北長140.5cm、東西長87.0cm。剥離する部分が多いが、高さ5.0cmの柱座が造られ、礎石の北東部に残存する円弧から径は71.0cmと推定される。北側に幅29.0cm、長さ23.0cmの地覆座が造り出されている。南側には明瞭な地覆座の加工はないが、端部に地覆石をのせる割り込みが認められる。石材は花崗閃緑岩である。

礎石3は南北長111.0cm、東西長142.5cmで、礎石の西寄りに径72.0cm（推定）、高さ7.0cmの柱座が造り出されている。南側に地覆座はないが、西側の端部に幅21.0cmの地覆石をのせる割り込みが認められ、塔の北東角の側柱の礎石であることが明らかである。石材は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石上面の標高は礎石1、礎石2が44.82m、礎石3が44.83mである。推定される柱座の中心点で礎石間の距離を測ると、礎石1と礎石2の間、礎石2と礎石3の間ともに2.25mである。柱座中心点から基壇端までの距離は、礎石1から東端まで3.27m、礎石3から北端まで3.31mであった。

■ 側柱の礎石抜取穴 図10。調査区の南西角で

南北長1.25m以上、東西長1.9m以上で広がる不整形の土坑を検出した。第3次調査で検出した四天柱の抜取穴と同じく、神社整備の造成土である2層上面から掘り込まれている。側柱の礎石3個と直線に並び、側柱礎石間の距離である2.25mの地点が土坑内に収まることから、南東角の側柱礎石の抜取穴である。

■ 基壇外装 図9。基壇の東面では8.3m、北面



写真41 礎石1（第7次西から）



写真42 礎石2（第7次西から）



写真43 礎石3（第7次西から）



写真44 塔北面・東面の乱石積基壇外装（第7次北東から）

写真45 塔南面の乱石積基壇外装（第10次2区南西から）



では2.8m、南面では1.3mの計12.4m分の乱石積基壇外装を検出した。東面、北面の乱石積には一辺15cm程度の小さなものから、横97cm、縦50cmの大きなものまで多様な石材が使用されており、2～5段、約75cmの高さまで残存している。南面の乱石積は5段、約1.1mの高さまで残存していた。

乱石積は花崗岩を主体とした石が使用されており、石積みの1段目は長辺30～40cmで大きさをそろえた石が設置されている。石積みの中には古代の瓦が挟まれているのを複数箇所を確認しており、東面の1段目と2段目の間には、単弁16弁蓮華文軒丸瓦（単弁1a型式）が挟み込まれていた。基壇の北面、基壇東面の北寄りと中央付近では、小片となった凝灰岩が設置されていること、南面の乱石積最上段には表面が平滑に整えられた凝灰岩が並べられていることから、本来は乱石積の最上段には凝灰岩が配されていたと考えられる。

南面では下から3段目の石が大きく前へせり出しており、外装基底の位置はそれより20cmほど内側にある。なお、東面と南面の塔の中央間に当たる部分で調査を行っているが、階段遺構は確認できなかった。

乱石積の石材は片麻状黒雲母花崗岩が多くを占め、花崗閃緑岩、アプライト、玢岩が少量、角閃石安山岩、細粒黒雲母花崗岩が1点ずつ使用されている。片麻状黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、アプライト、玢岩は、西安寺跡の東方の丘陵の露岩を採取したものである。また、乱石積上部に設置される火山礫凝灰岩は、鹿谷寺跡北方付近のものである。西安寺跡に使用された石材の鑑定は、奈良県立橿原考古学研究所特別指導研究員の奥田尚氏に依頼し、本報告書第6章で詳しく報告されている。

■足場穴 図10。北面から東面の基壇外周に堆積する金堂廃絶に伴う7層を除去した後、17層の地山上において3基の柱穴を検出した。

柱穴1は直径30.0cmで、埋土が5YR4/6褐色粗粒砂混じり粘土。柱穴2は直径25.0cmで、埋土が10YR3/4暗褐色微粒砂混じりシルト、柱穴3は直径20.0cm（推定）で、埋土が10YR4/2灰黄褐色シルトである。柱穴1は礎石3と基壇北東角の延長線上にあり、柱穴2、柱穴3は軒先の外側にあつて柱穴1とほぼ直線に並ぶため、これらの柱穴は足場穴と考えられる。なお、遺構の掘削は行っていない。

■基壇外周 図10。基壇北東角付近で遺存状況

が良好であった。基壇の周囲には、雨落溝の遺構、痕跡が認められなかったものの、犬走りが設けられていた。

犬走りは、基壇裾から外側へ約16cmの位置から約75cmのところまで約59cmの幅があり、なだらかな傾斜で下っている。犬走りの外側はさらに傾斜角度がきつくなって一段下がっており、そこが軒先に当たると考えられる。犬走りを含めた傾斜が排水の機能をもっていたのだろう。犬走り部分には15層の盛土地業が認められ、その外側は17層の地山となる。北面から東面にかけての基壇外周では、金堂廃絶時の堆積である7層が乱石積基壇裾まで覆っていた。基壇外周の排水傾斜面によって基壇から離れるほど堆積が厚くなり、塔の北側で30cmを測り、その堆積は金堂側へと繋がっている。

南面の基壇外周では、10層に当たる古代の塔基壇周りの整地土が、2つの層に分かれて堆積しており、2度にわたって整地が行われたようである。整地は基壇外装の裾から外側に向かって施されており、素弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦、行基丸瓦等が出土し、人頭大の石を検出したが、用途は不明である。また、下位の整地土からは拳大の玉石が出土し、外装の基底から南へ60cmの位置で、幅20～30cmで東西方向に延びる溝を検出した。部分的に白色細粒砂の堆積が認められ、雨垂れ痕跡と考えられる。

■6層上面遺構 図13。洪水による水成堆積である6層は、塔と金堂の間（塔北面）から塔の東面にかけて堆積し、塔基壇を50cmほど埋めている。その上面において東面の基壇外周で4基、北面の基壇外周で1基の土坑を検出した。

土坑1は南北50.0cm、東西60.0cm、深さ9.5cmの不整形の土坑である。埋土に10YR3/2黒褐色細粒砂混じりシルトと10YR6/4にぶい黄橙色細粒砂混じり粘土の2層がある。土坑2は南北80.0cm、東西45.0cm、深さ9.9cmの不整形の土坑である。埋土は10YR3/4暗褐色微粒砂混じりシルト、10YR4/3にぶい黄褐色細粒砂混じり粘土である。土坑3は南北30.0cm、東西50.0cm、深さ6.1cmで、楕円形を呈する。埋土は10YR3/4暗褐色微粒砂混じりシルト。土坑4は長軸1.1m、短軸50.0cm、深さ11.9cmで、平面は瓢箪の形状をしている。埋土は2.5Y4/1黄灰色細粒砂混じり粘土である。土坑5は南北1.0m、東西1.5m、深さ8.2cmの楕円

- アプライト
- ペグマタイト
- 黒雲母花崗岩
- 細粒黒雲母花崗岩
- 片麻状黒雲母花崗岩
- 花崗閃緑岩
- 閃緑岩
- 玢岩
- 角閃石安山岩
- ガラス質溶結凝灰岩
- 火山礫凝灰岩

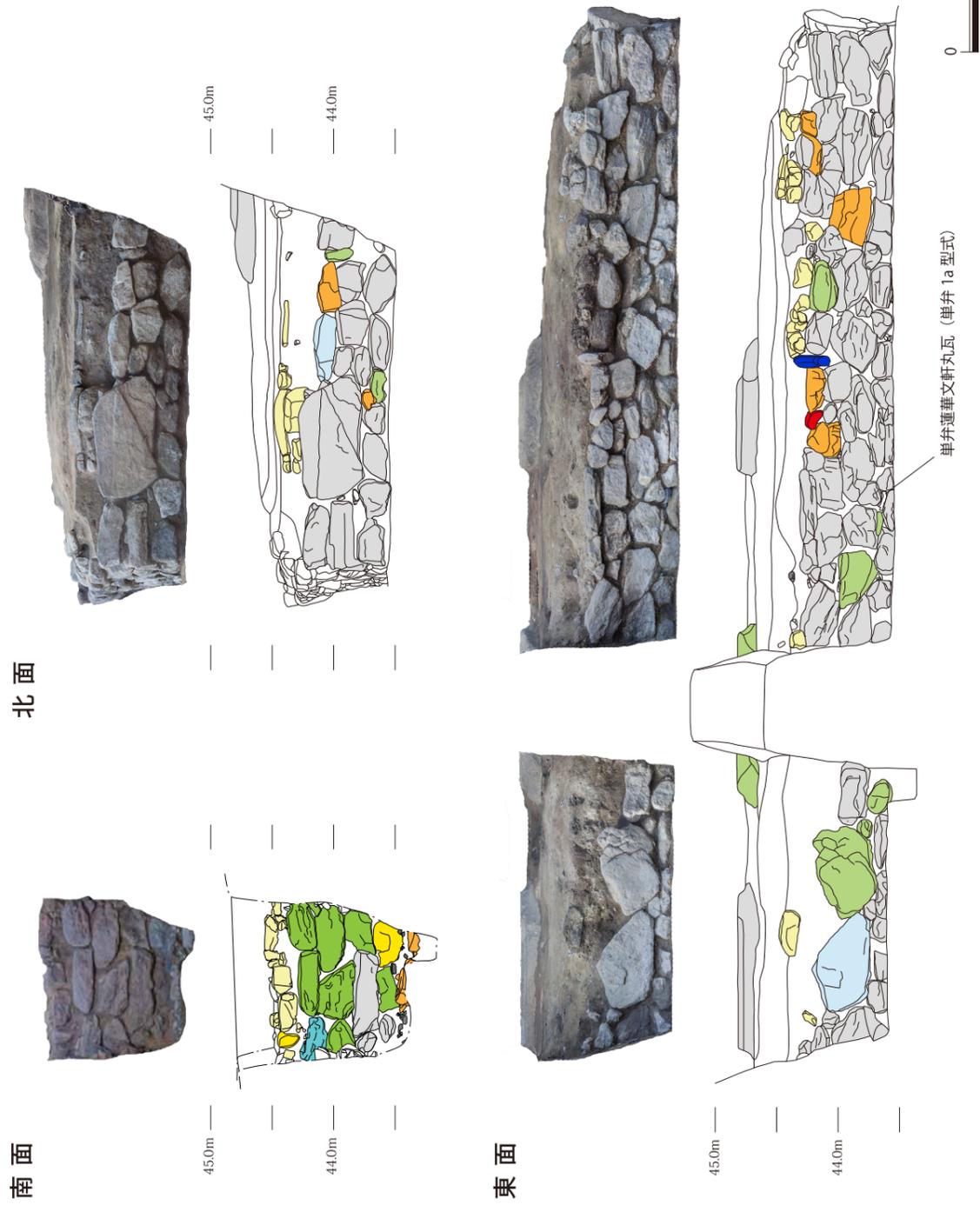


図9 塔基壇外装立面図 (1/50)

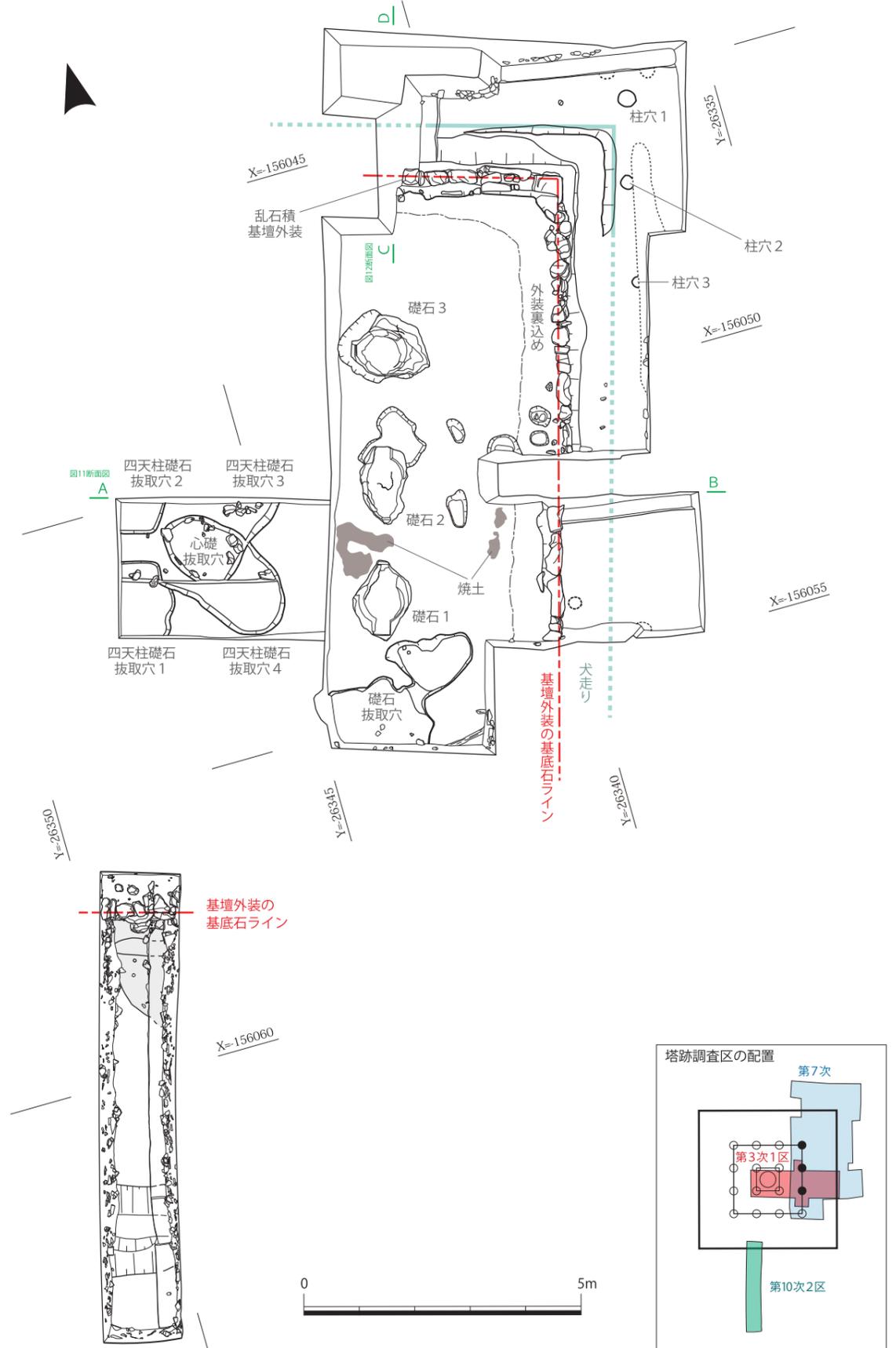


図10 塔遺構平面図 (1/100)

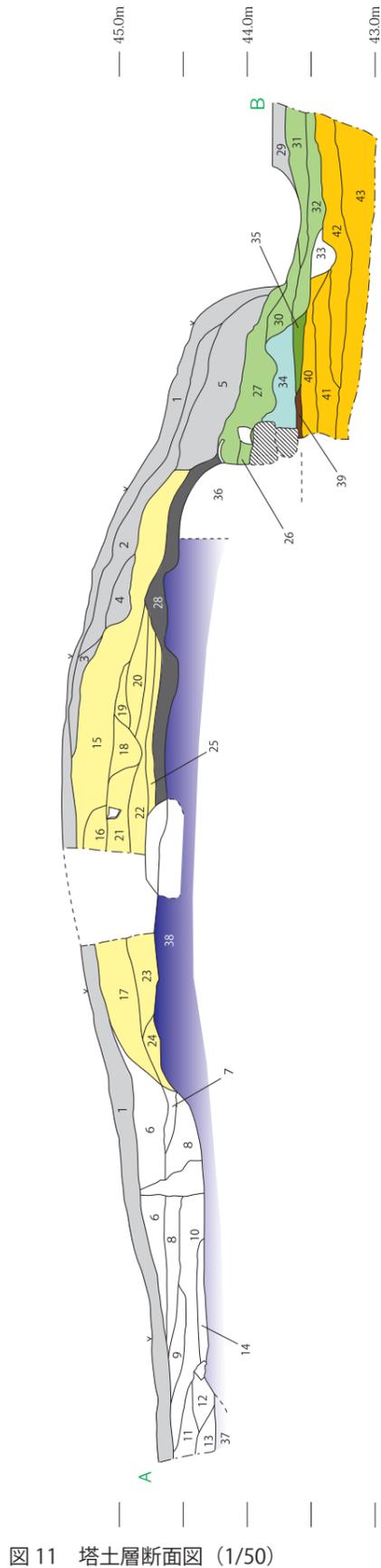
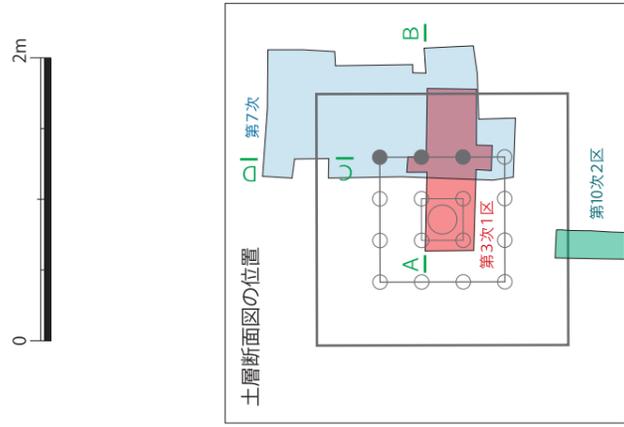


図11 塔土層断面図 (1/50)



1	5YR3/3	暗赤褐	シルト	1層
2	5YR4/3	にぶい赤褐	微粒砂混じりシルト	2層
3	10YR5/3	にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト	
4	7.5YR3/3	暗褐	シルト	3層
5	10YR4/6	褐	シルト	
6	10YR2/3	にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト	4層 (現代水田耕土)
7	10YR4/5	褐	微粒砂混じりシルト	
8	10YR5/4	にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト	3層 (古い水田耕土)
9	2.5Y5/3	黄褐	微粒砂混じりシルト	
10	10YR4/4	褐	微粒砂混じりシルト	溝
11	7.5YR3/2	黒褐	微粒砂混じりシルト	
12	5YR4/4	にぶい赤褐	微粒砂混じりシルト	6層
13	2.5Y5/3	黄褐	微粒砂混じりシルト	
14	10YR4/4	褐	微粒砂混じりシルト	7層
15	7.5YR4/3	褐	微粒砂混じりシルト	
16	10YR4/4	褐	微粒砂混じりシルト	基礎外装裏込め
17	10YR5/3	にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト	
18	10YR5/6	黄褐	微粒砂混じりシルト	13層塔基壇
19	10YR6/4	にぶい黄橙	微粒砂混じりシルト	
20	10YR5/4	にぶい黄橙	微粒砂混じりシルト	15層
21	7.5YR4/3	褐	微粒砂混じりシルト	
22	10YR4/6	褐	微粒砂混じりシルト	17層
			中粒砂混じり粘土	

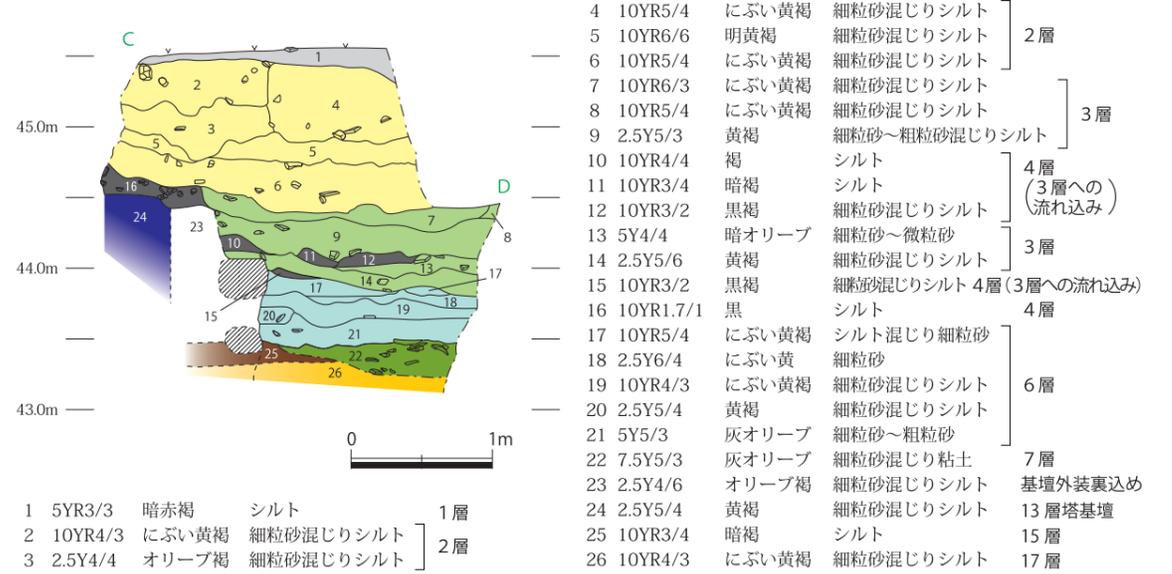


図12 塔北面基壇外周土層断面図 (1/50)

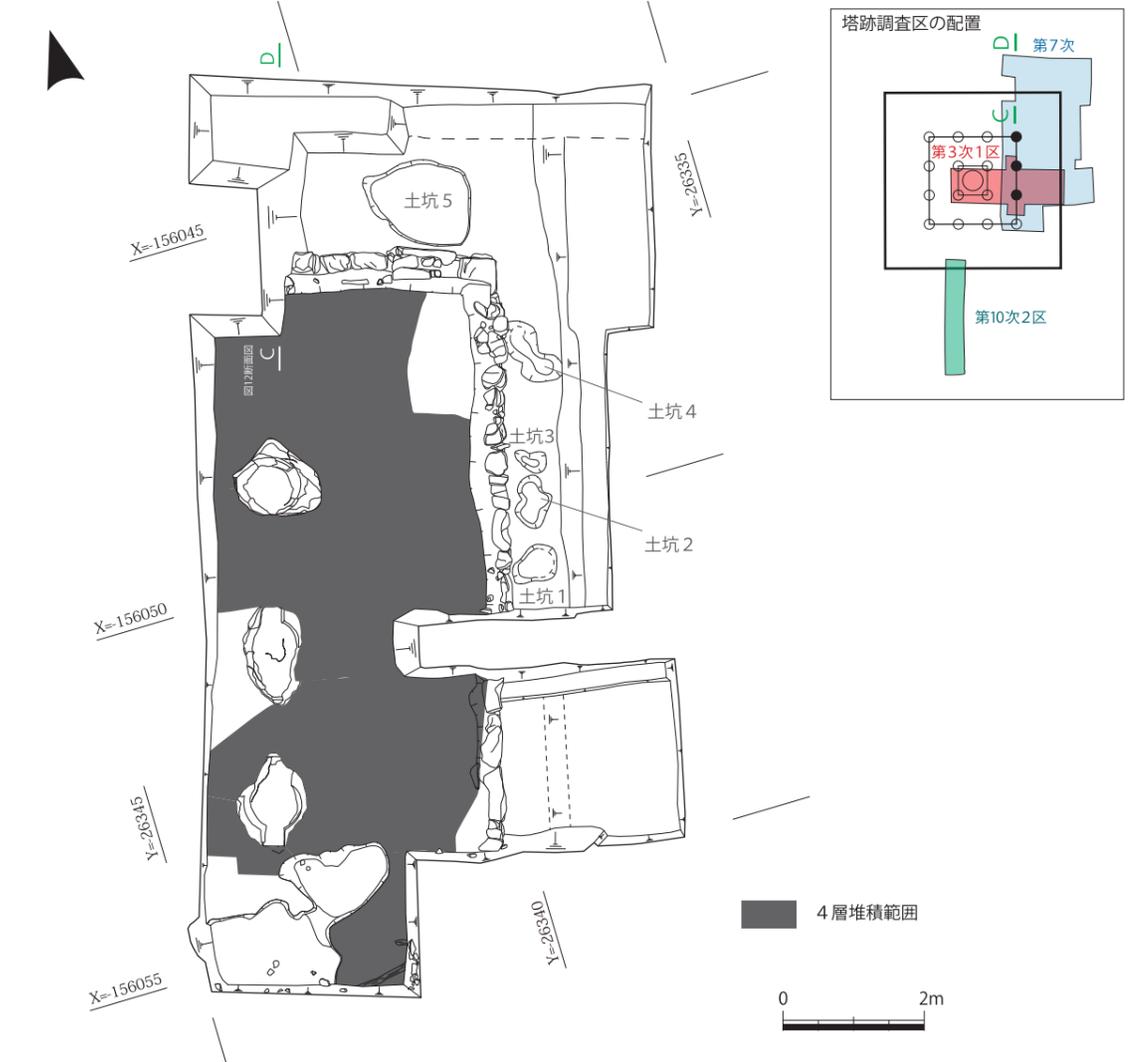


図13 塔4層及び6層上面遺構平面図 (1/100)



写真 46 塔北東面角の犬走り（第7次北東から）



写真 47 塔東面基壇外周の6層上面遺構（第7次南東から）



写真 48 基壇外装に挟まれた軒丸瓦（第7次南東から）

る。

花崗岩を主体とした乱石積基壇外装は、石積みに緩みがあるものの、北面、南面がとくに良く残っており、石積みの最上段には凝灰岩が用いられていた。調査を行った東面基壇、南面基壇のいずれからも階段の遺構は確認できていない。

基壇外周では雨落溝はつくられていなかったが、基壇の北面、東面に犬走りを検出しており、その先端で傾斜角度がきつくなって一段下がる位置が南面の基壇外周における雨垂れ痕跡とほぼ一致すること、また、その外側の北東角から東面で足場穴を検出していることから、そのラインが軒先であると推定できる。

検出遺構と塔付近の堆積土から変遷をたどってみると、塔の南面では古代の間に基壇外周の整地が2度行われている。その後、回廊雨落溝が埋没し、基壇外周にまでその埋没が広がり（8層）、13世紀後半～14世紀前半には人為的な整地（5層）が行われている。

一方、塔の北面では、金堂の廃絶に伴い13世紀後半～14世紀前半に基壇外周が埋没し（7層）、その後、ほぼ同時期に洪水が発生し、水成砂層（6層）で50cmほど埋まった。この水成砂層（6層）との前後関係は不明であるが、その頃に南面の整地土（5層）が入れている。6層上面と5層上面の標高差は10cm前後で、水成砂層（6層）の上面から土坑を検出していることからすると、5層、6層の上面で一定の造営活動が行なわれたことを示している。このとき、基壇の高さは50cm程度となっていた。

さらにその後、基壇上と南面基壇外周には炭・焼土の4層が堆積しており、火災があったことを示している。瓦、炭、焼土、炭化材などの遺物が出土するものの、その量は多くない。4層は15世紀以降に堆積したと考えられ、その上に17世紀～19世紀中頃の神社整備に伴う造成土が堆積していることから、火災ののち基壇は長く地表に露出したままであった。

形である。土坑1～土坑5のいずれにも埋土に炭が混入していることから、基壇上で火災があった以前に掘削されていた遺構である。

■ 小結 塔の基壇上では、心礎の抜取穴、四天柱の礎石抜取穴、東面側柱の礎石3個と抜取穴1基を検出した。これらは、基壇東寄りで見出したもので、基壇の西半は現地表面が基壇面よりも低くなって削平されていると考えられるため、西面の側柱柱列や抜取穴、基壇外装の残存状態はわずかなものと予想される。

検出した礎石1～3によって、塔は柱間が1間2.25m（7.5尺）の3間等間、一辺6.75m（22.5尺）の建物で、基壇の規模は南面と北面の外装基底で計測して一辺13.2m（44尺）である。これらの数値から造営尺は切りの良い1尺＝30.0cmと考えられ

写真 49 塔基壇上に堆積する4層（第3次1区南東から）



写真 52 塔基壇（第7次北東から）



写真 50 塔基壇上に堆積する4層（第7次南から）



写真 51 塔基壇上の焼土（第3次1区南から）

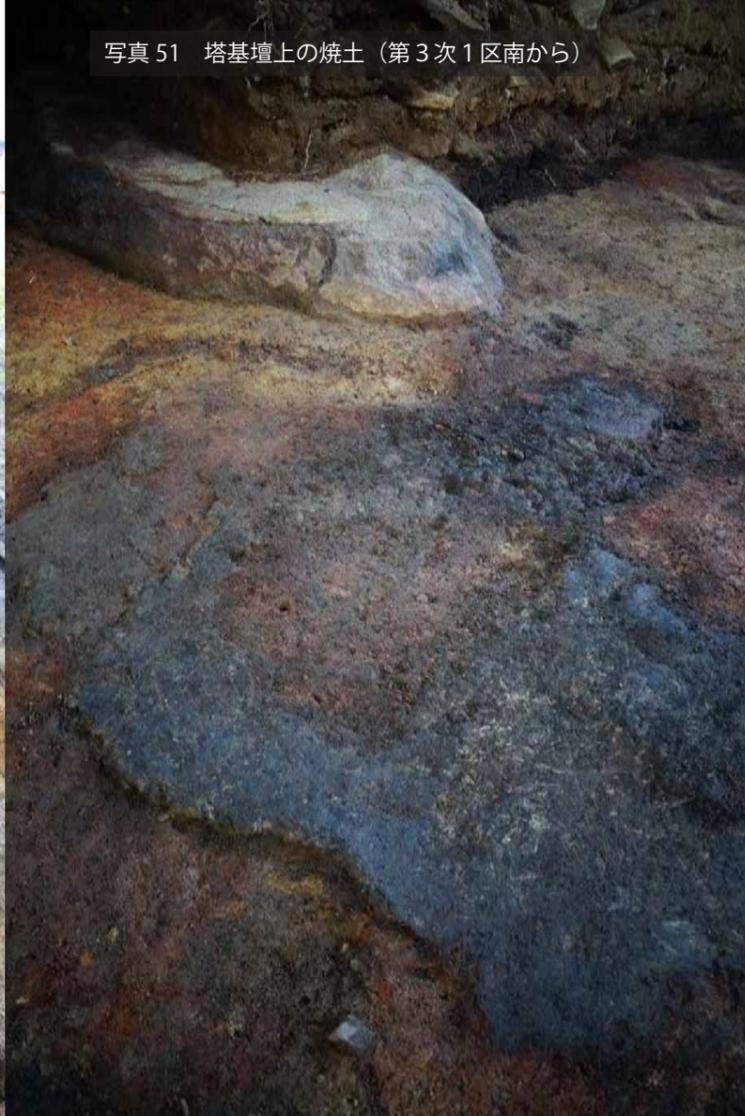


写真 53 塔の調査前（第7次南東から）



2 金堂

■ 金堂跡の調査 金堂跡では第4次調査、第8次調査1～4区、第9次調査3区、第11次調査1・2区で調査し、第8次調査の1区、2区では、第4次調査1区の東半を再発掘した。以上により金堂基壇の約15%を調査した。塔跡と同じく、舟戸神社の整備に伴う造成土が厚く堆積するため、基壇の東側およそ1/3の範囲で保存状態が良好で、造成土が堆積しなくなる西側は削平を受けており、とくに金堂跡では第8次調査3区によって、大きく削平されていることがわかった。

■ 基壇 図15。北面、南面、東面の基壇外装を検出した。基壇の西面近くはほぼ垂直に切断、削平されていて、基壇外装がまったく残っていなかった。基壇の南北長は12.18m、東西長は残存するだけで13.45mである。

第4次調査では、基壇土の断ち割りを行い、基壇は厚さ4～10cmからなる層が12層分重なった版築によって構築されていることがわかっている。その厚さは約60cmで、版築の下層には暗褐色の盛土による地業層がある。第8次調査3区の基壇西面では、上部が一部削平されていることもあって、8層分の厚さ約52cmの版築が残存していた。基壇のレベルは、最も残りの良いところで標高44.4mであり、東面付近で44.2m、南面付近で44.3m、北面付近で44.12m、西面付近で43.98mである。西面では約40cmの削平を受けていることになる。基壇外周から見た基壇の高さは、南面で1.07m、東面で1.3m、北面で1.45～1.6mと、周囲の地形に高低があることから各面で差が生じている。基壇上では、礎石2個と礎石抜取穴5基、土坑1基を検出した。

■ 礎石 図15。南北方向に並ぶ礎石2個を検出した。東面側柱の礎石である。

礎石1は南北長85.7cm、東西長73.28cmで、径53.0cmの柱座をもっている。梁行中央の柱の礎石で、棟が通る位置に当たっている。礎石の縁辺部分は火を受けて赤く変色しているが、柱座上には径約45cmの火を受けていない部分があり、柱痕跡と見られる。礎石上面の標高は44.49mで、石種は片麻状黒雲母花崗岩である。平面精査では礎石据付穴が確認できなかったため、礎石1の南東部分に断ち割りを入れた。その結果、版築での基壇構築途

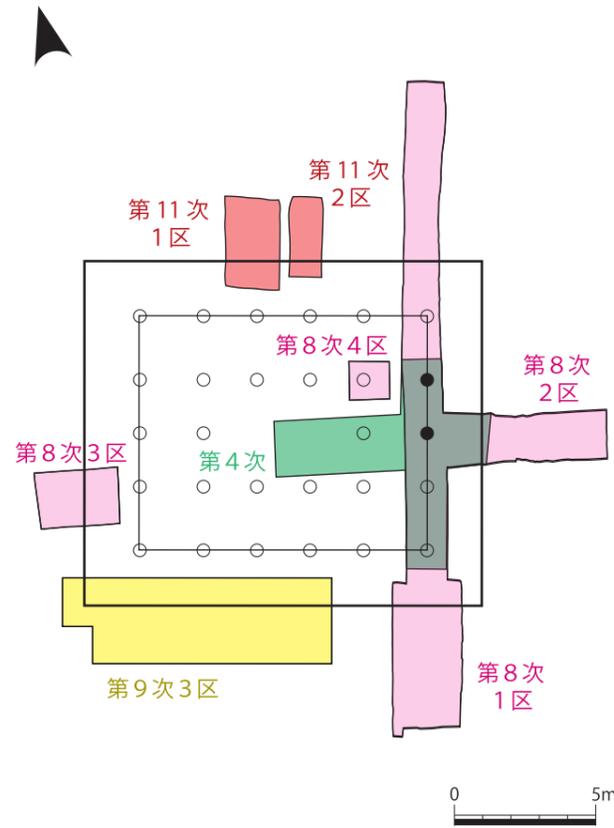


図14 金堂跡調査位置図 (1/250)

中で深さ10.0cmの礎石据付穴を掘削し、礎石を据え付け、その後に再び版築土を加える状況が確認できた。

礎石2は、礎石1の北側に位置する。南北長79.5cm、東西長70.9cmで、明確な柱座の造り出しは認められないが、約45cm四方の不整形な範囲で平坦な面が加工されている。礎石の表面のほとんどが火を受け赤色を呈し、礎石の中央部には不整形に黒く変色する部分もある。礎石の上面の標高は、44.48mであり、石種は片麻状黒雲母花崗岩である。

礎石1と礎石2の芯々での距離は1.89m、礎石1から東面基壇外装までは1.95～2.08mの距離であった。

■ 礎石抜取穴 図15。礎石抜取穴1は、礎石1の西側約2mにあり、身舎の入側柱を支える位置にある。東西長1.45m、南北長1.1m以上の大きさで、表土層下面から掘り込まれており、未完掘のため深さは70cm以上ある。埋土には瓦が多量に混入している。この抜き取り穴以外にも礎石1の上層、礎石2の東側で、表土の下面から神社整備の造成土で

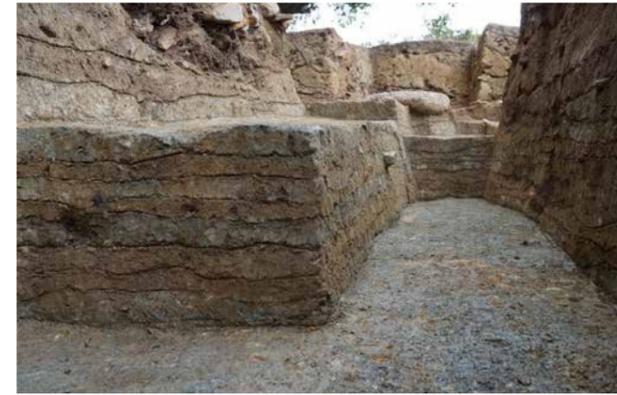


写真54 金堂基壇版築 (第4次南から)



写真55 礎石1 (第4次西から)



写真56 礎石1据付穴 (第4次東から)



写真57 礎石2 (第4次西から)



写真58 礎石抜取穴1 (第4次南から)



写真59 礎石抜取穴2 (第8次1区南西から)



写真60 礎石抜取穴4の土層断面 (第8次1区西壁)



写真61 礎石抜取穴5 (第8次4区北から)

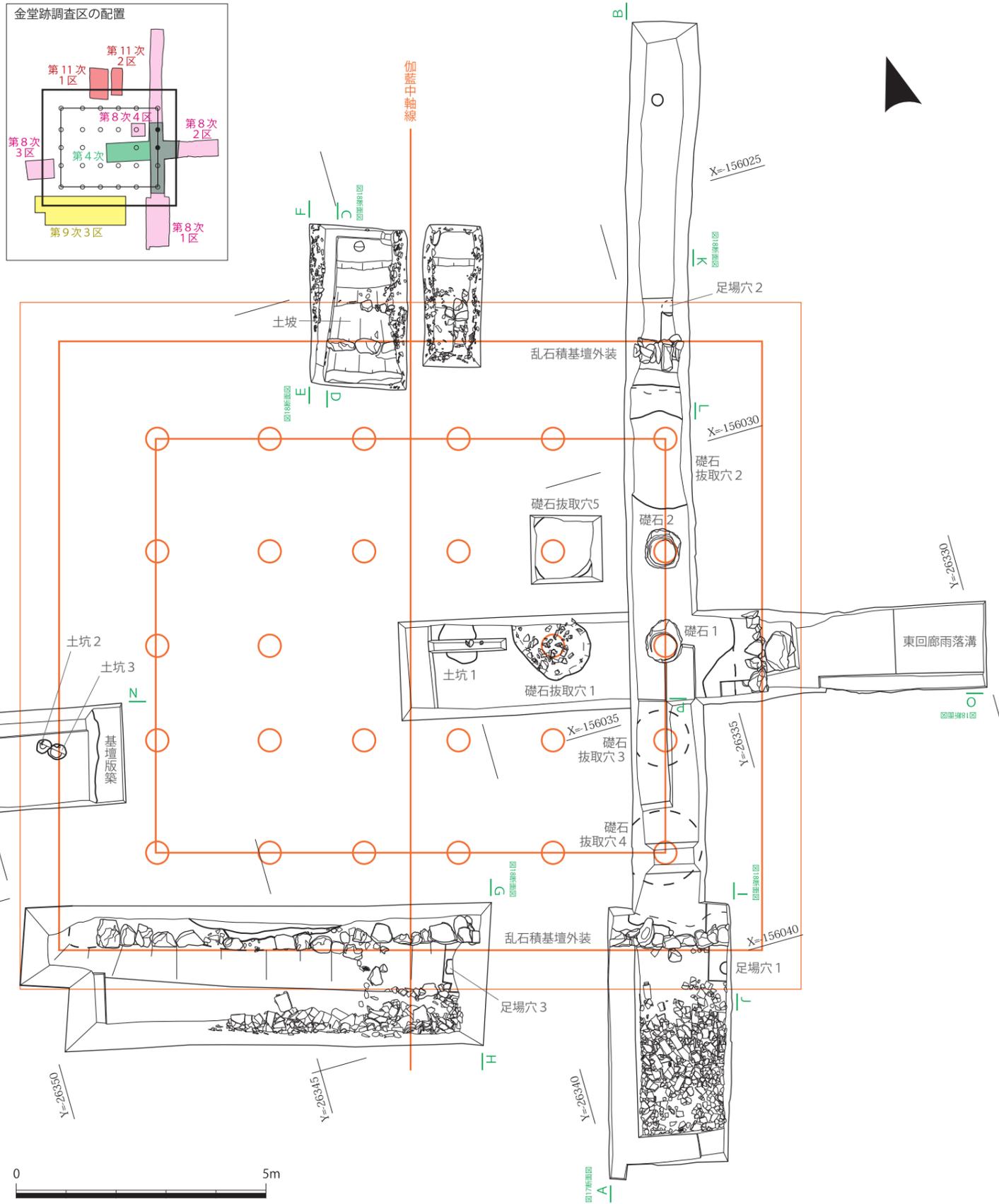


図15 金堂遺構平面図 (1/100)

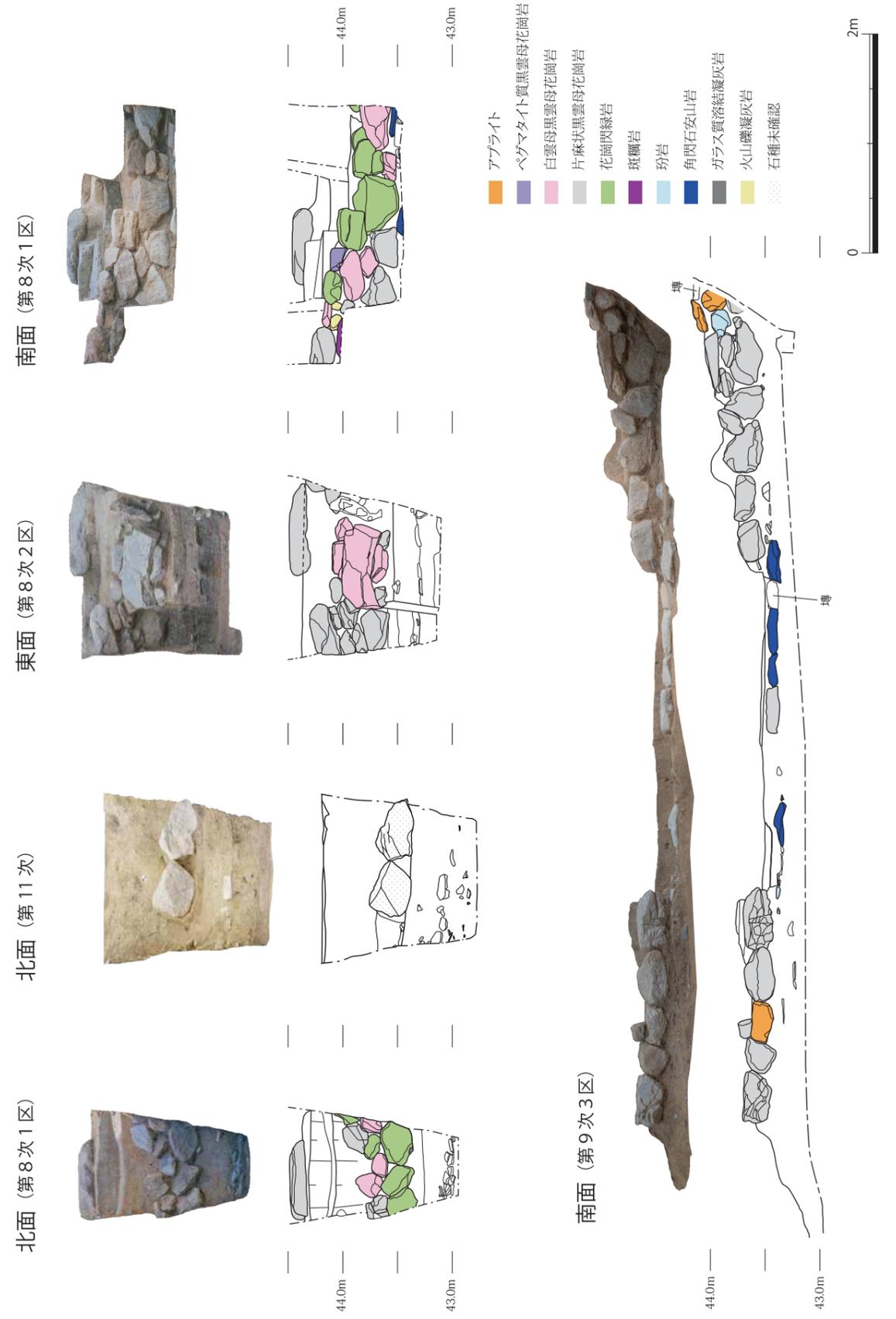


図16 金堂基壇外装立面図 (1/50)



ある2層を掘り込む土坑があり、礎石の抜き取りをねらった掘削であることがうかがえる。

礎石抜取穴2は、礎石2の北側で検出した。南北長1.96mで、東西長は調査区幅の1.0mを超える。深さは43.2cmで、塔廃絶後の造成土である3層が埋土となっている。礎石1、礎石2の延長上にあり、東面側柱の北端の礎石に当たる。

礎石抜取穴3は、礎石1の南側約1.9mにある。基壇上での平面検出では遺構を認識できなかったが、西壁の土層断面で礎石の抜取穴があることを確認した。抜取穴上端の南北長は5mを超え、深さは97.5cm、基壇検出面からの深さは12.8cmに達している。神社整備の造成土である2層上面から掘り込まれており、近代の抜き取りである。

礎石抜取穴4も西壁土層断面で確認した。礎石抜取穴3の南側にあり、東面側柱の南端の礎石に当たる。南北長1.52m、深さ50.7cmである。塔廃絶後の造成土である3層の上面から掘削されており、神社整備が行われる2層の造成以前に礎石が抜き取られている。

礎石抜取穴5は、身舎の北東角に当たる礎石の抜取穴である。第8次調査4区として礎石の有無をピンポイントで確認するために、小面積で発掘したので、調査区の全域で深さ70～80cmまでプラスチック等が混入する攪乱層が堆積していた。わずかに残る抜取穴内の埋土には、版築土が混ざる塔廃絶後の造成土である3層が堆積し、瓦、土師器、須恵器、瓦器、瓦質土器が出土した。標高44.3mで基壇を検出した。

■土坑 図15。礎石抜取穴1の西側約2mの地点では、東西長75.0cm、南北長75.0cm以上、深さ20.0cmの土坑1を検出した。平面では検出しがたいものであったが、断ち割りを入れると基壇の版築を切って土坑が掘削されている状況が確認できた。礎石1、礎石2、礎石抜取穴との位置から身舎内部に当たり、須弥壇に関わる遺構の可能性もある。

■基壇外装 図16。北面、南面、東面でそれぞれ乱石積基壇外装を確認した。

北面の基壇外装は、第8次調査1区において東面の側柱が通る位置で東西方向に幅0.9m分を検出した。高さ約76cmで、2～3段の石積が残存していた。石積の裏込めに当たる部分は深く攪乱を受け、塔廃絶後の造成土である3層が入り込んでいる。同じく基壇北面の中央を発掘した第11次調査では、

石積みの残りが悪く、最下段の2個が東西方向に幅1.1mで並んで残存するだけで、他は抜き取られていた。石は幅30～50cm、高さ40cmの比較的大きなものを使用している。この石積みの東側には据付痕跡があり、その前面に堆積する層から石1個が出土している。

東面の基壇外装は、南北方向に1.5m分を検出した。最も残りの良いところで4段、高さ76.5cmの石積みが残存する。外装の石積みラインよりも外側の位置で東西長47cm、南北長80cm、高さ30cmの石が出土している。石の下に根石が入れられ、上面が水平になるよう調整されているが、塔廃絶後の造成土である3層に設置されたものであるため、寺院とは関係ない時期のものである。もとは西安寺に使用された石材と見られる。

南面の基壇外装は、第8次調査で東面の側柱が通る位置で東西方向に2.4m分を検出した。このうち西側の残りが良く高さ約81cm、4段の石積みがあり、東へ行くほど上部が失われている。第9次調査3区では、金堂中央間に当たる位置から西側にかけて東西方向に7.6mを検出した。東側で高さ66.0cm、3段の石積みが残存し、調査区の中央では大きく削平されて石積みが失われた箇所もあるものの、おおむね1段の石積みが残存している。基壇外装の南西角が想定できる位置まで調査区を広げたが、削平によりまったく残っていなかった。南面の基壇外装は、発掘していない第8次調査1区と第9次調査3区の間が最も残りが良いと思われる。

西面の基壇外装は、基壇版築が露出するほどの削平を受けており、まったく残っていなかった。

乱石積には、小さいもので10～20cm、大きいもので40～50cm程度の石が用いられている。奥田尚氏によれば、片麻状黒雲花崗岩、白雲母黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩の使用が大半を占めており、西安寺跡東方の山地で採取された。また、南面の乱石積では、土坡に埋もれる下段の方に明神山で採取された角閃石安山岩が、上段の方では石の隙間を埋めるように鹿谷寺北方で採取された火山礫凝灰岩2個が使用されている。石材とともに埴2点で使用されているのを確認している。乱石積の積み方には違いが認められ、南面、東面と北面の金堂中央間に当たる部分では石の長辺を正面にしており、北面の東寄りでは石の小口を正面にしている。

乱石積基壇外装の構築方法については、第11次

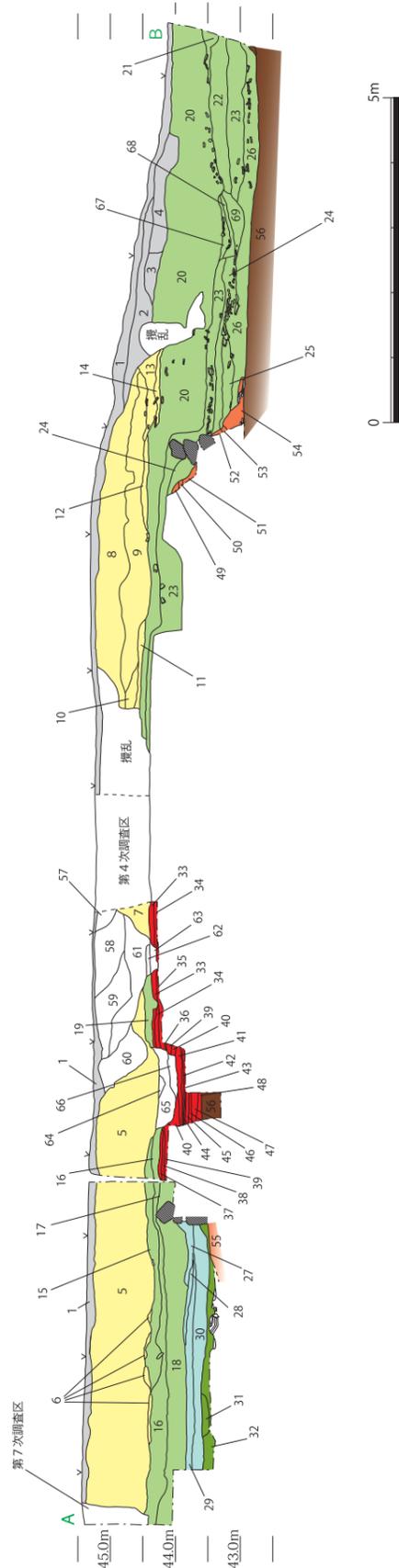
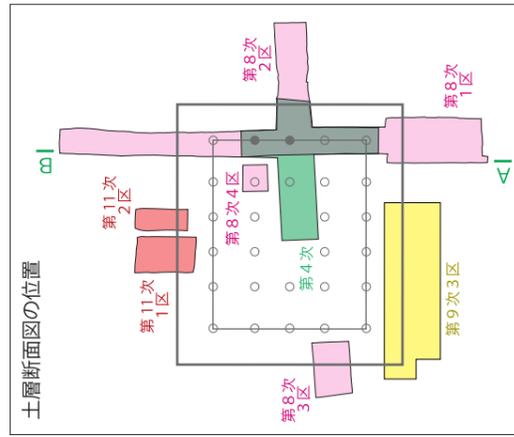


図17 金堂土層断面図 (1/50)

61 10YR3/2	黒褐	粗粒砂混じりシルト	礎石採取穴3
62 2.5Y6/4	にぶい黄	細粒砂混じりシルト	
63 2.5Y6/2	灰黄	細粒砂混じりシルト	礎石採取穴4
64 10YR6/3	にぶい黄褐	シルト	
65 10YR4/4	褐	細粒砂混じりシルト	溝状遺構
66 5Y5/2	灰オリーブ	シルト	
67 10YR4/4	褐	粗粒砂混じりシルト	
68 2.5Y6/3	にぶい黄	細粒砂混じりシルト	
69 2.5Y4/3	オリーブ褐	粗粒砂混じりシルト	

7層	14層 基礎版築	9層	15層	礎石採取穴3																																																							
31 2.5Y3/2	黒褐	32 10YR3/3	暗褐	33 2.5Y6/4	にぶい黄	34 2.5Y5/6	黄褐	35 7.5YR5/3	灰オリーブ	36 7.5YR5/3	にぶい褐	37 5Y4/4	暗オリーブ	38 10YR5/4	にぶい黄	39 10YR4/3	にぶい黄褐	40 5Y4/3	暗オリーブ	41 2.5Y4/4	オリーブ褐	42 2.5Y4/4	オリーブ褐	43 5Y5/2	灰オリーブ	44 10YR4/4	褐	45 2.5Y5/4	黄褐	46 7.5Y4/3	暗オリーブ	47 5Y5/4	オリーブ	48 2.5Y4/4	オリーブ褐	49 2.5Y4/6	オリーブ褐	50 10YR5/3	にぶい黄褐	51 10YR5/4	にぶい黄褐	52 2.5Y5/1	黄灰	53 10YR4/4	褐	54 7.5YR4/4	褐	55 10YR4/4	褐	56 7.5YR3/3	暗褐	57 7.5YR6/3	にぶい褐	58 2.5Y4/6	オリーブ褐	59 10YR4/4	褐	60 2.5Y3/3	暗オリーブ褐

1層	2層	3層	6層
1 10YR4/4	褐	1 粗粒砂混じりシルト	1 粗粒砂混じりシルト
2 2.5Y6/3	にぶい黄	2 シルト	2 シルト
3 10YR5/6	黄褐	3 細粒砂混じりシルト	3 粗粒砂混じりシルト
4 2.5Y4/4	オリーブ褐	4 細粒砂混じりシルト	4 シルト(礫土含む)
5 7.5YR4/4	褐	5 シルト(瓦多く含む)	5 粗粒砂混じりシルト
6 10YR3/2	黒褐	6 シルト(礫土含む)	6 粗粒砂混じりシルト
7 2.5Y5/3	黄褐	7 粗粒砂混じりシルト	7 粗粒砂混じりシルト
8 2.5Y6/4	にぶい黄	8 粗粒砂混じりシルト	8 シルト
9 10YR4/4	褐	9 粗粒砂混じりシルト	9 粗粒砂混じりシルト
10 10YR7/4	にぶい黄橙	10 シルト混じり粗粒砂	10 シルト
11 10YR3/4	暗褐	11 シルト	11 粗粒砂混じりシルト
12 2.5Y4/4	オリーブ褐	12 シルト	12 シルト(礫土含む)
13 10YR7/4	にぶい黄橙	13 粗粒砂混じりシルト	13 粗粒砂混じりシルト
14 7.5YR5/4	にぶい褐	14 シルト(礫土含む)	14 粗粒砂混じりシルト
15 2.5Y4/6	オリーブ褐	15 粗粒砂混じりシルト	15 粗粒砂混じりシルト
16 10YR5/6	黄褐	16 粗粒砂混じりシルト	16 粗粒砂混じりシルト
17 10YR4/4	褐	17 粗粒砂混じりシルト	17 粗粒砂混じりシルト
18 2.5Y5/6	黄褐	18 粗粒砂混じりシルト	18 粗粒砂混じりシルト
19 2.5Y6/6	明黄褐	19 粗粒砂混じりシルト	19 粗粒砂混じりシルト
20 5YR5/4	にぶい赤褐	20 粗粒砂混じりシルト	20 粗粒砂混じりシルト
21 2.5Y5/3	黄褐	21 粗粒砂混じりシルト	21 粗粒砂混じりシルト
22 2.5Y5/4	黄褐	22 粗粒砂混じりシルト	22 粗粒砂混じりシルト
23 10YR4/3	にぶい黄褐	23 粗粒砂混じりシルト	23 粗粒砂混じりシルト
24 10YR4/4	褐	24 粗粒砂混じりシルト	24 粗粒砂混じりシルト
25 10YR5/4	褐	25 粗粒砂混じりシルト	25 粗粒砂混じりシルト
26 10YR5/4	にぶい黄褐	26 粗粒砂混じりシルト	26 粗粒砂混じりシルト
27 10YR6/4	にぶい黄橙	27 粗粒砂混じりシルト	27 粗粒砂混じりシルト
28 10YR3/3	暗褐	28 粗粒砂混じりシルト	28 粗粒砂混じりシルト
29 2.5Y6/6	明黄褐	29 粗粒砂~中粒砂	29 粗粒砂~中粒砂
30 2.5Y4/3	オリーブ褐	30 小礫混じり粗粒砂	30 小礫混じり粗粒砂



土層断面図の位置



写真63 基壇西端付近の削平状況 (第8次3区南西から)



写真64 土坑1 (第4次南から)



写真65 北面の基壇外装と断ち割り (第11次北から)

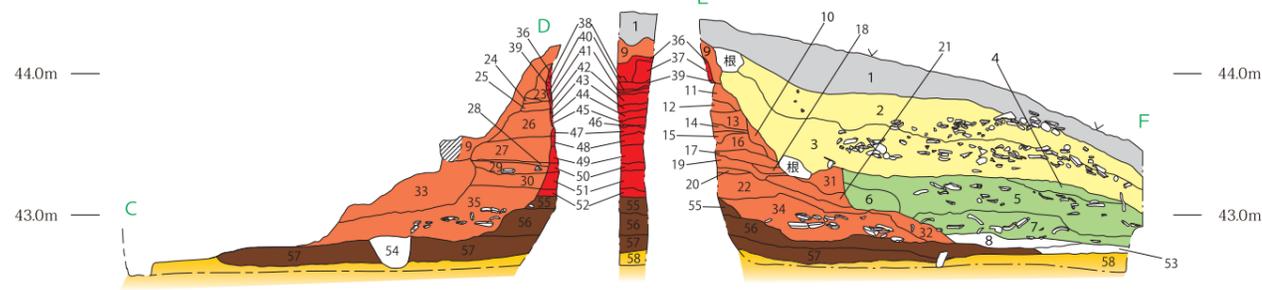


写真66 外装改修による基壇版築の切断部 (第11次北東から)



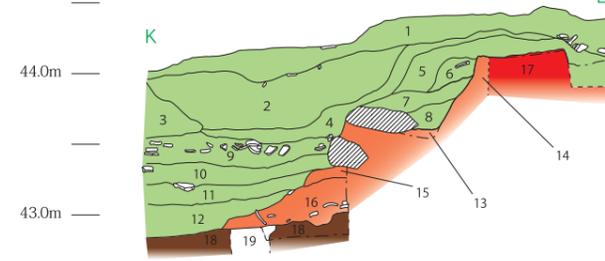
写真67 金堂基壇版築と乱石積による版築 (第11次北西から)

北面 (第11次1区東壁・西壁)



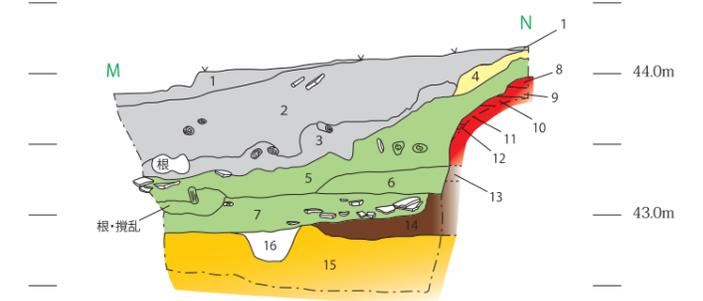
1 2.5Y3/3 暗オリーブ灰	微粒砂	1層	21 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じり微粒砂	41 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト
2 2.5Y5/6 黄褐	細粒砂	2層	22 10YR6/4 にぶい黄褐	細粒砂混じり微粒砂	42 5Y5/2 灰オリーブ	シルト
3 10YR6/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト		23 10YR6/4 にぶい黄褐	細粒砂混じり微粒砂	43 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト
4 10YR5/6 黄褐	微粒砂	3層	24 10YR5/4 にぶい黄褐	微粒砂	44 2.5Y6/3 にぶい黄	シルト
5 7.5YR4/6 褐	細粒砂混じりシルト		25 10YR6/4 にぶい黄褐	細粒砂	45 10YR5/8 黄褐	細粒砂混じりシルト
6 10YR5/6 黄褐	微粒砂	9層外装の版築	26 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト	46 2.5Y5/2 暗灰黄	シルト
7 10YR4/6 褐	細粒砂混じりシルト		27 10YR5/3 にぶい黄褐	中粒砂混じり微粒砂	47 2.5Y5/3 黄褐	細粒砂混じりシルト
8 10YR4/4 褐	微粒砂～細粒砂	水成砂層	28 10YR5/6 黄褐	微粒砂	48 2.5Y4/2 暗灰黄	シルト
9 10YR6/6 明黄褐	微粒砂混じりシルト		29 2.5Y5/2 暗灰黄	シルト	49 7.5YR5/6 明褐	細粒砂混じりシルト
10 10YR5/4 にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト	9層外装の裏込め	30 10YR6/4 にぶい黄橙	細粒砂混じりシルト	50 10YR5/6 明褐	シルト
11 10YR7/6 明黄褐	微粒砂混じりシルト		31 10YR6/3 にぶい黄橙	細粒砂混じり微粒砂	51 10YR5/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト
12 10YR6/4 にぶい黄褐	細粒砂	9層土坡	32 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	52 10YR6/6 明黄褐	細粒砂混じりシルト
13 10YR5/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト		33 10YR5/4 褐	細粒砂混じりシルト	53 10YR4/6 褐	中粒砂混じりシルト
14 7.5YR5/4 にぶい褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の整地	34 10YR6/6 明黄褐	細粒砂混じりシルト	54 10YR4/4 褐	中粒砂混じりシルト
15 10YR5/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト		35 10YR5/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	55 10YR5/3 にぶい黄褐	微粒砂混じりシルト
16 7.5YR5/2 灰褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の版築	36 2.5Y5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト	56 7.5YR4/4 褐	微粒砂混じりシルト
17 10YR6/6 明黄褐	細粒砂混じり微粒砂		37 2.5Y5/3 黄褐	細粒砂混じりシルト	57 7.5YR5/2 灰褐	粗粒砂混じりシルト
18 2.5Y5/2 暗灰黄	微粒砂混じりシルト	14層基壇版築	38 2.5Y4/2 暗灰黄	シルト	58 7.5YR6/1 褐	細粒砂混じりシルト
19 2.5Y5/4 黄褐	微粒砂混じりシルト		39 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト		
20 10YR4/6 褐	細粒砂混じりシルト		40 2.5Y6/3 にぶい黄	シルト		

北面 (第8次1区東壁)



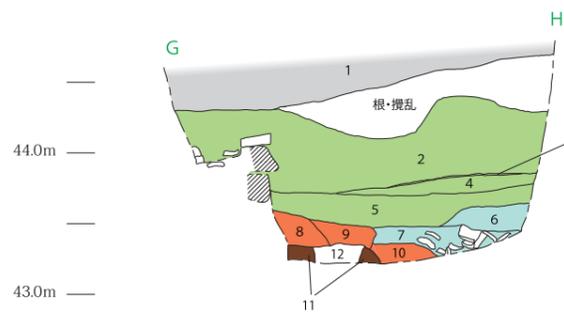
1 2.5Y4/4 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	3層
2 10YR5/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
3 2.5Y5/3 黄褐	粗粒砂混じりシルト	
4 2.5Y5/4 黄褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の裏込め
5 2.5Y4/4 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	
6 2.5Y4/4 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の版築
7 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	
8 5Y5/3 灰オリーブ	シルト	9層土坡
9 10YR4/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
10 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	14層基壇版築
11 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	
12 10YR5/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	15層
13 10YR4/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
14 2.5Y4/6 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	17層
15 10YR4/4 褐	地山混じり細粒砂	
16 7.5YR4/4 褐	シルト	
17 10YR5/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
18 7.5YR3/3 暗褐	細粒砂混じりシルト	
19 10YR3/3 暗褐	細粒砂混じりシルト	

西面 (第8次3区北壁)



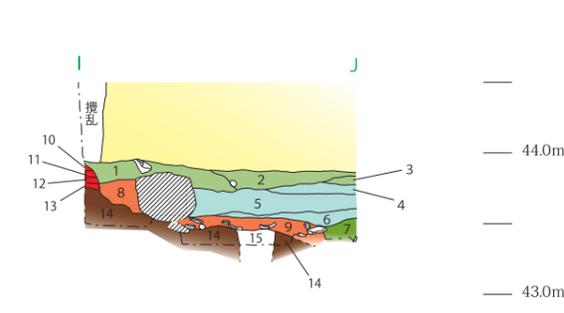
1 10YR2/3 黒褐	シルト	1層
2 7.5YR4/4 褐	粗粒砂混じりシルト	
3 10YR3/4 暗褐	細粒砂混じりシルト	2層
4 10YR4/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
5 7.5YR4/3 褐	細粒砂混じりシルト	3層
6 10YR4/6 褐	粗粒砂混じり細粒砂	
7 10YR4/4 褐	シルト混じり細粒砂	14層基壇版築
8 5Y5/4 オリーブ	細粒砂混じりシルト	
9 10Y4/2 オリーブ灰	シルト	15層
10 2.5Y5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト	
11 10YR4/4 褐	粗粒砂混じりシルト	17層
12 5Y4/1 灰	シルト	
13 5YR3/3 暗赤褐	シルト	
14 2.5Y4/6 オリーブ褐	シルト～粘土	
15 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	
16 10YR4/4 褐	シルト混じり細粒砂	

南面 (第9次3区東壁)



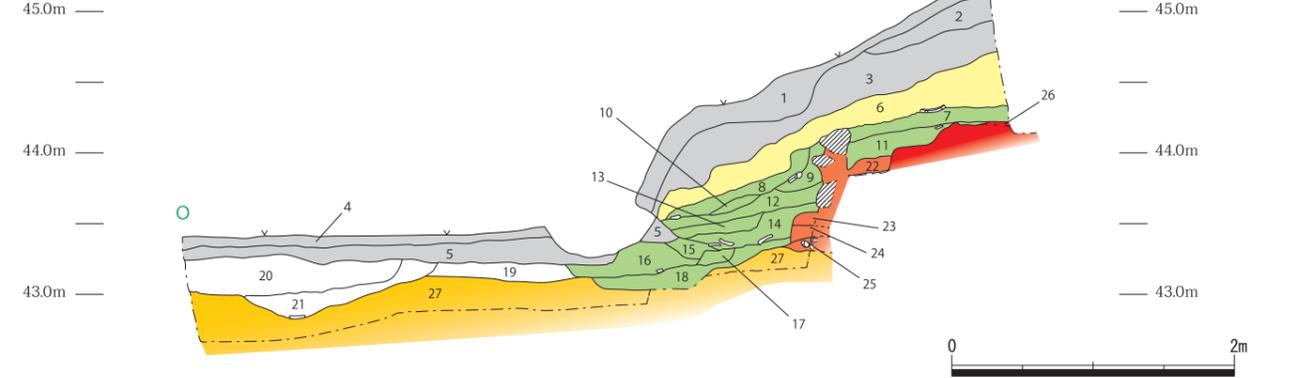
1 10YR4/2 灰黄褐	シルト	1層
2 10YR5/4 にぶい黄褐	粗粒砂混じりシルト	3層
3 7.5YR3/1 黒褐	シルト	
4 10YR6/2 灰黄褐	細粒砂混じりシルト	6層
5 2.5Y4/6 オリーブ褐	シルト混じり細粒砂	
6 2.5Y6/4 にぶい黄	細粒砂	9層外装の整地
7 10YR4/4 褐	シルト混じり細粒砂	
8 10YR4/4 褐	シルト	17層
9 5Y6/3 オリーブ黄	シルト混じり細粒砂	
10 5Y6/3 オリーブ黄	シルト混じり細粒砂	足場穴3
11 5Y5/3 灰オリーブ	シルト	
12 2.5Y4/6 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	

南面 (第8次1区東壁)



1 10YR5/4 にぶい黄褐	シルト混じり細粒砂	3層
2 10YR4/4 褐	シルト	
3 7.5YR4/2 灰褐	細粒砂混じりシルト	6層
4 2.5Y6/6 明黄褐	微粒砂～中粒砂	
5 2.5Y6/3 にぶい黄	細粒砂	7層
6 2.5Y4/3 オリーブ褐	小石混じり細粒砂	
7 10YR3/3 暗褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の裏込め
8 10YR5/3 にぶい黄褐	細粒砂混じり粘土	
9 10YR4/4 褐	シルト	9層土坡
10 5Y4/4 暗オリーブ	シルト	
11 10YR5/4 にぶい黄褐	シルト	14層基壇版築
12 2.5Y5/1 オリーブ灰	シルト	
13 10YR4/3 にぶい黄褐	シルト	15層
14 7.5YR4/3 褐	シルト	
15 7.5YR4/3 褐	細粒砂混じりシルト	足場穴1

東面 (第8次2区南壁)



1 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	1層 (現代水田耕土)
2 10YR5/6 黄褐	粘土	
3 10YR4/6 褐	シルト混じり細粒砂	
4 5Y2/2 オリーブ黒	粘土	2層
5 5Y3/2 オリーブ黒	粘土混じり細粒砂	
6 2.5Y4/6 オリーブ褐	細粒砂混じりシルト	3層
7 10YR4/6 褐	シルト混じり細粒砂	
8 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の裏込め
9 10YR4/3 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
10 7.5YR3/4 暗褐	細粒砂混じりシルト	9層土坡
11 10YR5/6 黄褐	細粒砂混じりシルト	
12 10YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	9層外装の整地
13 10YR3/3 暗褐	細粒砂混じりシルト	
14 7.5YR4/1 褐灰	細粒砂混じりシルト	14層基壇版築
15 5Y4/2 灰オリーブ	粘土	
16 5Y3/2 オリーブ黒	細粒砂混じり粘土	17層
17 10YR4/2 灰黄褐	粘土	
18 7.5YR4/1 褐灰	粘土混じり細粒砂	
19 2.5Y4/1 黄灰	細粒砂混じり粘土	
20 7.5Y4/1 灰	粘土	
21 5Y4/2 灰オリーブ	粘土混じり細粒砂	
22 10YR5/4 にぶい黄褐	細粒砂混じりシルト	
23 7.5YR4/3 褐	シルト	
24 7.5YR4/4 褐	細粒砂混じりシルト	
25 10YR4/1 褐灰	シルト混じり粗粒砂	
26 5Y5/4 オリーブ	シルト	
27 2.5Y5/6 黄褐	細粒砂混じり粘土	

土層断面図の位置

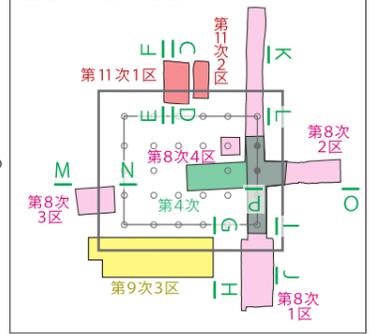


図18 金堂基壇外装土層断面図 (1/50)

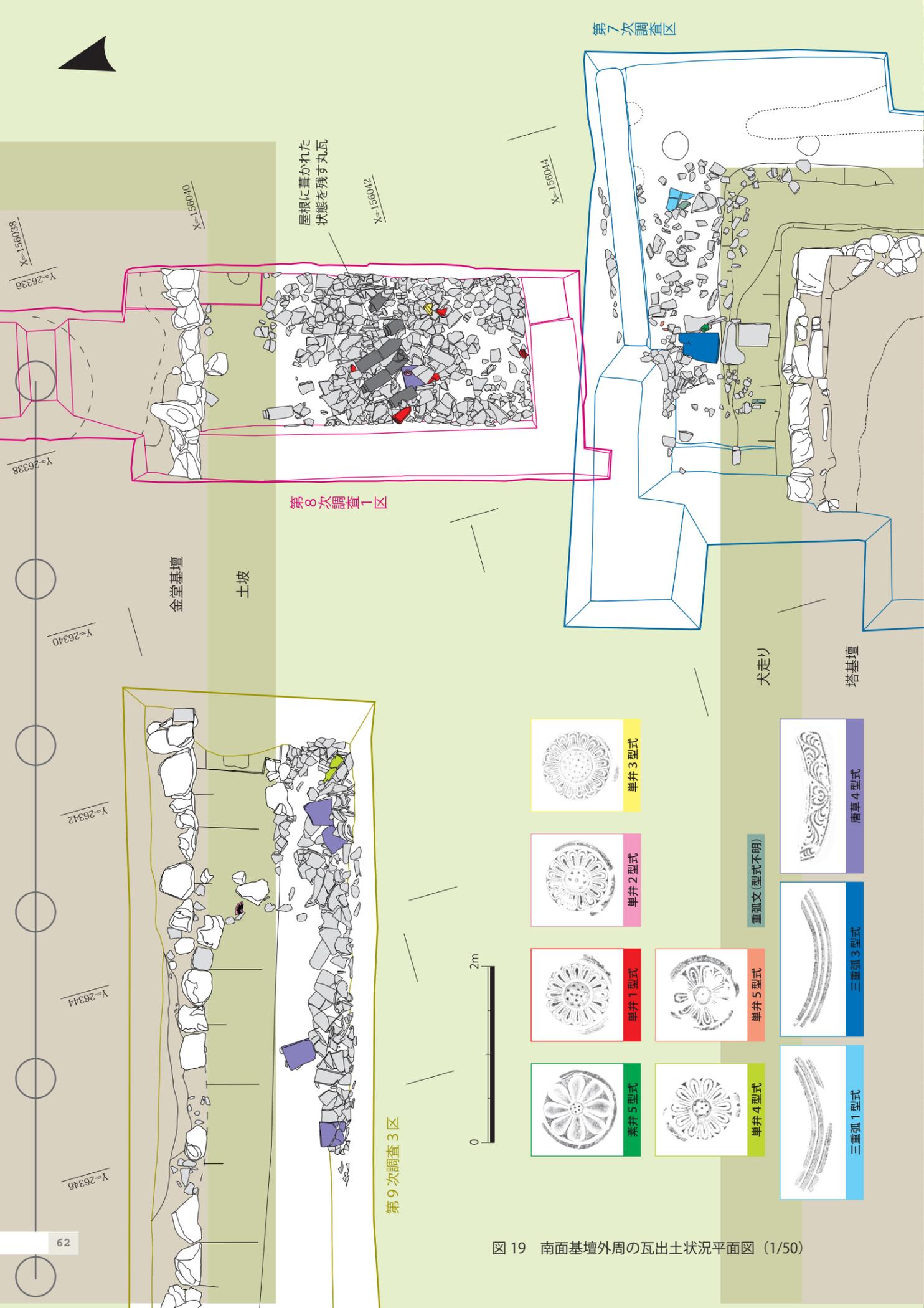


図 19 南面基壇外周の瓦出土状況平面図 (1/50)

写真 68 金堂基壇と東面側柱列 (第8次1区・2区南から)





写真 69 南面の基壇外周で組み合わせられて出土した丸瓦（第8次1区北西から）



写真 71 南面の基壇外周（第9次3区東から）



写真 72 東面の乱石積基壇外装（第8次2区東から）

写真 70 南面の基壇外周で瓦当面を基壇方向に向けて出土した唐草4型式の軒平瓦（第9次3区北から）



写真 73 北面の乱石積基壇外装と土坡（第8次1区北から）





写真74 北面の乱石積基壇外装と土坡(第11次1区北東から)

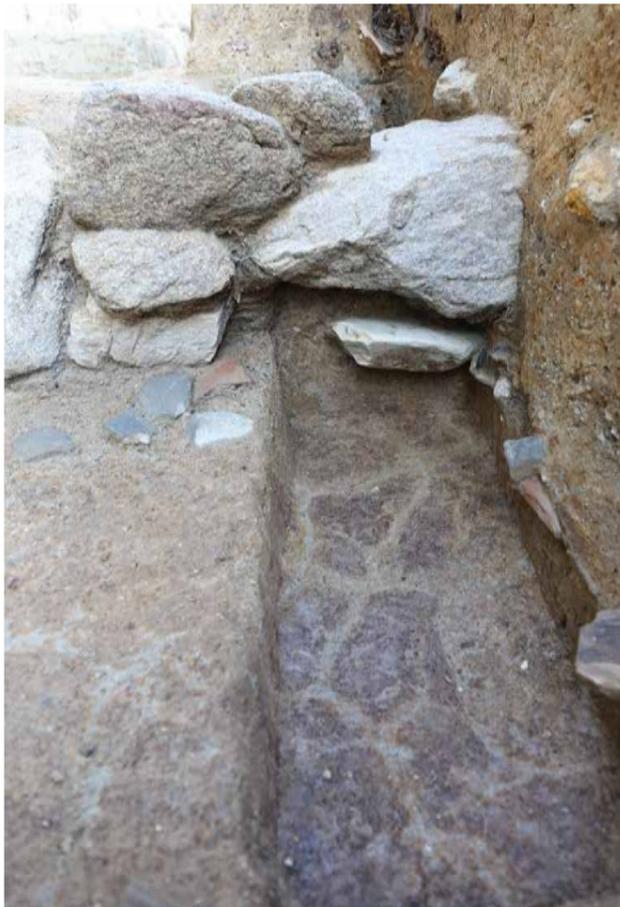


写真75 足場穴1(第8次1区南から)

調査で断ち割りを入れ、その土層断面を観察したことで明らかとなった。すなわち、地山に盛土地業を行ったところに厚さ1m、17層分の版築で構築した金堂基壇を、まず現状の乱石積基壇外装から内側70cmの位置で垂直に切り落とし、盛土地業の上に古代の瓦を含む土で厚さ30cmの整地を行っている。そして、その整地土の上に厚さ65cm、11層分の版築を再び築き、またさらにその版築の外側、古代の瓦を含む整地土上に厚さ15～30cmで土手状に整地を施して、乱石積を築いていた。なお、この土手状の整地を本報告書では土坡と呼んでおく。

乱石積に伴って築かれた版築は、下部で約1mの奥行きがあるが、上部は基壇側へ傾斜し、ほとんど奥行きがなくなっている。この傾斜が乱石積が施工されたときのものなのか、あるいはその後、削平されたものなのかは不明である。傾斜面には、厚さ10cmほどの裏込め土が残存していた。第8次調査1区においても乱石積基壇外装の下に瓦を含む整地土と乱石積の裏込め部分で版築状の堆積を確認していた。この堆積状況は、第11次調査の断ち割りによって確認できたものと同じである。

乱石積基壇外装の下に構築された土坡は、幅と高さには違いはあるものの、各面で検出している。土坡は、南から北、東から西に低くなる地山面の高低差を解消させ、乱石積基壇の基底の高さを均一にしている。基壇北面の第11次調査の土坡は石積みの外側96cmの位置まであり、石積みの下で30cm、端で10cmの厚さがある。古代の瓦、凝灰岩の塊や粉碎された石粒を含んでいる。第8次調査1区では石積みから外側へ約80cmの位置まであり、石積みの下で厚さ約52cmであった。基壇東面の土坡は石積みから外側へ26.7cmの位置まであり、石積み下で厚さ約29cmである。第8次調査1区の基壇南面では、石積みから外側へ96cmの位置まで、石積み下で厚さ10cmあり、第9次調査3区では、石積みから外側へ約70cmの位置まであり、石積み下で厚さ30.2cmであった。この調査区の東寄りでは、土坡に単弁蓮華文軒丸瓦や凝灰岩を含む粘土、中央から西寄りでは、6～8mm程度の石粒が混じる土が使用されている。金堂の基壇外装は、下部を土坡、上部を乱石積で築いた2段構造であった。

■ **足場穴** 図15。第8次調査1区の基壇南面、北面において2基、第9次調査3区において1基、計3基の柱穴を検出した。いずれも断ち割りを行っ

た地山上からの検出で、足場穴と見られる。

足場穴1は、南面の乱石積基壇外装から42cm外側で検出した。径約23cm。乱石積基壇外装下段の土坡を除去した後の地山上で検出した。足場穴2は、北面の乱石積基壇外装から45cm外側で検出した。直径31cm。足場穴3は、南面の乱石積基壇外装から42.0cm外側で検出した。径約23cmである。

■ **不明土坑** 図15。西面の基壇外装付近の地山上で土坑2基を検出した。土坑2は径24.0cm、深さ9.8cmで、土坑3は径29.4cm、深さ8.1cmである。2基とも円形で隣接している。西面の基壇外装付近は、地山面が20cm程度の削平を受けているので、遺構の底部分を検出したものである。

■ **基壇外周** 図15・19。南面の基壇外周では、金堂廃絶に伴う7層に大量の瓦が埋没しているのを確認している。第8次調査1区での出土状況を見ると、屋根に葺かれているのと同様に丸瓦が平行に並んでおり、2か所で玉縁部が組み合わさったままであった。丸瓦は玉縁部が基壇の方向を向いており、平行に並ぶ丸瓦の間には割れた平瓦が確認できた。また、第9次調査3区では、均整唐草文軒平瓦が瓦当を基壇側に、凸面を上にした状態で並ぶように出土しており、金堂に葺かれていた瓦が屋根からまとまって滑落し、そのまま埋まったものと考えられる。なお、これら南面の基壇外周から出土した瓦は、取り上げないで検出状況のまま現地保存している。

東面の基壇外周は緩やかな傾斜で外側に下り、東回廊の内側雨落溝へと続いている。北面の基壇外周は北側に向けてやや下がる状況が認められ、第11次調査では基壇外装の土坡上に基壇側から流れ込んだ葉理(ラミナ)を含む砂層の堆積があった。東面、北面ともに雨落溝の遺構は認められなかった。

■ **小結** 金堂跡において行った第4次調査、第8次調査1区・2区、第9次調査3区、第11次調査1区・2区で乱石積による化粧を施した基壇外装を検出した。金堂基壇の上面は、最も残りが良いところで標高44.4mであった。基壇は地山に盛土地業した上に、約80cmの版築をして構築されている。基壇の高さは、周囲の地形の高低差によって1.0～1.6mと各面で異なっている。

基壇上では、東面側柱の礎石2個と礎石採取穴3基、東面の入側柱に当たる礎石採取穴2基を検出した。これらの礎石、礎石採取穴の位置と基壇の南北

長12.18mから、基壇に配置できるのは東西方向に棟をもつ東西3間、南北2間の四面に庇の付く建物で、全体で桁行5間、梁行4間の金堂が復元できる。東面側柱の礎石1と基壇外装の東端から、基壇の出が1.95m(6.5尺)で確定できるため、金堂の梁行(南北)は8.28m(27.6尺)となる。さらに、礎石1と礎石2から身舎の梁行の柱間が1.89m(6.3尺)であるのが明らかなので、庇の柱間は2.25m(7.5尺)と推定できる。

そして、金堂の棟が東西方向で確定したことで、塔の調査成果も合わせれば、西安寺は四天王寺式の伽藍配置であったことになり、削平によって金堂西面の基壇外装が検出されなかったものの、伽藍中軸線で折り返すことで、金堂の桁行(東西)を10.17m(33.9尺)に復元することができる。この寸法に庇の柱間である2.25m(7.5尺)を当てはめれば、身舎の中央間と脇間の3間は1.89m(6.3尺)の等間として配分でき、金堂の規模、柱配置、柱間のすべてを推定することができる。造営尺は塔と同じく1尺=30.0cmで計算できる。

なお、金堂基壇についても、明らかになっている乱石積基壇外装の東面を伽藍中軸線で折り返せば、基壇の東西長は14.07m(46.9尺)に復元できる。復元による基壇西端のラインは、第9次調査3区で検出した土坡下の整地土が堆積するラインに一致している。

花崗岩を主体とした乱石積基壇外装は、1～4段の石積みが残存しており、北面で2.0m分、東面で1.5m分、南面で12.6m分の計16.1mを検出した。乱石積は、金堂基壇を切断した後、盛土地業の上に古代の瓦を含む土で整地し、金堂基壇版築の外側に新たに版築を築いて、土坡をつくり、石積みを行って裏込め土が入れられた。土坡は乱石積基壇外装の下部を構成するもので、その奥行きや高さは各面で異なり、地形の高低差を解消させて、乱石積の下端をそろえている。第11次調査の断ち割りで乱石積の構築過程が明らかになったことで、乱石積は改修されたものであり、金堂の建立時には別の基壇外装であったことが予想される。金堂跡の調査をつうじて凝灰岩の破片が出土し、乱石積基壇外装に伴う土坡にも凝灰岩が含まれること、金堂南面の基壇外装に凝灰岩が使用されることから、金堂の建立時は凝灰岩を使用した切石積基壇外装であったと想定できる。

3 回廊

■ **回廊跡の調査** 回廊跡は第8次調査2区、第9次調査2区で東回廊、第10次調査2区で南回廊、第6次調査3区、第10次調査1区で西回廊を調査している。

■ **東回廊** 図21。金堂基壇の東端から約5m、伽藍中軸線から約12mの位置を起点に、東に4.8mの上端幅をもつ高まりを検出した。南北方向に延び、左右に雨落溝と判断できる遺構が伴うので、東回廊の基壇である。回廊基壇は、東から西へ低くなる地山の17層を削り出し、さらに東西の雨落溝を掘り込んで構築している。検出した基壇面の標高は43.31～43.35mで、西側雨落溝の底からの高さは27cm。基壇上には版築などの整地は認められず、瓦を含む層が堆積していた。また、基壇上には後世の溝、大型土坑があり、想定される柱間以上に調査区を広げたものの、検出した範囲では礎石、礎石採取穴、柱穴などの遺構は確認できなかった。

■ **西回廊** 図20。西回廊は、東回廊から伽藍中軸線で反転させることで、その位置が推定できている。第10次調査1区、第6次調査3区の2か所で西回廊の推定地を調査しているが、いずれも削平を受けており、盛土地業の15層上にわずかな整地土を検出するのみで、基壇の高まりなどは確認できていない。東回廊の位置を反転させると、西回廊の外側雨落溝が現状の舟戸神社の西端を区切るコンクリート水路と一致するため、西回廊があった可能性は極めて高い。第6次調査2区では地山上に15層の地業盛土が検出されなかったこともそのことを示していると考えられる。

■ **南回廊** 図22。南回廊の基壇は、塔基壇の南端から6.5mの位置で北端を検出した。基壇検出面の標高は43.64mである。地山と15層の盛土地業を削り出してつくった内側雨落溝の土を基壇に積み上げて築いており、15層の盛土地業の上に11層の回廊基壇の整地土が約16cm残存している。溝底からの基壇の高さは60cmで、検出面積がわずかなこともあり、基壇面に柱穴などの遺構は認められなかった。また、11層の回廊基壇の整地土から遺物は出土しなかった。

■ **内側雨落溝** 図15・21。第8次調査2区、第9次調査2区で東回廊の内側雨落溝を検出している。溝底の幅は1.0mで、東側の溝上端は回廊基壇

に取り付いているが、西側は塔、金堂の基壇外周へと緩やかに上る斜面となっており、明確な溝幅は確認できていない。塔、金堂にも雨落溝がなく、基壇外周に排水することで、それらの雨水を内側雨落溝に集める構造になっていると推測される。

内側雨落溝は南回廊においても検出している。形状は、同じく塔基壇側は緩やかな傾斜で下り、塔基壇の南端から4.6m付近で傾斜がきつくなって溝底へと続いていく。対して、回廊基壇側は垂直に近い状態で立ち上がっている。雨落溝内には、幅約70cm、厚さ約20cmで砂が堆積していた。

■ **外側雨落溝** 図21。東回廊で外側雨落溝を検出している。南北方向に延びる幅3.07mの溝で、回廊基壇上面からの深さは16cmである。溝内には砂が堆積していた。地山を削り込んで溝としており、溝外側の地山面は標高43.48mと東回廊の基壇面よりも高い位置にある。地山の標高は東の丘陵に向かってさらに上がっていく。

■ **小結** 比較的標高の高い位置にある東回廊が良好な状態で確認できた。内側、外側に雨落溝があり、とくに内側の雨落溝は、その形状から塔、金堂の雨水の処理も兼ねていると考えられる。西回廊は確認できなかったが、東回廊の位置から推測でき、外側雨落溝の位置に現在もコンクリート水路が走り、それを境にした伽藍西側には15層の盛土地業が認められないことから、推測する位置に存在していた可能性は極めて高い。

また、南回廊は内側の雨落溝を検出したが、外側は調査区外のため未確認である。第3次調査2区の成果からすれば、南回廊の外側は谷に面した傾斜地になっていることが予想される。

東回廊と西回廊については、塔と金堂の中間付近に当たる位置を調査したが、中門に関連する遺構は確認できなかった。あるいは、南回廊のものと判断しているのが、予想するように外側が谷地形とはならず中門の基壇に当たる可能性も残されている。基壇を確認した東回廊では、建物に関する遺構は確認できておらず、基壇上には瓦が集中して出土している。このことから、東回廊と判断しているものも瓦葺の築地塀であった可能性も考えられる。



写真76 東回廊の基壇と雨落溝（第9次2区東から）



写真78 塔基壇南面と南回廊基壇（第10次2区北から）



写真77 西回廊想定地の調査（第10次1区東から）

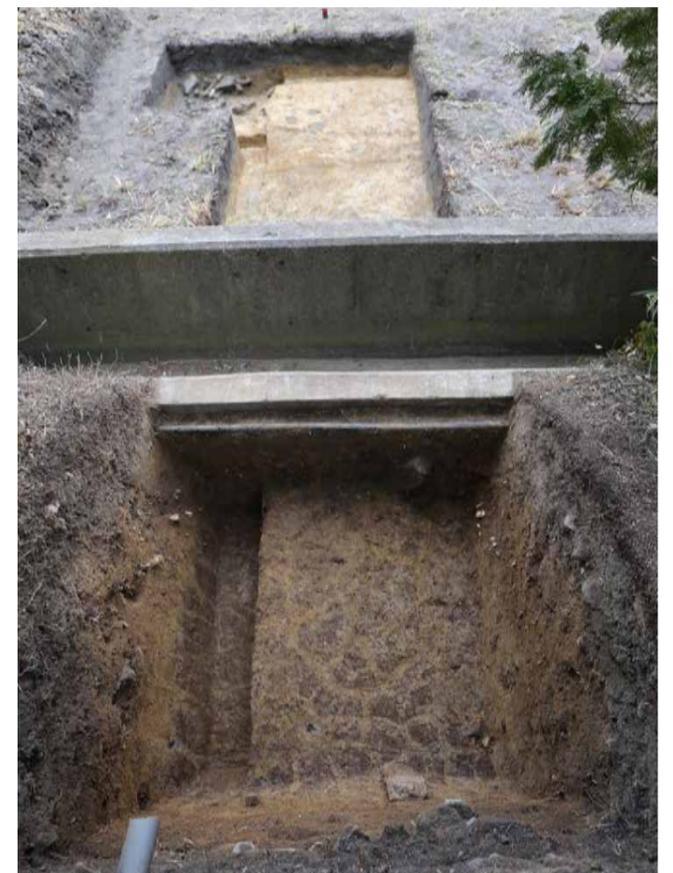


写真79 西回廊想定地内と地外（第6次2区・3区東から）

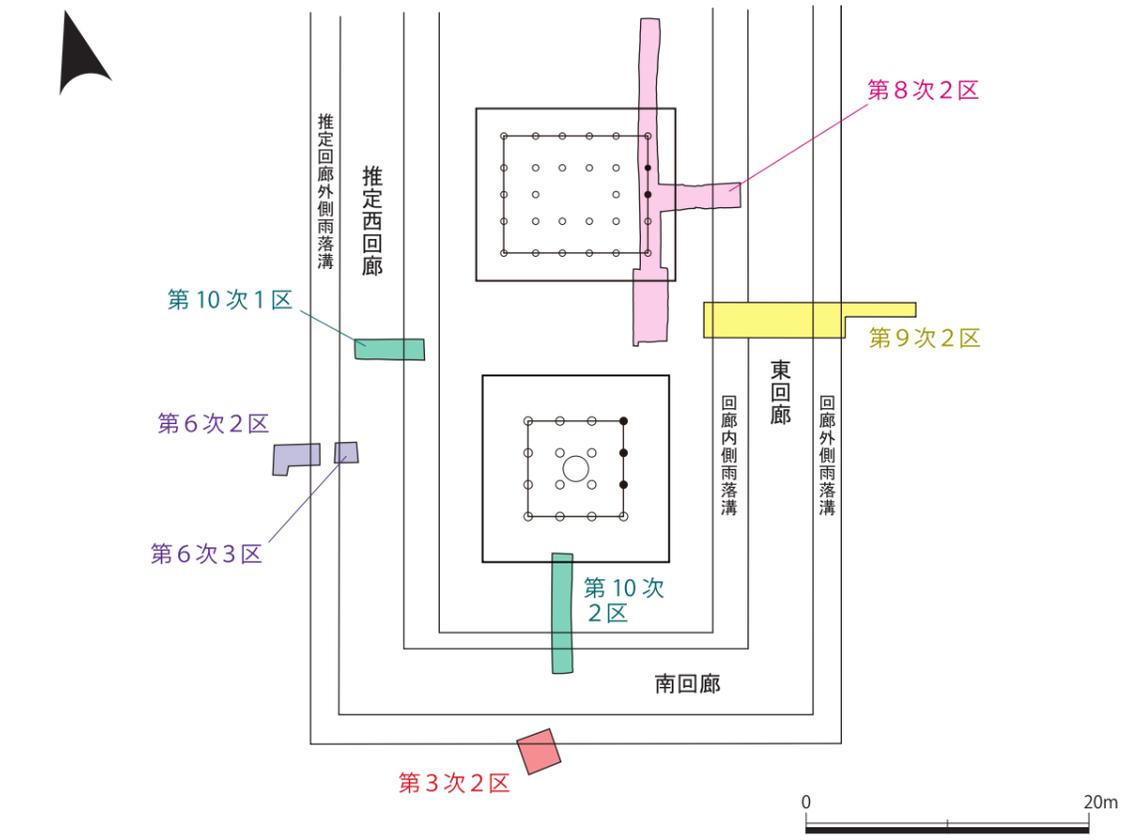


図20 回廊跡調査位置図 (1/500)

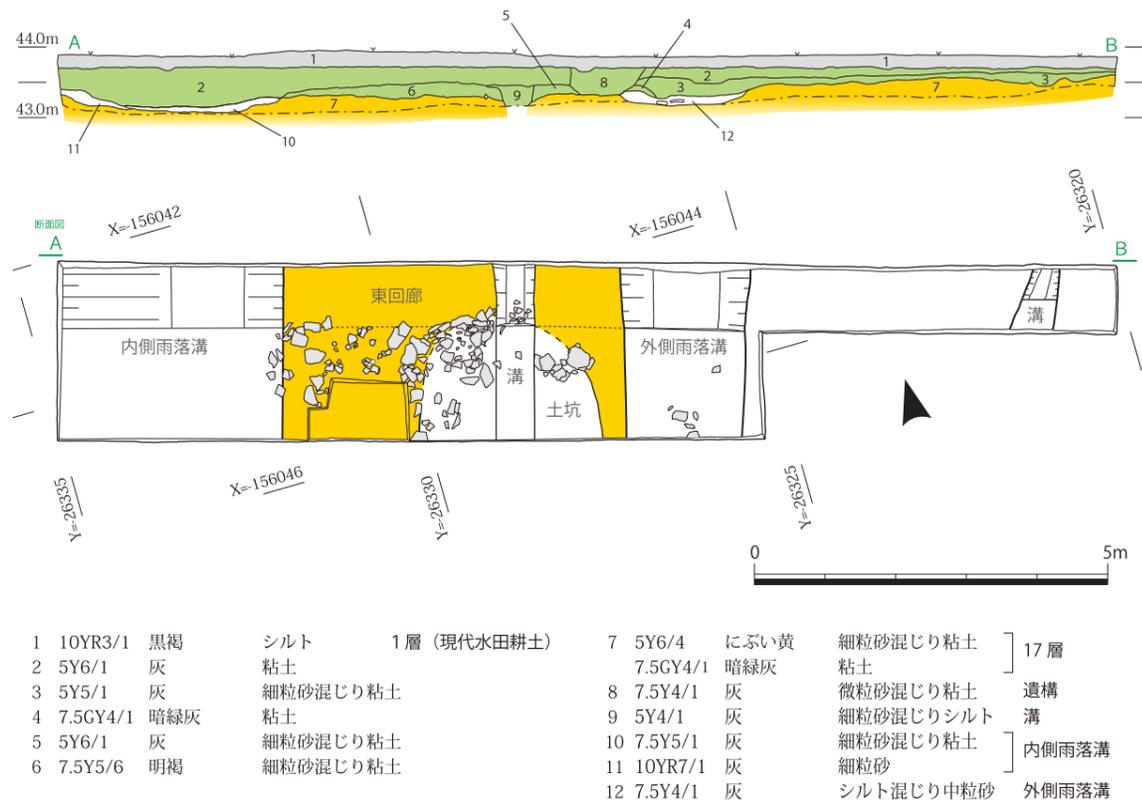


図21 東回廊遺構平面図及び土層断面図 (1/100)

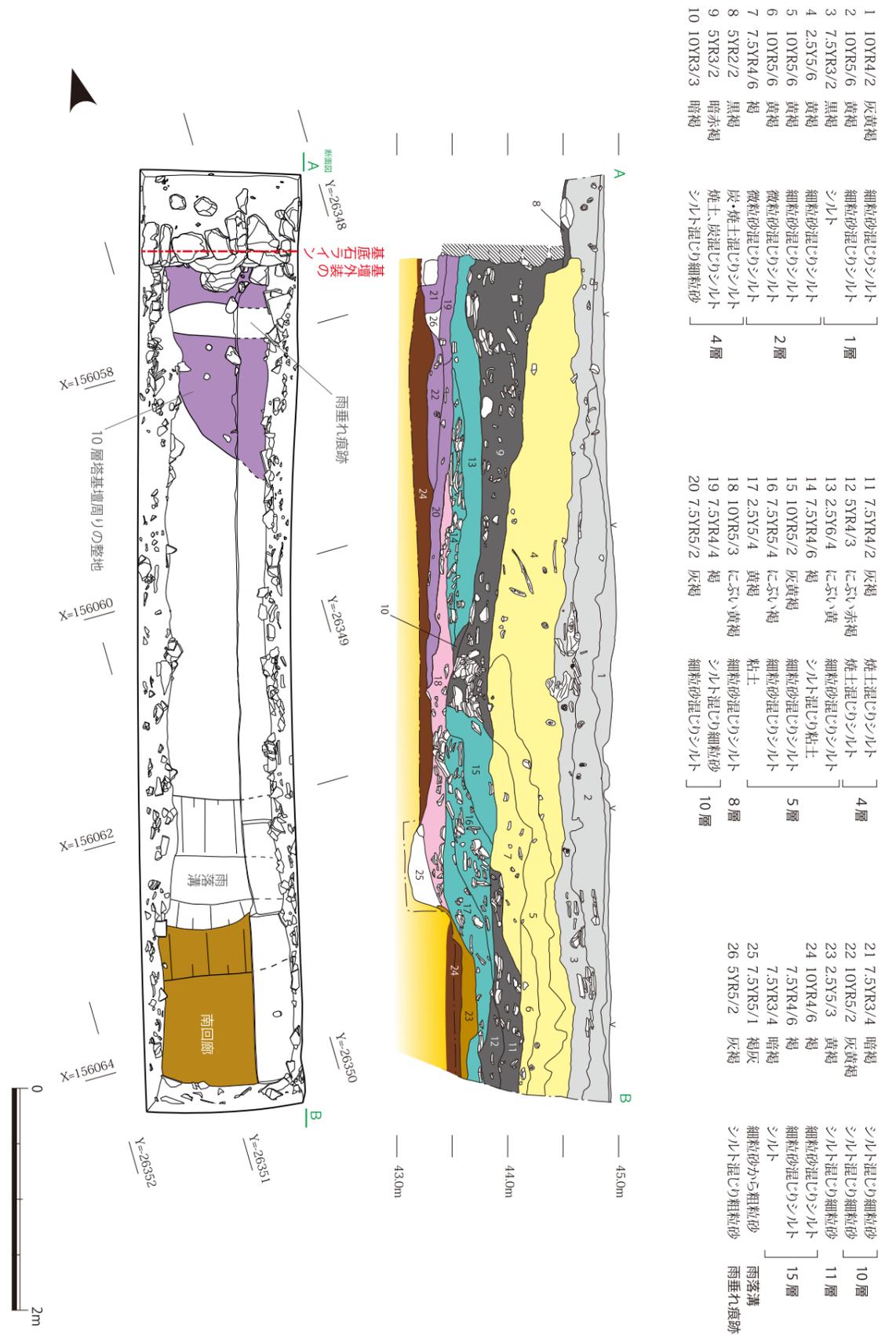


図22 塔基壇南面から南回廊遺構平面図及び土層断面図 (1/50)

写真 80 東回廊の基壇と雨落溝（第9次2区西から）



写真 81 東回廊の基壇と内側雨落溝（第9次2区南東から）

写真 82 南回廊の基壇と内側雨落溝（第10次2区北から）



写真 83 金堂と東回廊の調査前（第8次東から）



写真 84 金堂と金堂北方の調査前（第8次北から）



写真 85 推定西回廊の調査前（第10次1区北から）



写真 86 推定西回廊の調査前（第10次1区南から）



写真 87 南回廊の調査前（第10次2区北から）



4 金堂の北方

■ **金堂の北方での調査** 第9次調査1区では、講堂または回廊の遺構の有無を確認するために金堂の北方を調査した。調査区は舟戸神社北側の水田で、東西幅1m、南北長25mの大きさである。遺構面までには、近世から現在に至る水田耕土と中世の堆積層が約30～50cmの厚さで堆積していた。金堂の北方における調査成果は、以下のとおりである。

■ **版築状整地** 図25。第9次調査1区の東南隅をのぞく全域で、地山上に版築のように厚さ10cm前後の層を積み重ねて整地されている状況を確認した。層序の12層である。整地土は1区の中央で64cm、北端で47cmの厚さがあり、上面の標高は1区の南端から中央付近までが42.5m前後で、それより北側は42.2～42.4mとやや低くなっている。版築状の整地が行われていない1区南端における地山の標高は42.26mで、南端から北へ2.7m付近を境に地山が徐々に低くなり、1区中央で標高41.57mとなる。1区の北端では砂と粘土の互層堆積からなる自然流路が認められ、地山は確認できていない。整地土からは瓦が出土し、整地土の堆積状況を確認するために行った深掘り2からはTK217の須恵器杯蓋、深掘り1からは飛鳥Ⅱ期の須恵器杯蓋H、土師器皿が出土している。

■ **木製灯籠** 図24。金堂北面の基壇外装から北に6.96mの位置で柱根を検出した。柱根は、中央に直径約33cmの主柱と、それを囲む4本の添柱からなる。主柱の残存長は62.2cmで、柱の内部に2つの節が見えている。これらの柱根には、南北長1.33m、東西長1.44mあまりの隅丸方形の掘方があり、そのほぼ中央に据えられている。主柱の材はヒノキ、添柱の4本はコウヤマキが使用されている。掘方の北西1/4を掘削することで添柱3を検出しており、その根元の直径は約15cm、残存長は61.1cmで、上部は主柱に面する側が斜めに切断されている。添柱は主柱より4cmほど深く埋められており、礎板等は認められない。

これらの柱根が幢竿であることを想定し、拡張可能な範囲で西側に調査区を広げ、幢竿支柱の検出を行ったが、関連する遺構は認められなかった。柱根は、塔の中軸線に合わせて設定した第9次調査1区のほぼ中央で検出していることから、木製灯籠の竿に当たると考えている。なお、主柱・添柱ともに取

り上げておらず、現地で埋め戻している。

■ **柱穴** 図25。版築状整地土の上面から掘り込まれた3基の柱穴を検出した。

柱穴1は深掘り2の位置で検出し、掘方の南北長1.5m、深さ50cm以上で、柱痕跡の南北長は70cm。柱穴の底には根石と思われる石3個がある。柱穴2は、掘方の南北長74cm、深さ50cm以上で、柱痕跡の南北長が38cmある。調査区東壁では柱痕跡が肥大しているため、抜き取りの痕跡と見られる。柱穴3は、掘方の南北長1.2m、深さ50cm以上で、調査区東壁では柱痕跡が認められず、平面で径36cmの柱痕跡を検出している。

これら3基の柱穴は、塔の中軸線に合わせて設定した第9次調査1区内で、直線上に2.73mの等間隔で並んでいる。調査区の幅が狭く、また、整地土上の遺構であることも影響して確定できなかったものの、3基の柱穴よりさらに北側にも柱穴らしき遺構が認められた。金堂の北方には、版築状に整地されたのち、掘立柱による構造物が建造されていた。

なお、柱穴1から南に約1mの地点からは、幅50.1cm、深さ14.7cm以上で東西方向に延びる溝を検出している。溝には灰色細粒砂から粗粒砂が堆積していた。木製灯籠の柱根と柱穴1とのちょうど中間点に当たる。

■ **小結** 講堂または回廊の遺構の有無を確認するために金堂の北方を調査したが、明確にそれと判断できる遺構は検出されなかった。

しかし、金堂の北面から北に向かって低くなる地山を埋めるように版築状に整地されており、伽藍地を造成している状況が確認できた。出土遺物から7世紀後半のことと考えられる。

伽藍中軸線上からは木製灯籠のものと考えられる柱根、それに少なくとも3基の柱穴が検出できた。柱穴は整地土上から掘り込まれており、版築状整地と同時に掘立柱の構造物が建造されたことがうかがえる。これが講堂または回廊に当たる可能性もあり、そうすると柱穴1の南で検出した溝はその雨落溝にもなり得る。

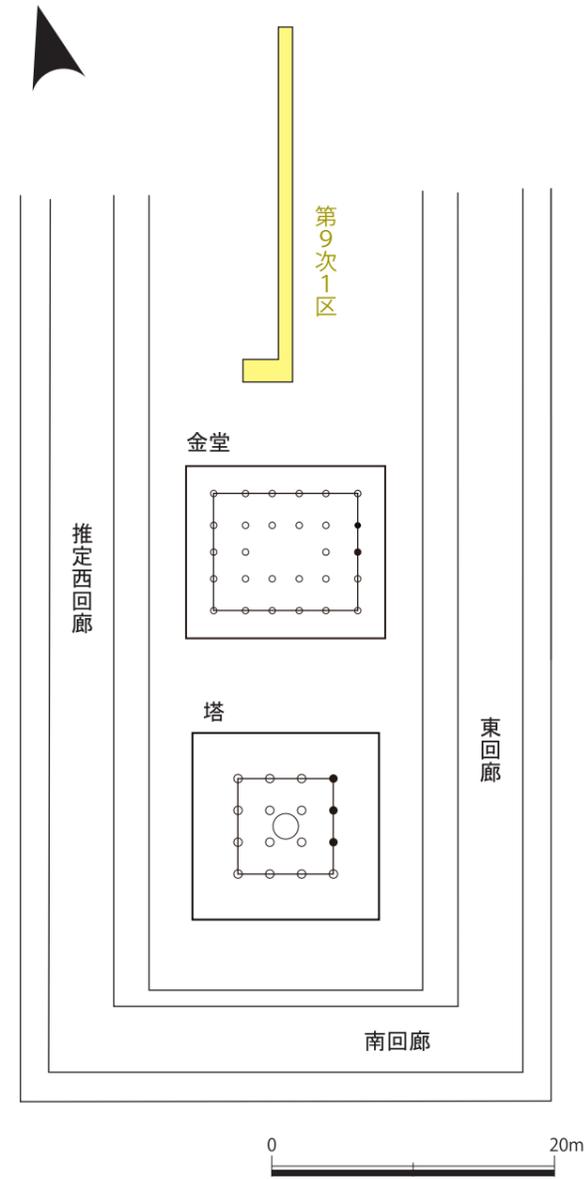


図23 金堂北方の調査位置図 (1/500)



写真88 金堂北方の調査前 (第9次1区南から)

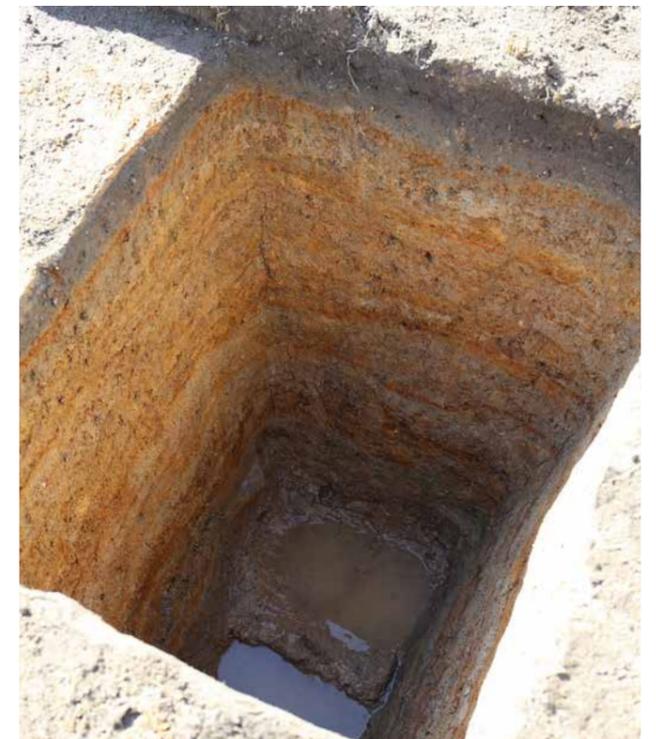


写真89 金堂北方の自然流路堆積 (第9次1区北東から)



写真90 金堂北方の版築状整地 (第9次1区西壁)

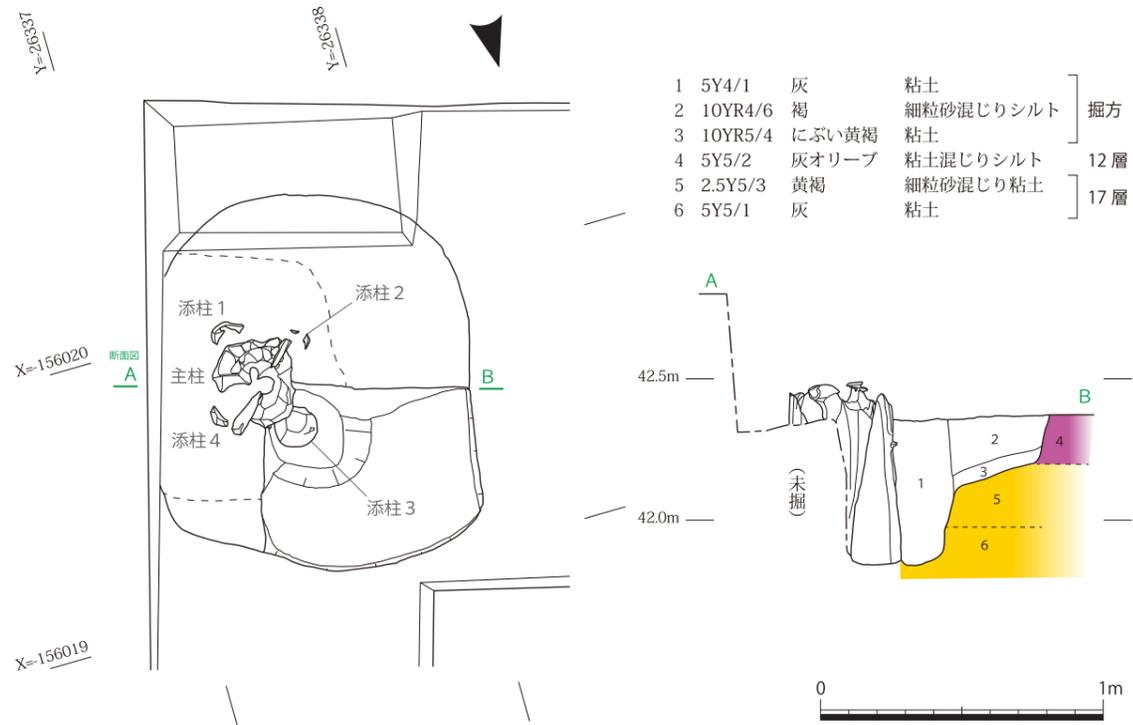


図24 木製灯籠の遺構平面図及び土層断面図 (1/25)



写真92 木製灯籠の遺構断ち割り状況 (第9次1区北西から)



写真91 木製灯籠の検出状況 (第9次1区北西から)



写真93 木製灯籠の遺構断ち割り状況 (第9次1区東から)



写真94 柱穴1 (第9次1区北西から)



写真96 柱穴2 (第9次1区西から)



写真97 柱穴3 (第9次1区西から)

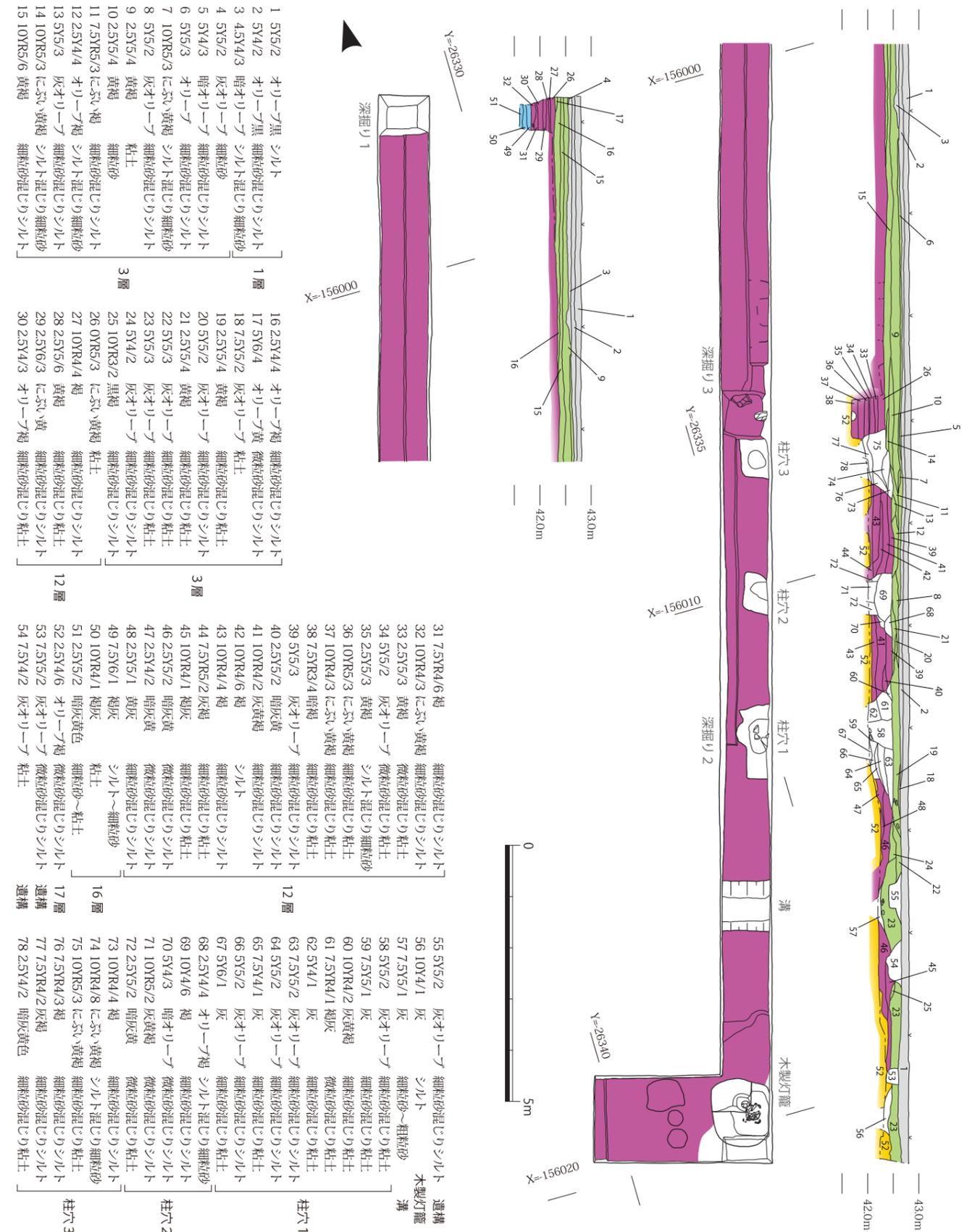


図25 金堂北方の遺構平面図及び土層断面図 (1/100)



第4章

出土遺物

- 1 軒丸瓦
- 2 軒平瓦
- 3 丸瓦
- 4 平瓦
- 5 道具瓦
- 6 土器
- 7 その他の遺物

■ **西安寺跡の出土瓦** 西安寺跡の出土瓦については、昭和初期から石田茂作氏の『飛鳥時代寺院址の研究』や保井芳太郎氏の『大和上代寺院志』で報告されてきた。そして、それらの瓦に飛鳥時代前期の素弁蓮華文軒丸瓦があることから、西安寺は推古朝建立 46 か寺の 1 つとして評価されている。

石田・保井の両氏が報告した瓦は、現在、主に天理大学附属天理参考館に収蔵されており、その他にも帝塚山大学附属博物館、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、名古屋市博物館などに西安寺跡から出土したとされる瓦が所蔵されているが、本報告書では、原則として王寺町が実施した遺跡範囲確認調査で出土した瓦のみを対象に報告する。王寺町が保管する出土遺物は、調査時点の数値でコンテナ 1,753 箱に及び、その 90% が瓦である。

なお、本章で使用する瓦の成形・調整技法は表 3 のとおりで、時期区分は法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝』第 15 巻瓦（以下、『法隆寺の至宝』と省略）を基本とする。また、各型式において報告する数値等は出土遺物のうち最良の資料によるものである。

1 軒丸瓦

■ **軒丸瓦の分類** 軒丸瓦は、素弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦、忍冬蓮華文軒丸瓦、複弁蓮華文軒丸瓦、重圈文軒丸瓦、梵字文軒丸瓦、巴文軒丸瓦がある。それぞれの文様の特徴により細分したものも含めて 29 種に分類し、今後の発掘調査での資料の増加や採集資料を含めた遺物整理に対応できるよう素弁、単弁、複弁などの種類ごとに型式番号を与えた。

なお、分類の対象としたのは、素弁蓮華文軒丸瓦、単弁蓮華文軒丸瓦に関しては外縁部、中房、蓮弁の大きさと形状によって型式が特定できるもの、巴文軒丸瓦に関しては巴文の頭部が残っていて、右巻か左巻かの方向が判断できるものと、範傷、外区の珠文の間隔で型式が特定できるものである。その総数は 416 点ある。舟戸神社に使用した近世の巴文軒丸瓦と棧瓦については、本報告書の型式分類の対象から除外している。

表 3 瓦の成形・調整技法の用語

使用する用語	技法の特徴	
ナデ	指、皮、布等による表面の擦痕	
ケズリ	稜線、砂粒の移動が確認できるヘラによる表面の擦痕	
布目	製作に使用した布筒、布の圧痕 3cm 四方の数によって次のとおり分類した	
粗	11 ～ 20 本	
中	21 ～ 30 本	
密	31 ～ 40 本	
糸切り痕	粘土角材から粘土板を切り取ったときに残る糸切りの痕跡 瓦の広端を下にして糸切り痕の方向によって 4 種に分類した	
Ul	上に向かって進行し、左に寄る	
Ur	上に向かって進行し、右に寄る	
DI	下に向かって進行し、右に寄る	
Dr	下に向かって進行し、左に寄る	
粘土板の合わせ目	桶巻作りの平瓦・丸瓦の製作で桶・模骨に粘土板を巻き付けた際、上から見た合わせ目の形状によって 2 種に分類した	
S	左の粘土板が下で、右の粘土板が上	
Z	右の粘土板が下で、左の粘土板が上	
側面	a 手法	分割断面、分割破面の調整をしない
	b 手法	分割破面の凹凸を粗く削って仕上げるもので、一部に破面が残る
	c 手法	分割断面、分割破面を丁寧に削って仕上げるもの
軒丸瓦	A 型範	範型の端が外縁側面に及ぶもの
	B 型範	範型の端が瓦当外縁までのもの
軒平瓦	曲線顎 1	瓦当側凸面に平坦面がないもの
	曲線顎 2	瓦当側凸面に平坦面があるもの

[参考] 糸切り痕は、大脇潔「7世紀の瓦生産—花組・星組から荒坂組まで—」、粘土板の合わせ目は、佐原真「平瓦桶巻作り」、軒丸瓦の範型は、星野献二「鎧瓦製作と分割型」、毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技法に関する一考察—範型と榑型—」による。

i 素弁蓮華文

■ **素弁1型式** 写真99、図26-1・2。直径3.3cmの中房に1+5の蓮子があり、瓦当面の直径は17.7cm。蓮弁の先端は丸味を帯び、弁端に珠点はない。外区を画す溝内に小さな珠文が3個、外区に幅0.8cmの凸線状の範傷、中房周縁に追刻の圏線があり、これらの特徴は『法隆寺の至宝』で分類されている軒丸瓦7Abと共通する⁽¹⁾。したがって、素弁1型式は法隆寺若草伽藍出土の7Abと同じ範型を使用して製作されたものである。接合する丸瓦は行基丸瓦で、瓦当裏面の上端に無加工の丸瓦広端面を突き合わせて接合している。瓦当裏面は横ナデ、丸瓦凸面は縦方向のナデ、丸瓦凹面は密な布目、側面はc手法で凹面側・凸面側の両方に0.6cmの面取りがある。素弁1型式は16点出土しており、うち4点で7Abと同じ範傷が確認できた。焼成は須恵質で硬質なものが多く、軟質なものがあるが、胎土に1～5mm程度の長石を含む点は共通している。『法隆寺の至宝』における7Abの年代と同じく、622～670年の製作と考えられる。

■ **素弁2型式** 写真100、図26-3・4。素弁8弁蓮華文軒丸瓦。直径3.4cmの中房に1+8の蓮子があり、瓦当面の直径は18.3cm。丸味を帯びた蓮弁の端部が肥厚する船橋廃寺式の特徴があり、蓮弁の外形を凸線で表現し、蓮弁中央に鑄が通る。外縁は素文で、A型範を使用しており、外縁側面には範端の段差がつく。丸瓦が残る個体はないが、瓦当裏面の接合部には加工した形跡はない。瓦当裏面は斜め方向の丁寧なナデで、瓦当の厚さは2.2cmと薄く、焼成は主として硬質で灰色から暗灰色である。船橋廃寺式の成立が630年頃とされるので、それに続く時期の製作と考えられる。

■ **素弁3型式** 写真101、図26-5・6。素弁8弁蓮華文軒丸瓦。直径2.6cmの中房に1+6の蓮子があり、外側の蓮子は中房の端から突出する。瓦当面の直径は17.0cm。中房の周囲には溝、蓮弁の先端には珠点があり、弁端と肩の形状は角張る。西安寺跡から出土した5点のうち3点には、中房周りの溝と外区の溝のなかに線状の範傷があり、それらは『法隆寺の至宝』の軒丸瓦6Bと一致する⁽²⁾。同じ範型を使用しているが、丸瓦の接合方法に違いがあり、法隆寺若草伽藍出土の6Bは丸瓦の広端を片柄に切り落として瓦当裏面上端に接合するのに対し、

西安寺跡出土のものは丸瓦の広端を未加工のまま接合している。別の瓦工人による製作であるとの見方ができる。わずかに残る丸瓦部分から接合するのは行基丸瓦と考えられ、凸面は凹凸が残るほどの強めのナデ、凹面は密な布目である。瓦当裏面のナデも強く、指頭圧痕がある。胎土にはほとんど砂粒を含まず、焼成が硬質なものは灰色、軟質なものは灰白色である。斑鳩からもたらされた範を使用しており、『法隆寺の至宝』で622年を下限とされる6Bより下の時期の製作である。

■ **素弁4型式** 写真102、図26-7。素弁8弁蓮華文軒丸瓦。直径3.3cmの中房に1+8の蓮子がある。外側の蓮子は中房の端から飛び出し、中房の周りには溝がめぐる。丸味を帯びる蓮弁の端には大きめの珠点があり、中央の盛り上がりに鑄が通る。瓦当面の直径は17.0cm。B型範を使用する。中房周縁の溝と外区の溝のなか、蓮弁上に範傷があり、奈良国立博物館所蔵の伝放光寺(片岡王寺)出土品と共通する⁽³⁾。また、『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』に報告される軒丸瓦101Aは小片であるが同範の可能性が高い⁽⁴⁾。丸瓦は広端を加工せずに瓦当裏面の上端近くに突き合わせ、瓦当裏面は横と斜め方向のナデを施す。黄褐色から灰白色の色調で焼成が軟質なもの、灰色で硬質なものがあり、いずれも胎土には1～2mm程度の長石を含む。基本的な特徴は『法隆寺の至宝』の6Bと共通するため、6Bと同範関係にある素弁3型式と同じ622年以降の製作と考えられる。

■ **素弁5型式** 写真103、図26-8・9。素弁8弁蓮華文軒丸瓦。中房は直径3.0cmで、中央から外れた位置に1+5の蓮子がある。瓦当面の直径は17.4cm。蓮弁の幅は一定ではなく配置も不均等で、瓦当面の形状がいびつになり、木目状の範傷が多数ある。外縁側面には範端の段があり、A型範を使用している。丸瓦は、瓦当裏面の上端からやや下がった位置に広端を未加工のまま突き合わせて接合し、凸面は表面に凹凸が残る強めのナデ、凹面は密な布目があり、縦方向にナデる。瓦当裏面は斜め方向に強めにナデている。色調は灰色で、焼成は硬質なものが多い。瓦当径、中房径、蓮弁の配置が素弁1型式とよく似ており、他遺跡での類例も確認できないことから、素弁1型式を模倣して西安寺で作られた瓦と考えられ、素弁蓮華文軒丸瓦のなかでは後出のものである。



写真99 素弁1型式



写真100 素弁2型式



写真101 素弁3型式



写真102 素弁4型式



写真103 素弁5型式

写真の大きさは実物のおよそ50%

ii 単弁蓮華文

■ **単弁 1a 型式** 写真 104、図 26-10~12。単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径は 16.6cm。中房の直径は 5.9cm 前後で 1 + 4 + 8 の三重の蓮子がある。蓮子には周環があり、蓮弁はそれぞれが独立し、なかにひと回り小さい子葉が盛り上がる。蓮弁の長さは約 3.3cm、幅は広いところで約 1.6cm。間弁は中房から蓮弁の間を通り、弁端付近では逆三角形をなして盛り上がり、蓮弁の外側で両脇の間弁につながって弁区内に連続する。外区内縁は溝、外縁は斜縁の素文で外縁の立ち上がりには段がある。B 型範を使用する。接合する丸瓦は行基丸瓦で、無加工の丸瓦先端を瓦当裏面上端に突き合わせる。外縁の側面は瓦当面に沿ってナデしており、丸瓦の凸面は縦方向の強めのナデ。瓦当裏面は個体によって方向は変わるが、丁寧なナデを行っている。蓮子に周環がめぐる点は川原寺式、蓮子が 1 + 4 + 8 であり、外縁が斜縁で素文である点は複弁と単弁の違いはあるものの飛鳥寺 XIV 型式と似ており、これらに後出するものとして、天武朝 672 年以降の年代が考えられる。

■ **単弁 1b 型式** 写真 105、図 26-13~16。単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径は 18.2cm。単弁 1a 型式の範を使用し、外縁部分を外側に拡張してひと回り大きくしている。瓦当裏面は個体により方向は変わるが丁寧なナデで、接合する丸瓦は行基丸瓦である。丸瓦の先端は無加工で、瓦当上端に突き合わせる。丸瓦の凸面は縦方向のナデ、凹面には糸切り痕 Ur、密な布目がある。

単弁 1a 型式に使用された範は 1 つと見られ、図 26 に示すように範傷の進行具合が確認できる。単弁 1a 型式の 10 では a・b の 2 か所に範傷があったが、11 では a~f の 6 か所に増えている。12 にも a~e の 5 か所にあり、f 部分は欠損している。単弁 1b 型式の 13 には同 1a 型式の範傷に g が加わる。15・16 は小片のため蓮弁の位置が確定できないが、h の範傷も発生している。範傷の進行具合から、単弁 1a 型式、単弁 1b 型式の順に製作されていることが明らかになる。

■ **単弁 2 型式** 写真 106、図 26-17・18。単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径は 19.5cm で、直径約 7.0cm の中房には 1 + 8 の蓮子がある。外側の蓮子の配置は方形に近い。蓮弁はそれぞれが

独立して凸線で縁取り、弁端部分が太く盛り上がる。弁内の子葉も先端付近が最も盛り上がっている。蓮弁の長さは約 4.1cm、幅は最も広いところで約 2.0cm。間弁は弁区内に連続しており、弁端付近で逆三角形をなして最も盛り上がる。その先端は蓮弁間を通り中房に達する。外区内縁には溝、外縁は素縁で側面に範端の段があり、A 型範を使用している。全長は 44.0cm、重量は 6.7kg (復元)。行基丸瓦を接合し、丸瓦の先端は無加工で接合するものがあり、接合の位置は瓦当裏面上端からやや下がったところである。丸瓦の凸面はナデで、瓦当面から約 8.0cm の位置に幅 7.5cm の工具の当たった痕がある。凹面には糸切り痕 U、密な布目がある。製作年代は白鳳後期の 7 世紀末頃が考えられる。一般的に片岡王寺式として型式名が付けられているもので、片岡王寺跡、平城京薬師寺の出土品が同範である⁶⁾。

■ **単弁 3 型式** 写真 107、図 26-19・20。単弁 16 弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径は 21.3cm。直径 8.9cm の大きな中房に 1 + 8 + 16 の三重の蓮子があり、各蓮子には周環がある。蓮弁の長さは約 4.0cm、幅は最も広いところで 2.4cm。瓦当の断面形状は中房より子葉、蓮弁が盛り上がり、間弁は蓮弁の周囲に連続し、先端は中房に接している。外区内縁には溝があり、外縁は平坦な素縁で個体により内側が傾斜するもの、段が付くものなど調整によってばらつきがある。A 型範を使用している。蓮弁と子葉の間、蓮弁の外側の 2 か所に範傷のあるものが 1 点あった。行基丸瓦を接合し、その接合には丸瓦の凸面を斜めにケズリ、ナデを行って粘土をかぶせるもの、凹面に斜格子状のキザミを加えるものがある。色調が黄褐色で焼成が良好なもの、灰色で硬質なものがある。単弁 3 型式は、単弁 1 型式の中房を大きくして蓮子を増やし、瓦当面を広げた作りになっており、7 世紀末頃に新たに製作されたと考えられる。

■ **単弁 4a 型式** 写真 108、図 26-21・22。単弁 11 弁蓮華文軒丸瓦。西安寺跡第 1 次発掘調査で出土したものである⁶⁾。瓦当面の直径は 15.4cm、中房部分は剥離しているため推定直径 3.6cm で、蓮子は不明である。外縁には線鋸歯文があり、外縁外側には幅 0.7cm の面取りがある。第 3 次以降の調査では外縁の線鋸歯文部分が残る破片が少量出土し



写真 104 単弁 1a 型式



写真 105 単弁 1b 型式



写真 106 単弁 2 型式



写真 107 単弁 3 型式



写真 108 単弁 4a 型式



写真 109 単弁 4b 型式

写真の大きさは
実物のおよそ 50%

ている。焼成は軟質、表面はいぶしがかり暗灰色を呈す。

■ **単弁4b型式** 写真109、図26-23・24。単弁11弁蓮弁文軒丸瓦。瓦当面の直径は15.0cm。直径3.7cmの中房には1+6の蓮子がある。凸線で蓮弁をかたちづくり、蓮弁内に子葉を配する。蓮弁の長さは3.8cm、幅は1.8cm。間弁はそれぞれが独立し、逆三角形で基部は中房に接している。やや傾斜する外縁には珠文がある。文様の法量、蓮弁の形状から単弁4a型式と同範と考えられ、外縁部分に線鋸歯文から珠文への彫り直しが行われている。接合するのは玉縁丸瓦で、瓦当上端からやや下がった位置で接合し、丸瓦凸面に粘土を付け足しており、丸瓦部から曲線をもって瓦当面に続く形状となっている。外縁外側の調整、胎土、焼成は単弁4a型式と共通し、4a・4b型式ともに8世紀後半のものと考えられる。

■ **単弁5型式** 写真110、図26-25。単弁11弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の直径は約15.1cm。直径3.8cmの中房には中央に蓮子が1個確認できる。蓮弁形状などが単弁4型式によく似るが、残りが悪く同範関係は確認できないため、単弁5型式とした。外縁には単弁4型式のような文様はなく素縁で、瓦当側面には段があり、A型範を使用している。胎土は長石を多く含み、焼成も軟質である。色調は赤褐色で、唐草4型式と組み合うものと考えられる。

iii 忍冬蓮華文

■ **忍蓮1型式** 写真111、図26-26・27。忍冬蓮華文軒丸瓦。型式名を忍蓮とする。瓦当面の直径は18.0cm、直径約4.5cmの中房には1+8の蓮子がある。中央の蓮子には周環があり、中房の周囲には幅0.6cmの溝がめぐり、内区に4弁の蓮弁と4葉の忍冬文を交互に配し、蓮弁と忍冬文の間に珠点を置いている。丸味を帯びた蓮弁の中央部は肥厚し、複線による鎬が通り、弁端にも珠点を置く。接合する丸瓦は不明だが、瓦当裏面の剥離面からすれば無加工で接合する。

第7次調査で出土した図26-26は中房周囲の溝内と外区の溝内に凸線状の範傷が認められ、第10次調査出土の図26-27にも中房周囲の溝内に同じ範傷がある。ただし、こちらは外区溝内の範傷部分がつぶれていて確認できないが、文様の形状が一致

することからも、この2点は同じ範型で製作されたものといえる。

忍冬蓮華文軒丸瓦については、西安寺跡採集資料と横須賀市宗元寺跡出土品との同範関係が知られている⁽⁷⁾。同範関係が確認されている帝塚山大学附属博物館所蔵の西安寺資料と比較したが、文様の形状が異なり、合致する範傷もないことから、確認調査で出土した忍蓮1型式とは範を異にするものであることが判明している。忍冬蓮華文軒丸瓦の範型は2種類あったと推測できる。

蓮弁の形状は素弁4型式に近く、中房の蓮子数と中房をめぐる溝幅が広い点は素弁4型式の特徴と一致する。したがって、素弁4型式に後出するもので、かつ、同範関係にある相模宗元寺の創建が7世紀第4四半期から8世紀第3四半期とされていることから、それに先行する7世紀後半の時期が考えられる。

図26-28-30は小片であり、忍蓮1型式のもの出土部位が異なり、同1型式に含めることができない。なお、図26-28は東回廊の外側雨落溝から出土している。色調は灰白色で、焼成は良好である。

iv 複弁蓮華文

■ **複弁1型式** 写真112、図26-31。複弁蓮華文軒丸瓦。残る蓮弁の形状から複弁蓮華文と判断している。外区内縁の溝内には1本の圈線があり、外縁は素文である。

v 重圈文

■ **重圈1型式** 写真113、図26-32。三重圈文軒丸瓦。復元による瓦当径は15.4cmで、瓦当の厚さ3.2cm。中央に珠点があり、第1、第2圈線に対して第3圈線が細く、第3圈線と外縁に近い。瓦当と丸瓦を接合したのちにナデを施し、瓦当裏面は横方向のナデ、瓦当側面はナデで指頭圧痕が残る。胎土に含まれる砂粒の違いはあるものの、平城京跡出土の6012B型式と同範である⁽⁸⁾。6012B型式に見える第1圈線横の範傷は、欠損が多く確認できていない。色調は灰黄色で、焼成は良好である。

vi 梵字文

■ **梵字1型式** 写真114、図26-33。梵字文軒



写真110 単弁5型式



写真111 忍蓮1型式



写真112 複弁1型式



写真114 梵字1型式



写真113 重圈1型式

写真の大きさは実物のおよそ50%

丸瓦。梵字の「丸」を陽刻する。復元による瓦当面直径は15.8cmで、外区溝内に圈線があり、溝内を横断する数条の範傷がある。色調は赤褐色、焼成は良好。平安後期のものである。

vii 巴文

■ **左二巴1型式** 図26-34・35。左巻二巴文軒丸瓦。写真115は保井芳太郎『大和上代寺院志』に掲載されるもので、確認調査では瓦当面を復元できる破片が出土していない。中央に珠点を持ち、巴の頭は丸く、くびれることなく尾へと続く。内圏線があり、巴の尾が内圏線に接着する。色調は灰褐色から灰色。焼成は良好なもの、硬質なものがある。平安後期のものである。

■ **左二巴2型式** 写真116、図26-36。左巻二巴文軒丸瓦。瓦当面の直径15.4cm。左二巴1型式と同じく中央に珠点があり、巴文の形状もくびれない。やや扁平な断面形状であることが違う点である。内外圏線はなく、16個の小ぶりの珠文がめぐる。外縁の内側角を部分的に面取りし、瓦当側面は外縁に沿ってナデを施す。丸瓦の接合位置は瓦当上端から2.5cm下がった位置で、接合面には指押さえて整えた指頭圧痕がある。色調は褐灰色で、焼成は良好である。平安後期のもの。

■ **左三巴1型式** 写真117、図26-37~39。左巻三巴文軒丸瓦。中央に珠点があり、巴の頭はやや尖っている。珠文帯の内外に圏線があり、巴の尾は内圏線に接着しない。珠文帯には14個の珠文がある。瓦当面には範割れの状況が転写され、同型式で比べると範の傷みが拡大していく様子が認められる。瓦当裏面の調整は縦方向のナデで、下端は側縁に沿ってナデる。瓦当面の直径は15.5cm、全長41.2cm、玉縁長6.2cmで、重量は4.5kg。丸瓦の凸面は縄タタキのちにそれをナデ消しているが、玉縁側に縄タタキの痕が残っている。瓦当側から玉縁側へ向けて縦方向のヘラケズリがあり、肩部には横方向のナデを施している。凹面には密な布目、指頭圧痕がある。平安後期のもの。片岡王寺跡でも同じ範割れのある軒丸瓦が出土している⁹⁾。色調は二次焼成を受けていないものは暗褐色から灰色で、焼成は良好なもの、硬質なものがある。

■ **左三巴2型式** 写真118、図26-40。左巻三巴文軒丸瓦。中央に直径2mmの珠点があり、内外

圏線に囲まれた珠文帯には27個の珠文がある。巴の頭はやや尖り、尾は圏線につかない。瓦当面の直径は14.8cmで、厚さは2.7cm。瓦当側面は外縁部に沿ったナデ、丸瓦部の凸面には縦方向のヘラケズリがあり、瓦当裏面と丸瓦凹面の調整は摩滅しており不明である。色調は灰色で、焼成は良好。平安後期のもの。

■ **左三巴3型式** 写真119、図26-41。左巻三巴文軒丸瓦。復元による瓦当面の直径は13.8cm。巴の頭は先がやや尖り、断面の形状は扁平である。外圏線があり、その内側に小さな珠文がめぐる。巴の頭の横に範傷がある。瓦当の裏面は斜め方向のナデ、側面は外縁に沿うナデである。色調は灰色で、焼成は軟質。平安後期のもの。

■ **左三巴4型式** 写真120、図26-42。左巻三巴文軒丸瓦。復元による瓦当面の直径約14.0cm。内圏線があり、小ぶりの珠文がめぐる。丸瓦の接合面で剥離しており、瓦当裏面には指頭圧痕が残る。胎土に長石を多く含む。焼成は良好である。鎌倉時代のもの。

■ **左三巴5型式** 写真121、図26-43。左巻三巴文軒丸瓦。瓦当面の直径14.3cmで、厚さ3.1cm。巴の頭の先が尖り、断面形は扁平である。圏線はなく、珠文は15個。丸瓦部の凹面には布目、糸切り痕が残る。鎌倉後期から室町前期のもの。

■ **左三巴6型式** 写真122、図26-44。左巻三巴文軒丸瓦。瓦当面直径は15.7cmで、厚さは2.3cm。内圏線があり、頭のやや丸い巴の尾は内圏線に接着しない。復元すれば22個の珠文を配する。瓦当面には離れ砂を使用し、瓦当側面上半は縦方向、下半は外縁に沿ったナデを施す。瓦当裏面は接合面で剥離しており、瓦当上端から2.0cm下がった位置に強めのナデを施して丸瓦を接着させ、瓦当裏面全体に粘土を貼り付けている。色調は灰色で、焼成は硬質。瓦当面に範傷が多い。鎌倉から室町前期のもの。

■ **左三巴7型式** 写真123、図26-45。左巻三巴文軒丸瓦。瓦当面の直径は17.1cmで、厚さは約2.6cm。中央に小さな珠点がある。巴の頭は尖りがあるものと丸く収まるものがある。内圏線があり、巴の尾はつかないが、範の使用が進み接着したものがある。直径1.1cmの珠文は推定で23個ある。瓦当裏面は螺旋状にナデる。丸瓦の接合位置は瓦当の上端で、器面をナデで整えて丸瓦を接着させている。



写真115 左二巴1型式



写真116 左二巴2型式



写真117 左三巴1型式



写真118 左三巴2型式



写真119 左三巴3型式



写真120 左三巴4型式



写真121 左三巴5型式

外縁幅は2.4cmと幅広く、珠文の周辺に範傷が多い。半数は被熱のため橙色に変色している。室町時代のもの。

■ **右三巴1型式** 写真124、図26-46。右巻三巴文軒丸瓦。瓦当面の直径15.4cm。内圏線があり、珠文33個がめぐる。巴の頭はやや尖り、断面形はやや丸みを帯びる。巴の尾は圏線につかない。瓦当面には離れ砂が付着しており、範傷も多い。二次焼成を受け、橙色から橙褐色の色調を呈するものが多いが、灰色で焼成が良好なものも出土している。鎌倉後期のもの。

■ **右三巴2型式** 写真125、図26-47。右巻三巴文軒丸瓦。瓦当面の全体が残るものがないが、直径は15.0cmに復元できる。巴の頭の内側は少し窪み、断面形は緩やかな曲線を描く。尾の断面形は山形で、圏線はなく外区の珠文は25個程度と見られる。外縁の外側角と瓦当裏角に0.1cm程度の面取りを施し、瓦当裏面は横方向のナデで、下端は側縁に沿ったナデ。瓦当面には離れ砂が残る。色調は灰色で、焼成は硬質。二次焼成を受けたものもある。鎌倉時代のもの。

■ **右三巴3型式** 写真126、図26-48。右巻三巴文軒丸瓦。復元による瓦当面の直径は14.4cmで、厚さは1.8cm。巴の頭の先端はやや尖り、断面形も緩やかである。珠文は推定21個。珠文帯の外側には外圏線がめぐり、外縁となる。瓦当面には離れ砂の痕跡がある。瓦当裏面はナデである。丸瓦との接合部で破損しており、巴の尾がめぐる位置に丸瓦の凹面を合わせて接合していることが見て取れる。鎌倉時代のもの。

■ **右三巴4型式** 写真127、図26-49。右巻三巴文軒丸瓦。復元による瓦当面の直径は13.9cmで、厚さ1.8cm。巴の頭はやや尖り、尾は内圏線につかない。推定17個の珠文があり、珠文と内圏線が接触する部分がある。巴文、珠文の盛り上がりは低く、離れ砂を使用する。室町前期のもの。

【注：1 軒丸瓦】

- (1) 『法隆寺の至宝』39頁の「14 軒丸瓦 7Ab」と同範であることを確認している。
- (2) 『法隆寺の至宝』37頁の「8 軒丸瓦 6B」と同範であることを確認している。
- (3) 奈良国立博物館収蔵品番号735-1。
- (4) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』71頁の図44-1・2(101A)。

- (5) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』71頁の図44-9(110A)で報告される片岡王寺跡出土品とは中房蓮子の位置が一致し、『薬師寺跡発掘調査報告書』80頁のFig30-5で報告される薬師寺出土品とは蓮弁内の子葉先端にある2条の範傷が一致することを確認した。
- (6) 写真109は「北葛城郡王寺町西安寺跡発掘調査概報」図版4に掲載されるものを改めて撮影した。
- (7) 河野一也「相模宗元寺の西安寺式鑑瓦について」において、個人蔵の鑑瓦1点、神奈川県立博物館に寄託されている宗元寺の鑑瓦8点、横須賀市曹源寺所蔵の宗元寺の鑑瓦2点と現在帝塚山大学附属博物館に所蔵される西上氏収集の西安寺の鑑瓦3点の同範調査が報告されている。
- (8) 6012B型式の同範確認は、奈良文化財研究所所蔵の基準資料と奈良市埋蔵文化財センター所蔵の平城京351-1次調査出土資料で行った。
- (9) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』72頁の図45-29(135A)。



写真122 左三巴6型式



写真123 左三巴7型式



写真124 右三巴1型式



写真125 右三巴2型式



写真126 右三巴3型式



写真127 右三巴4型式

写真の大きさは実物のおよそ50%

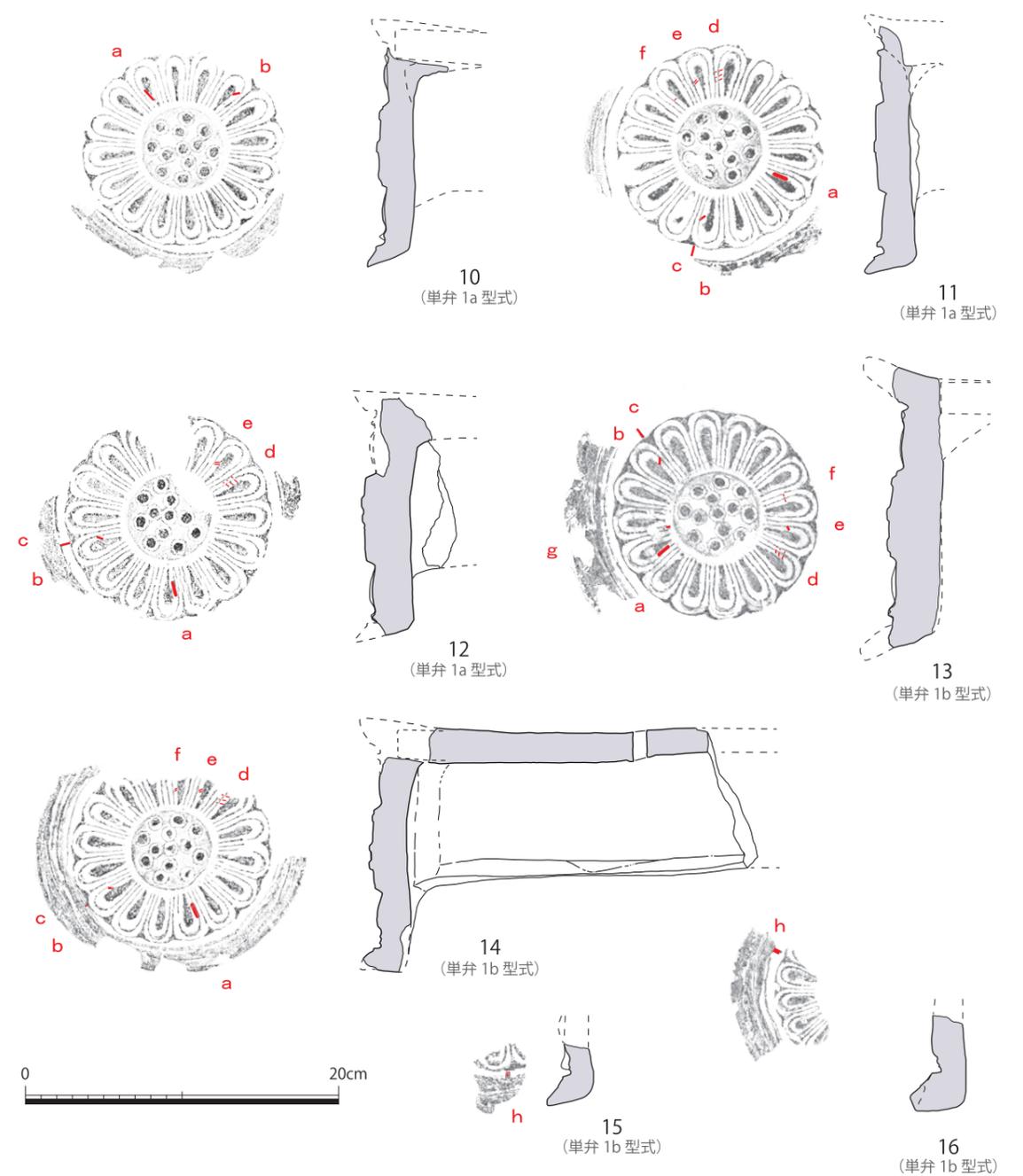
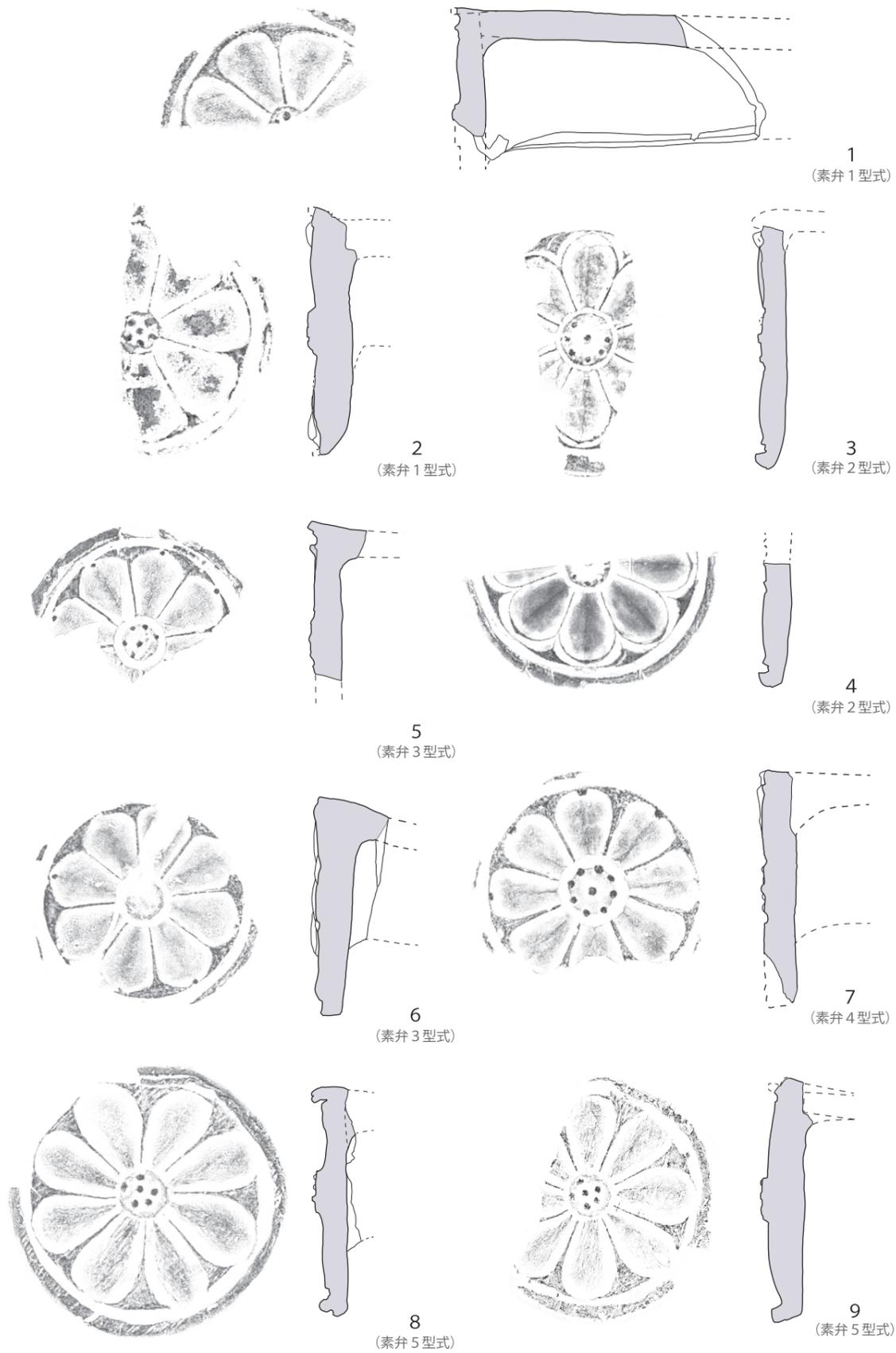


表4 単弁 1 型式の範傷進行

型式	遺物番号	範傷							
		a	b	c	d	e	f	g	h
単弁 1a 型式	10	●	●	—					
	11	●	●	●	●	●	●		
	12	●	●	●	●	●	—		
単弁 1b 型式	13	●	●	●	●	●	●	●	
	14	●	●	●	●	●	●	—	
	15	—	—	—	—	—	—	—	●
	16	—	—	—	—	—	—	—	●

図 26 軒丸瓦実測図 (1/4)

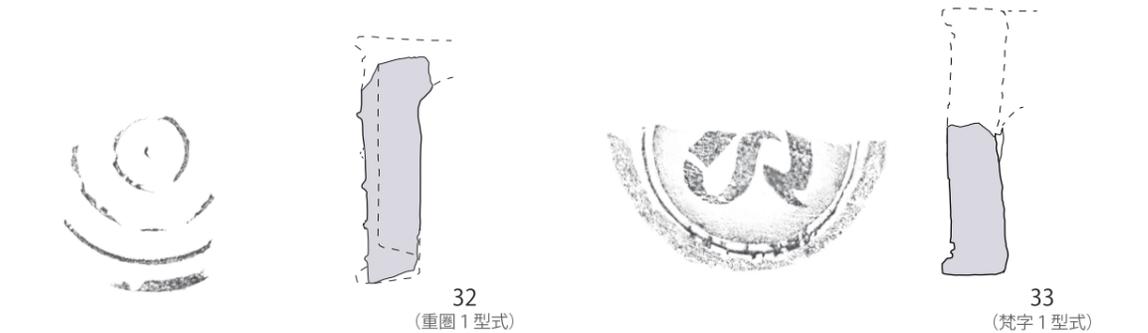
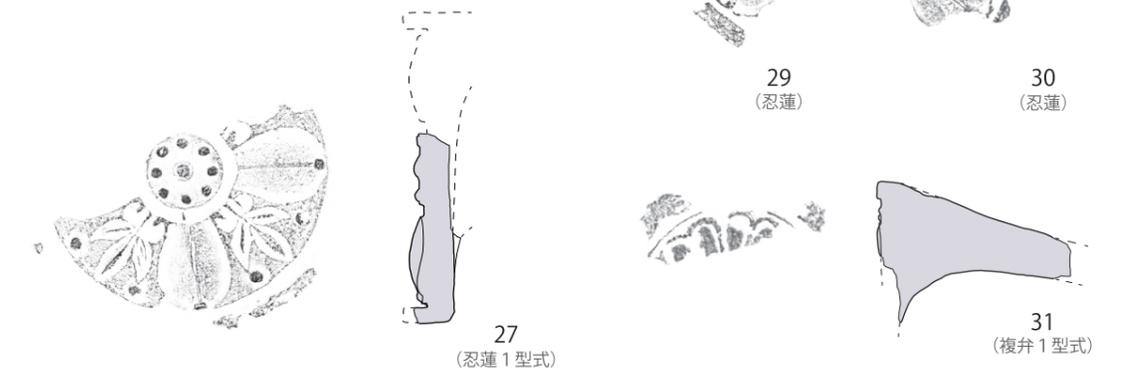
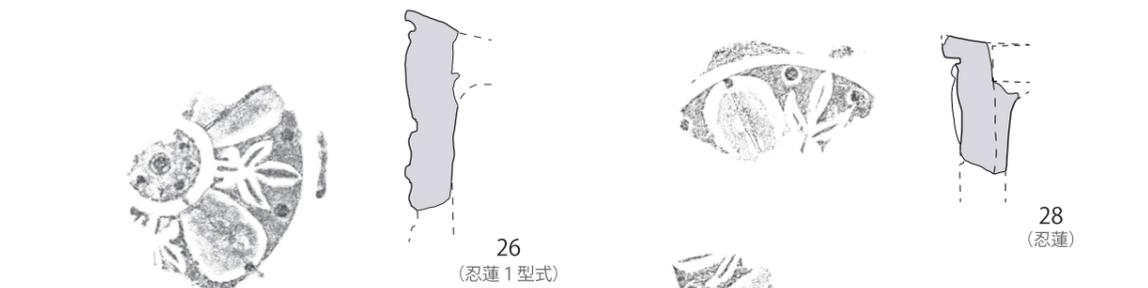
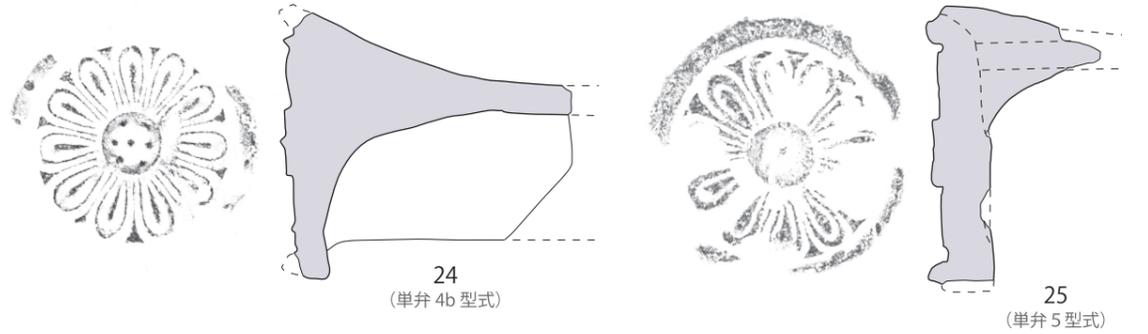
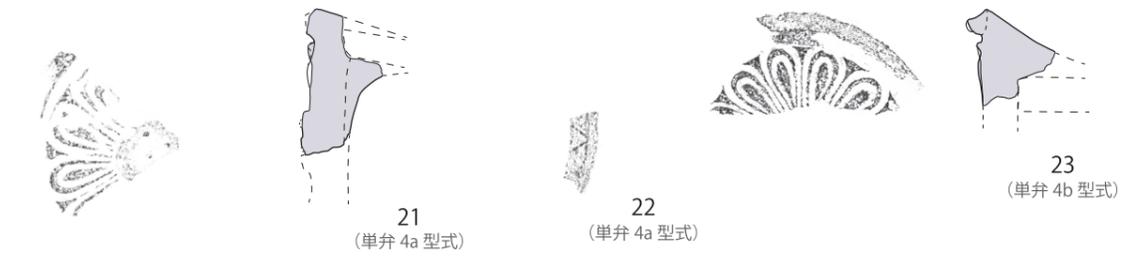
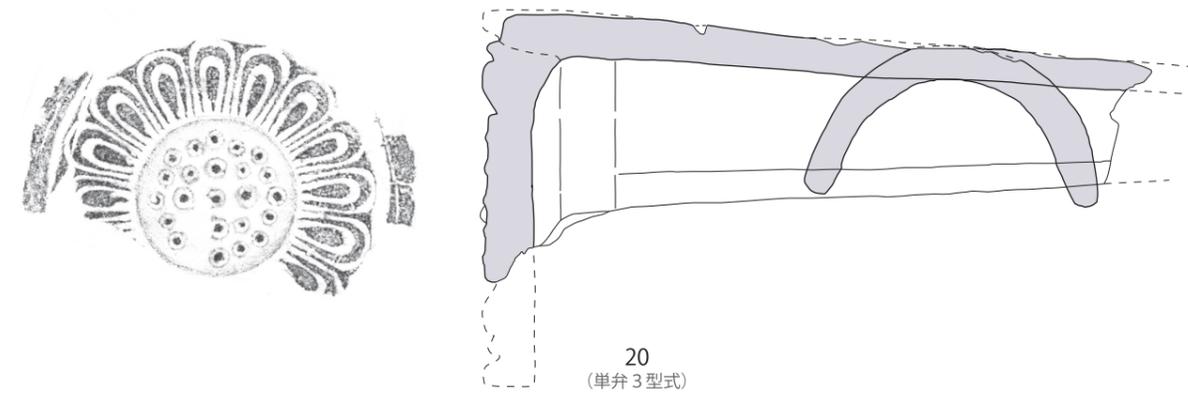
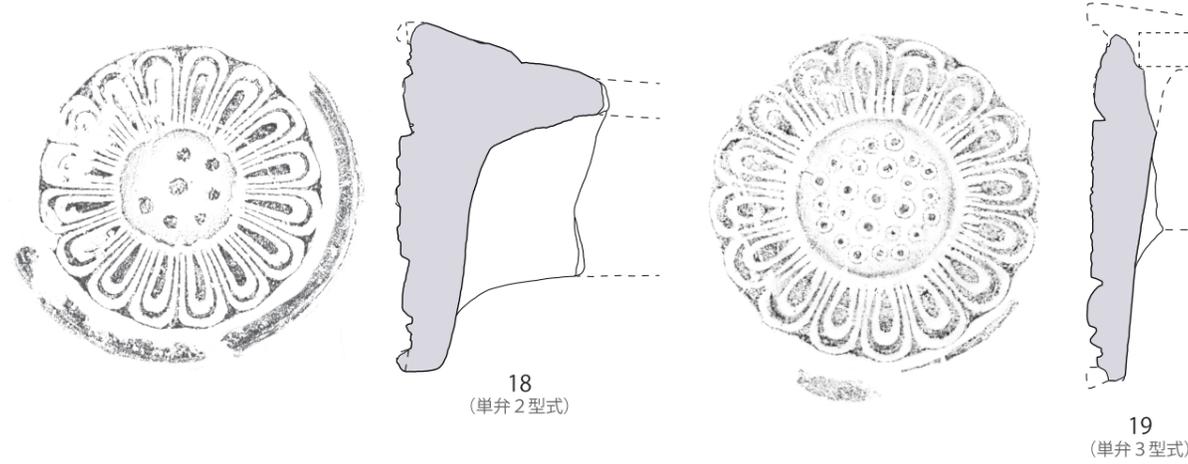
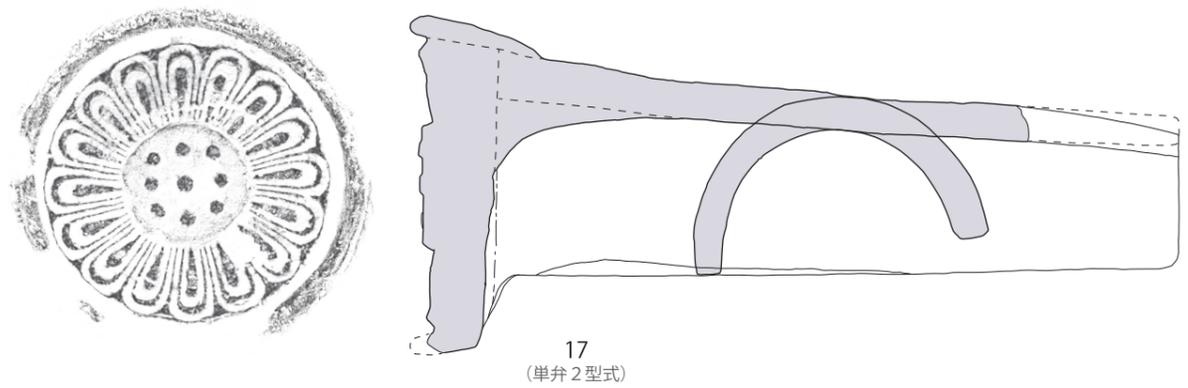


图26 軒丸瓦実測図 (1/4)

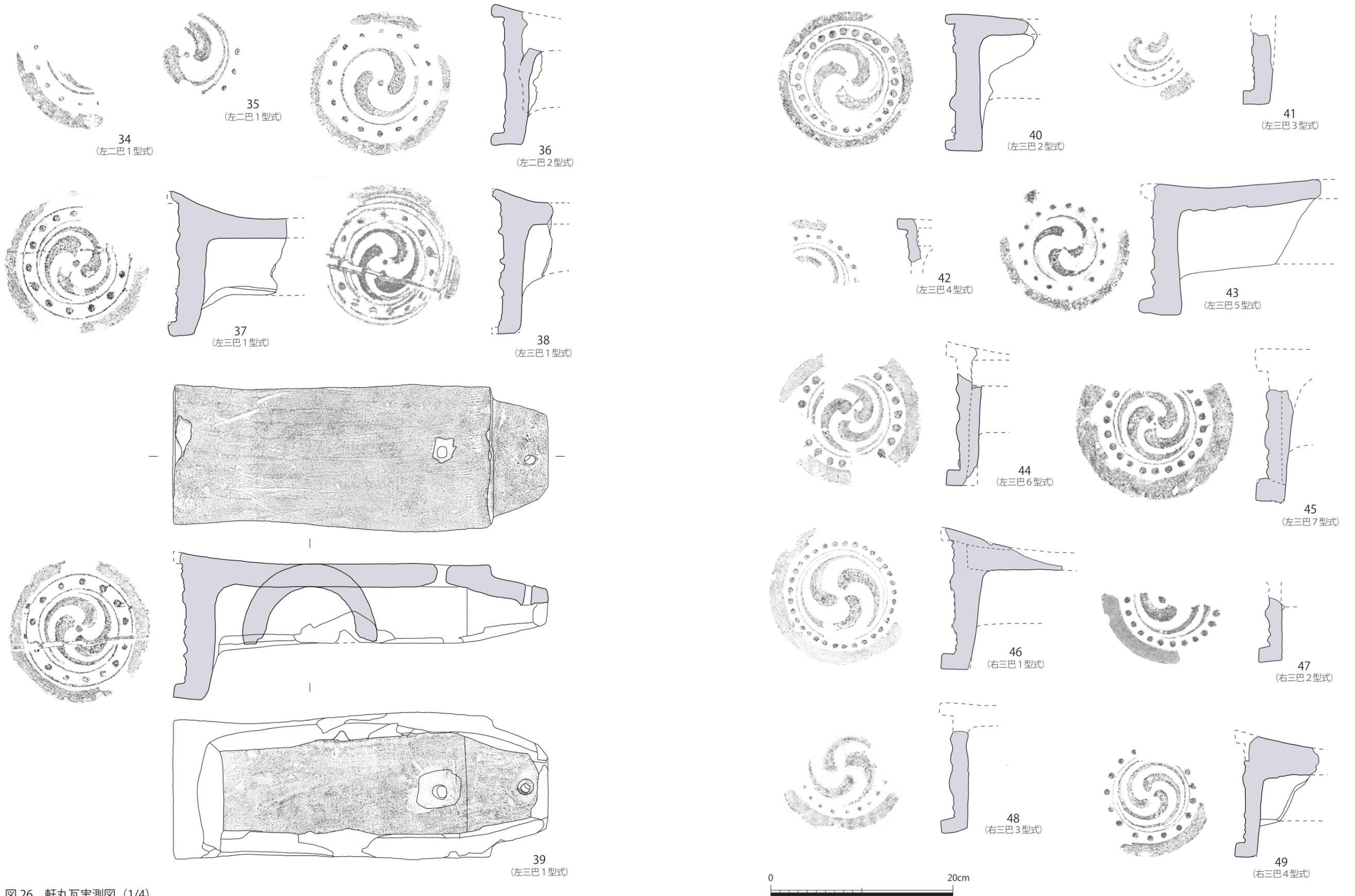


图 26 軒丸瓦実測図 (1/4)

表5 軒丸瓦の型式一覧

単位 (cm)

型式・拓本 (S=1/10)	直径	内区						外区					全長	重量 (kg)	
		中房径	蓮子数	弁区径	文様弁数	蓮弁		幅	内縁		外縁				
						長さ	幅		幅	文様	幅	高さ			文様
素弁1型式	17.7	3.3	1+5	15.5	素弁8	6.0	4.3	1.1	—	—	0.6	0.7	—		
素弁2型式	18.3	3.4	1+8	15.5	素弁8	5.4	4.3	1.4	—	—	0.8	0.8	—		
素弁3型式	17.0	2.6	1+6	13.6	素弁8	4.9	3.7	1.7	—	—	1.0	0.7	—		
素弁4型式	17.0	3.3	1+8	14.8	素弁8	5.1	4.0	1.1	—	—	0.5	—	—		
素弁5型式	17.4	3.0	1+5	14.0	素弁8	5.3~5.7	2.8~3.4	1.7	—	—	1.0	0.7	—		
単弁1a型式	16.6	5.9	1+4+8	13.0	単弁16	3.3	1.6	1.8	—	—	1.3	1.1	—		
単弁1b型式	18.2	5.9	1+4+8	13.0	単弁16	3.3	1.6	2.6	—	—	1.8	1.4	—		
単弁2型式	19.5	7.0	1+8	15.9	単弁16	4.1	2.0	1.8	—	—	1.2	0.9	—	44.0 (6.7)	
単弁3型式	21.3	8.9	1+8+16	17.5	単弁16	4.0	2.4	1.9	—	—	1.4	1.0	—		
単弁4a型式	(15.4)	(3.6)	(1+6)	(11.8)	単弁11	3.9	1.9	1.8	—	—	1.4	0.6	線鋸歯文		
単弁4b型式	15.0	3.7	1+6	11.2	単弁11	3.8	1.8	1.9	—	—	1.2	0.9	珠文		
単弁5型式	(15.1)	3.8	1+(6)	11.7	単弁11	4.0	1.8	1.7	—	—	1.3	0.8	—		
忍蓮1型式	18.0	4.5	1+8	15.6	素弁4 忍冬4	5.1 5.0	4 4	1.2	—	—	0.8	1.1	—		
複弁1型式					複弁			1.9		圏線	1.3	0.3	—		
型式・拓本 (S=1/10)	直径	第1圏線内径	第2圏線内径	第3圏線内径	内区径	全体幅	幅	文様	幅	高さ	文様	全長	重量		
重圏1型式	(15.4)	3.7	7.8	11.8	13.5	1.2	—	—	0.7	0.8	—				

*単弁4a型式の拓本は「西安寺跡発掘調査概報」27頁の図4を使用

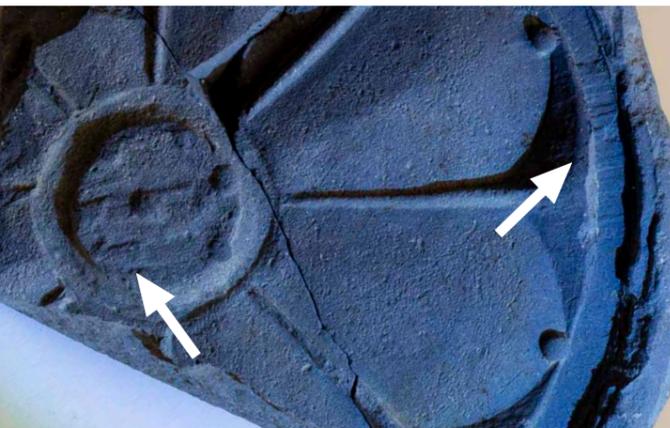
単位 (cm)

型式・拓本 (S=1/10)	直径	内区		外区						全長	重量 (kg)
		文様	径	幅	内縁		外縁				
					幅	文様	幅	高さ	文様		
梵字1型式	(15.8)	梵	(11.1)	2.2	1.1	圏線	1.1	0.7	—		
型式・拓本 (S=1/10)	直径	内区 珠点	幅	圏線		内縁		外縁		全長	重量 (kg)
				内	外	幅	珠文(個)	幅	高さ		
左二巴1型式	(15.0)	○	3.4	○	—	1.9	—	1.5	1.1		
左二巴2型式	15.4	○	3.1	—	—	1.7	16	1.4	1.2		
左三巴1型式	15.5	○	3.7	○	○	2.0	14	1.7	1.1	41.2	4.5
左三巴2型式	14.8	○	3.1	○	○	1.9	27	1.2	0.9		
左三巴3型式	(13.8)	—	3.8	—	○	2.2	—	1.6	1.2		
左三巴4型式	(14.0)	—	2.7	○	—	1.5	—	1.2	0.8		
左三巴5型式	14.3	—	3.6	—	—	1.9	15	1.7	1.5		
左三巴6型式	15.7	—	3.2	○	—	1.4	(22)	1.8	1.2		
左三巴7型式	17.1	○	3.9	○	—	1.5	(23)	2.4	1.2		
右三巴1型式	15.4	—	3.1	○	—	1.3	33	1.8	1.5		
右三巴2型式	(15.0)	—	3.0	—	—	1.3	(25)	1.7	1.2		
右三巴3型式	(14.4)	—	3.1	—	○	1.5	(21)	1.6	0.9		
右三巴4型式	(13.9)	—	2.7	○	—	1.2	(17)	1.5	1.1		

* () は復元した数値



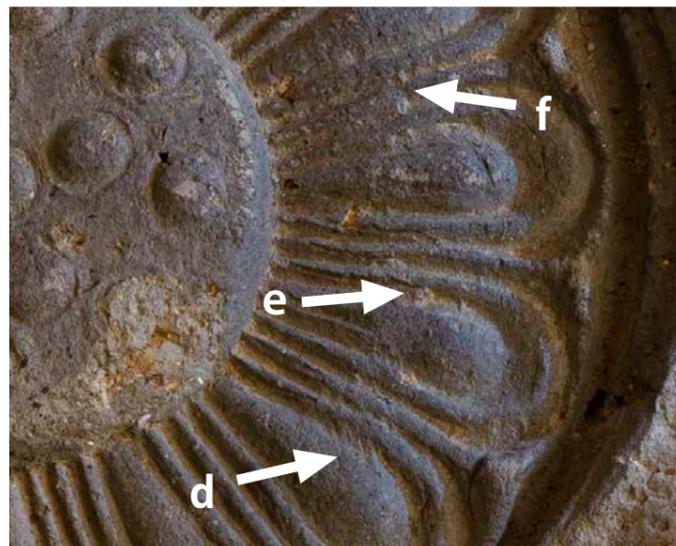
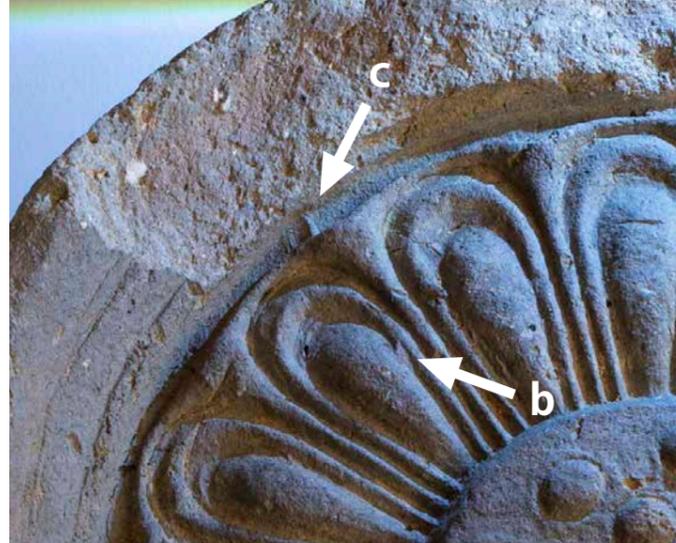
素弁1型式の範傷 図26-1。外区の溝にある範傷が法隆寺若草伽藍出土の軒丸瓦7Abでも確認でき、両者は同じ範型を使ってつくられたことがわかる。



素弁3型式の範傷 写真上が図26-6。外区の溝に複数の範傷があり、法隆寺若草伽藍出土の軒丸瓦6Bと一致する。写真下は図26-5で、やはり同じ範傷があり、同範であることがわかる。中房にも範傷がある。



忍冬1型式の範傷 図26-27。中房周りの溝にある範傷は図26-26にもあり、両者が同範であることがわかるが、宗元寺跡出土品の範傷とは一致しない。



単弁1型式の範傷 写真上・下ともに図26-13。単弁蓮華文は細やかなデザインで、範傷も小さなものがあちこちにてきている。アルファベットは図26に付したものと同一。



瓦当と丸瓦の接合 丸瓦を瓦当裏面に接合する際、無加工のまま突き合わせるものが多いのが西安寺の軒丸瓦の特徴で、素弁蓮華文・単弁蓮華文に共通。写真は単弁2型式。



無文1型式 図27-50。写真左が凹面、右が凸面。瓦当面の厚さは1.5cmと薄い。粘土板桶巻作りで凹面には布目、布筒の縦じ合わせ目、分割界線があり、界線のなかに撚紐の圧痕が見える。瓦当側は丁寧な横ナデで仕上げている。一方の凸面は全体を非常に丁寧に横ナデしている。狭端近くに「大」のヘラ書きがある。



三重弧文の型引き工具痕 図27-56。瓦当面を上凸面側から撮影している。施文する型引き工具の端が当たる位置に段ができています。



三重弧文の型引き工具痕 写真上が図27-66、写真下が図27-62。いずれも瓦当面を上凸面側から撮影したもので、施文する工具の痕が横方向に移動しているのがわかる。



凸面に残るペンガラ 図27-69の唐草3型式。建物に塗布したペンガラが横方向に付着している。

2 軒平瓦

■ **軒平瓦の分類** 軒平瓦には無文軒平瓦⁽¹⁾、三重弧文軒平瓦、唐草文軒平瓦の出土があった。点数は424点である。

無文軒平瓦は、粘土板桶巻作りで瓦当面を一様にナデ調整するため、凸面の調整方法をもとに分類している。三重弧文軒平瓦は、すべて粘土板桶巻作りの型引き施文で、凸面調整も丁寧なナデを行っているため、弧線の幅、形状をもとに分類した。唐草文軒平瓦は、中心飾りと唐草文の形状で分類している。軒平瓦についても、今後の調査により種類が増えることを考慮して、文様ごとに型式番号を設定した。無文軒平瓦は3種、三重弧文軒平瓦は6種、唐草文軒平瓦は細分したものも含めて13種に分類し、唐草文軒平瓦の顎形状が段顎のものは20番台からの番号を付している。

i 無文

■ **無文1型式** 写真130、図27-50~52。無文軒平瓦。粘土板桶巻作り平瓦の広端面と広端凹凸面に丁寧なナデを施し、軒平瓦としている。瓦当面の厚さは1.5cm。灰色で須恵質の硬質な焼成のものと、白色で軟質な焼成のものがあり、14点の出土があった。

図27-50の凹面には糸切り痕Ur、密度が中の布目、幅9.0cmの側板痕跡があり、右側縁近くには分割界線、布筒の縫い合わせ目、瓦当面から2.5cmの位置に布筒の端の痕跡がある。凸面の全面は横方向のナデで、狭端側には「大」の文字のヘラ書きがあり、瓦当から12.0cmの位置に幅3.7cmのベンガラと見られる赤色顔料（以下、ベンガラと記載）が部分的に残っている。瓦当面の幅29.4cmで、狭端幅は24.2cmに復元できる。全長50.0cm、厚さ1.5cm、重量3.9kg（復元）である。

■ **無文2型式** 写真131、図27-53。無文軒平瓦。粘土板桶巻作りの平瓦の広端面と広端凹凸面に丁寧なナデを施して厚さ2.1cmの瓦当面をつくり、最後に凹面側は幅1.6cmの横ナデ、凸面側は幅0.8cmの面取りをしている。凸面は縄タタキののちナデを行ってその痕跡を消しており、凹面には糸切り痕U、密度が中の布目がある。色調は灰色で、焼成は硬質である。

■ **無文3型式** 写真132、図27-54・55。無文軒平瓦。粘土板桶巻作り平瓦の広端面と広端凹凸面に丁寧なナデを施して軒平瓦としており、瓦当面の厚さは1.3~1.8cm。凸面では対角幅1.1cm×1.0cmの斜格子タタキをしたのちナデを行っている。凹面には糸切り痕Ur、密度が中の布目、幅5.6cmの側板痕跡がある。色調は灰白色で、焼成は軟質である。

ii 三重弧文

■ **三重弧1型式** 写真133、図27-56・57。三重弧文軒平瓦。中央の弧線が太く、弧線角が角張るもの。瓦当面の厚さは4.0cm前後と三重弧文軒平瓦の6種のなかで最も厚い。顎の形状は直線顎。凹面には糸切り痕、密な布目、幅5cm前後の側板痕跡がある。凸面は横、斜め方向の丁寧なナデで仕上げている。瓦当面に沿って凸面側には0.6cm、凹面側には1.6~2.0cmの型引きの工具痕があり、凹面側は深く屈曲している。側面はc手法で丁寧に複数回の面取りを行っている。三重弧1型式は30点が出土し、褐色で焼成が良好なもの、灰色で硬質なものがある。凸面にベンガラの付着するものが2点あり、糸切り痕は4種ともあったが、Ur・Drの右利きの工人によるものが多い。

図27-57は狭端側が欠損しているが、最も残りの良いものである。瓦当面の幅35.5cm、厚さ4.2cm。弧線幅は上段が0.8cm、中段が1.2cm、下段が1.0cmで、全長は43.4cmである。軒平瓦中央の粘土板接合部分で剥離しており、粘土板の合わせ目形状がSであることがわかる。凸面は斜め方向の丁寧なナデ、凹面には糸切り痕Dr+Dl、幅5.1cmの側板痕跡があり、粘土円筒の段階で施した形状補正の右上がりの工具痕跡が多く残る。重量は7.0kg（復元）。

■ **三重弧2型式** 写真134、図27-58・59。三重弧文軒平瓦。中段の弧線がやや細く、弧線角が角張る。12点の出土があり、溝の形状はU字形で深さは0.3~0.5cmと他の型式と比べて浅く、瓦当面の厚さは3.5cmである。顎の形状は直線顎。瓦当面に沿って凹凸面に型引きの工具痕がある。凸面は横方向、斜め方向の丁寧なナデを施し、凹面には糸切り痕、密な布目がある。糸切り痕はUrとDrが同程度の割合である。側面はc手法で丁寧に複数回の面取りを行っている。灰色から灰褐色のものが



写真130 無文1型式



写真131 無文2型式

写真132 無文3型式



写真133 三重弧1型式



写真134 三重弧2型式

写真130~132の大きさは任意、
写真133・134の大きさは実物のおよそ50%

多く、焼成は良好である。

図 27-58 は瓦当厚 3.5cm、弧線は上段が 0.9cm、中段が 0.7cm、下段が 1.0cm で、凹面には幅 1.8cm、凸面には幅 0.9cm の型引き工具痕跡がある。瓦当面の幅は 33.0cm に復元でき、全長は 42.0cm。狭端幅は 26.0cm である。凹面は、左側縁に布筒との縫い合わせ目がある密な布目で、数条の縦方向のナデ、木目状の痕跡がある当て具の痕跡がある⁽²⁾。凸面は斜め方向のナデで、狭端側には指頭圧痕が残る。重量は 7.0kg (復元)。

■ **三重弧 3 型式** 写真 135、図 27-60・61。三重弧文軒平瓦。弧線幅はほぼ均等で、弧線の角が角張る。顎の形状は直線顎。凸面は縦方向から斜め方向の丁寧なナデ、凹面には糸切り痕、密な布目、側板痕跡があり、部分的にナデを施す。糸切り痕は Ur と Dr が同程度の割合である。色調は灰色で、焼成は硬質なものが多い。

三重弧 3 型式には大きさに差のある瓦がある。図 25-60 は瓦当面の復元幅 31.5cm、厚さ 3.7cm、全長 40.3cm、狭端の復元幅 26.6cm、重量 7.5kg (復元) で、凹面の広端側に当て具の押圧、狭端側に指頭圧痕がある。図 27-61 は瓦当面の幅 33.7cm、厚さ 3.8cm、全長 43.0cm、狭端幅 30.2cm で、重量は 8.6kg (復元) ある。

■ **三重弧 4 型式** 写真 136、図 27-62・63。三重弧文軒平瓦。中段の弧線が細く、弧線の角が丸くて溝形状が上開きとなっている。出土点数は 4 点と少なく、瓦当幅を復元できるものがない。色調は灰色で、焼成は硬質である。

図 27-62 は瓦当の厚さ 3.5cm で、弧線の幅は上段が 0.7cm、中段が 0.5cm、下段が 0.7cm である。瓦当面に沿って凸面に幅 1.0cm、凹面に 2.1cm の型引きの工具の痕跡がある。平瓦部の凹面には、瓦当面から狭端に向けたケズリがあり、布目が残らない。粘土板の合わせ目形状は S で、合わせ目のところで剥離しており、剥離面には糸切り痕 UI がある。

図 27-63 は、凹面に密度が中の布目、幅 4.1cm の側板痕跡、狭端側から瓦当側へ強めにナデあげた痕跡がある。凸面には、瓦当面から 15.5cm の位置に幅約 3cm でベンガラが付着する。

■ **三重弧 5 型式** 写真 137、図 27-64・65。三重弧文軒平瓦。中段の弧線幅が細く、弧線角が角張る。溝の深さは 0.3～0.4cm と浅い。瓦当面の厚さは 3.5cm。瓦当面の幅を復元できるものが出土し

ていない。顎形状は直線顎。凸面は横方向、斜め方向の丁寧なナデで、凹面は糸切り痕 Ur、密な布目であるが、斜め方向のナデによって消えているところがある。また、木製当て具と見られる楕円形の押圧が施される個体が 3 点あり、桶を抜き取ったのちの段階に補正した痕跡と考えられる。色調は灰色で、焼成は良好なもの、硬質なものがある。

■ **三重弧 6 型式** 写真 138、図 27-66・67。三重弧文軒平瓦。弧線幅はほぼ均等で、弧線角は丸い。溝の形状は U 字形で、溝の深さは 0.6～0.8cm である。瓦当厚は 3.8cm で、顎の形状は直線顎。瓦当面の幅を復元できるものはなかったが、色調は灰色で、焼成は硬質なものが多い。

図 27-66 は、瓦当面に沿って凸面側は 1.5cm、凹面側は 2.4cm の幅で型引きの工具痕跡がある。凹面には糸切り痕、密な布目があり、狭端から瓦当面に向けて強めのナデ、木目状の痕跡がある当て具の圧痕がある。施文後に工具痕跡付近に横ナデを加えており、型引き痕の上に粘土がバリ状にかぶっている。

iii 唐草文

■ **唐草 1 型式** 写真 139・図 27-68。均整唐草文軒平瓦。粘土板一枚作りで、瓦当面の幅約 29cm、全長 34cm、狭端の幅約 27cm。中心飾りに棒形と上へ巻く唐草文があり、左右に唐草文が 3 回反転し、外区には三重に圏線がめぐる。唐草文の形状は 6663B 型式、中心飾りは 6755 型式に似るが、外区に三重の圏線をもつ例はなく、この型式の特徴となっている。19 点が出土しており、顎の形状には曲線顎 1 と曲線顎 2 の両方がある。凸面は狭端から瓦当面に向けてナデを施すが、縄タタキの痕跡が残る。凹面には密な布目、糸切り痕 UI、凸型成形台の痕跡が残るものもある。胎土に長石を多く含んでいる。黒くいぶされた軟質の焼き上がりは、単弁 4a 型式、同 4b 型式と共通しており、これらと組み合わせることが予想される。8 世紀後半のものと考えられる。重量は 4.0kg (復元)。

■ **唐草 2 型式** 写真 140、図 28-77。均整唐草文軒平瓦。瓦当面に向かって右端上部に当たる小さな破片が 1 点出土している。唐草文の形状、外区の幅は片岡王寺跡出土の 206A と一致し⁽³⁾、唐草 1 型式と同形の中心飾りの左右に唐草文が 3 回反転する。



写真 135 三重弧 3 型式



写真 137 三重弧 5 型式



写真 136 三重弧 4 型式



写真 140 唐草 2 型式



写真 138 三重弧 6 型式



写真 139 唐草 1 型式



写真 141 唐草 3 型式

写真の大きさは実物のおよそ 50%

■ **唐草3型式** 写真141、図27-69。均整唐草文軒平瓦。一枚作りで、唐草1型式、同2型式と同形の中心飾りがある。唐草文は単位をくずしながら3回反転している。外区には珠文、外縁には細い凸帯がめぐる。瓦当面の幅約28.5cm、厚さ5.5cmで、凹面には密度が中の布目、幅3.4cmの凸型成形形の板材の圧痕があり、凸面は瓦当から狭端へ向けてケズリを施す。顎の形状は曲線顎1。片岡王寺跡出土の206Bと同範であるが、こちらは直線顎である⁽⁴⁾。胎土、焼成は唐草1型式に似て軟質で、色調は黄褐色である。

■ **唐草4a型式** 写真142、図27-70。均整唐草文軒平瓦。一枚作りで、瓦当文様は唐草2型式、同3型式を基本としながらも大きく変化させている。刺股形の中央に珠点を置き、唐草の上に巻いた中心飾りの左右に唐草文が3回反転し、凸線による界線で囲まれた内区は唐草文の合間に珠点を置く。11点が出土しており、瓦当面の幅は29cm前後、厚さ5.0～6.5cm、全長約40cmである。外区の幅は個体によりまちまちで、瓦範は界線までと考えられる。凹面には粗の布目があり、狭端面、側面、凸面側にも布目が残るものもある。凸型成形形で布をかぶせて押さえ、成形したものと考えられる。凸面と側面は瓦当面から狭端へ向かってケズリを加えている。図27-70の凸面には、瓦当面から9.0cmの位置に幅1.0cmのベンガラが残存している。重量は6.9kg（復元）。

■ **唐草4b型式** 写真143、図27-71。唐草4a型式と同範で、向かって左側に瓦当面を斜めに走る凸線の範傷があるもの。製作技法、調整、胎土、焼成も唐草4a型式と共通する。凸面には、瓦当面から8.6cmの位置に幅2.5cmのベンガラが残存している。重量は6.8kg（復元）。範傷部分が残存しないために唐草4a型式か同4b型式か判断できないもの、調査で取り上げず現地保存したものも含め、唐草4型式は35点が出土している。胎土、焼成が単弁5型式と共通し、組み合わせるものと考えられる。

■ **唐草5型式** 写真144、図27-72・73。均整唐草文軒平瓦。粘土板一枚作り。中心飾りがなく、唐草文が中央から左右に2回反転する。瓦当面の幅28.2cm、全長37.8cm、復元による狭端の幅25.3cmで、瓦当面の厚さは5.7cmである。平瓦の凹凸面に粘土を貼り合わせて瓦当面を成形している。顎の形状は曲線顎1である。112点が出土し

ており、凹面にはDr・Urが大勢を占める糸切り痕、密な布目があり、側縁と狭端側を面取りし、瓦当面に沿って幅1～2cmの横ナデを施している。凸面は縦方向のナデ、側面は瓦当側から狭端に向けて複数回のヘラケズリを施す。図27-72の凸面には、瓦当面から10.0cmの位置に幅1.9cmで、顎部分には幅1.7cmでベンガラの痕跡がある。灰色で焼成は硬質であるが、二次焼成を受け橙褐色となっている個体もある。重量5.5kg。平安後期のもの。片岡王寺跡出土の232Aは、唐草文の線がやや太くはっきりしているが同範品であり⁽⁵⁾、胎土もよく似ている。

■ **唐草6型式** 写真145、図27-74・75。均整唐草文軒平瓦。粘土板一枚作り。唐草文が陰刻で表現されている。瓦当面の幅28.7cm、厚さ5.8cm、全長37.0cm、狭端幅25.0cmである。平瓦の広端面と凸面側に粘土を足して瓦当面をつくっており、瓦当の下半が剥離した面には糸切り痕がある。65点が出土しており、顎の形状は曲線顎1のものと、顎部分に横方向のナデを施すことにより幅2.6～4.0cmの平坦面ができる曲線顎2がある。平瓦の凸面は縦方向のナデ、顎部分には接合痕を消すように横ナデを施している。平瓦の凸面は縦方向のナデ、凹面にはDr・Urが主流となる糸切り痕、密度が中の布目があり、瓦当面、側縁に沿ってナデを施している。唐草5型式と胎土もよく似ており、灰色で硬質な焼成で、二次焼成により橙褐色を呈するものがある。重量5.5kg（復元）。平安後期のもの。片岡王寺跡231Aと一致する範傷があり、同範である⁽⁶⁾。

■ **唐草7型式** 写真146、図28-78。唐草文軒平瓦。全体の文様構成はわからないが、残存する唐草文の先端形状が一致するものがないので、唐草7型式として設定した。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

■ **唐草8型式** 写真147、図28-79。均整唐草文軒平瓦と考えられる。粘土板一枚作り。瓦当面の向かって左端部分が1点出土している。瓦当面の厚さは6.6cm。唐草文の反転が崩れ直線に近づいている。上外区には凸線の鋸歯文、下外区には縦長の珠文を配し、左脇区は界線横で側面となる。瓦当裏面には厚さ2.3cmの平瓦の接合痕跡が残り、包み込み技法により製作されている。色調は暗褐色で、焼成は良好である。



写真142 唐草4a型式



写真143 唐草4b型式



写真144 唐草5型式



写真145 唐草6型式

写真の大きさは実物のおよそ50%

■ **唐草 20 型式** 写真 148、図 28-80・81。均整唐草文軒平瓦。3葉で構成する花文を中心飾りとし、1単位1葉の唐草文が3回反転する。全体を復元できるものはなく、瓦当幅は推定 28cm で、瓦当の厚さは 6.5cm。下半貼り付けの段顎で、顎幅は 2.8cm 前後。平瓦の凸面は縦方向のナデ、顎部には横方向のナデを施し、顎角に面取りはない。出土した個体のほとんどが二次焼成を受けて橙褐色を呈しており、1点だけが黒色である。14世紀のもの。

片岡王寺跡出土の 287A と文様の形状、大きさが一致し、同範の可能性が高い。片岡王寺跡出土品は顎裏を面取りしている。また、尼寺北廃寺出土の NKH16 も同範と見られる⁽⁷⁾。

■ **唐草 21 型式** 写真 149、図 27-76。均整唐草文軒平瓦。上向きの4葉がある中心飾りで、その両脇に唐草文が展開する。瓦当面の最大幅 26.7cm、瓦当面の厚さ 6.2cm、全長 33.8cm、狭端幅 24.1cm である。顎の形状は貼り付けの段顎である。顎の周りは横方向のナデで、顎角の面取りはない。凹面には密な布目があり、瓦当側には縦方向のナデを施す。凸面は繊維束状の痕が残る縦方向のナデがあり、離れ砂が付着する。側面はヘラケズリで整え、凸面角にわずかな突出がある。14世紀前半のもので、重量は 4.4kg (復元)。

『法隆寺の至宝』の軒平瓦 355Ab とその同範品である平城京薬師寺出土品との比較を行ったところ⁽⁸⁾、中心飾り、唐草文の形状と大きさが酷似しており、共通の範傷は認められないものの同範と判断できた。範の摩耗具合から西安寺、法隆寺 355Ab、薬師寺の順でつくられた。法隆寺 355Ab では、西安寺跡の唐草 21 型式の両脇区が切り縮められており、中央飾りの下の界線に乱れがある。薬師寺出土品は下界線が欠損し、唐草文が不明瞭となっている。瓦当面に向かって左端には新たな界線と文様を刻み、範を拡張させている。

■ **唐草 22 型式** 写真 150、図 28-82・83。均整唐草文軒平瓦。半截花文を中心飾りとして1単位1葉の唐草文を5回反転する。6点が出土しており、瓦当面だけが残存する。瓦当面の幅 23cm 前後、厚さ 4.5～5.3cm。貼り付け段顎で、顎の後角に面取りがある。14世紀後半のもの。片岡王寺跡出土の 271A と同範品で、中央飾り左側の花卉内の界線の上にある膨らみが一致する⁽⁹⁾。

■ **唐草 23 型式** 写真 151、図 28-84~86。均整

唐草文軒平瓦。下向きの半截菊花文を中心飾りとする。7点出土しており、瓦当面の幅約 21cm、厚さ 5.4cm。貼り付け段顎で、顎の後角を面取りする。15世紀のもの。片岡王寺跡 281A と照合し、どちらも小片であったものの同範と考えられる⁽¹⁰⁾。

iv 近世瓦

■ **近世・近代の瓦** 図 28-87~93 は、表土の1層、神社整備の造成土である2層から出土した近世の軒先瓦で、舟戸神社の本殿・拜殿に使用したものである。江戸時代後期後半から明治期にかけての軒丸瓦、軒平瓦、棧瓦が出土している。

[注：2 軒平瓦]

- (1) 無文軒平瓦については、第11次調査の遺物整理段階で初めて認識できたものであり、金堂周辺の表土、神社整備の造成土、塔廢絶後の造成土に当たる1～3層からの出土である。第8次調査、第9次調査の出土遺物から発見したのもあり、今後、資料数が増える可能性がある。
- (2) この当て具の痕跡は、三重弧2型式、同5型式、同6型式と違う型式であっても一部に共通して認められるもので、粘土板を巻き付けて桶を抜き取ったのち、瓦の形状を補正するために使用されたと考えられる。当て具は木製で、木目が瓦に転写されていると見られ、木目のあり方から木材の芯からはずれたところで木取りしていると推定する。
- (3) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』76頁の図48-12(206A)で報告される遺物で確認した。
- (4) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』76頁の図48-17-20(206B)で報告される遺物で確認した。
- (5) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』77頁の図49-31(232A)で報告される遺物で確認した。
- (6) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』77頁の図49-27・28(231A)で報告される遺物で確認し、左側の下外縁から内区へ向かう突起状の範傷が一致した。
- (7) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』78頁の図50-50(287A)、『尼寺廃寺Ⅰ—北廃寺の調査—』63頁の図49に掲載される NKH16。
- (8) 『法隆寺の至宝』169頁の「484 軒平瓦 355Ab」、『薬師寺発掘調査報告』137頁の Fig.64-326 で報告される遺物で確認した。
- (9) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』77頁の図49-40(271A)で報告される遺物で確認した。
- (10) 『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』77頁の図49-42(281A)で報告される遺物で確認した。

写真 146 の大きさは実物のおよそ 70%、その他の写真の大きさは実物のおよそ 50%



写真 146 唐草 7 型式



写真 147 唐草 8 型式



写真 148 唐草 20 型式



写真 149 唐草 21 型式



写真 150 唐草 22 型式



写真 151 唐草 23 型式



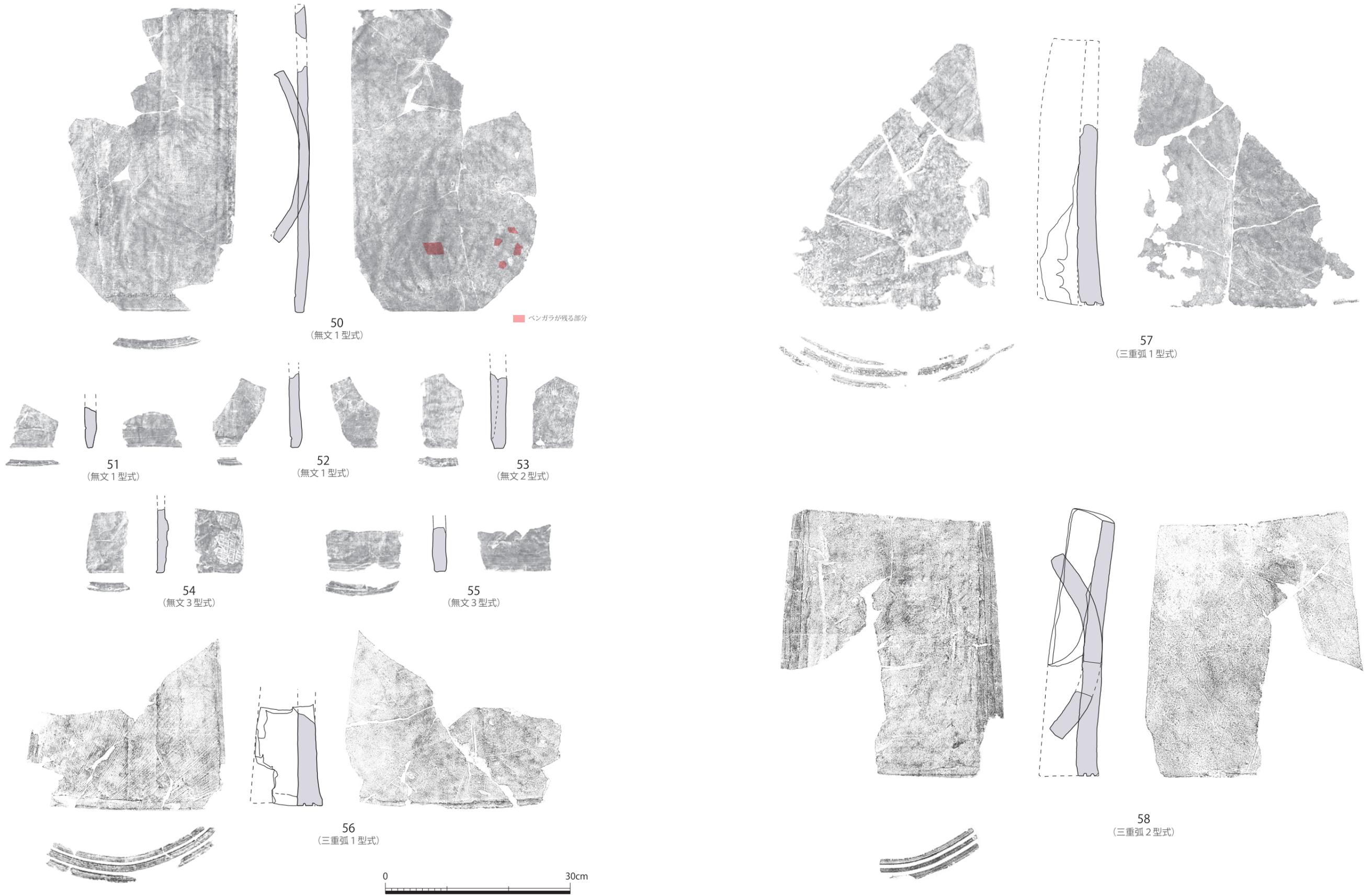


図27 軒平瓦実測図 (1/6)

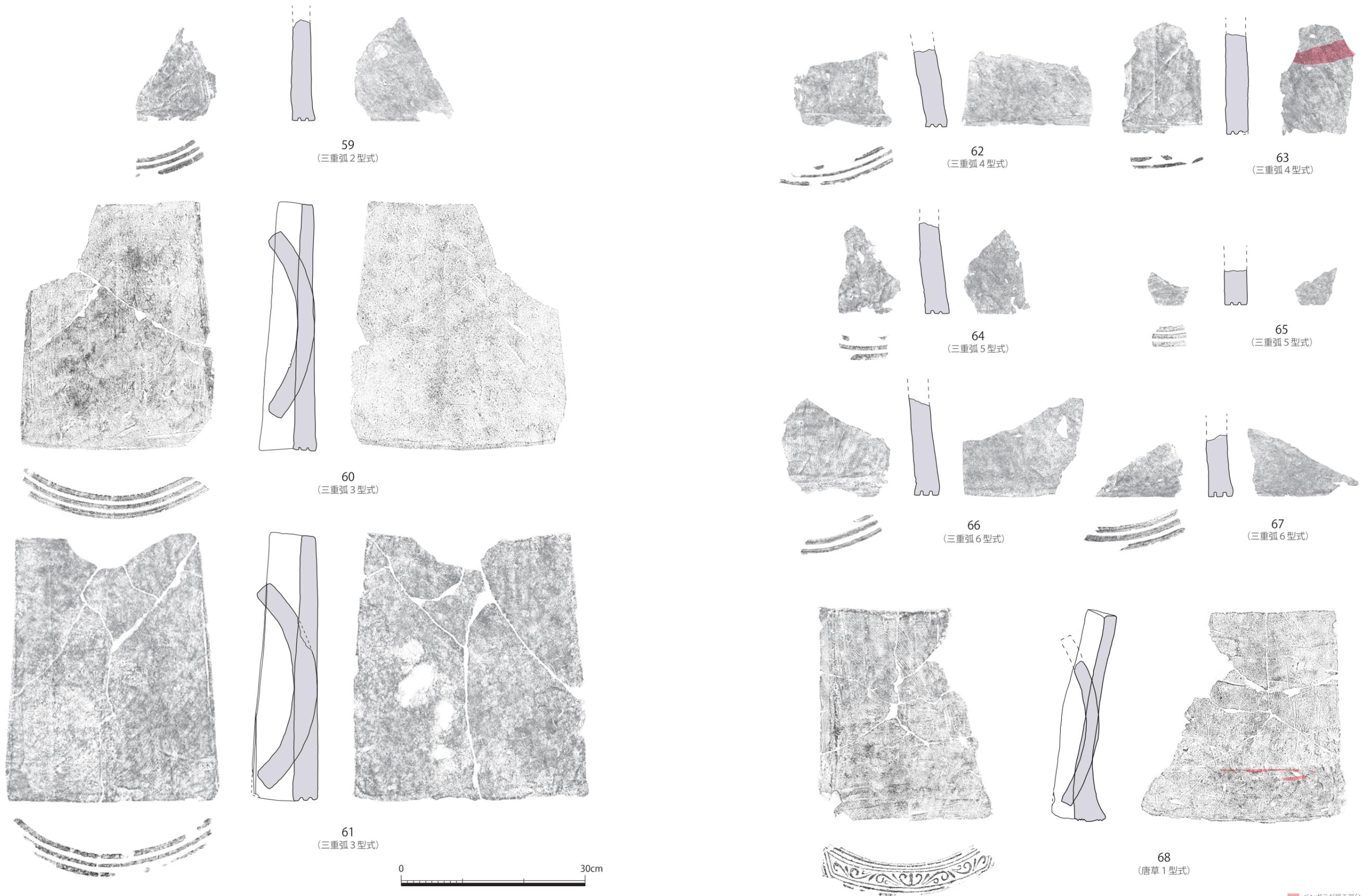


図 27 軒平瓦実測図 (1/6)

ベンガラが残る部分

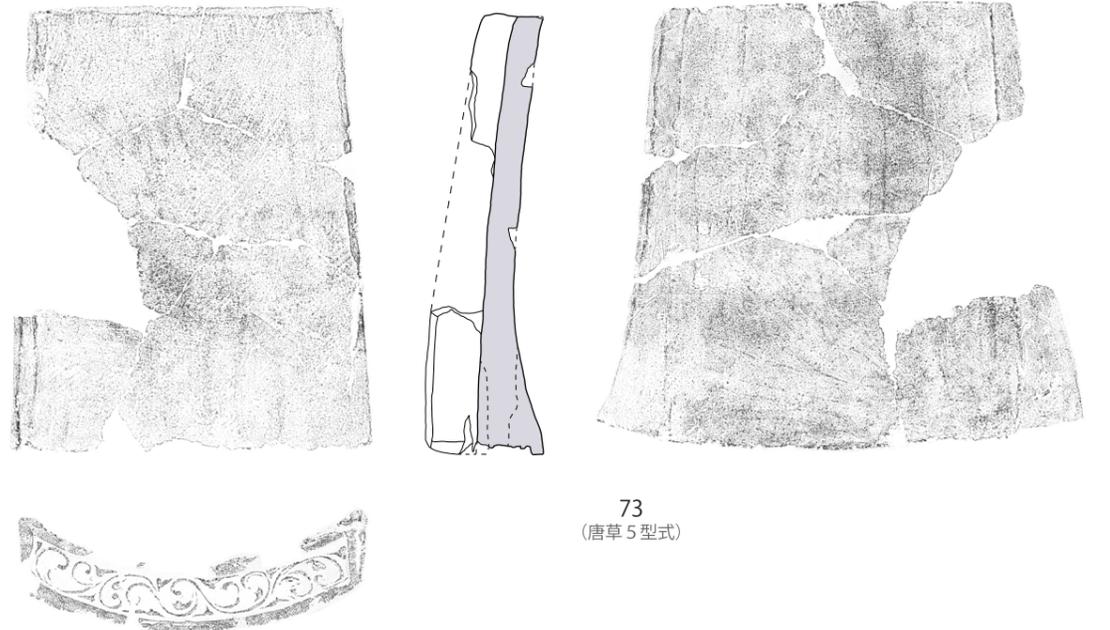
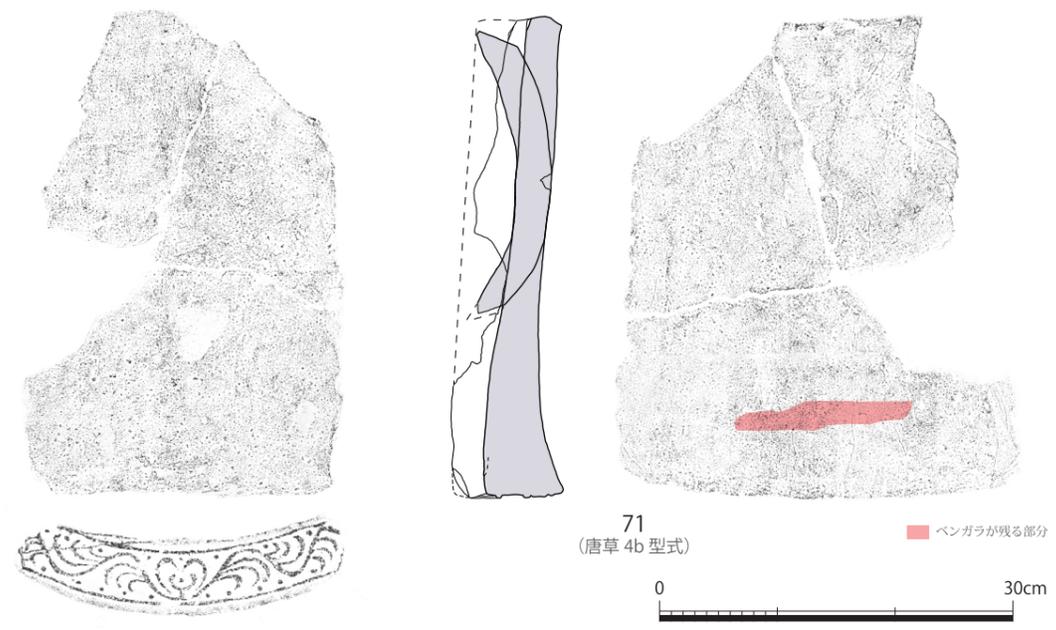
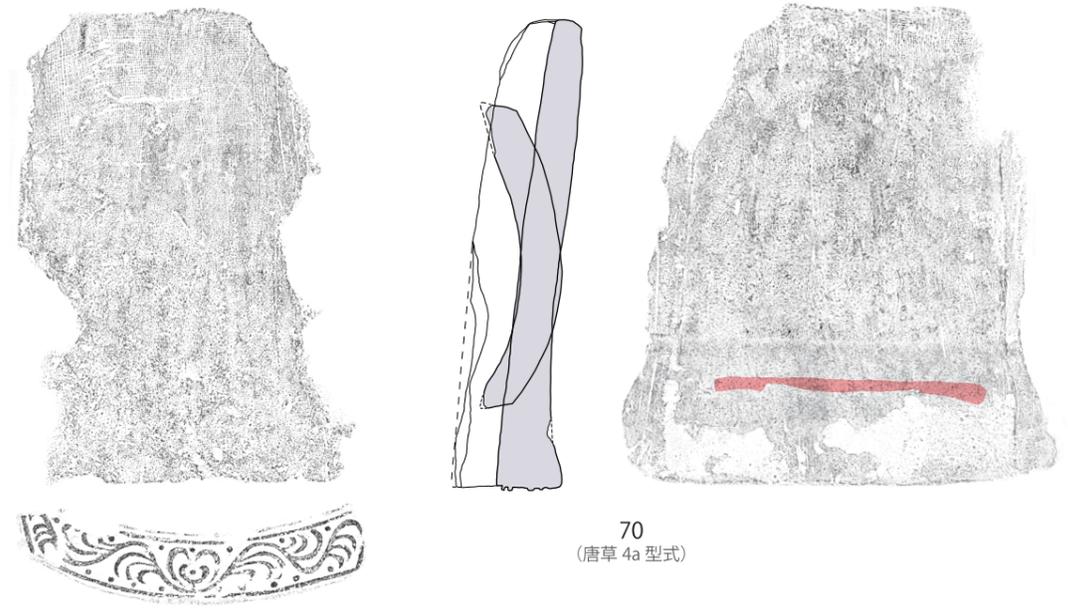
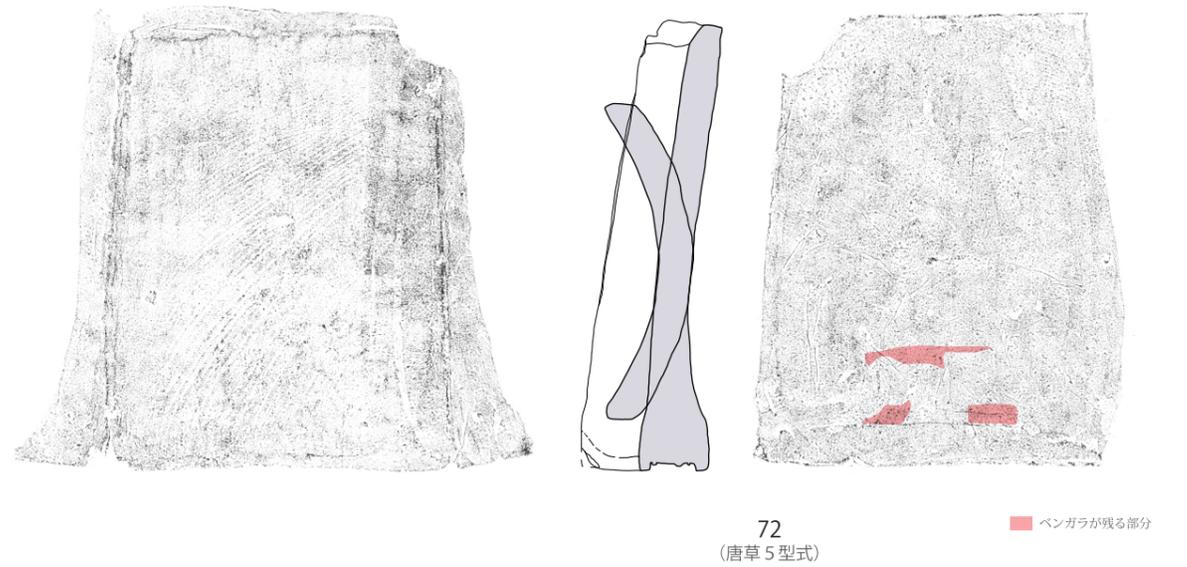


図27 軒平瓦実測図 (1/6)

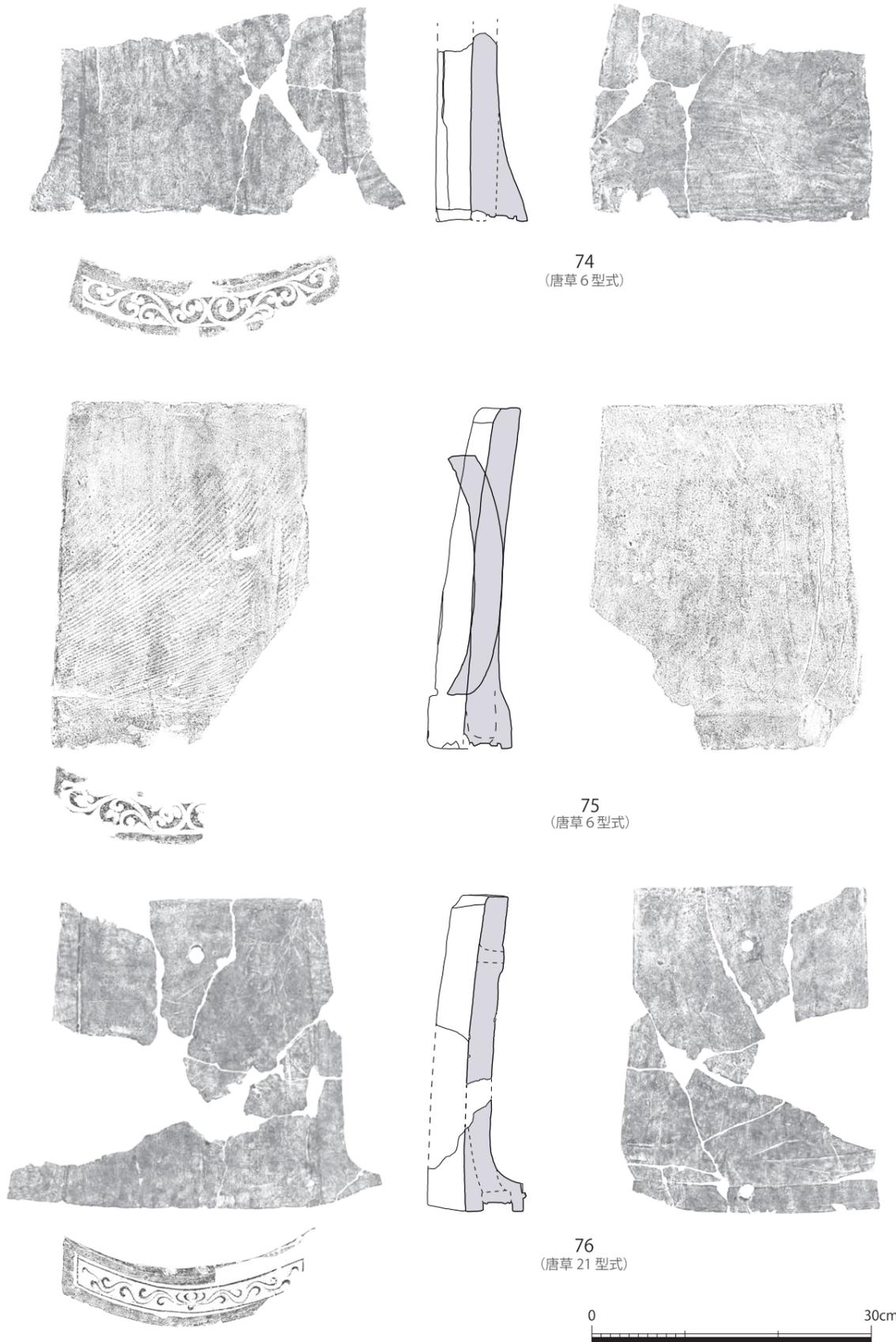


图 27 軒平瓦実測図 (1/6)

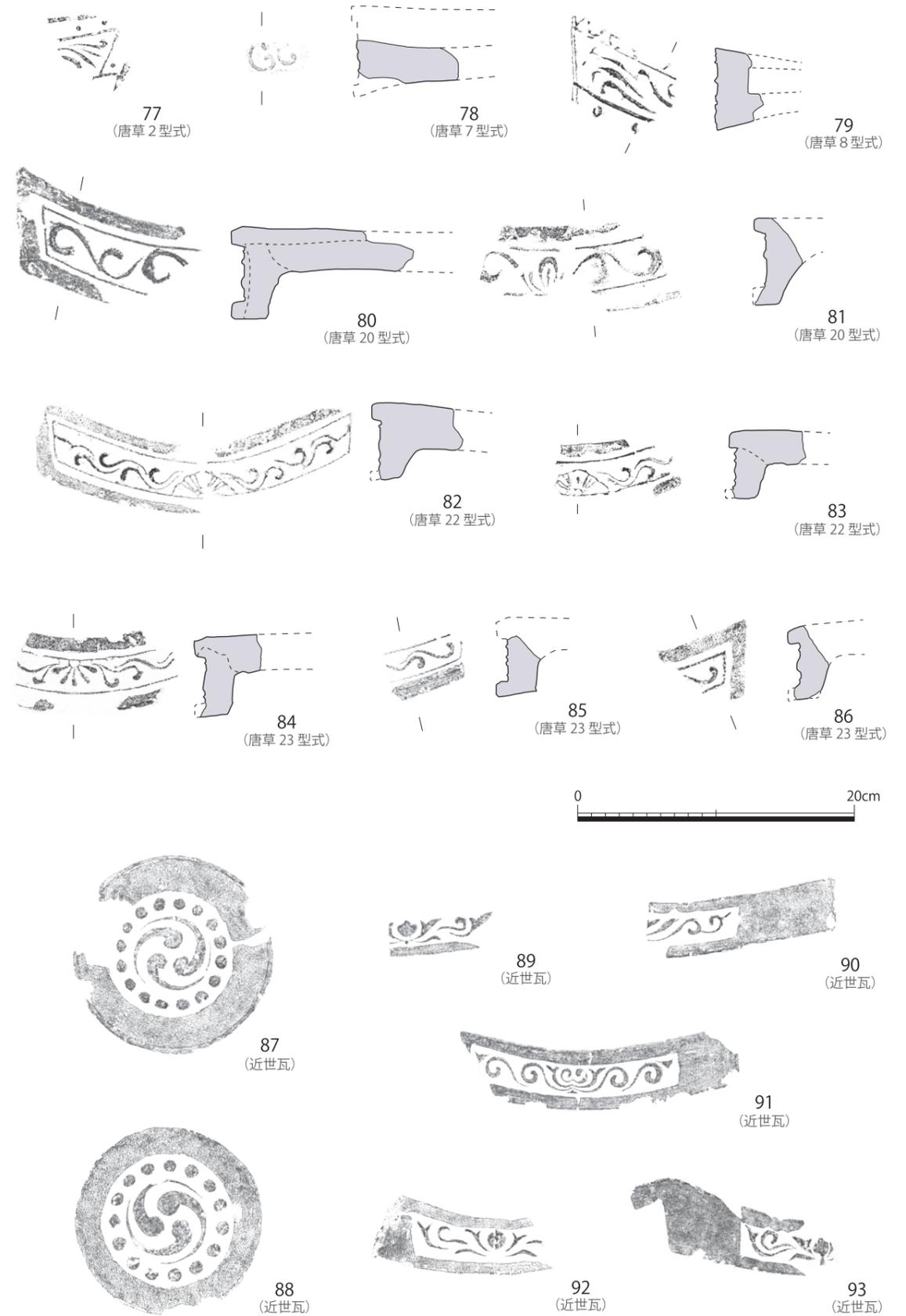


图 28 軒平瓦実測図 (1/4)

表6 軒平瓦の型式一覧

単位 (cm)

型式	拓本 (S=1/10)	瓦当断面 (S=1/5)	瓦当		顎	全長	狭端幅	重量 (kg)
			幅	厚さ				
無文1型式			(29.4)	1.5	直線	50.0	(24.4)	(3.9)
無文2型式				2.1	直線			
無文3型式				1.8	直線			
三重弧1型式			35.5	4.2	直線	43.4		(7.0)
三重弧2型式			(33.0)	3.5	直線	42.0	26.0	(7.0)
三重弧3型式			(31.5)	3.7	直線	40.3	(26.6)	(7.5)
			33.7	3.8	直線	43.4	30.0	(8.6)
三重弧4型式				3.5	直線			
三重弧5型式				3.5	直線			
三重弧6型式				3.8	直線			

単位 (cm)

型式	拓本 (S=1/10)	瓦当		内区		外区 文様	顎	全長	狭端幅	重量 (kg)
		幅	厚さ	中心飾り	唐草文					
唐草1型式		(29.0)		棒形+ 上巻唐草	3回 反転	三重 圏線	曲線1 曲線2	34.0	(27.0)	(4.0)
唐草2型式				棒形+ 上巻唐草	3回 反転		曲線1			
唐草3型式		28.5	5.5	棒形+ 上巻唐草	3回 反転		曲線1			
唐草4a型式		29.0	5~6.5	刺股形+ 上巻唐草	3回 反転		曲線1	40.0	24.0	(6.9)
唐草4b型式				刺股形+ 上巻唐草	3回 反転		曲線1			(6.8)
唐草5型式		28.2	5.7		2回 反転		曲線1 曲線2	37.8	25.3	5.6
唐草6型式		28.7	5.8		2回 反転		曲線1 曲線2	37.0	25.0	(5.5)
唐草7型式										
唐草8型式			6.6			上:線鋸 齒文 下:珠文				
唐草20型式		(28.8)	6.5	(3葉) 花文	3回 反転		段			
唐草21型式		26.7	6.2	(4葉) 花文	5回 反転		段	33.8	24.1	(4.4)
唐草22型式		(23.0)	4.5~ 5.3	半截 花文	5回 反転		段			
唐草23型式		(21.0)	5.4	半截 菊花文			段			

*唐草2型式の拓本は『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』76頁の図48-12(206A)を使用 * ()は復元した数値

3 丸瓦

■ **丸瓦の分類** 分類対象とした丸瓦は、おおむね半分以上が残存し、全長や幅など法量が判明する瓦、法量が判明しない小片だが特徴的なタタキ目や調整を施す瓦の総数 110 点である。

丸瓦には、行基丸瓦（無段式）、玉縁丸瓦（有段式）があり、どちらも成形には粘土板を用いている。分類は、まず模骨に粘土板を巻きつけて成形した行基丸瓦を丸瓦 I 群、同じ方法で成形した玉縁丸瓦を II 群に大別し、次に凸面に施したタタキ目、調整を基準として行った。分類基準は表 7 のとおりである。

なお、この分類基準は対応する瓦の検討のため、丸瓦と平瓦で統一して使用している。そのため、ここで報告しない分類もあることを断っておく。また、瓦の成形・調整技法については、引き続き表 3 のとおり使用する。

i 行基丸瓦

■ **丸瓦 I B1-a** 凸面に多角形タタキ目を施す一群で、タタキ目をナデ消す瓦。1 点のみ出土した。

写真 152・図 29-94 は狭端角の資料。凸面のタタキ目はほとんどナデ消してあり、狭端中央に重なり合ったタタキ目が残る。本来のタタキ目は不明。側面調整は c 手法。凹面は粗い布目で、粘土板の合わせ目 S がある右側面付近は縦ナデしている。狭端面、側面の凹面側を面取りする。厚さ 2.1cm。

■ **丸瓦 I C1-a** 凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、タタキ目をナデ消す瓦である。

写真 153・図 29-95 は狭端角を欠くが、ほぼ完形の資料。凸面は円弧を描くように縦縄タタキ目を施した後横にナデ消すが、ナデが甘く、タタキ目は全体的に薄く残っている。凹面は密の布目で、右側面付近に複数の指頭圧痕がある。側面調整は c 手法。側面の凸面側、凹面側を面取りする。全長 39.5cm、広端幅 19.1cm、厚さ 2.1cm、重量 3.3kg（復元）。

写真 154・図 29-96 は図 29-95 と調整が異なる例。凸面に施した縦縄タタキ目はほぼ完全にナデ消し、広端には工具によるナデ痕が凹凸をなして残っている。側面調整は c 手法で、狭端角は斜めにヘラケズリする。凹面には糸切り痕 DI、粗い布目がある。広端面、側面の凹面側を面取りする。全長 37.6cm、広端幅 19.5cm、厚さ 2.0cm、重量 2.2kg。

表 7 丸瓦・平瓦の分類記号と基準

記号	分類の基準
タタキ目の種類	
A	斜格子タタキ目
1	対角幅 0.4cm × 0.5cm の斜格子タタキ目
2	対角幅 1.2cm × 2.0cm の斜格子タタキ目
3	対角幅 3.6cm × 4.5cm と対角幅 1.2cm × 2.0cm の間に平行線 2 本で構成した斜格子タタキ目
B	多角形タタキ目
1	三角形と台形で構成するタタキ目
C	縄タタキ目
1	縦縄タタキ目
2	縦縄タタキ目で、離れ砂を用いる
3	縦縄タタキ目で、粉殻を用いる
D	タタキ目不明
凸面の調整	
a	ナデ
b	ナデでタタキ目を部分的に残す
c	調整しない

■ **丸瓦 I D-a1** 丸瓦 I D-a は凸面を丁寧にナデており、タタキ目が判明しない瓦。側面調整によって D-a1 と D-a2 に細分した。丸瓦 I D-a1 は側面調整が a 手法と b 手法の瓦で、砂粒の混入は極めて少なく、灰白の瓦が多い。

写真 155・図 29-97 は広端部の資料。凸面は丁寧にナデているが、やや角ばる。タタキ目は不明。広端付近には指頭圧痕が横並びで 12 か所ある。凹面には密の布目、広端には木目状の痕がある当て具の圧痕がある。側面調整は b 手法。側面の凹面側に面取りする。広端幅 18.5cm、厚さ 1.9cm。

写真 156・図 29-98 は全長が判明する資料。凸面は不定方向にナデてあり、タタキ目は不明。狭端付近に指頭圧痕が 2 か所ある。凹面は密の布目で、木目状の痕がある当て具の圧痕がある。側面調整は b 手法。側面の凹面側に面取りする。全長 43.0cm、広端幅 17.5cm(復元)厚さ 1.6cm、重量 1.8kg(復元)。

■ **丸瓦 I D-a2** 丸瓦 I D-a のうち、側面調整が c 手法の瓦である。

写真 157・図 29-99 は完形の資料。凸面は工具によって丁寧に横ナデしており、タタキ目は不明。側面は両面側から深くヘラケズリし、断面が剣先形になっている。凹面には糸切り痕 UI、密の布目があ

り、右側面付近に布筒の綴じ合わせ目がある。全長 41.2cm、広端幅 17.8cm、厚さ 1.9cm、重量 3.3kg。

ii 玉縁丸瓦

■ **丸瓦 II C1-a1** 丸瓦 II C1-a は凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、タタキ目をナデ消す瓦。玉縁部の形態から C1-a1、C1-a2、C1-a3 に細分した。丸瓦 II C1-a1 は玉縁の基部幅と端部幅の差が 2 cm 以下で、平面形状が長方形の玉縁をもつ瓦であり、玉縁凸面に横方向で凹帯の水切り溝を施す。

写真 158・図 30-100 は完形の資料。凸面は縦縄タタキ目を施した後、玉縁部、丸瓦部それぞれに工具で横にナデてタタキ目を消す。玉縁凸面にはほぼ中央に幅 0.5cm の水切り溝を施す。凹面は肩部でゆるやかに屈曲し、糸切り痕 UI + UI、玉縁から丸瓦まで一体の密の布目がある。右側面付近には粘土板の合わせ目 S がある。側面調整は c 手法。玉縁・丸瓦側面の凹面側を面取りする。全長 34.1cm、玉縁長 5.5cm、広端幅 15.3cm、厚さ 1.9cm、玉縁基部幅 11.1cm、玉縁端部幅 9.0cm、重量 1.7kg。

■ **丸瓦 II C1-a2** 丸瓦 II C1-a1 と同じく平面形状が長方形の玉縁をもつ瓦であるが、玉縁凸面に水切り溝を施さず、側面調整も異なることから a2 とした。

写真 159・図 30-101 は玉縁端部、広端角を欠くが法量が判明する資料。凸面は縦縄タタキ目を施した後、横ナデでおおむね消す。側面調整は b 手法。凹面は肩部でやや強く屈曲し、糸切り痕 Ur、玉縁から丸瓦まで一体の中の布目がある。面取りは玉縁端部、玉縁・丸瓦側面の凹面側、玉縁側面の凸面側に施す。全長 35.7cm、玉縁長 5.1cm、広端幅 14.5cm(復元)、厚さ 1.4cm、玉縁基部幅 9.4cm（復元）、玉縁端部幅 10.5cm（復元）、重量 2.0kg（復元）。

■ **丸瓦 II C1-a3** 丸瓦 II C1-a のうち、玉縁の基部幅と端部幅の差が 2 cm 以上で、先がすぼまる形の玉縁をもつ瓦である。

写真 160・図 30-102 は広端角を欠くが、法量が判明する資料。凸面は縦縄タタキを施した後、横にナデ消すが、丸瓦部のナデが甘く、タタキ目が薄く残っている。凹面は肩部でゆるやかに屈曲し、糸切り痕 Ur、玉縁から丸瓦まで一体の密の布目、吊り紐 B 型⁽¹⁾がある。吊り紐 B 型は丸瓦部のやや上方にあり、幅 0.8cm の紐を少しゆとりを持たせて弧状を描く形をしている。側面調整は c 手法。玉縁端面、玉

縁・丸瓦側面、広端面の凹面側、玉縁・丸瓦側面の凸面側に面取りする。全長 32.7cm、玉縁長 4.6cm、広端幅 15.5cm（復元）、厚さ 2.5cm、玉縁基部幅 11.7cm、玉縁端部幅 8.5cm、重量 2.7kg（復元）。

■ **丸瓦 II C1-b** 凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、ナデ調整を行うが、部分的にタタキ目を残す瓦。

写真 161・図 30-103 はほぼ完形の資料。凸面は縦縄タタキ目を施した後、玉縁部、丸瓦部それぞれ工具で横ナデするが、丸瓦肩部のタタキ目は調整せずに残っている。凹面には糸切り痕 Ur、玉縁から丸瓦まで一体の密の布目がある。側面調整は c 手法。玉縁端面、広端面、玉縁・丸瓦側面の凹面側に面取りする。全長 36.1cm、玉縁長 5.3cm、広端幅 15.2cm、厚さ 2.5cm、玉縁基部幅 12.0cm、玉縁端部幅 9.1cm、重量 2.9kg（復元）。

■ **丸瓦 II D-a1** 丸瓦 II D-a は凸面をナデて、タタキ目が判明しない瓦。玉縁部の形態で D-a1、D-a2 に細分した。丸瓦 II D-a1 は玉縁部の基部幅と端部幅の差が 2 cm 以下で、平面形状が長方形の玉縁をもつ瓦である。

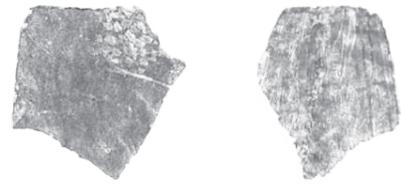
写真 162・図 30-104 は広端部を一部欠くが、法量が判明する資料。凸面はナデで、タタキ目は不明。凹面には中の布目、中央に布筒の綴じ合わせ目がある。側面調整は c 手法。玉縁・丸瓦側面の凹面側を面取りする。全長 36.5cm、玉縁長 6.4cm、広端幅 15.0cm、厚さ 1.3cm、玉縁基部幅 10.9cm、玉縁端部幅 10.1cm、重量 2.4kg（復元）。

■ **丸瓦 II D-a2** 丸瓦 II D-a のうち、玉縁部の基部幅と端部幅の差が 2 cm 以上で、先がすぼまる形の玉縁をもつ瓦である。

写真 163・図 30-105 は広端部を欠くが、法量が判明する資料。凸面は玉縁部、丸瓦部ともに丁寧にナデでタタキ目は不明。丸瓦部は一度ヘラケズリをしてからナデている。凹面は肩部でゆるやかに屈曲し、玉縁から丸瓦まで一体の密の布目がある。玉縁端部は布筒の絞り痕がある。側面調整は c 手法。面取りは玉縁端面、玉縁・丸瓦側面、広端面の凹凸面、肩部凸面側、肩部角に施し、玉縁端部の凹面側は 2 回面取りする。玉縁長 5.3cm、広端幅 14.2cm、厚さ 2.5cm、玉縁基部幅 11.2cm、玉縁端部幅 8.0cm。

[注：3 丸瓦]

(1) 小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」20 頁。



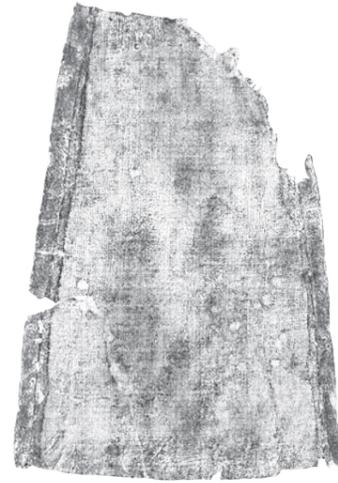
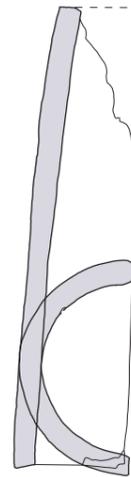
94 (丸瓦 I B1-a)



写真 152 丸瓦 I B1-a



(細部) 凸面の多角形タキ目とナデ



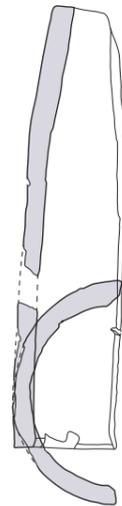
95 (丸瓦 I C1-a)



写真 153 丸瓦 I C1-a



(細部) 凸面の縄タキ目とナデ



96 (丸瓦 I C1-a)



写真 154 丸瓦 I C1-a



(細部) 凸面広端の横方向の強い工具痕



図 29 行基丸瓦実測図 (1/6)



97 (丸瓦 I D-a1)



写真 155 丸瓦 I D-a1



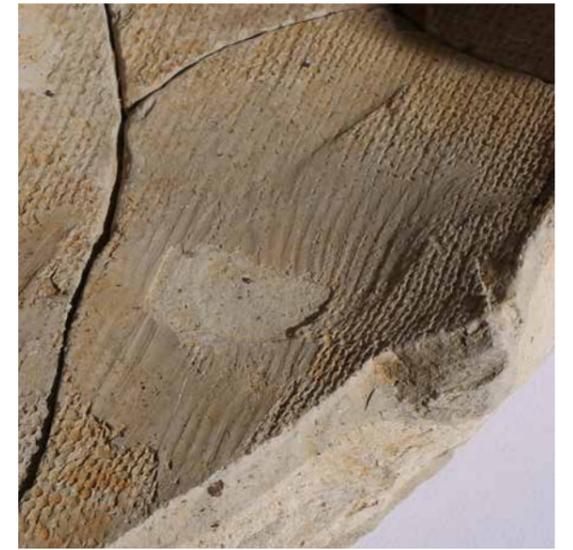
(細部) 凸面広端付近の指頭圧痕



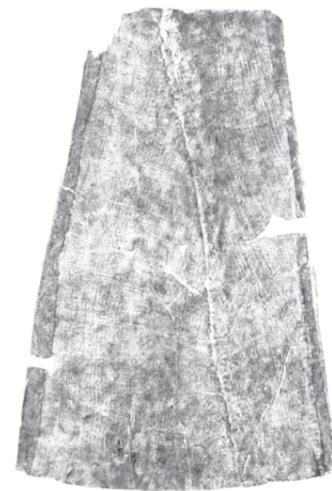
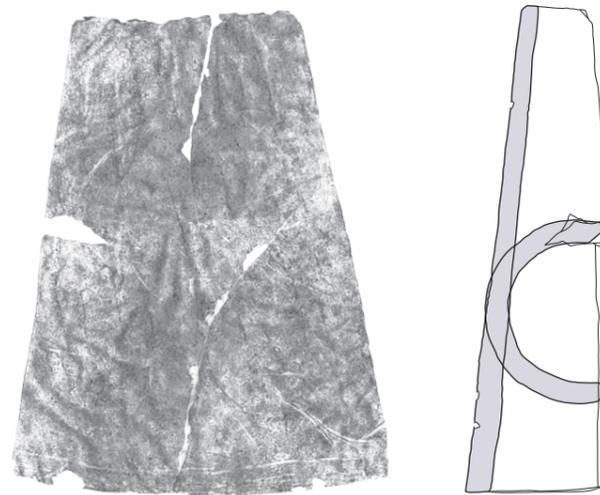
98 (丸瓦 I D-a1)



写真 156 丸瓦 I D-a1



(細部) 凹面の木目状の痕がある当て具の圧痕



99 (丸瓦 I D-a2)



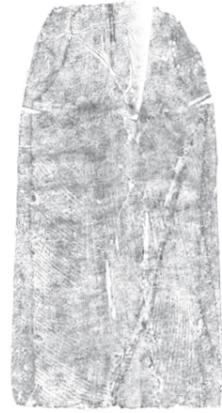
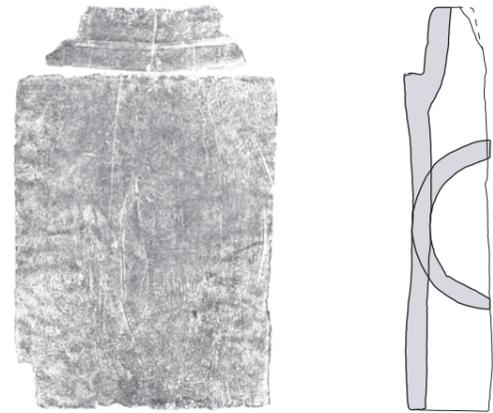
写真 157 丸瓦 I D-a2



(細部) 剣先形に深くヘラケズリした側面



図 29 行基丸瓦実測図 (1/6)



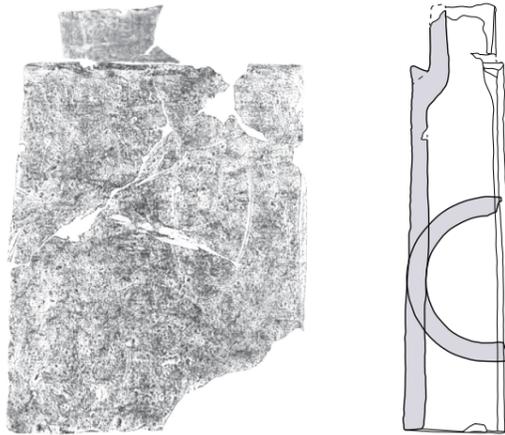
100 (丸瓦 II C1-a1)



写真 158 丸瓦 II C1-a1



(細部) 玉縁凸面の水切り溝



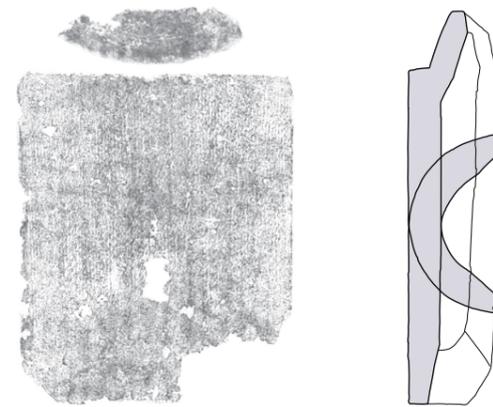
101 (丸瓦 II C1-a2)



写真 159 丸瓦 II C1-a2



(細部) 凸面肩部の強い屈曲



102 (丸瓦 II C1-a3)



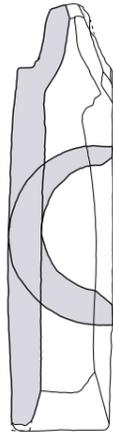
写真 160 丸瓦 II C1-a3



(細部) 凹面の吊り紐B型



図 30 玉縁丸瓦実測図 (1/6)



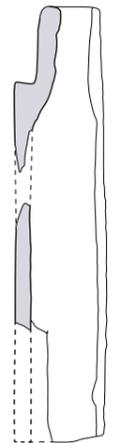
103 (丸瓦 II C1-b)



写真 161 丸瓦 II C1-b



(細部) 凸面の縄タタキ目を部分的に残すナデ



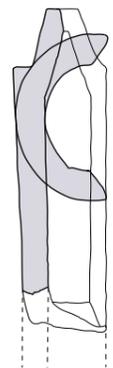
104 (丸瓦 II D-a1)



写真 162 丸瓦 II D-a1



(細部) 凹面の中の布目と布筒の綴じ合わせ目



105 (丸瓦 II D-a2)



写真 163 丸瓦 II D-a2



(細部) 凹面の密の布目



図 30 玉縁丸瓦実測図 (1/6)

4 平瓦

■ **平瓦の分類** 分析対象とした平瓦は、おおむね半分以上が残存し、全長や幅など法量が判明する瓦、法量が判明しない小片だが特徴的なタタキ目や調整を施す瓦の総数 64 点である。

平瓦には、桶巻き作り平瓦と一枚作り平瓦があり、どちらも成形には粘土板を用いている。分類は、まず粘土板桶巻き作り平瓦を I 群、粘土板一枚作り平瓦を II 群に大別し、次に丸瓦と同じく凸面のタタキ目、調整を基準として行った。分類基準については表 7、瓦の成形・調整技法については表 3 を引き続き使用する。

i 桶巻き作り平瓦

■ **平瓦 I A1-a** 凸面に対角幅 0.4cm × 0.5cm の細かい斜格子タタキ目を施す一群で、タタキ目をナデ消す瓦。2 点出土した。

写真 164・図 31-106 は側面を含む小片の資料。凸面には細かい斜格子タタキ目を横にナデるが、タタキ目はおおむね残っている。側面調整は a 手法で、面取りは施さない。凹面には幅 4.0cm 程度の側板痕跡、密の布目がある。厚さ 1.7cm。

■ **平瓦 I A2-b** 凸面に対角幅 1.2cm × 2.0cm の斜格子タタキ目を施す一群で、ナデ調整を行うが、部分的にタタキ目を残す瓦である。

写真 165・図 31-107 は狭端角の資料。凸面の狭端にタタキ目を残し、あとはナデ消している。凹面には側板痕跡、密の布目があり、狭端側の布目はナデで消えている。側面調整は c 手法。側面の凹面側、凸面側を面取りする。厚さ 2.6cm。

■ **平瓦 I B1-c** 凸面に多角形タタキ目を施す瓦である。

写真 166・図 31-108 は広端角の資料。凸面には三角形や台形で構成するタタキ目を施しており、タタキ目は部分的に重なり合う。平坦面を境にしてタタキ目は上下反転になっている。凹面には糸切り痕 Dr + Ul、側板痕跡、密の布目がある。右側縁付近には粘土板の合わせ目 S があり、合わせ目は縦にナデで整えている。側面調整は c 手法。広端面、側面の凹面側、側面の凸面側に面取りをする。厚さ 2.0cm。『飛鳥池遺跡発掘調査報告』の平瓦 7 類 A2 と似ているが、平瓦 I B1-c では線が斜交する箇所が多く、タタ

キ目がより複雑になっている。

■ **平瓦 I C1-a** 凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、タタキ目をナデ消す瓦である。

写真 167・図 31-109 は狭端角を斜めに切り落とす例。凸面は縦縄タタキ目を施した後、横にナデ消す。さらに乾燥によって変形した形を補正するために、タタキ板の角で再びタタキ目を施している。凹面には幅 3.7cm の側板痕跡、糸切り痕 Dl、密の布目がある。側面調整は c 手法。狭端面、広端面、側面の凹面側、側面の凸面側を面取りする。全長 36.5cm、広端幅 27.5cm、狭端幅 25.5cm、厚さ 1.5cm、重量 3.5kg。

写真 168・図 31-110 は狭端角を調整しない例。凸面は施した縦縄タタキ目を横にナデ消しているが、ナデが甘く、やや残っている。凹面には幅 3.1～4.2cm の側板痕跡、糸切り痕 Ur、密の布目、左側面際には分割界線がある。側面調整は c 手法。狭端面、側面の凹面側に面取りする。全長 41.2cm、広端幅 30.9cm (復元)、狭端幅 26.0cm (復元)、厚さ 2.2cm、重量 5.1kg (復元)。

■ **平瓦 I D-a1** 平瓦 I D-a は凸面はナデており、タタキ目が判明しない瓦。瓦の形態によって、D-a1、D-a2 に細分した。平瓦 I D-a1 は狭端幅と広端幅に 5cm 以上の差があり、平面形状が台形の瓦である。

写真 169・図 31-111 は広端角の資料。凸面は丁寧なナデており、タタキ目は判明しない。広端には指頭圧痕がほぼ等間隔に横並びで 6 か所ある。凹面には幅 4.0cm 前後の側板痕跡、密の布目、広端側には木目状の痕がある当て具の圧痕がある。側面調整は b 手法。側面の凹面側に面取りする。厚さ 2.4cm。

写真 170・図 31-112 は広端角を欠くが、法量が判明する資料。凸面は工具で横にナデており、タタキ目は不明。凹面には幅 5.1cm の側板痕跡、密の布目、広端には押圧がある。中心からやや右寄りに粘土板の合わせ目 S があり、合わせ目は縦ナデで整えている。側面調整は b 手法。側面の凹面側に面取りする。全長 45.5cm、広端幅 32.5cm (復元)、狭端幅 24.7cm、厚さ 2.2cm、重量 4.9kg (復元)。

■ **平瓦 I D-a2** 平瓦 I D-a のうち、狭端幅と広端幅の差が 3 cm 以下で、平面形状が長方形の瓦。

写真 171・図 31-113 は完形の資料。凸面は斜め方向にナデており、タタキ目は不明。凹面には糸切り痕 Ur + Ur、幅 3.3～4.7cm の側板痕跡、密の布目がある。中央に粘土の合わせ目 Z があり、合わせ目は縦ナデで整えている。側面調整は c 手法。側面

の凹面側、凸面側に面取りする。全長 42.1cm、広端幅 26.2cm、狭端幅 24.9cm、厚さ 2.0cm、重量 4.4kg。

ii 一枚作り平瓦

■ **平瓦 II A3-c** 凸面に対角幅 3.6cm × 4.5cm の大きい斜格子と対角幅 1.2cm × 2.0cm の小さな斜格子の間に平行線を組み合わせたタタキ目を施す一群で、タタキ目を調整しない瓦である。

写真 172・図 32-114 は広端角の小片の資料。凸面のタタキ目は重ならず、側面と平行に施している。凹面は丁寧にナデており、密の布目がわずかに確認できる。側面調整は c 手法。側面の凸面側はやや突出する。面取りは広端面、側面の凹面側に施す。厚さ 2.4cm。

■ **平瓦 II C1-c1** 平瓦 II C1-c は凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、タタキ目を調整しない瓦。側面調整によって C1-c1、C1-c2 に細分した。平瓦 II C1-c1 は側面調整が c 手法の瓦である。

写真 173・図 32-115 は広端角を欠くが、法量が判明する資料。凸面には縄の条密度が 10 条 /3cm の縦縄タタキ目を施す。凹面は糸切り痕 Dr、密の布目がある。側面調整は c 手法で、狭端面、広端面、側面の凹面側、側面の凸面側に面取りする。全長 38.1cm、広端幅 26.5cm (復元)、狭端幅 24.3cm、厚さ 2.3cm、重量 3.6kg (復元)。

■ **平瓦 II C1-c2** 平瓦 II C1-c1 と同じく c 手法であるが、凹面に続く布目が側面に残る瓦である。布目は狭端面、凸面にも残る場合がある。

写真 174・図 32-116 は狭端角を欠くが、法量が判明する資料。凸面には縄の条密度が 10 条 /3cm の縦縄タタキ目を施す。右側面付近には指頭圧痕があり、窪みには凹面と同じ布目を確認した。凹面には幅 4.6cm の側板痕跡、糸切り痕 Dr、粗の布目がある。布目は側面に続いており、凸型成形台から成形した粘土を外す時に、布ごと持ち上げたと思われる。側縁調整は c 手法。狭端面、広端面の凹面側に面取りする。全長 38.3cm、広端幅 27.7cm、狭端幅 24.5cm (復元)、厚さ 2.0cm、重量 3.6kg (復元)。

■ **平瓦 II C2-c** 凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、離れ砂を用いる瓦である。

写真 175・図 32-117 は完形の資料。凸面は縦縄タタキ目の上に 0.2～0.5cm の長石、チャート、石

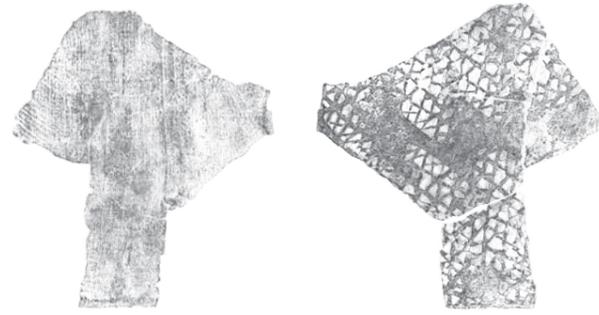
英の離れ砂が付着している。中央から右側には指痕が多数認められる。凹面には中の布目がある。側面調整は c 手法。狭端面、側面の凹面側、側面の凸面側を面取りする。全長 39.5cm、広端幅 27.3cm、狭端幅 22.3cm、厚さ 1.8cm、重量 4.0kg。

■ **平瓦 II C3-c** 凸面に縦縄タタキ目を施す一群で、粉殻を用いる瓦である。

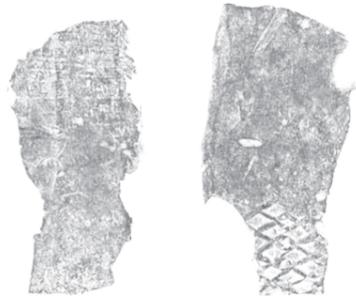
写真 176・図 32-118 は広端角の小片の資料。凸面は縦縄タタキ目の上から粉殻による圧痕がある。また、広端角には L 字の圧痕があり、凹型成形台を使用した可能性がある。凹面は粗の布目で、左側面付近は縦にナデている。側面調整は c 手法。広端面、側面の凹面側に面取りする。この瓦は凸型成形台で縄タタキ目を施した後、粉殻を撒いた凹型成形台に移し、凹面調整を行ったと考えられる。厚さ 2.1cm。



106 (平瓦 I A1-a)



108 (平瓦 I B1-c)



107 (平瓦 I A2-b)



109 (平瓦 I C1-a)



110 (平瓦 I C1-a)



写真 164 平瓦 I A1-a

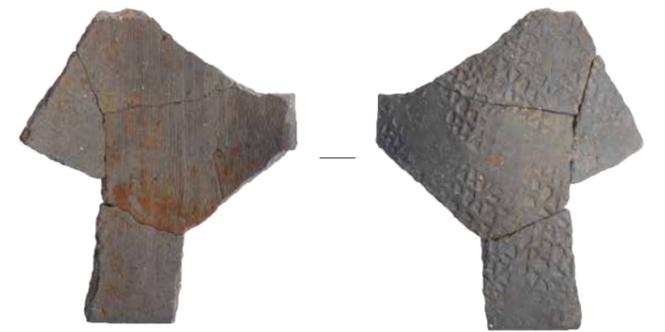


写真 166 平瓦 I B1-c



写真 165 平瓦 I A2-b



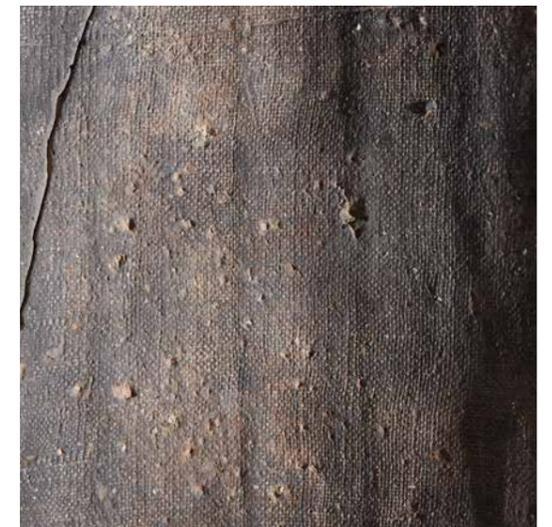
写真 167 平瓦 I C1-a



(細部) 狭端両側面角の切り落とし



写真 168 平瓦 I C1-a



(細部) 凹面の側板痕跡と密の布目

図 31 桶巻き作り平瓦実測図 (1/6)



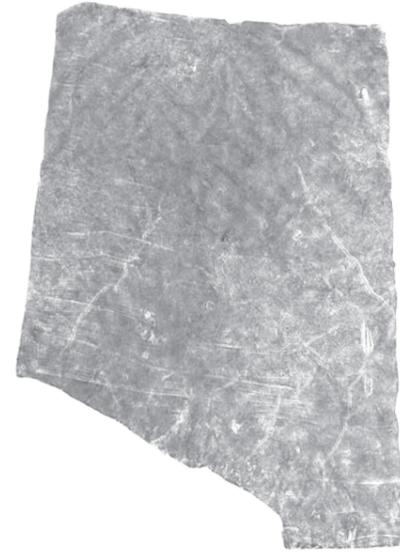
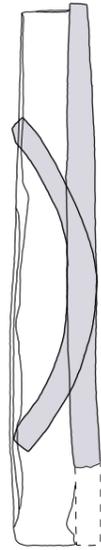
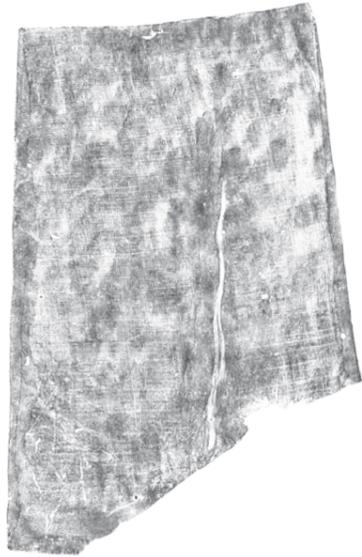
111 (平瓦 I D-a1)



写真 169 平瓦 I D-a1



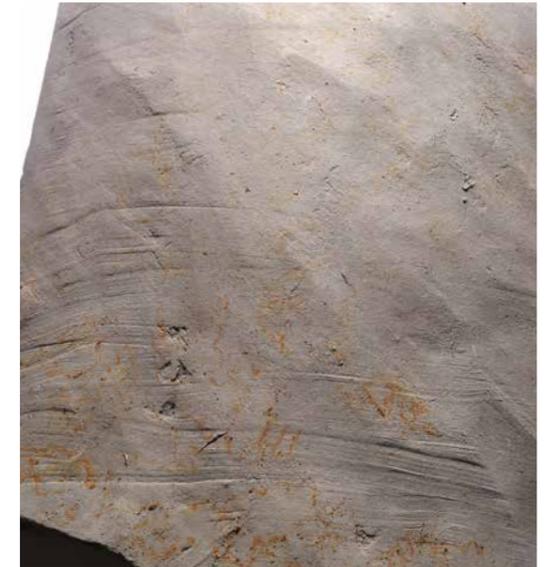
(細部) 凹面の木目状の痕がある当て具の圧痕



112 (平瓦 I D-a1)



写真 170 平瓦 I D-a1



(細部) 凸面の工具による横ナデ



113 (平瓦 I D-a2)



写真 171 平瓦 I D-a2



(細部) 凹面の糸切り痕と密の布目



図 31 桶巻き作り平瓦実測図 (1/6)



114 (平瓦II A3-c)



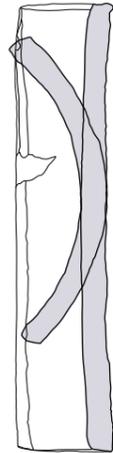
118 (平瓦II C3-c)



写真 172 平瓦II A3-c



写真 176 平瓦II C3-c



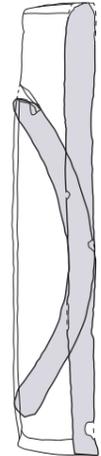
115 (平瓦II C1-c1)



写真 173 平瓦II C1-c1



(細部) 凸面の縄タキ目



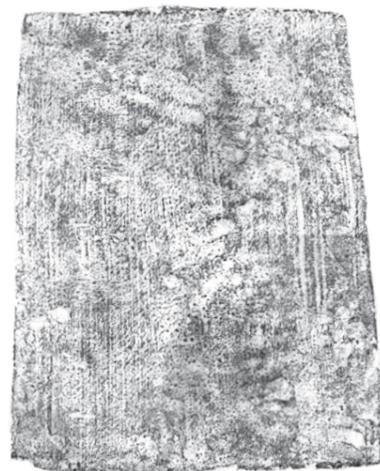
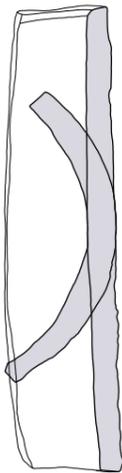
116 (平瓦II C1-c2)



写真 174 平瓦II C1-c2



(細部) 凹面から側面に続く布目



117 (平瓦II C2-c)



写真 175 平瓦II C2-c



(細部) 凸面の縄タキ目と離れ砂





(平瓦 I A1-a) 凸面の細かい斜格子タタキ目とナデ



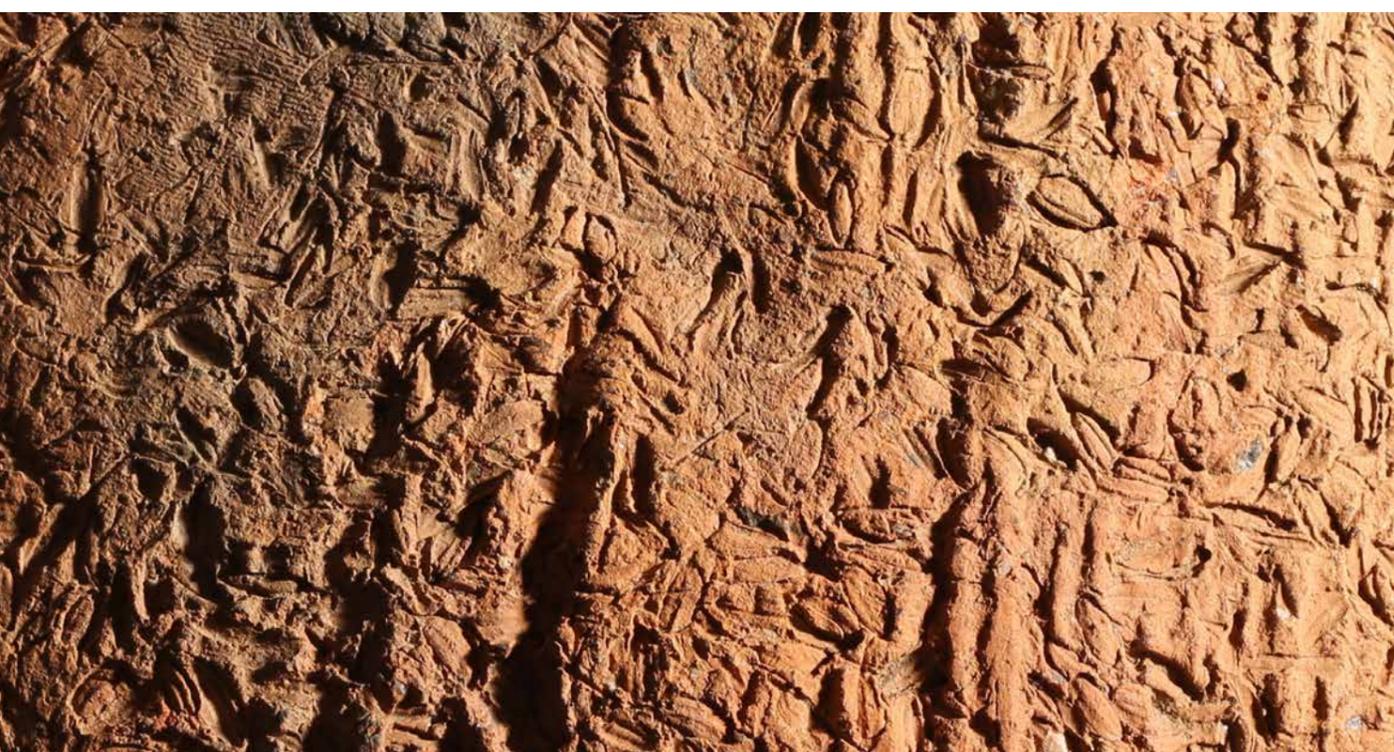
(平瓦 I A2-b) 凸面の斜格子タタキ目を残すナデ



(平瓦 I B1-c) 凸面の多角形タタキ目



(平瓦 II A3-c) 凸面の大小の斜格子と平行線のタタキ目



(平瓦 II C3-c) 凸面の縄タタキ目と刳殻の圧痕

写真 177 平瓦の細部

5 道具瓦

i 鴟尾

■ 鴟尾 第8次調査で破片2点が出土した。写真178・図34-119は1区の神社整備の造成土である2層、写真178・図34-120は第4次調査区再発掘時の埋戻し土からの出土である。

119は右側面の胴部から鱗部にかけての破片で、縦帯はなく胴部側が高い段によって鱗部と区画している。胴部は幅5.7cmの正段で、表面には段に平行するハケ目と段の上下に幅4～5mmのヘラによる沈線を引く。鱗部は根元で幅3.7cm、4.5cmと頂部側の段が幅広く、ヘラで正段を成形している。胴部と鱗部の段の位置は一致しない。裏面は剥離しており、現状の厚さは2.3cmである。

120は右側面の胴部の破片で、幅5.6cmの正段があり、丁寧なナデの後、上下に幅4～5mmの沈線を引いて段を際立たせている。裏面は剥離しており、現状の厚さは1.8cmである。この2点は、色調が黄灰色、焼成はやや軟質で同一個体の可能性が高い。百濟様式の鴟尾で7世紀前半の630年代の時期が考えられる。素弁4型式と胎土、焼成がよく似ている⁽¹⁾。



119



120

写真の大きさは実物のおよそ50%

写真 178 鴟尾

ii 鬼瓦

■ 鬼瓦の分類 鬼瓦は破片20点が出土した。出土した破片は小さいものが多いが、確認できた文様の特徴をもとに5種類に分類した。

表8 鬼瓦の分類と出土点数

分類	特徴	点数
A種	(蓮華文) 鬼瓦	1点
B種	平城宮式系鬼瓦	2点
C種	南都七大寺式系鬼瓦	6点
D種	珠文帯に竹管を使用する鬼瓦	6点
E種	毛・髭にヘラで線を加えた鬼瓦	1点
その他	分類できなかった鬼瓦	4点

■ 鬼瓦A種 写真179・図34-121は第8次調査1区の2層(神社整備の造成土)からの出土である。横16.3cm、縦10.9cmの破片で、地板の厚さは3.6cm。地板の上辺はアーチ状で、頂部の幅5cmは地板に沿い両端が内側に入る円弧状の凸帯がある。凸帯は下端の幅2.8cm、高さ1.4cmで、内側の傾斜とナデ調整の痕跡は単弁1型式の外縁と同じで、色調、胎土、焼成もよく似ている。凸帯内側の地板に文様はないが、破片の下端に肥厚する部分があり、中央には何かしらの施文の可能性がある。7世紀後半の蓮華文鬼瓦と考えられ、図33に示したように単弁1型式の文様のある鬼瓦として復元を試みた。

■ 鬼瓦B種 写真180・図34-122は2層(神社整備の造成土)からの出土で、第4次調査と第8次調査で出土したものが接合している。さらに、天理大学附属天理参考館に西安寺跡出土品として所蔵される鬼瓦と接合することを確認している⁽²⁾。

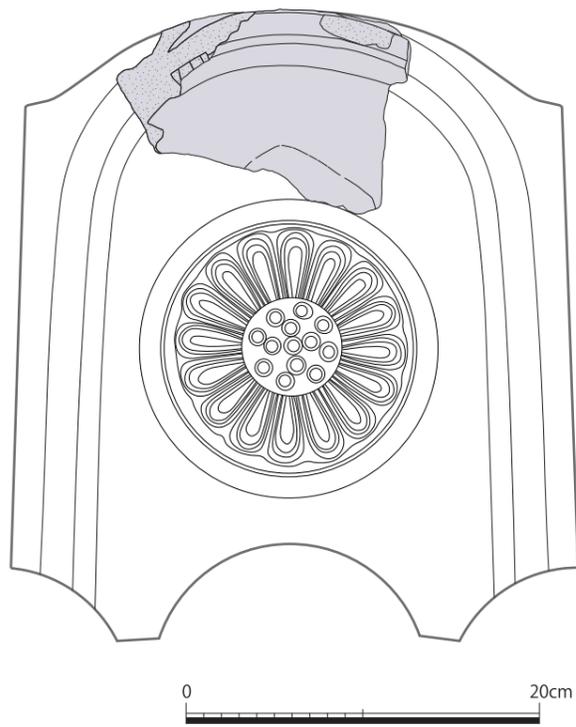


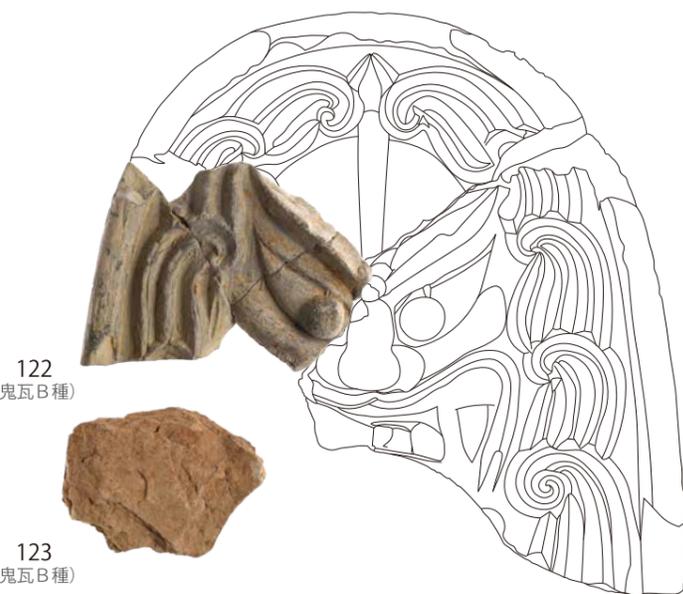
図33 A種蓮華文鬼瓦の復元案 (1/4)



地板に対して内側に入る凸帯

中央付近の肥厚とそれに沿うナデ調整

写真179 鬼瓦A種 (蓮華文鬼瓦)



図の大きさは約 1/4
下図は『大和王寺文化史論』掲載写真をトレースして作成



127 (鬼瓦C2種)



124 (鬼瓦C1種)



125 (鬼瓦C2種)



126 (鬼瓦C2種)



128 (鬼瓦D1種)

天理参考館に所蔵される鬼瓦の左眼の剥離部分に出土した破片がはまり込むものである。全体を縦32.8cm、横は最大33.5cmに復元できる。アーチ状の地板に鬼面を表現しており、眉毛と目が吊り上がり、円形の瞳を目頭に配している。髭は下から上へと巻き上げ、側縁には素縁の凸帯がめぐる。

天理参考館の所蔵品も合わせて見れば、鬼面の眉間に釘穴がある。額全体に瘤が広がり、とくに中央で縦方向に盛り上がる筋状のものが鼻筋に連なる。大きく開いた口には牙と上歯が表現され、上歯の下方で削形になっていることがわかる。口端にしわを寄せないこと、口辺に複数の巻毛を配していることから平城宮式鬼瓦VI式に相当する。胎土に砂粒は含まず、色調は灰色、焼成は良好である。

写真180・図34-123は第6次調査1区の1層(表土)からの出土で、左側の基底部付近の破片である。削形、側面、裏面が部分的に残存する。表面は粘土塊の接合部分で剥離しており、剥離面には押圧の痕跡が残る。側面、裏面はナデ、色調は灰色で焼成は良好である。胎土、色調、焼成、粘土塊の単位で剥離する状況から122と同一個体の可能性が高い。

■鬼瓦C1種 南都七大寺式系であるC種には2種類の鬼面が確認できたので、C1種とC2種に分けた。C1種は3点の破片が出土した。写真180・図34-124は1層(表土)からの出土で、アーチ状の地板に凸線で区画した珠文帯と三角形の眉毛のある破片である。天理大学附属天理参考館に西安寺跡出土として所蔵される鬼瓦に同じ特徴をもつものがあり、南都七大寺式鬼瓦のV式Aの系統を引くものである。珠文帯の幅は2.3cmで、直径0.7cm、高さ0.2cmの小ぶりの珠文が1.2cm前後の間隔で並ぶ。珠文の上部に範傷の凸線があり、天理参考館所蔵品と同範と考えられる。色調は赤褐色で、焼成は良好である。また、他の2点は、削形が部分的に残るものと左眉部分の破片で、色調と焼成は124と同じである。

■鬼瓦C2種 写真180・図34-125~127。製作には木製範型が使用されており、表面に木目状の範傷がある。地板はアーチ状で厚さは3.2cm。外縁はなく、幅3.1~3.6cmの珠文帯を凸線で区画する。眉毛の形状は外側に吊り上がり、上辺は波形となっている。破片3点が出土し、3点とも同じ部位の破片であるため、3個体の鬼瓦が出土したことになる。

125は塔廢絶後の造成土である3層と水成堆積



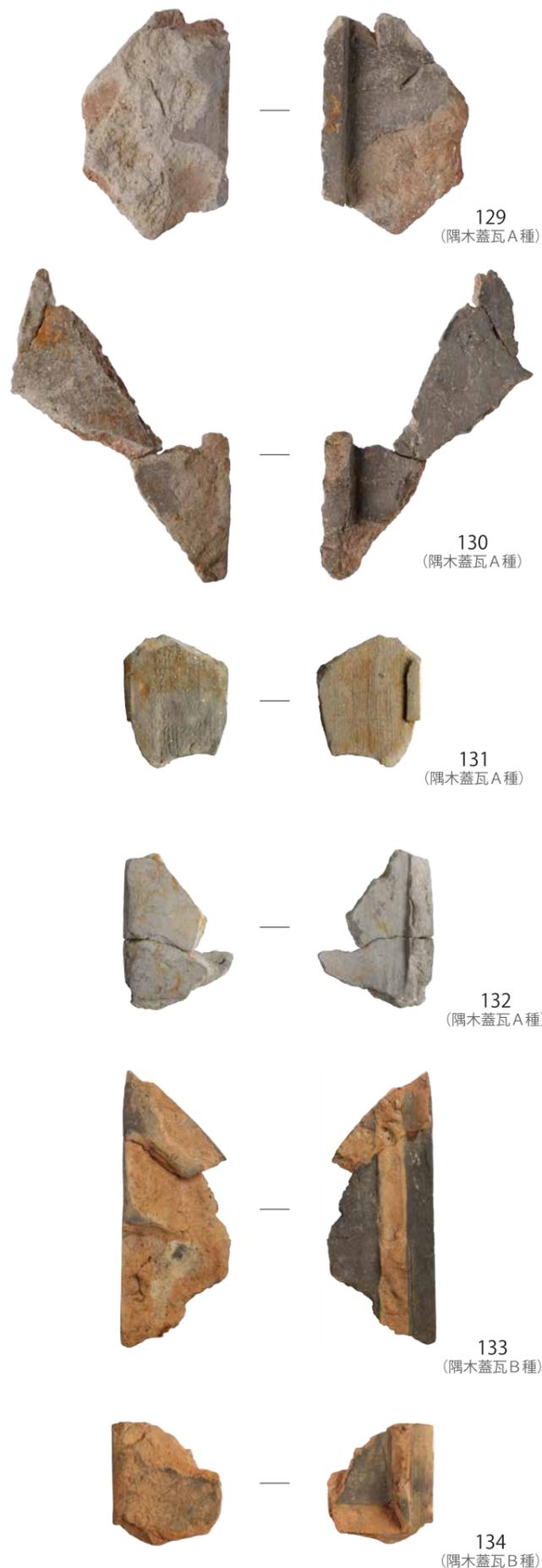
(D1) 半球状の珠文 (D2) 押し形の珠文 (E) ヘラ書きのうねり
写真181 鬼瓦D種・E種

砂層である6層上面の土坑5から出土した破片が接合したもので、珠文に手を加えて方形となったものがあり、眼が高さ3.8cmと突出している。126は金堂南面の1層(表土)、127は金堂北面の1層から出土した。127は、額の瘤を中央と左側に分割して表現しており、欠損する右側にも瘤があるだろう。珠文の大きさは直径1.7cm、裏面には縦方向の把手が付く。同じ範型からつくられた3点だが、125は赤褐色で焼成は良好、126・127は表面が黒褐色で焼成は軟質という違いがある。南都七大寺式鬼瓦の系統を引いており、その系統の鬼瓦は8世紀末から平安時代末まで使用されている。

■鬼瓦D1種 珠文帯に竹管を使用するD種には、珠文の表現方法の違いから2種類が確認できたので、D1種とD2種に分けた。D1種は、珠文帯をへら書きの沈線で区画し、竹管の内側に半球状の珠文を配した鬼瓦で、破片5点が出土している。図34-128は右上部が残存し、地板の厚さは3.6cm。鬼面の造形は剥離して不明である。珠文帯の幅は3.3~3.5cmで、珠文は直径2.0cm、高さ0.6cm、竹管径2.6cmである。また、写真181(D1)に示したように、珠文の大きさ、形状は128と同じで、珠文帯の内側がへら書きの沈線、外側が幅1.4cmの内傾する外縁で区画するものも出土している。

■鬼瓦D2種 写真181(D2)。珠文帯をへら書きの沈線で区画し、竹管の押し形で珠文を表現する鬼瓦である。竹管の直径は2.4cm。小片1点が出土するだけで部位は不明だが、穿孔と珠文帯を区画するへら書きとは別の線刻がある。色調は黒色、焼成は軟質で、胎土に含まれる砂粒が少ない点は図34-128に似ている。

■鬼瓦E種 写真181(E)。髭か毛のいずれかひと房の破片で、うねりの表現にへら書きの沈線を用いるものである。第4次調査で金堂基壇上の2層(神社整備の造成土)から出土した。色調は暗灰色で焼成は堅緻である。へら書きの沈線でうねりを表現する特徴が現れるのは、鎌倉時代以降である。



写真の大きさはすべて実物のおよそ 16.7%

写真 182 隅木蓋瓦A種・B種

iii 雁振瓦

■ 雁振瓦 8点が出土している。1点が塔基壇上に堆積する炭・焼土の4層からの出土で、その他は表土の1層と神社整備の造成土である2層からの出土である。山形の平瓦部と玉縁部の接合部分が残存するだけで、全体の形状は不明である。鳥衾の狭端部分である可能性もある。

iv 隅木蓋瓦

■ 隅木蓋瓦の分類 22点の破片が出土し、2種類5個体を確認した。蓋板の下面の先端と両側縁に凸帯を設けるものをA種、蓋板の下面の内側に凸帯を設けるものをB種とした。

■ 隅木蓋瓦A種 第7次調査で金堂廃絶に伴う堆積である7層から出土した。図35-129・130は蓋板の上面は平坦で、裏面の先端と両側に幅・高さともに2.0cmの凸帯を設け、掛かりとしている。側面に装飾はなく、表面に砂粒の移動が残るケズリを行っている。129には茅負を避けるため、斜めに切断する部分が残存する。130には隅木に固定する釘穴があり、そこを中心として復元すると幅25.5cm、内法は約21.8cmとなり、隅木の幅を約21cm前後に考えることができる。奈良時代後半のものと考えられ、破片すべての色調は黄灰色で、胎土も同じである。焼成もすべて良好で、同時期に製作されたものだろう。

図35-131は第7次調査の水田耕土下層から出土した。厚さ1.3cmの蓋板が残存する。凸面は縄タタキ、ナデを施し、凹面には密度が中の布目がある。側縁の凸帯は幅1.4cm、高さ1.5cm。色調は黄褐色で、焼成は良好である。

図35-132は第9次調査2区の水田耕土下層から出土した。厚さ2.6cmの蓋板が残存し、表面はナデで調整している。凸帯幅は2.4cmで、凸帯の立ち上がり部分に強めのナデを施している。色調は灰色で、焼成は硬質である。

■ 隅木蓋瓦B種 図35-133は第7次調査で2層から出土したものと、第10次調査2区で1層から出土したものが接合した。厚さ2.6cmの蓋板と茅負側の斜めに切断する部分が残存している。蓋板の下面の凸帯の幅は2.8cm、凸帯から蓋板端までは2.6cmある。表面は縦方向のナデで仕上げ、凸帯は



写真 183 博

強めのナデで窪みをつくり接合させている。

図35-134は第9次調査3区の排土から採集したもの。先端角の部分が残存している。先端部分の凸帯は幅2.7cm、側面の凸帯は幅2.0cm。凸帯は接合面で剥離しており、剥離面には細かい砂粒が付着している。これら2点の胎土は砂粒を多く含まず、表面が黒褐色で内面が赤褐色を呈して焼成が軟質であるところが唐草21型式と共通している。

v 博

■ 博 38点の破片が出土した。図35-135は第7次調査の塔の北面、金堂廃絶に伴う堆積層である7層から出土した。平面形は長方形で幅25.5cm、厚さ5.9cm、長さ42.6cmが残存している。表面はほとんどが摩滅しており、線刻、装飾は認められない。色調は灰白色、焼成は良好である。図35-136には135度の角度をもつ角があり、八角形の博と推定できる。厚さ5.1cm。橙褐色で焼成は良好である。

その他の破片はいずれも小片で、厚さのわかる33点で計測した結果を記しておく、厚さ5.5～5.7cmのものが18点、厚さ4.0～4.3cmと薄いものが4点、135を含む厚さ5.9～6.1cmのものは3点であった。最も厚いものは6.4cmで、1点あった。

vi 線刻・刻印瓦

■ 線刻瓦の種類 第3次から第11次までの調査で出土した瓦のなかには、文字や記号、戯画をヘラ書きしたもの、刻印するものがあった。ヘラ書きに



写真の大きさは実物のおよそ 25%

136

は文字6点、記号19点、画1点、内容は不明だが意図的な線刻と判断できるもの94点があり、刻印には7種14点がある。そのなかから明確なものを拓本で示して説明しておく。

■ ヘラ書きの文字瓦 写真184・図36-137・138は「大」をヘラ書きする。2点が出土しており、ともに無文1型式軒平瓦の凸面狭端側に記してある。137は中央左寄り、138は右側にあり、書き順は「一」、「ナ」、「大」である。137(図27-50)の瓦当面の幅は29.4cm、全長は50.0cmあり、大きな瓦という意味での「大」であろうか。第11次調査で金堂北面の塔廃絶後の造成土である3層からの出土。138は第8次調査1区で金堂北面の神社整備の造成土である2層から出土した。

写真184・図36-139は「壹」をヘラ書きする。丸瓦I C1-aの凸面狭端側にある。塔基壇上の2層から出土した。

写真184・図36-140は「田^(沙カ)□□尔丁」をヘラ書きする。平瓦I D-a2の凸面にある。第9次調査2区の水田耕土下層から出土した。

■ ヘラ書きの記号瓦 写真184・図36-141は「×」をヘラ書きする。14点が出土している。行基丸瓦4点、桶巻作り平瓦9点にあり、いずれも凸面に記すが、出土した破片が小さいため、それ以上位置が特定できない。

■ ヘラ書きの戯画瓦 写真184・図36-142は平瓦I C1-aの凸面に曲線をヘラ書きしたもので、形状から宝珠を表現しているのではないかと推測する。第4次調査で金堂基壇上の2層から1点出土した。

■ 菊花文の刻印瓦 菊花文の刻印には大きいものと小さいものがある。写真184・図36-143-147

は小さい菊花文で、いずれも玉縁丸瓦の肩部上面に刻印している。143は第4次調査の金堂基壇上の神社整備の造成土である2層、144は第11調査の金堂北面の1層から出土したもので、II C1-a3に分類できる玉縁丸瓦に11弁の菊花文を刻印している。146・147は第4次調査の金堂基壇上の2層からの出土で、10弁の菊花文が146には中央に1つ、147には左右に2つの刻印がある。145も第4次調査の金堂基壇上の2層からの出土で、丸瓦II D-a2に刻印するが、欠損により菊花文の弁数は不明である。

写真184・図36-148は大きい菊花文で、第9次調査3区の1層から出土した。玉縁丸瓦の肩部下に刻印がある。直径2.9cmの菊花文で、半分が欠損しており弁数は不明である。

写真184・図36-149-152は「△」を一枚作り平瓦の広端面に刻印する。4点出土している。149は第10次調査2区の塔基壇の炭・焼土の4層、150-152は第7次調査の2層から出土した。151・152には「△」の底辺側に半円形の平坦な部分があるが、刻印なのかどうかははっきりとしない。刻印する平瓦は、凸面に繊維束痕の残るナデがあり、凹面広端側に面取りのある室町時代のものである。

写真184・図36-153は「囧」を一枚作り平瓦の広端面に刻印する。第8次調査の金堂基壇上の塔廃絶後の造成土である3層から出土した。

写真184・図36-154は「𠃉」を一枚作り平瓦の広端面に刻印する。第7次調査の塔基壇東面の1層から出土した。

写真184・図36-155・156は「人」字形を一枚作り平瓦の広端面に刻印する。155は第7次調査の2層、156は第8次調査1区の金堂基壇上の3層から出土した。

[注：5 道具瓦]

- (1) 以上の記述は、大脇潔「鴟尾の変遷」に示される鴟尾各部の名称に従った。
- (2) 接合するのを確認したのは、『古代の鬼瓦—日本と朝鮮半島—』に29番に掲載されるもので、木村捷三郎「王寺出土の古瓦」229頁のとおり、元は保井芳太郎のコレクションである。



(137) 「大」



(138) 「大」



(139) 「壺」

写真184 線刻瓦



(140) 「田^(9カ)口尔丁」



(141) 「×」



(142) 宝珠?



(143-148) 菊花文



(153) 「囧」刻印



(149-152) 「△」刻印

(154) 「𠃉」刻印



(145・156) 「人」字形刻印

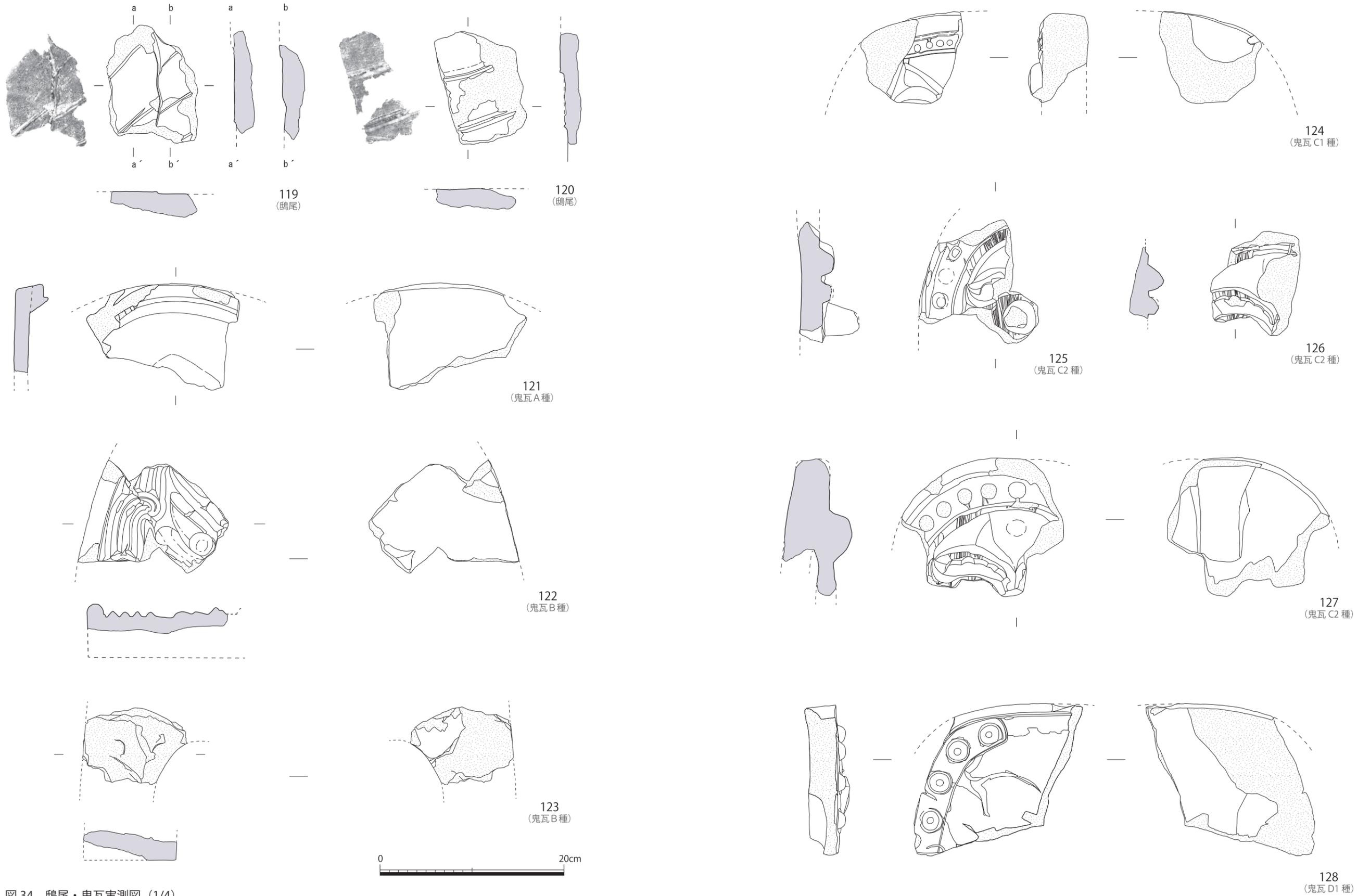


图 34 鴟尾・鬼瓦実測図 (1/4)

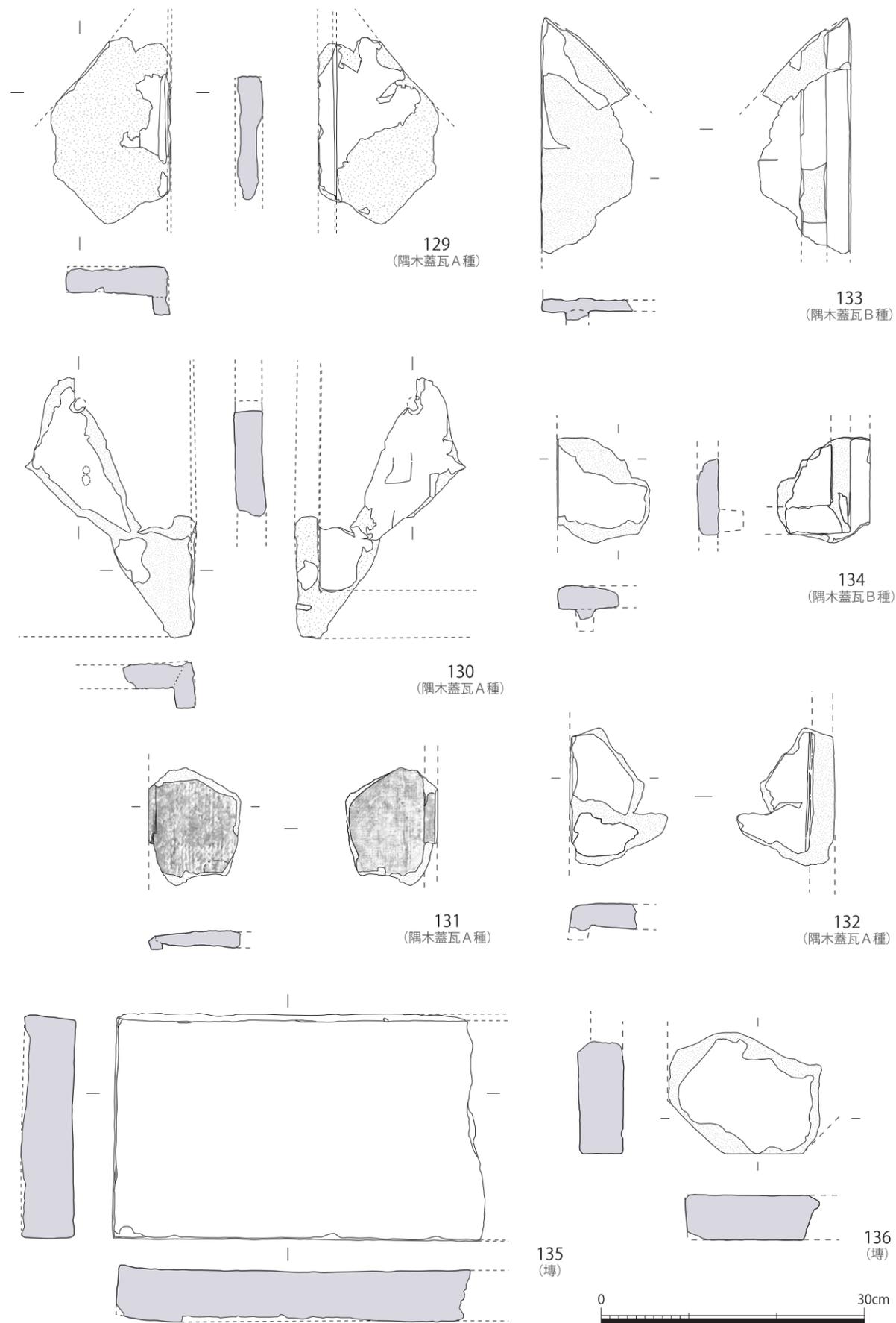


図35 隅木蓋瓦・埴実測図 (1/6)

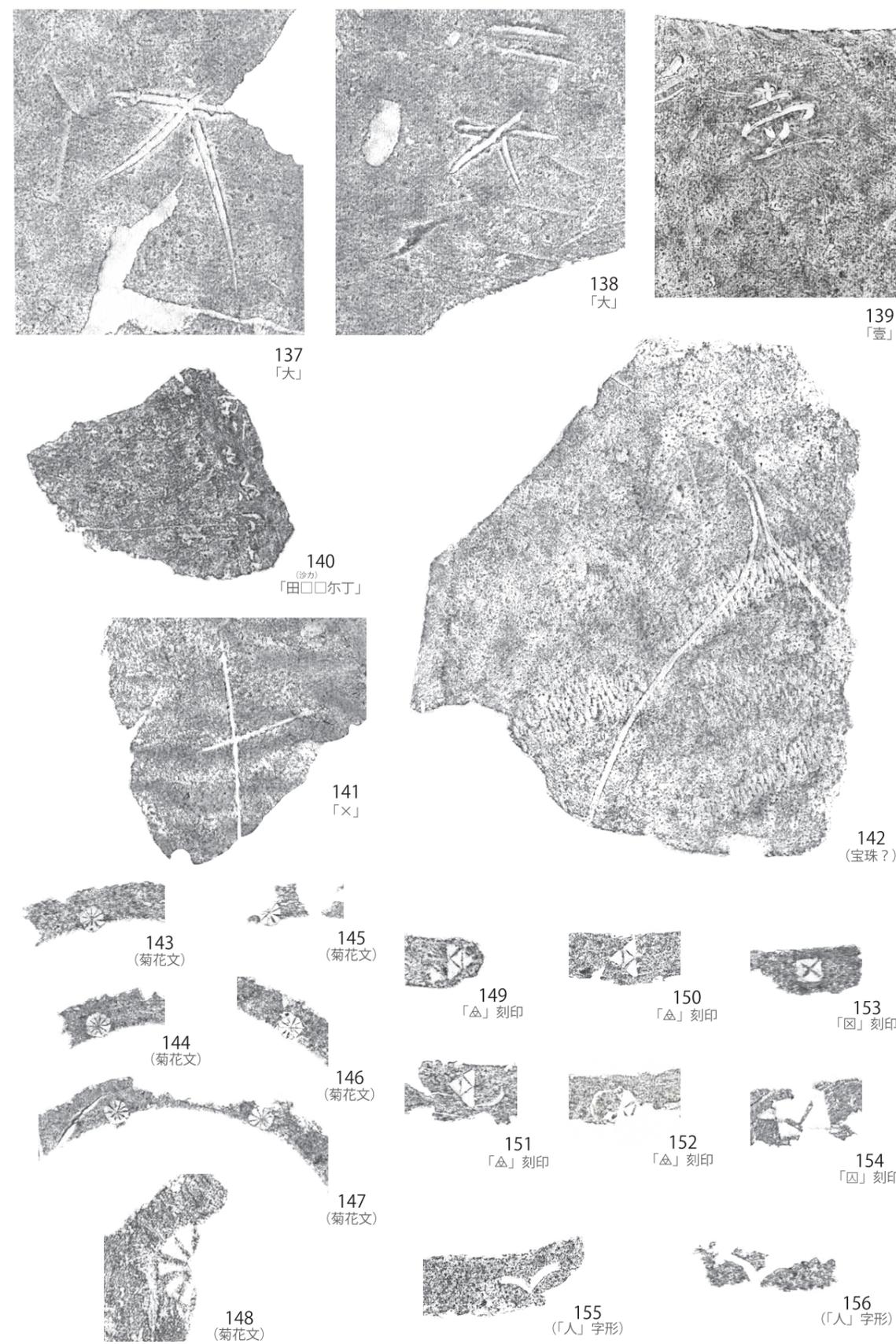


図36 線刻・刻印瓦拓本 (およそ 1/2)

6 土器

■ **出土土器** 西安寺跡の調査では、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、青磁、緑釉・灰釉陶器が出土した。コンテナにして14箱である。小片となったものがほとんどで、細かい年代を押さえられるものが少ない。それらのなかから、西安寺の創建から廃絶に至る変遷を考えるうえで重要な土器を出土位置、層位別に報告する。なお、土器の年代に関する参考文献は、第7章に記している。

i 塔・金堂周辺出土

■ **4層出土** 写真185・図37-157~165。4層は塔の基壇上から南面に堆積する炭・焼土で、瓦、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器が出土している。4層は第3次、第7次、第10次調査2区で検出しており、第3次、第7次調査では4層の土をすべてふるいにかけて水洗浄し、遺物の回収に努めた。

157~161は土師器皿。157は口径6.7cm、器高1.6cmに復元できる。丸味を帯びた器形で体部外面に段があり、口縁端部は内側に肥厚する。精製した胎土で色調はにぶい黄橙色。13世紀末頃のものである。158は全体の1/4程度が残る。口径7.5cm(復元)、器高1.1cm。精製された胎土はにぶい黄橙色で、13世紀中頃のもの。159は口縁がやや外反するもので、口径9.7cm、器高1.6cmに復元できる。色調は明赤褐色で、14世紀中頃のもの。160は約1/4の残存で、口径9.8cm、器高2.0cmに復元できる。わずかに砂粒を含み、色調は橙色。14世紀前半のもの。161は口縁部が外反し、ナデにより稜線がある。精製した胎土は橙色。14世紀前半~中頃のもの。162は土釜である。大和H型の口縁部で、口縁部の形状から14世紀頃のものか。163・164は瓦器碗で、底部だけが残存する。163は三角の貼り付け高台の形状から12世紀後葉~13世紀終末、164は見込みの暗文、扁平な貼り付け高台から13世紀後葉~14世紀前葉のものと考えられる。165は小型の瓦器碗である。

■ **5層出土** 写真186・図37-166~168。5層は塔の修理に伴う整地土層で塔の南面に堆積する。第10次調査2区で検出した。塔の北面と東面が水成堆積砂層である6層によって埋没したため、基壇外周の高さをそろえるために整地している。

166は平底で体部の立ち上がりに段のある土師器皿である。口径9.2cm、器高1.1cmに復元でき、色調は橙色で精製した胎土である。13世紀中頃~末のもの。167・168は、内面に間隔の粗い渦巻き状の暗文のある瓦器碗で、どちらも色調は灰白色。167の口縁端部は外反し、内面には沈線がめぐる。168の体部には押捺痕があり、小さな貼り付け高台で底部が突出する。13世紀後半~14世紀前葉のもの。

■ **6層出土** 写真187・図37-169~171。6層は塔と金堂の間、塔の東面に堆積する洪水による砂層で、金堂廃絶に伴う7層が堆積した後、時間を空けずに堆積している。第7次、第8次1区、第9次調査3区で検出した。

169・170は土師器皿である。169は口径6.8cm(復元)、器高1.3cm。精製した胎土ではあるが、1mm程度の長石を含む。色調は鈍い黄橙色で、12世紀末~13世紀代のもの。170は口径8.8cm(復元)、器高1.8cmで、口縁は外反し、その下に段がある。精製した胎土で、色調は橙色。13世紀末~14世紀前半のもの。171は須恵器の壺底部と考えられるが、器面全体が水流による摩滅を受けている。

■ **7層出土** 写真188、図37-172~178。7層は金堂廃絶に伴って屋根からすべり落ちた瓦を包含する粘土層で、塔と金堂の間から塔東面にかけて堆積する。第7次、第8次1区、第9次調査3区で検出した。

172は土師器皿で、口径10.0cm、器高1.0cmに復元できる。厚さは3mmと薄く、口縁が外反する。色調は灰白色で、11世紀後葉のもの。173は須恵器杯蓋の宝珠つまみで、174は灰釉陶器の壺頸部である。175・176は黒色土器の碗底部で、2点とも摩滅が激しくミガキが確認できないが、内黒で畿内系Ⅱ、Ⅲ類の底部と考えられ、9~10世紀代のものであろう。177・178は瓦器碗の底部。177は断面形が三角形の高台であり、川越編年ⅢAに当たる12世紀後葉~13世紀中葉のもの。178は内面見込みに暗文があり、高台は扁平で、川越編年ⅢC~3Eの13世紀後葉~14世紀前葉の時期に当たる。

■ **8層出土** 写真189・図37-179・180。8層は南回廊の雨落溝が埋没した後の堆積層で、第10次調査2区で検出した。179は口径8.5cm、器高1.4cmに復元できる。体部は屈曲し、口縁端部は



写真185 4層出土土器

写真186 5層出土土



写真187 6層出土土器



写真188 7層出土土器

157及び169~173の写真の大きさは任意、その他は実物のおよそ50%

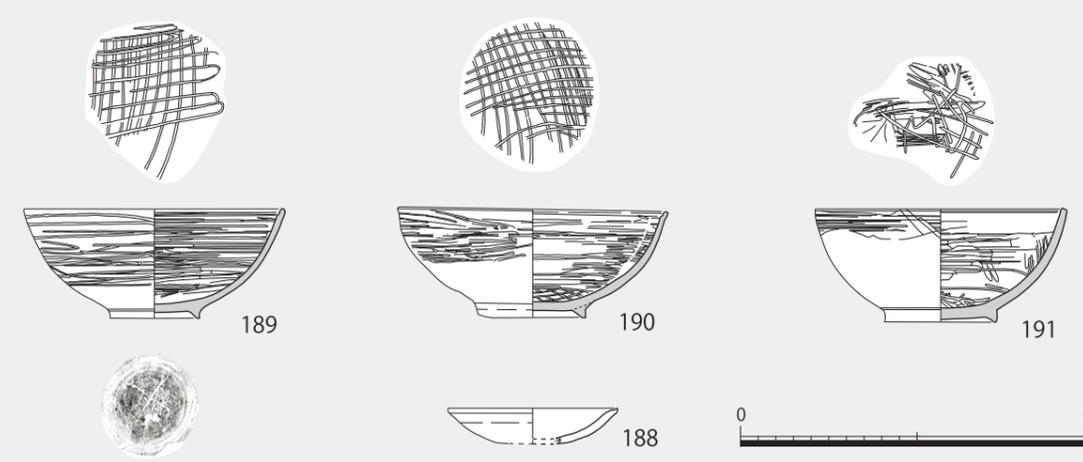
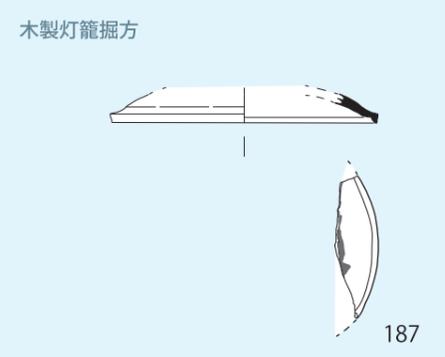
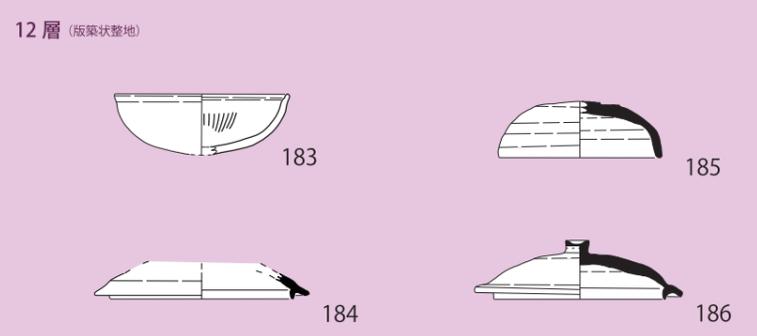
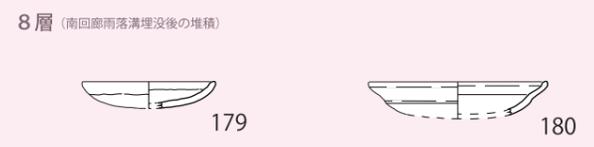
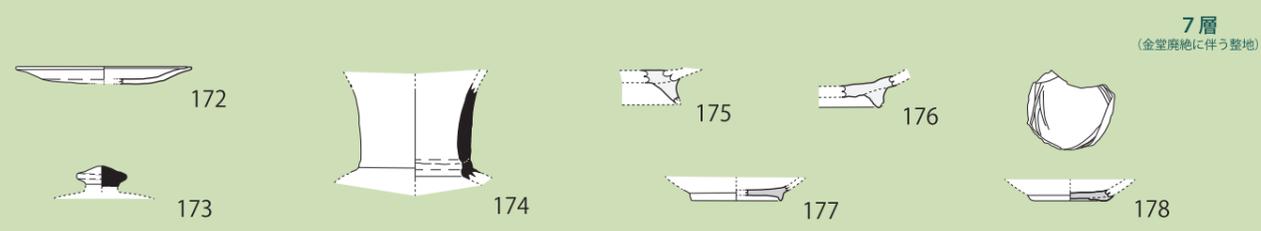
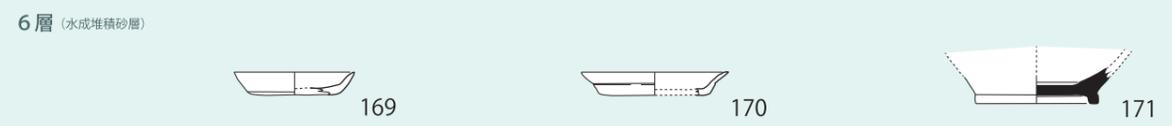
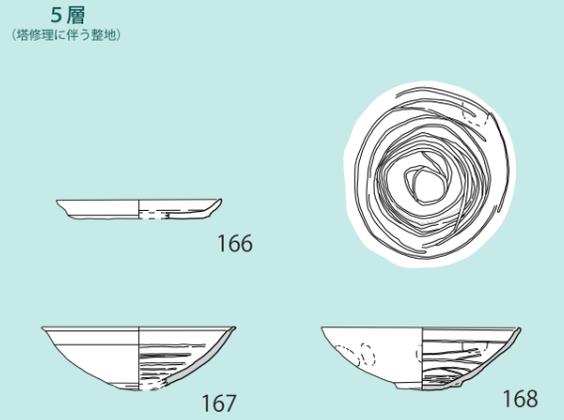
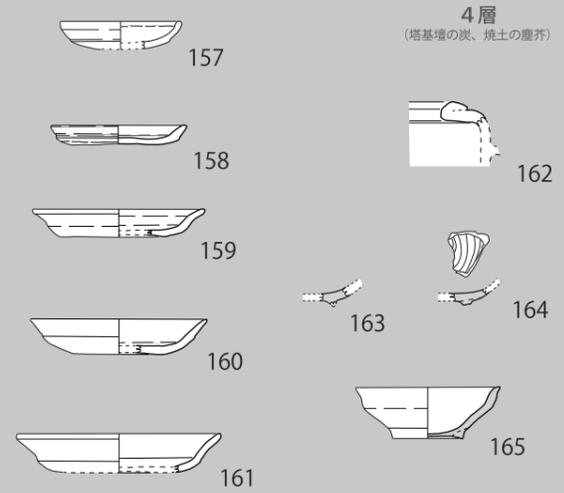


図 37 土器実測図 (1/4)



写真 190 東回廊雨落溝出土土器



写真 191 12層出土土器

写真 192 木製灯籠掘方出土土器

185・186の写真の大きさは任意、その他は実物のおよそ100%

やや内湾している。精製した胎土で色調はにぶい橙色。11世紀末～12世紀前葉のもの。180は口径10.1cm、器高2.1cmに復元でき、口縁端部が丸く収まる。色調は橙色である。

ii 回廊出土

■ 東回廊外側雨落溝出土 写真190・図37-181・182。東回廊外側の雨落溝には、7.5Y4/1灰色のシルト混じり中粒砂が約16cm堆積している。181・182の土師器皿が出土した。2点とも摩滅が激しいが、口縁が外反するての字口縁の皿と見られる。色調は灰白である。10世紀～12世紀初めのもの。

iii 金堂の北方出土

■ 12層出土 写真191・図37-183-186。12層は金堂の北方で標高が低くなっていた地山を版築工法で整地した層で、第9次調査1区で検出した。調査では、版築状整地層の厚さを確認するために3か所で先に深掘りした。

183-185は深掘り1から出土した。183は土師器の杯Cで内面に一段の暗文がある。口径9.8cm、器高3.4cmに復元でき、径高指数は28.8である。精製した胎土で、色調は橙色である。184は須恵器杯G蓋で、口縁部のみの小片。185は須恵器の杯H蓋で、口径9.2cm、器高3.2cm、径高指数28.75である。色調はオリーブ灰色、焼成は良好である。飛鳥Ⅱ期に当たる。

186は深掘り2の掘削中に出土した。深掘り2は柱穴1の掘削と重複する位置にあり、柱穴と認識できないまま掘削しており、柱穴1の遺物である可能性もある。口径は9.7cm、器高3.3cmで、つまみ上面は押圧により凹んでいる。TK217型式に当たる。

■ 木製灯籠掘方出土 写真192・図37-187。全体の1/4程度を掘削した木製灯籠掘方の土はすべて持ち帰って洗浄した。その結果、いずれも小片の平瓦、丸瓦、土師器、須恵器と石が出土した。187は須恵器の杯蓋で、内面に墨書の痕跡がある。口径は15.0cmに復元できる。8世紀前後のもので、木製灯籠の建立時期といえる。

iv 主要伽藍周辺の出土

■ 第5次調査出土 写真193・図37-188-191。第5次調査では、古代の整地土の上面と地山面の2つの遺構面を検出した。古代の整地土上面で検出したSX01（用途不明遺構）は、調査区の北東隅にあり、北壁で70cm、東壁で250cmの大きさであった。埋土は暗灰黄色シルト～細粒砂で、瓦、埴、土師器、須恵器、瓦器が出土した。

188は土師器皿で、口径9.6cm、高さ1.9cmに復元でき、色調はにぶい橙色である。189は口径14.7cm（復元）、器高6.2cm。見込みに斜格子のヘラミガキがあり、外面は体部下半まで隙間の大きいヘラミガキがある。高台内部には焼成後に「×」が刻まれている。190は口径15.1cm、器高6.4cm。見込みのヘラミガキは斜格子で、外面のヘラミガキは体部上半にある。191は口径14.3cm（復元）、器高6.4cm。見込みには斜格子とジグザグに反復するヘラミガキが混在し、外面の口縁部にヘラミガキがある。瓦器碗は大和型で、川越編年第1段階B～Dに当たり、11世紀後半～12世紀初頭のものである。



189の写真の大きさは実物のおよそ100%、その他はおよそ50%

写真193 第5次調査出土土器

7 その他の遺物

i 建築部材

■ **塔の建築部材** 炭・焼土の4層は、塔の基壇上から塔の南面にかけて堆積する。基壇上では元の形状のわかるものはなかったが、塔の南面において行った第10次調査2区では柱状の炭化材2点が出土した。出土位置から塔の建築部材と考えられる。2点ともよく燃えており、用途を特定することができない。

写真195は塔南面の基壇外装から南へ1.3mの位置で出土した。幅9cm、残存長45cm、厚さ18cmの角材で、調査区に直交した方向で出土し、材は東壁内に続いていく。加工痕は確認できない。

写真196は調査区中央の西壁で出土した。長さ54.0cm、幅12.5cm、厚さ14.8cm。表面が残存する部分は少なく、片端は斜めに切断されているように見える。材には釘が打ち込まれており、釘は材のなかで屈曲し、先端が欠けている。

ii 金属製品

■ **鉄製品** 写真194・図38-192~194。鉄製品として鉄釘が出土した。釘と見られる破片は83点あり、多くは錆が進んで棒状の小片となっている。第7次調査で全体形状のわかる鉄釘が出土した。192は金堂廃絶に伴う堆積層である7層から出土し、足の短いもの。193・194は塔基壇の炭・焼土層である4層から出土。193は長さ15.1cmで、釘身は一辺0.9cmの方形。194は巻頭で、長さ5.0cm、一辺0.3cmの方形である。

■ **銅製品** 写真194・図38-195~199。196は第7次調査の神社整備の造成土である2層、195、198、199は第10次調査2区の塔南面の4層、197は第3次調査の塔基壇上の4層からの出土である。195は幅3.0cm、残存長5.3cm、厚さ1.5cmの破片で、側面がゆるくカーブする。196は幅1.9cm、厚さ1.2cm、長さ5.9cmが残存する。直線的な形状だが、下部が湾曲し、やや厚みが増すことから、他の部位から枝分かれする部分に当たる。この2点は水煙の破片と考えられる。197は最大幅7.1cm、最大長9.3cm、厚さ0.5cmと薄い板状の破片で、やや湾曲している。198は擦管の破片である。幅

約4.8cm、高さ6.2cmが残存し、体部の厚さは1.2~1.4cm。端部内面は内湾し、外面が肥厚して1.8cmの厚みがある。端部の円弧は直径31.2cmに復元でき、上端はまっすぐ上方へ延びる。199は伏鉢の破片で、最大幅12.7cm、高さ12.4cmが残存し、厚さ1.6~1.9cm、重量1.2kgである。端部の円弧は直径69.4cmに復元でき、端面で直立させると、上端はやや内径する形状となっている。

■ **銭貨** 写真194・図38-200・201。第3次から第11次までの調査で計7点の銭貨が出土した。1層または2層からの出土で、そのうち3点が寛永通宝である。200・201は舟戸神社参道の第10次調査1区で出土。200の鉄四文銭は1層、201の銅銭は2層からの出土である。

iii 壁土

■ **壁土** 写真197。舟戸神社境内における調査区では、表土である1層、神社整備の造成土である2層、塔廃絶後の造成土である3層、塔基壇の炭・焼土の塵芥層である4層から焼土と化した壁土が出土し、その量はコンテナ75箱に及ぶ。とくに塔基壇上の4層からの出土が51箱あり、出土量の70%近くが塔の基壇上での片付け行為に伴うものである。それらのなかには、荒壁、中塗、表土塗、白土があり、スサを含む荒壁には木舞の痕が残る破片があった。また、白土には熱でガラス質となったもの、赤や黒の色が残る部分もあり、壁画である可能性も考えて分析を依頼したが、顔料の成分は検出されなかった。

iv 凝灰岩

■ **凝灰岩** 写真198。塔の乱石積基壇のうち、残りの良い部分では葛石に凝灰岩が使用されていた。表面を平滑に整えたものもあり、創建金堂の切石積基壇外装を転用したことも考えられる。すべての調査を通じてコンテナ14箱、354点の凝灰岩が出土しており、総重量は約77.1kgである。こぶし大以下のものから縦28cm、横19cm、厚さ16cmに及ぶ大きさのものまである。平滑な面をもつのは60点、削り込みの加工痕跡があるものは3点あるが、使用箇所が推定できるものはない。採石は大阪府太子町の鹿谷寺跡北方付近と推定されている。



写真194 金属製品

200・201の写真の大きさは実物のおよそ100%、その他は50%



写真 195 炭化した塔の建築部材 1



打ち込まれた釘

写真 196 炭化した塔の建築部材 2



同個体の表面と裏面の木舞の痕



荒壁から白土までが残るもの



写真 197 被熱した様々な壁土



壁土に含まれるスサ



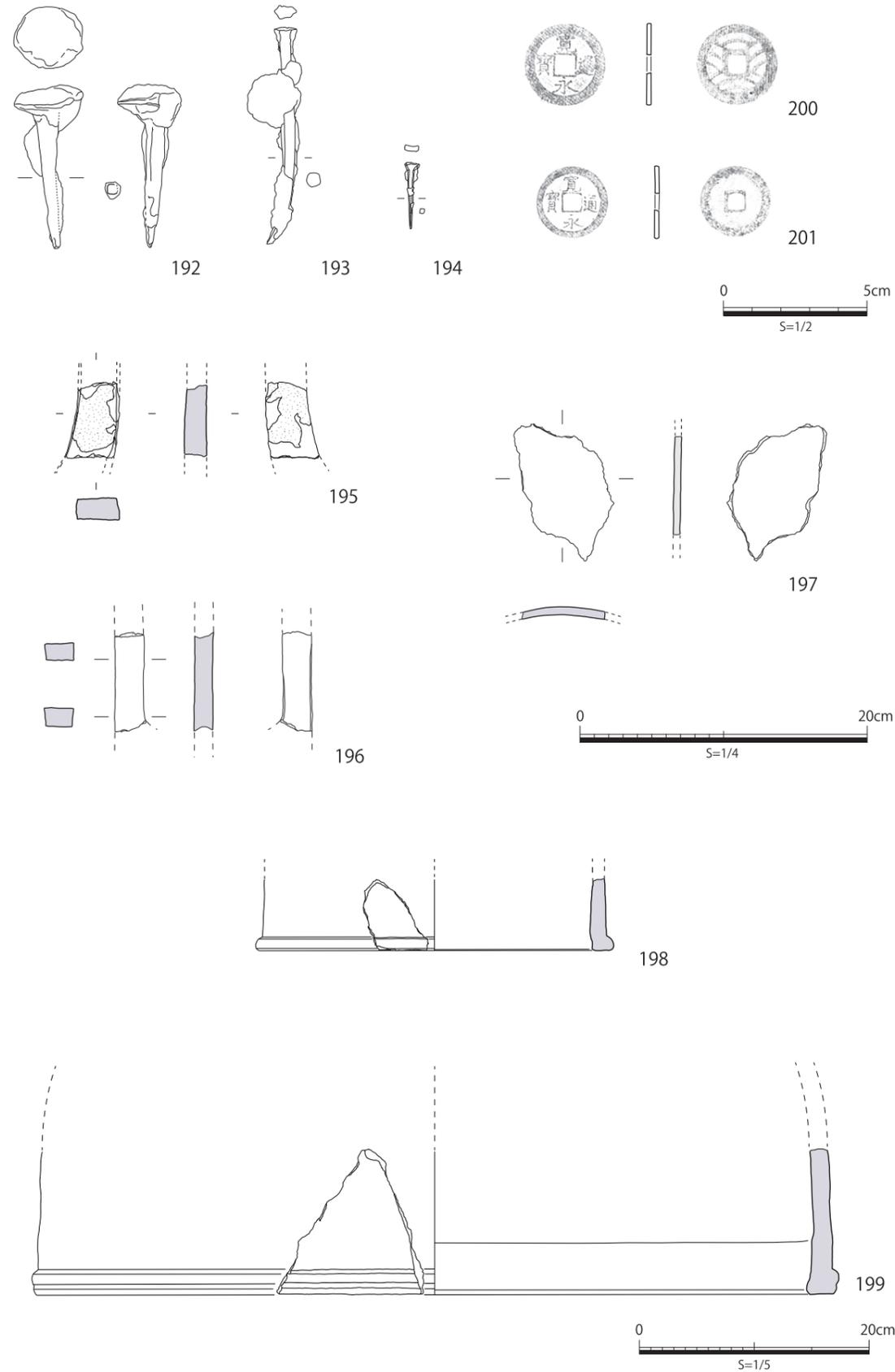
被熱でガラス質になった白土



削り込み痕跡



写真 198 加工痕跡のある凝灰岩



第5章 まとめ

- 1 出土瓦から見た寺院造営の画期
- 2 伽藍の復元と推移
- 3 西安寺跡の歴史的意義

図38 金属製品実測図

1 出土瓦から見た寺院造営の画期

■ **出土地点・層位から** 西安寺跡における第3次から第11次までの9次にわたる範囲確認調査では、多くの瓦が出土した。第4章1及び2で報告した軒瓦では、軒丸瓦が計416点、軒平瓦が計424点あり、型式ごとの層位別出土数は表9に示すとおりである。その約90%は西安寺が廃絶した後に堆積する1～4層からの出土であるが、残りの約10%は出土位置、層位から西安寺の造営状況を知ることのできる瓦である。

とくに金堂の南面から塔の間に堆積する7層で検出した瓦堆積は、その出土状況から金堂が廃絶を迎えたときに屋根にあった瓦であり、7世紀前半から10世紀の瓦が混在している。このことから、10世紀以降に金堂で修理されることはなかったと考えられる。ただし、これらの瓦は検出面での出土瓦を記録しただけで、堆積する瓦のほとんどを現地保存しているためにすべてを把握できていない。また、金堂の乱石積基壇外装の土坡からは金堂北面（第8次調査1区）で素弁3型式、南面（第8次調査1区）で素弁4型式の各1点が出土している。土坡は金堂に直接関わる堆積層であり、これらの素弁蓮華文軒丸瓦は基壇外装改修前の金堂に用いた瓦と考えることができる。

金堂、塔の周囲に堆積する4～8層は出土した土器片が小さいためにその堆積時期を細かく分別できていないが、各層から出土する瓦から2つの時期を見出すことができる。1つは平安後期に属する巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦で、塔の南面では5層より下層、塔の北・東面では6層より下層から出土しないこと、もう1つは、鎌倉～室町以降の巴文軒丸瓦と段頸を用いる唐草文軒平瓦で、4層より下層から出土しないことである。つまり、金堂の廃絶時までの堆積層から出土しない平安後期以降の瓦は、塔に使用されたものであり、塔は平安後期と鎌倉～室町期に修理が行われて存続していたことがわかる。

■ **軒瓦の出土数から** 以上のように出土地点、層位から金堂、塔に使用する瓦を大まかに推定することができた。次に軒瓦の出土数に着目したい。

表9には細分したものを含めて29種の軒丸瓦と21種の軒平瓦の出土数とその比率を示している⁽¹⁾。軒丸瓦では鎌倉後期の右三巴1型式、軒平瓦では平安後期の唐草5型式が20%を超える出土があり、

7世紀後半の単弁2型式、平安後期の左三巴1型式、唐草6型式、室町前期の唐草21型式が10%台である。軒瓦の半数は1桁台の出土率で、1点のみの出土という型式もあり、1%を満たしていないものも多い。

しかし、わずかな出土数であっても型式区分に捉われることなく、軒丸瓦と軒平瓦の組み合わせや同じ年代を括りにして捉えてみることで、造営の状況をうかがい知ることができるのではないかと考えた。例えば、7世紀前半の素弁軒丸瓦は合計すると10.8%（45点）となり、それに年代的に対応する無文軒平瓦の出土もある。7世紀後半の三重弧文軒平瓦の6種もそれぞれでは10%に満たないが、三重弧文軒平瓦という括りにすると20.7%（88点）が出土している。また、8世紀後半の唐草1型式は4.5%（19点）の出土で、これと組み合う単弁4a型式、同4b型式は合わせて1%（4点）であるが出土している。

このように見ていくと、表9からは7世紀前半・飛鳥中期、7世紀後半・白鳳、8世紀後半・奈良時代後半、10世紀・平安中期、11世紀後半～12世紀・平安後期、13世紀後半～15世紀・鎌倉～室町中期の6つの時期を抽出することができる。以下、各時期の軒瓦の出土数と特徴を整理し、同時期に使用された他の瓦についてもふれながら、西安寺の造営状況を考えていく。

■ **7世紀前半・飛鳥中期** 素弁蓮華文軒丸瓦は10.8%（45点）の出土があった。なかでも素弁1型式は3.8%（16点）、同2型式は2.9%（12点）と多く、素弁1型式は法隆寺若草伽藍の修理瓦である軒丸瓦7Abと同範で、素弁2型式は中房の周りに溝がめぐる点が法隆寺若草伽藍出土の軒丸瓦6Bと共通し、蓮弁の先端が肥厚する船橋廃寺式軒丸瓦の特徴ももち合わせている。ついで出土量が多いのは素弁5型式の1.7%（7点）である。瓦当面、中房の直径と蓮弁の長さのバランスが素弁1型式と共通し、他遺跡での出土が認められないことから、素弁1型式を手本として西安寺でつくられたと考えられる。そして、素弁3型式と同4型式が1.2%（5点）で並ぶ。素弁3型式は法隆寺若草伽藍出土の軒丸瓦6Bとの同範を確認しているが、丸瓦の接合方法において若草伽藍は丸瓦の広端を片柄に加工するのに対し、西安寺では無加工で接合するという違いがある。胎土も違うことから範が移動してきたと考えら

表9 軒丸瓦・軒平瓦型式ごとの層位別出土数

年代	型式	近現代		中世						古代		その他	壁精査等	合計(点)	出土比率			
		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層				10	20	30	(%)
飛鳥	7世紀前半	素弁1	2	4	3	5			2					16				3.8
		素弁2	3	7		1							1	12				2.9
		素弁3	1	2	1					1				5				1.2
		素弁4		2	1	1				1				5				1.2
		素弁5	1	2	1				2				1	7				1.7
	7世紀後半	単弁1a	4	8	3	6	4	1	6			1●	2	35				8.4
		単弁1b	5	2	3		3		6	1				20				4.8
		単弁2	5	15	7	2	1	1	8				6	45				10.8
		単弁3	3	4	7		1	1	4	1			5	26				6.3
		忍連1		2	1		1					1▲		5				1.2
奈良	8世紀後半	複弁1		1									1				0.2	
		重圈1	1										1				0.2	
		単弁4a		2									2				0.5	
		単弁4b		2									2				0.5	
平安	11世紀後半～12世紀	10世紀 単弁5	1	1					2				4				1.0	
		梵字1					1						1				0.2	
		左二巴1		1		1	1						2	5			1.2	
		左二巴2	1	6	1	2							1	11			2.6	
		左三巴1	7	21	10	13							10	61			14.7	
		左三巴2	2	2		1							1	6			1.4	
		左三巴3											1	1			0.2	
鎌倉	13世紀後半～15世紀	左三巴4			1								1				0.2	
		右三巴1	18	36	23								23	100			24.0	
		右三巴2	5	4	1								1	11			2.6	
		右三巴3		2										2			0.5	
		左三巴5		1									1	2			0.5	
		左三巴6	4	7		1							1	13			3.1	
		左三巴7		2	1								4	10			2.4	
室町	右三巴4	1	1								4	6				1.4		
合計(点)		64	138	66	33	12	3	30	2	2	2	64	416					
出土比率(%)		15.4	33.2	15.9	7.9	2.9	0.1	7.2	0.5	0.5	0.5	15.9						

(その他) ●: 第10次調査1区 15層上の水成砂層 ▲: 東回廊外側の雨落溝

年代	型式	近現代		中世						古代		その他	壁精査等	合計(点)	出土比率			
		1層	2層	3層	4層	5層	6層	7層	8層	9層	10層				10	20	30	(%)
飛鳥	7世紀前半	無文1		6	8									14				3.3
		無文2				1								1				0.2
		無文3			3	1								4				0.9
	7世紀後半	三重弧1	5	4	4	8	3		3				3	30				7.1
		三重弧2		4		2	2						4	12				2.8
		三重弧3	2	2	2	2			2				2	12				2.8
奈良	8世紀後半	三重弧4		2		2							4				0.9	
		三重弧5	2	6	2							1▲	2	13			3.1	
		三重弧6	4	2	4	1	3		2				1	17			4.0	
平安	11世紀後半～12世紀	唐草1	2	7	3			3				4	19				4.5	
		唐草2					1						1				0.2	
		唐草3	1										1				0.2	
鎌倉	13世紀後半～15世紀	唐草4	3	11	7			4	8			2	35				8.3	
		唐草5	23	41	10	16	2	2				18	112				26.4	
		唐草6	15	28	5	7	1					1●	8	65			15.3	
		唐草7		1									1				0.2	
		唐草8	1										1				0.2	
室町	15世紀	唐草20	2	3								1	6				1.4	
		唐草21	19	22	5	2						15	63				14.9	
		唐草22	2	2								2	6				1.4	
唐草23		6	1								7					1.7		
合計(点)		81	150	53	40	12	9	15			2	62	424					
出土比率(%)		19.1	35.4	12.5	9.4	2.8	2.1	3.6			0.5	14.6						

(その他) ▲: 第7次調査6層上面遺構土坑1 ●: 7次調査6層上面遺構土坑5

れる。素弁4型式は片岡王寺跡にも出土例があるが、出土数も少なく小片であるため西安寺跡との前後関係は不明である。また、素弁3型式、同4型式は、それぞれ1点が金堂の乱石積基壇外装の土坡から出土し、基壇外装改修前の金堂に使用したものである。素弁蓮華文5種の瓦当面直径は17cm前後と似かよった大きさであることから、素弁蓮華文軒丸瓦は5種とも1つの建物、すなわち金堂の所用瓦といえ、出土数の多い素弁1型式、同2型式が金堂を初めて建立したときの瓦であり、同3～5型式は補足瓦と考えられる。

素弁蓮華文軒丸瓦と組み合わせる軒平瓦は無文軒平瓦で、3種合わせて4.4%（19点）と出土数は少ない。ただし、無文軒平瓦は第11次調査で無文1型式が出土したことからその存在を認識し、平瓦に分類整理したものなかから広端面にナデ調整を行った同種の瓦が抽出できた。現在のところ、凸面を丁寧なナデ、縄タタキの後ナデ、格子タタキの後ナデを行うという外面調整の違いにより3種が確認できている。今後、出土数が増加する可能性は高い。

素弁蓮華文軒丸瓦、無文軒平瓦と同時期の丸瓦、平瓦は特定できていないが、鷗尾の破片が2点出土している。文様と胎土、焼成から同一個体のものであり、縦帯がなく胴部、鱗部の表現を段、ヘラ書きの沈線で表現することから7世紀前半の630年代と考えられる。同時期の素弁4型式の胎土、焼成ともよく似ている。素弁蓮華文軒丸瓦をはじめとしたこの時期の出土瓦は金堂に使用したもので、素弁蓮華文軒丸瓦と鷗尾の製作年代から、金堂を初めて建立したのは630年代といえる。

■ **7世紀後半・白鳳** 単弁1～3型式と忍冬蓮華文軒丸瓦を合わせて31.5%（131点）⁽²⁾が出土している。この時期で最も出土量が多いのは単弁2型式の10.8%（45点）で、片岡王寺式として知られる片岡地域に特徴的な瓦である。同範瓦は片岡王寺跡で出土し、同文で外縁に鋸歯文のある軒丸瓦は尼寺北麿寺で出土している。瓦当面の直径は19.5cmで前時代の素弁蓮華文軒丸瓦に比べて大きくなっている。

次に出土量が多いのは単弁1a型式の8.4%（35点）で、同じ範を使用した1b型式も合わせると13.2%（55点）と単弁2型式の出土量を超える。第4章1で述べたように単弁1型式は、中房の蓮子に周環があることが川原寺式軒丸瓦、中房の珠文が

1+4+8で外縁の形状が斜縁で鋸歯文がないことが飛鳥寺XIV型式の特徴をもっている。飛鳥寺XIV型式は天武朝に行われた飛鳥寺の修理に使用された瓦とされており、単弁1型式はそれ以降の年代が考えられる。素弁蓮華文に多く使用されたA型範ではなく、B型範を使用していることも特徴で、単弁1型式は瓦当面の直径が16.6cmの1a型式と、外縁に手を加え瓦当面の直径を18.2cmに広げた1b型式があり、範傷の進行具合で1a型式の製作が先行している。瓦当面に転写された文様はシャープで、他遺跡での出土例が認められないことから西安寺造営のために製作された瓦といえる。

3番目に多いのは6.3%（26点）の単弁3型式で、瓦当面の直径が21.3cmの大型品である。文様は単弁1型式、同2型式と同じく、蓮弁は16弁、大きくした中房の蓮子の配置は同1型式の2重目、3重目の蓮子の間に蓮子を1つずつ増やしたもので周環がある。単弁1a型式の範型を使って外縁を大きくし、同1b型式をつくってみたものの、瓦当面の直径が足りないため新たな範をつくり直したのではないだろうか。単弁1b型式単独の出土量が4.8%（20点）と単弁のなかでは最も少ないことがこのことを示している。単弁1～3型式の軒丸瓦はすべて行基丸瓦が接合し、瓦当径によって同1a型式の小型品、同1b型式、同2型式、同3型式の大型品に分けることができる。また、単弁2型式、同3型式はA型範を使用している点も同1型式との相違点としてあげられる。

三重弧文軒平瓦は20.7%（88点）出土しており、いずれも粘土板桶巻作りで、弧線は分割前に型引きで施文している。顎形態は直線顎、凸面は丁寧なナデ、側面はc手法で複数回のヘラケズリを行う丁寧なつくり方をする点は共通し、弧線の幅、形状で三重弧1～6型式に分類した。出土数が多いのは三重弧1型式の7.1%（30点）で、中段の弧線の幅が上下段に比べ太く、瓦当面の厚さは4.2cmと6種のなかで最も厚い。次に多いのは三重弧6型式の4%（17点）で、弧線幅はほぼ均等で弧線角は丸く、断面形状がU字形の溝の深さは0.6～0.8cmとやや深い。三重弧5型式は3.1%（13点）で中段の弧線幅が細く、弧線角は角張り、溝の深さは0.3～0.4cmと浅い。三重弧2型式、同3型式は2.8%（12点）と同数の出土である。三重弧2型式は中段の弧線がやや細く、弧線の角は角張る。溝の形状はU字

形で深さは0.3～0.5cmと浅い。弧線の特徴は三重弧5型式と一致するが、溝幅が広く弧線表面に残る擦痕に違いがある。三重弧3型式は弧線幅がほぼ均等で、弧線の角は角張る。三重弧4型式は0.9%（4点）と出土数が最も少ない。中段の弧線が細くて弧線角は丸く、溝形状が上開きとなっている。三重弧文軒平瓦は6種に分類したが、1つの引き型の経年変化を別型式と設定している可能性もある。また、引き型の上下を入れ替えて使用した可能性も考えられ、弧線に残る引き型の痕跡の詳細な観察を行う余地がある。

三重弧文軒平瓦では法量がわかるものが4点出土している。三重弧1型式の図27-57は瓦当面の幅35.5cm、全長43.4cm。三重弧2型式の図27-58は瓦当面の幅33.0cm（復元）、全長42.4cm。三重弧3型式は2点あり、図27-60は瓦当面の幅31.5cm（復元）、全長40.3cm。図27-61は瓦当面の幅33.7cm、全長43.4cmである。軒丸瓦でも大小があったように瓦当面の幅には最大4cmの差があり、同じ三重弧3型式であっても大小がある。これは使用する建物の違いによると考えられ、建物によって施文具を変えることはしていない。

7世紀後半は、金堂北方では版築状の整地を行い、伽藍の整備が始まっている。検出した金堂と塔基壇の大きさは金堂に対し塔が大きいものであったことから、単弁1a型式と三重弧文軒平瓦の小型品で7世紀前半に建立した金堂の修理を行い、単弁1b型式、同2型式、同3型式と三重弧文軒平瓦の大型品で塔を建立したという流れが考えられる。とくに単弁2型式の図26-17と三重弧3型式の図27-61とは胎土、焼成が同じで、組み合わせさせて塔に使用したものだろう。

三重弧文軒平瓦の凸面調整はナデ、側面はヘラケズリを複数回行う丁寧なつくり方が各型式で共通することは先にも述べた。凹面でも布目痕、糸切り痕、側板痕跡が消えてしまうほど調整を加えたものが多い。それは、木目状の痕がある当て具の圧痕、ケズリ、ナデ、指頭圧痕などで、桶から外した後の粘土円筒の段階に円弧を補正した痕跡である。こうした桶から外した後の調整は、型式を超えて確認でき、とくに木目状の痕がある当て具の圧痕は三重弧2型式、同4型式、同5型式、それに行基丸瓦の丸瓦I D-a1（写真156・図29-98）、桶巻作りの平瓦I D-a1（写真169・図31-111）にあった。この



写真199 塔建立の単弁2型式と三重弧3型式

当て具の痕跡は正門の木目ではなく、一方向に収束するような形状であることから、心材からはずれた部分の木材を使用した曲面のある当て具が想定できる。開口部の狭い丸瓦にも使用することから持ち手は須恵器の木製当て具のような柄ではなく、短く握り込める形状となっていたと推定できる。その他、種類を超えた製作技法という点では、行基丸瓦の丸瓦I B1-a（写真152・図29-94）、桶巻作りの平瓦I B1-c（写真168・図31-108）の凸面調整に多角形タタキ目を使用している例もある。

この時期の鬼瓦としては、第4章6で復元を試みたとおり、単弁1a型式の文様のある蓮華文鬼瓦（写真179・図33）を金堂に使用したと考え、将来、接合資料が出土することを期待したい。

神奈川県横須賀市宗元寺跡との同範関係が知られる忍冬蓮華文軒丸瓦は1.2%（5点）の出土にとどまっている。図26-28だけが東回廊の外側雨落溝の遺構から出土しているが、小片であるため使用された建物を特定するには至らない。瓦当面の直径が18cmあり、金堂南面の瓦堆積からの出土がないので、金堂とは別の建物の所用瓦と考えられる。以上のように、7世紀後半には金堂、塔に使用するために瓦を大量に生産したことがうかがえる。

■ **8世紀後半・奈良時代後半** この時期の出土数は少なく、小修理が行われたとの見方ができる。軒平瓦の唐草1型式が4.5%（19点）で最も多く、これと組み合わせる単弁4a型式、同4b型式がそれぞれ0.5%（2点）の出土である。唐草1型式の内区の唐草文の形状は軒平瓦6663B型式に似ているが、外区に三重郭文があり他に類例を見ない。粘土板一枚作りで、凸面は縄タタキを施した後ナデ消すものである。

単弁4型式は蓮弁が11弁と西安寺では新出の文様で、この時期から玉縁丸瓦を使用しており、瓦当

面の直径は単弁1型式よりも小さく金堂に使用したと考えられる。その他には唐草2型式、同3型式、複弁1型式、重圏1型式はそれぞれ0.2%（1点）の出土がある。唐草2型式は瓦当面のみの小片で、製作技法は不明。唐草3型式は一枚作りで、破片の割れ具合から粘土塊を凸型成形台で押圧して製作したものである。

単弁4型式、唐草1型式とともに使用した瓦として、玉縁丸瓦の丸瓦ⅡC1-a1（写真158・図30-100）があり、玉縁部に水切りの凹線を刻む。平瓦は粘土板桶巻作りの平瓦ⅠC1-a（写真167・図31-109）で、凸面に施す縄タタキは唐草1型式と共通しており、桶巻作りと1枚作りの製作技法が共存している。この丸瓦と平瓦は、単弁4型式、唐草1型式と同じく表面は黒くいぶされたような焼き上がりである。

この時期の特徴は、平城宮・平城京の瓦である軒丸瓦6012B型式の重圏1型式、平城宮系の鬼瓦B種が出土することである。平城宮系の鬼瓦が地方へ伝播するのは、国分寺の造営に伴い周辺寺院に供給されたためと考えられており、この流れに沿って西安寺にもこれらの瓦が存在しているのだろう。また、唐草2型式、同3型式は片岡王寺跡でも出土しており、片岡地域でのまとまった造瓦がうかがえる。

■ 10世紀・平安中期 軒丸瓦、軒平瓦それぞれ1型式ずつの出土である。唐草4型式が8.3%（35点）、単弁5型式が1%（4点）で出土量は少ないが、これらは赤褐色で長石を多く含む胎土、焼成が同じで組み合わせると考えられる。金堂からすべり落ちた瓦を包含する7層でまとまって出土することから、金堂に使われた瓦といえる。とくに単弁5型式は、単弁4型式の珠文のある外縁を素縁に改範したと推測でき、瓦当面の直径は15.1cmで金堂所用の小さい軒丸瓦に相当する。

唐草4型式は、凸面成形台で粘土塊に布を被せて押圧するもので、側面、狭端面に布目が残る。前時代の唐草文様を大胆に崩し、界線のなかに珠点を配するところなど他に類例を見ず、範割れ（唐草4b型式）があっても使用を続けている。

一枚作りの平瓦ⅡC1-c2（写真174・図32-116）には側面、狭端面に布目があり、凸面は縄タタキを施す。鬼瓦C1類（写真180・図34-124）は単弁5型式、唐草4型式と胎土、焼成が同じであり西安寺跡出土品と同種の鬼瓦が天理大学附属天理参考館

には収蔵されている。この時期の出土点数は多いといえないが、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・鬼瓦と数多くの種類がつくられており、金堂の修理は大規模に行われたことが予想される。

■ 11世紀後半～12世紀・平安後期 この時期の軒丸瓦は6種の出土があり、左三巴1型式が14.7%（61点）と最も多く、その他は左二巴2型式の2.6%（11点）、左三巴2型式の1.4%（6点）、左二巴1型式の1.2%（5点）、梵字1型式と左三巴3式は同数で0.2%（1点）であった。出土数から見ても左三巴1型式が主となる瓦で、瓦範が割れたものを使用しており、範の割れが進行する様子が見て取れる。

軒平瓦では4種の出土があり、唐草5型式が26.4%（112点）、ついで唐草文6型式が15.3%（65点）と軒平瓦全体で1番、2番目の数値である。残る唐草7型式、同8型式は0.2%（1点）であった。唐草5型式、同6型式は文様の違いはあるものの製作技法や胎土、焼成は似かよっており、同時につくられたものと考えられる。

左三巴1型式を接合する丸瓦ⅡC1-b（写真161・図30-103）、唐草5型式、同6型式と胎土が共通する平瓦ⅡC1-c1（写真173・図32-115）と鬼瓦C2種（写真180・図34-125-127）もこの時期に使用されたものである。

冒頭にふれたように、この時期の瓦は金堂の廃絶後に堆積した1～6層から出土することから、塔に所用された瓦といえ、金堂の廃絶前に塔の修理を行ったが、金堂の屋根瓦が落ちたときには塔はとくに被害を受けなかったようである。この時期の主たる左三巴1型式、唐草5型式、同6型式の同範品は片岡王寺跡でも出土しており、造瓦所を共有していた可能性がある。

■ 13世紀後半～15世紀・鎌倉～室町中期 この時期の瓦は、塔廃絶後の堆積層である1～4層で出土することから塔に使用された瓦である。8種の巴文軒丸瓦が出土している。右三巴1型式が24.0%（100点）と最も多く、左三巴4～7型式、右三巴2～4型式は0.2～3.1%（1～13点）と右三巴1型式に比べると非常に少ない。軒平瓦は4種の出土があり、唐草21型式が14.9%（63点）、唐草23型式が1.7%（7点）、唐草20型式、同22型式がそれぞれ1.4%（6点）である。唐草21型式が最も多く、右三巴1型式と組み合わせた修理瓦とし

て使用したと考えられる。右三巴1型式は文様から鎌倉後期の年代とされ、唐草21型式は法隆寺、薬師寺例との同範調査から室町前期のものである⁽³⁾。両者には年代に差があるが、右三巴1型式は範傷が多くあることから他の寺院も含めて長く使用されていたものであり、14世紀前半の室町前期になって西安寺の塔の修理に使用されたと考えられる。

この時期には丸瓦ⅡC1-a3（写真160・図30-102）、ⅡD-a2（写真163・図30-105）、平瓦ⅡA3-c（写真172・図32-114）があり、菊花文などの刻印瓦はこの時期のものである。鬼瓦ではD種（写真180・図34-128）、E種、髭もしくは髪部分の破片が出土している（写真181）。また、隅木蓋瓦ではB種（写真182・図35-133・134）が出土しており、唐草21型式と胎土、焼成が共通する。

■ 出土瓦と造営の画期 以上、表9によって抽出した6つの時期ごとに、使用された瓦の特徴を整理しつつ、西安寺の造営状況を見てきた。最後に、6つの時期の瓦と西安寺の変遷を対応させてまとめとする。

● 西安寺の創建（7世紀前半・飛鳥中期）

この時期に金堂一字で西安寺を創建する。630年代と考えられる。素弁蓮華文軒丸瓦と無文軒平瓦の軒先瓦、棟には鴟尾を使用している。

● 伽藍の完成（7世紀後半・白鳳期）

伽藍を本格的に整備し始める。金堂を単弁1a型式と三重弧文軒平瓦で修理し、ついで単弁1b型式、同2型式、同3型式と三重弧文軒平瓦を使用して塔を初めて建立了。塔に使用した軒丸瓦の3種とも単弁1a型式に後出し、地上式の心礎を使用していることは、塔の建立を7世紀末から8世紀初頭とすることとも年代的に一致する。

● 金堂の修理（8世紀後半・奈良時代後半）

単弁4型式、唐草1型式を主に使用して金堂を修理している。鬼瓦B1種の平城宮系の鬼瓦、三重圏文軒丸瓦なども出土しており、中央との結びつきが強かった時期と考えられる。

● 金堂の大規模修理（10世紀・平安中期）

単弁5型式、唐草4型式を使用しており、鬼瓦C1種の出土もある。基壇外装が乱石積に改装されたのもこの時期と考えられる。

● 塔の修理（11世紀後半～12世紀・平安後期）

左三巴1型式、唐草5型式、同6型式を主とし、鬼瓦C2種を使用して修理を行っている。

● 金堂の廃絶（13世紀後半～14世紀前半・鎌倉後期～室町前期）

平安後期の塔の修理後、金堂の屋根瓦が落ちてそのまま埋没していることから、このときに金堂は廃絶を迎えている。この埋没した瓦のなかに塔の修理瓦は含まれないことから、金堂の廃絶に際して塔には影響はなかったといえる。金堂の埋没瓦に塔建立時の単弁1b型式、同2型式、同3型式が含まれるのは、各時期の修理の際に金堂に移されたものと考えられる。なお、埋没瓦が堆積する7層からは、13世紀後半～14世紀前半の瓦器碗が出土しているので、それが金堂廃絶の時期と考えられる。

● 塔の修理（14世紀前半・室町前期）

右三巴1型式、唐草21型式を主に使用した修理で、隅木蓋瓦B種と鬼瓦D種、小片の鬼瓦E種も出土している。基壇周辺では、塔基壇の北面、東面が金堂廃絶後の洪水砂層で半ば埋没したため、塔南面を盛土して整地し、基壇外周を同レベルに整えることもしている。

● 塔の廃絶（15世紀末以降・室町後期以降）

唐草23型式が15世紀代の最も新しい軒平瓦であり、この時期が西安寺最後の修理と考えられる。塔基壇上には4層が広がっており、近世の神社造成が行われるまで地表に露出していた。4層からは仏像や仏具の出土がなく、建築部材の出土量もわずかなため、塔は焼亡したのではなく片付け行為をし、仕舞をつけるために焼却を行ったと考えられる。それが4層の堆積である。

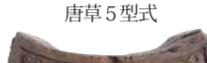
以上が出土瓦から見た西安寺造営の画期である。それぞれの画期に使用された瓦については表10にまとめた。なお、今回の瓦出土数による分析は9次にわたる範囲確認調査によるものであり、今後の調査の進展によって評価が変わる可能性がある。

[注：1 出土瓦から見た寺院造営の画期]

- (1) 唐草4a・4b型式については、範傷の有無で型式分類している。その出土状況から、両型式とも金堂に使用し、同時期のものと判断できたので、表9では唐草4型式として出土数を合計して示している。
- (2) 忍冬蓮華文軒丸瓦は、1型式以外にも型式設定できないものが出土しているが、表9ではそれらを含めた数量で示している。
- (3) 唐草21型式は、同範調査により『法隆寺の至宝』に掲載される軒平瓦355Abに先行するものであることが確認できた。355Abの年代は室町前期I（1333-1361）とされており、この年代を唐草21型式の下限とした。

表 10 西安寺造営に伴う瓦の変遷

年代	7世紀前半 西安寺の創建(金堂建立)	7世紀後半 金堂修理・塔建立・伽藍完成
軒丸瓦	<p>素弁蓮華文軒丸瓦</p>  <p>素弁1型式 素弁2型式 素弁3型式 素弁4型式 素弁5型式</p>	<p>単弁蓮華文軒丸瓦</p>  <p>単弁1a型式 単弁1b型式 単弁2型式 単弁3型式</p>
軒平瓦	<p>無文軒平瓦</p>  <p>無文1型式 無文2型式 無文3型式</p>	<p>三重弧文軒平瓦</p>  <p>三重弧3型式</p>
丸瓦		<p>行基丸瓦(丸瓦I)</p>  <p>I D-a1 I D-a2</p>
平瓦		<p>桶巻作り平瓦(平瓦I)</p>  <p>I D-a1 I D-a2</p>
鴟尾・鬼瓦・隅木蓋瓦	 <p>鴟尾</p>  <p>鬼瓦A種</p>	 <p>鬼瓦B種</p>  <p>鬼瓦C1種</p>  <p>鬼瓦C2種</p>  <p>鬼瓦D種</p>  <p>隅木蓋瓦A種</p>  <p>隅木蓋瓦B種</p>

8世紀後半 金堂修理	10世紀 金堂修理	11世紀後半～12世紀 塔修理	14世紀前半 (金堂廃絶) 塔修理 (塔廃絶)
 <p>単弁4b型式</p>	 <p>単弁5型式</p>	<p>巴文軒丸瓦</p>  <p>左三巴1型式</p>  <p>右三巴1型式</p>	
<p>唐草文軒平瓦</p>  <p>唐草1型式</p>	 <p>唐草4a型式</p>  <p>唐草4b型式</p>	 <p>唐草5型式</p>  <p>唐草6型式</p>	 <p>唐草21型式</p>
<p>玉縁丸瓦(丸瓦II)</p>  <p>II C1-a1</p>		 <p>II C1-b</p>	 <p>II C1-a3</p>  <p>II D-a2</p>
	<p>一枚作り平瓦(平瓦II)</p>  <p>I C1-a</p>  <p>II C1-c2</p>  <p>II C1-c1</p>  <p>II A3-c</p>		

2 伽藍の復元と推移

■ **伽藍配置** 舟戸神社の境内地を中心とした第3次から第11次の発掘調査によって、西安寺に関する建物として塔、金堂、東回廊、南回廊の遺構が確認できた。塔の北に配置された金堂が東西方向に棟をもち、塔と金堂を回廊が囲うことから、西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置を基本とする寺院であった。

基本とすると評価しているのは、一般的には塔の南に配置される中門の所在がなお不明で、伽藍の向きが確定していないためである。南回廊と判断している遺構が中門に当たる可能性があるものの、第3次調査2区の結果から回廊幅を上回る基壇を復元することができず、さらにその南側は舟戸山の丘陵が張り出していて南門を配置する空間としては狭い。また、石田茂作氏が『飛鳥時代寺院址の研究』などにおいて西向きの伽藍配置を推定しているように、西に中門があったことも考えられるが、こちらは遺構の残存状況が悪く確認が難しい。

このように、南と西で中門の遺構が確認できていないのに対して、金堂の北方では多くの情報が引き出せている。金堂北方では版築状に盛土することで

伽藍地を北に広げており、伽藍中軸線上から木製灯籠の柱根1基と柱穴3基が検出された。柱穴は3基にとどまらずさらに続く可能性があり、柱穴を掘立柱建物による講堂に想定することが可能である。また、西安寺跡の北約200mを流れる大和川に門戸を開いた中門となる可能性も捨て切れない。ただし、伽藍中軸線上に柱列が配置されるということは、偶数の柱間をもつ建物になるため、それが講堂・中門のいずれであっても特異な形式である。

以上のことから、舟戸神社境内地を中心に発掘調査した現段階においては、西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置を基本とすると評価している。それでは、これまでの調査報告を踏まえて、西安寺伽藍の建立、修理、廃絶に至る推移を見通しておくこととする。

■ **伽藍の選地** 西安寺が建立されたのは、舟戸山と呼ばれる丘陵の西麓である。舟戸山は、奈良盆地西南部を縦走る馬見丘陵の北端に当たり、頂部の標高は約80mである。西安寺は標高約43m付近で、現在、瓦谷池と称する山池（谷筋に1本の堤を築いて水を溜める池）が築かれ、水田が開かれるような舟戸山の谷の先、いわば小さな扇状地のような地形にある。さらに細かく見れば、第3次調査2

区で1.8mの深さまで掘っても地山が確認できなかったように、この扇状地の南端にはさらに小さな谷筋が通っている。対して北端は大和川に向かって緩やかに下っている。つまり西安寺は、舟戸山の谷先に広がる小さな扇状地のなかでも、中央の微高地を選んで創建された。

■ **伽藍の地業** この微高地をうまく利用しているのが塔・金堂である。塔・金堂では、まず建立地を掘り残すようにして周囲の地山を削り出し、さらにその上に盛土して建立地面を高くする地業（15層）を行っていると思われる。地山が南東から北西に下るので、塔の東端付近で約8cm、金堂の西端付近では約50cmの厚さで盛土地業を検出している。地山を削り出した上に盛土する地業を選択しているのは、谷先の土地が雨水の影響を受けやすいためであろう。

盛土地業と見ているのは、全体に干裂痕が認められ、長期間にわたって天日で乾燥させていたと考えられること、また、土色が暗褐色で土質がシルト～粘土質と均質であり、さらに干裂痕に細粒砂が入り込んでいる様相が塔・金堂の双方で同じ状況にあるからである。とくに、第6次調査3区の西回廊想定地から検出した干裂痕のある暗褐色盛土は、推定できる西回廊部分にしかなく、西回廊より外の第6次調査2区にはなかった（写真79）。このことから、地山削り出しと盛土による地業は、塔・金堂・回廊の広範囲で同時に行われたと考えられ、当初から伽藍全体のプランがあったと判断できる。金堂が建立されて西安寺が創建されるのと同じ7世紀前半に行われた地業であろう。

■ **金堂の建立** こうした地業の上にまず建立されたのが金堂である。調査で確認できた金堂基壇（14層）は、東西14.07m（46.9尺）×南北12.18m（40.6尺）で乱石積基壇外装をもつ。第11次調査1区の基壇断ち割り部分では基壇の高さが1.0mあり、5～12cm程度の層を重ねた版築によって築かれている。

金堂跡で検出した礎石は東面側柱列の2個のみであるが、合わせて北面・東面・南面の基壇端が確認できたこと、伽藍配置が四天王寺式で中心軸が判明したことから金堂の建物を復元することができた。すなわち、金堂は桁行5間×梁行4間で、桁行3間×梁行2間の身舎の四面に1間の庇が取り付く。身舎の柱間は桁行の中央間・脇間、それに梁行もすべ

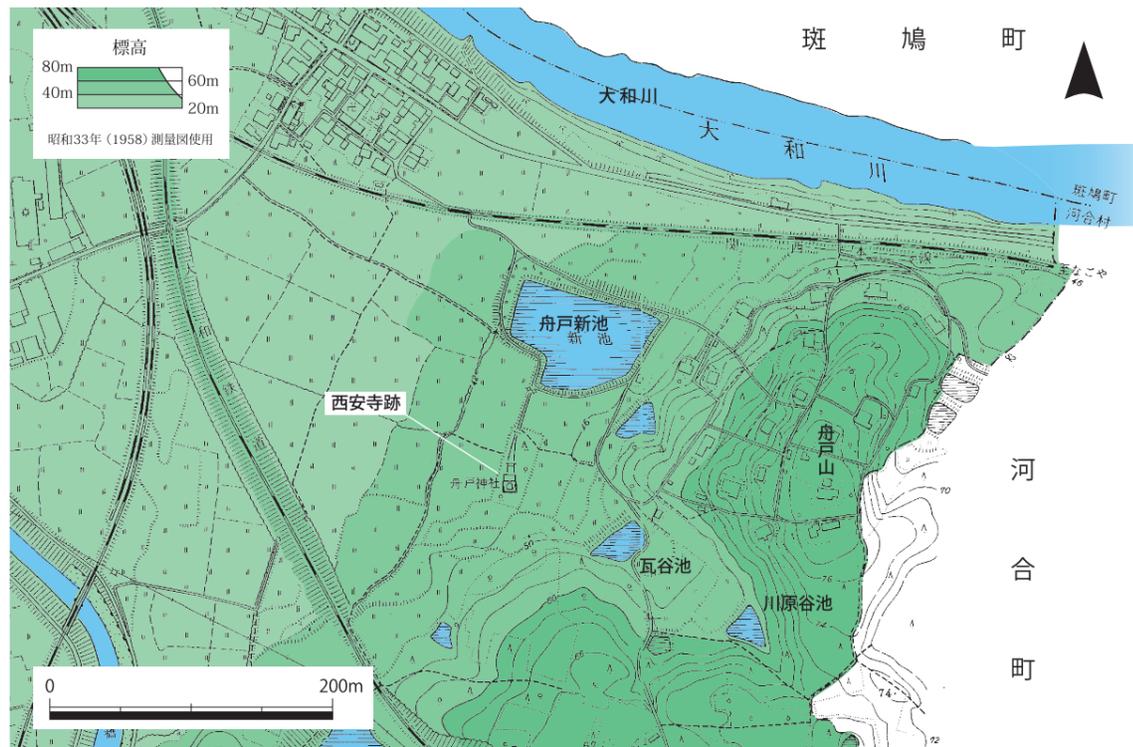
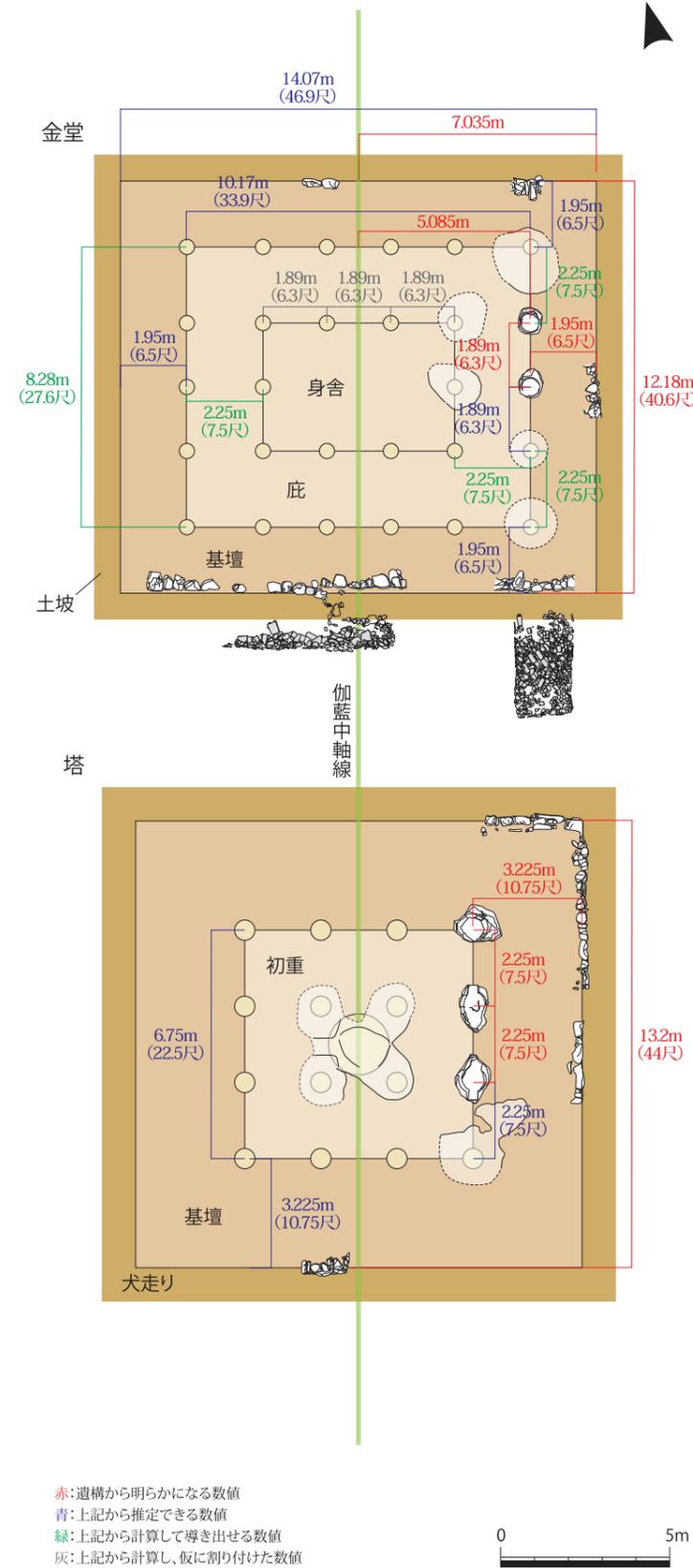


図39 西安寺の立地 (1/5,000)



赤:遺構から明らかになる数値
 青:上記から推定できる数値
 緑:上記から計算して導き出せる数値
 灰:上記から計算し、仮に割り付けた数値

図40 塔と金堂の寸法復元 (1/200)

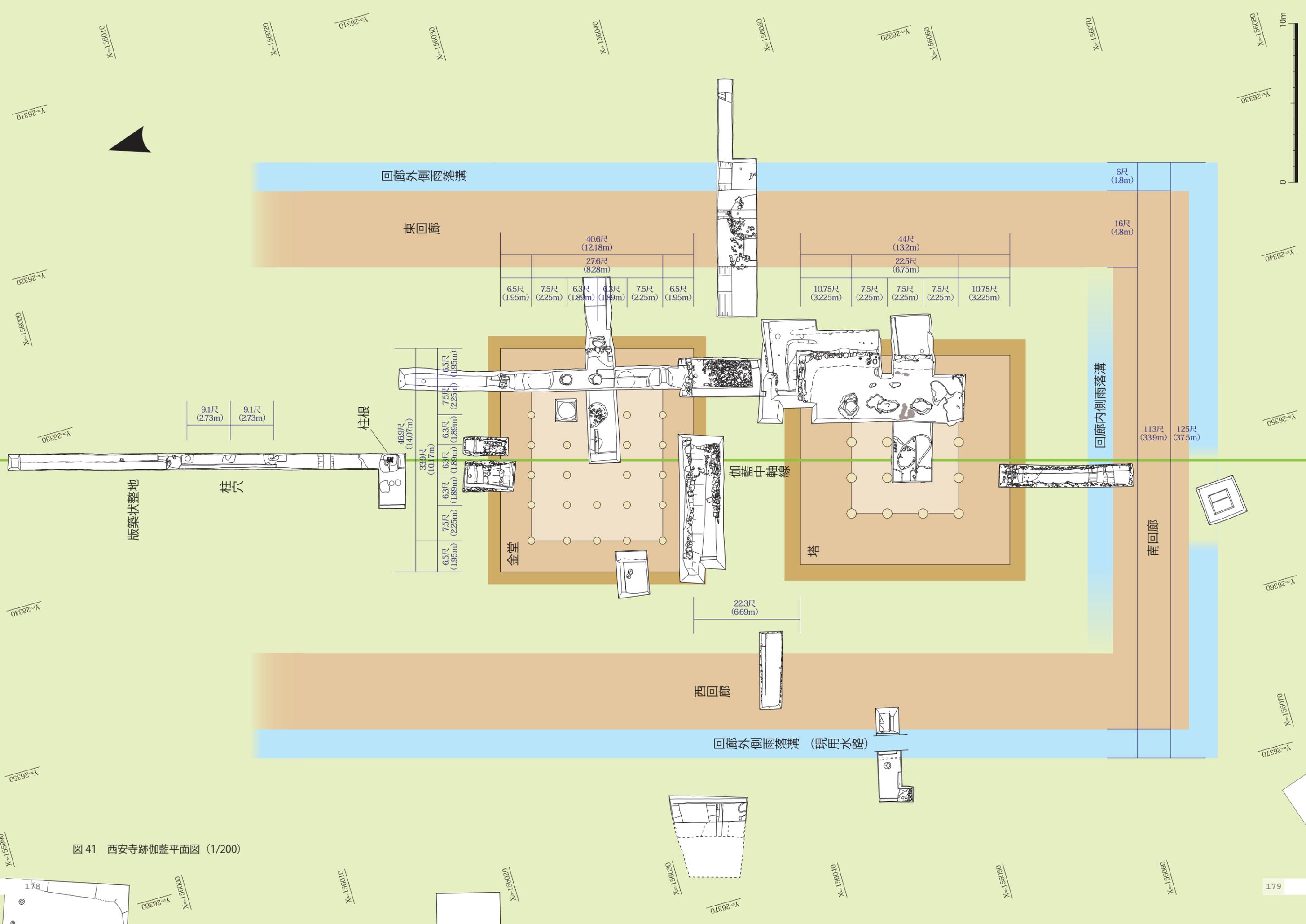


图 41 西安寺跡伽藍平面圖 (1/200)

て1.89 m (6.3 尺) であるのに対して、庇の柱間
が桁行・梁行ともに2.25 m (7.5 尺) となる。身
舎の柱間に比べて庇のそれが大きい、基壇東端
から東面側柱礎石までの基壇の出が1.95 m (6.5 尺)
であること、梁行の中央2間分の柱間が検出した2
個の礎石から1.89 m (6.3 尺) であること、さら
に検出した基壇の北端から南端までの距離が12.18
m (40.6 尺) であることが明らかになっているた
め、このような庇の柱間が大きい建物の復元になる。
金堂の建物は桁行10.17 m (33.9 尺) × 梁行8.28
m (27.6 尺) の規模である。

後述するように、乱石積基壇外装はのちの時代の
改修によると考えられるもので、その外装下段につ
くられた土坡から素弁3型式と同4型式の素弁蓮華
文軒丸瓦が出土し、それらは塔跡から出土しないこ
とから、金堂だけが先にこれらの瓦が使用されて7
世紀前半に建立され、西安寺が創建された。鷗尾の
出土から、より具体的に630年代の金堂建立を見
通すこともできる。金堂跡出土の素弁3型式と同1
型式の素弁蓮華文軒丸瓦は、法隆寺若草伽藍所用の
ものと同範である。第4次調査では、検出した礎石
の周囲を部分的に断ち割り、据え直した痕跡がない
ことを確認している(写真56)、金堂の柱配置
は7世紀前半の建立当初からのものである。金堂跡
では凝灰岩の破片が多く出土しており、乱石積に改
修されるまでの基壇外装は、凝灰岩の切石積基壇で
あったと推定されるが、規模は不明である。

■ **塔の建立** 金堂の次に塔が建立された。調査
で確認できた塔基壇(13層)は、一辺13.2 m (44 尺)
で乱石積基壇外装をもつ。第3次調査において心礎
抜取穴と4基の四天王柱礎石抜取穴、それに第7次調
査において東面の側柱礎石3個と1基の側柱礎石抜
取穴、北面・東面の基壇端が確認できているので、
塔の建物が復元できた。塔は初重が1間2.25 m (7.5
尺) の3間等間で一辺6.75 m (22.5 尺) である。
基壇東端から東面側柱礎石までの基壇の出は3.225
m (10.75 尺) で、軒が深い印象を受けるが、裳階
が取り付いたような痕跡は確認できていない。基壇
の高さは1.2 m である。基壇の断ち割りを行って
いないので詳細は不明であるが、現状の乱石積基壇外
装は金堂と同じくのちの改修であることが予想され
る。乱石積基壇の葛石に凝灰岩が使われているのも
確認できたことから(図9)、これも金堂と同じく
建立当初は凝灰岩の切石積基壇外装であったと考え

られる。

塔は金堂に比べると礎石、柱間、建物、基壇とす
べてひと回り大きい規模である。その意味では金堂
と同時代に設計されたものではないと考えることが
できるが、地山削り出しと盛土による地業が金堂と
塔で同時に行われており、塔と金堂の大きさのアン
バランスは当初からのプランであったといえる。金
堂・塔ともに、造営尺が1尺=30.0cm と考えれば、
発掘調査で確認できた柱間や基壇寸法がすべてうま
く処理できるのもそれを裏付けているだろう。乱石
積基壇外装は当初からのものではないが、元の造営
尺に依拠しつつ改修されたようである。

西安寺跡の発掘調査において飛鳥時代の瓦で最も
多く出土するのが単弁2型式の単弁蓮華文軒丸瓦と
三重弧1型式の重弧文軒平瓦である。塔跡からは素
弁蓮華文軒丸瓦が出土しないことから考えると、塔
が建立されたのはこれらの瓦の時期の7世紀後半
で、心礎が地上式であることも考慮すれば、7世紀
末から8世紀初頭と推定でき、金堂の建立よりも時
期が下る。単弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦は、塔
と金堂の規模の大小に符合するように、瓦もまた大
小のサイズが出土しており、塔の建立で大きいサイ
ズの単弁1b型式・同2型式・同3型式の軒丸瓦と
三重弧文軒平瓦(こちらは同じ型式で大小両方のサイ
ズがある)が使用されるとともに、小さいサイ
ズの単弁1a型式の軒丸瓦と三重弧文軒平瓦は金堂に
使用されたと見られる。つまり、塔の建立に合わせて、
金堂では瓦の葺き替えを伴う修理が行われたと
考えられ、瓦の前後関係からいえば、先に金堂が修
理され、のちに塔が建立された。金堂の北方におけ
る造成時期も踏まえると、全体的な伽藍完成に向け
て、まず金堂の修理に着手したと推測できる。

■ **金堂北方の造成** 7世紀後半から末、8世紀
初頭にかけて金堂が修理され、塔が建立されたこと
に加えて、金堂の北方が盛土(12層)され、北に
伽藍地が新しく造成された。金堂の北方は大和川に
向かって地山が緩やかに下っていくところであり、
そこに非常に丁寧に、版築のように厚さ10cm 前
後の層を最大7層重ねて整地されている。整地土か
らは、TK217の須恵器杯蓋や飛鳥Ⅱ期の須恵器杯
H蓋などが出土した。

四天王寺式伽藍配置では金堂の北に講堂を置く
のが一般的であるが、塔・金堂と同様の乱石積の外
装をもつ基壇がないのは明らかである。ただし、第

表11 塔・金堂規模の比較

(塔) 単位 (m)

寺院名	中央間	脇間	初重一辺	基壇一辺	基壇の出	年代
西安寺跡	2.25	2.25	6.75	13.2	3.225	7世紀末～8世紀初
尼寺北廂寺	2.36	2.36	7.08	13.80	—	670年頃
法隆寺 (西院伽藍)	2.68	1.86	6.42	13.80	3.69	7世紀後半～8世紀初
法起寺	2.65	1.88	6.41	11.65	2.62	706年
法輪寺	2.42	1.97	6.36	13.22	3.43	7世紀前半～後半
山田寺跡	2.38	2.07	6.52	12.8～12.9	3.14～3.19	676年
川原寺跡	2.02	2.02	6.06	11.69	2.82	7世紀後半 (数値は鎌倉中期の再建のもの)
橘寺跡	2.24	2.36	6.96	12.30	2.65～2.78	7世紀中期
本薬師寺跡 (西塔)	2.40	2.40	7.20	13.50	3.15	7世紀後半
當麻寺 (東塔)	2.12	1.60	5.32	12.29	3.48	8世紀後半
當麻寺 (西塔)	2.01	1.61	5.23	—	—	8世紀末～9世紀初

* 『西安寺跡第7次発掘調査報告書』、太田博太郎編『塔婆1』、奈良文化財研究所編『韓・中・日古代寺址比較研究(Ⅰ)―木塔址編―(日本語版)』から作成

(金堂) 単位 (m)

寺院名	建物								基壇		年代
	桁行× 梁行 (間)	桁行	梁行	桁行柱間			梁行柱間		桁方向	梁方向	
				中央間	脇間	端間	中央間	端間			
西安寺跡	5×4	10.17	8.28	1.89	1.89	2.25	1.89	2.25	14.07	12.18	7世紀前半
四天王寺	5×4	—	—	—	—	—	—	—	19.32	15.87	6世紀後半
中宮寺跡	5×4	13.00	10.40	2.60	2.60	2.60	2.60	2.60	17.30	14.10	7世紀前半
山田寺跡	3×2	14.50	11.50	4.84	4.84	—	5.75	—	21.60	18.50	643年
川原寺跡 (中金堂)	5×4	16.75	11.96	3.59	3.59	2.99	2.99	2.99	23.63	19.39	7世紀中期
檜隈寺跡	5×4	13.92	11.38	2.72	2.72	2.88	2.81	2.88	17.95	15.50	7世紀後半
法隆寺 (西院伽藍)	5×4	14.02	10.79	3.236	3.236	2.157	3.236	2.157	23.63	20.90	7世紀後半

* 『西安寺跡第8次発掘調査報告書』、奈良文化財研究所編『東アジア古代寺址比較研究(Ⅱ)―金堂址編―(日本語版)』から作成



写真 200 北向きに祀られる舟戸神社

9次調査1区で整地土上から3基の柱穴が検出でき、柱穴はさらに北側に増加する可能性もあって何らかの建物が存在したと考えるべきである。柱間は2.73 m (9.1 尺) の等間隔で、塔のそれよりもさらに大きい。これが掘立柱建物による講堂の一部となる可能性もあるが、柱穴が伽藍中軸線上に位置しており、桁行が偶数の柱間をもつ建物を復元することになる。

また、金堂基壇の北端から6.96 mの地点からは4本の添柱をもつ柱根が検出された。柱根もまた伽藍中軸線上に位置することから幢竿遺構ではなく、木製灯籠の竿であると考えている。木製灯籠ならば、どの仏に献灯するのかが問題になる。西安寺は南向きの四天王寺式伽藍配置を基本とするので、金堂北方を版築状に整地したのは掘立柱建物による講堂を建立するためであり、講堂内の仏に献灯する灯

籠であると考えてるのが妥当だろうか。もう1つ考えておくべきは、版築状整地上に建立されたのが掘立柱建物による中門であり、北から金堂内の仏に献灯する灯籠であったことである。そうすると、金堂内の仏像も北面していたことになり、北から中門、金堂、塔が配置される極めて特異な伽藍配置を想定しなければならない。西安寺の北には河内と大和を往来する重要な交通路である大和川が流れているので、可能性がまったくないとはいえないだろう。現在の舟戸神社でも北にある拝殿から北向きに祀られる本殿を拝している。3基の柱穴は、塔・金堂の伽藍を閉じる北回廊の可能性も考えられるが、そうすると東回廊の基壇幅4.8 m (16 尺) よりも大きくなり、かつ複廊の構造になるので考えにくい。木製灯籠は、金堂基壇北端と金堂北方に想定される掘立柱建物南端(3基のうち最も南にある柱穴1)のほぼ中央に位置しており、南北のいずれの建物の仏に献灯するためのものであるのか判断しにくい状況にある。なお、掘方からの出土遺物によって、木製灯籠は8世紀前後に建立されたと考えられる。

■ 回廊の整備 第9次調査2区、第10次調査2区でそれぞれ東回廊、南回廊の一部を検出した。東回廊は基壇の幅が4.8 m (16 尺) で、回廊の外側・内側に雨落溝が伴う。外側雨落溝は幅1.8 m (6 尺) で、内側雨落溝は溝底で幅1.0 mあるが、塔・金堂側は明瞭な溝の上端が認められなかった。塔・金堂にも雨落溝がなく、基壇に沿ってつくられた土坡や犬走りから外側に傾斜して下る状況を検出している。雨水は回廊内側の雨落溝に傾斜でもって流れ込むようになっていたと考えられる。東回廊では礎石や柱穴は検出されなかったため、建物については不明である。

西回廊は第10次調査1区で確認を試みているが、削平があつて遺構は検出できていない。しかし、伽藍中軸線で東回廊を折り返せば、回廊外側の雨落溝が現在の舟戸神社境内の西端を北に流れるコンクリート用水路と合致するので、西回廊の存在が想定できる。第6次調査3区では干裂痕を伴う暗褐色の盛土地業(15層)を検出している。やはり西回廊の存在がうかがえ、これらのことからすると、石鳥居から北に延びる舟戸神社参道も西回廊の痕跡ではないかと想定される。

南回廊は第10次調査2区で約1.0 m分の基壇を検出した。位置的に塔の南に配置された中門の基壇に当たる可能性があるが、第3次調査2区によって東回廊で確認できた回廊幅以上に基壇の南北幅が大きくな

ないことがわかっているので、南回廊基壇の一部であると判断している。

使用されたものかは不明であるが、東回廊の外側雨落溝から忍冬蓮華文軒丸瓦が出土するなど、東・南・西の回廊は7世紀後半から8世紀に入る頃に建立されたと考えられる。したがって、金堂の修理から塔の建立、金堂北方の造成、回廊の整備が一連の伽藍造営であり、7世紀前半の地山削り出しと盛土地業、金堂の建立からようやく伽藍が整った。あるいは木製灯籠の建立が西安寺伽藍の完成を示しているのかもしれない。

■ 金堂の大規模修理 こうして西安寺の伽藍が完成した後、10世紀になって金堂が大規模に改修された。金堂跡からは基壇南面側で屋根からすべり落ちたような状態の瓦が大量に出土(7層)しており、そこに唐草4型式の均整唐草文軒平瓦が多く含まれていた(図19)。唐草4型式は、単弁5型式の単弁蓮華文軒丸瓦と組み合うものと見られ、同時期の平瓦や鬼瓦も出土し、多種の瓦が製作されていることから(表10)、これらの瓦の時期に屋根を大きく葺き替えるような修理があつたと考えられる。

また、金堂の基壇外装が当初の凝灰岩切石積から花崗岩を中心とする乱石積に変更されたのもこの時期であると推定している。第11次調査1区の水成堆積の砂層(6層)が認められた。おそらく豪雨等によって舟戸山から谷筋に沿って雨水とともに土砂が流れ込んだものと推定される。水成堆積砂層は塔と金堂の間から塔の東面付近以外には認められず、部分的な土砂の流れ込みだったようであるものの、約30~50cmの厚さで堆積して相当量の土砂が流入した。この土砂のレベルに合わせるようにして塔の南面を盛土(5層)し、境内地を整備したようである。金堂が倒壊して土砂が流入するまではほとんど時間的な経過がなく、盛土による境内整備もほぼ同時期に一連して行われたようである。西安寺は金堂が倒壊したのち、塔だけを整備して存続した。塔は出土瓦から、11世紀後半から12世紀と14世紀前半の2回修理されていることがわかっている。

■ 寺院の廃絶 しかし、やがて塔も15世紀に廃絶する。塔基壇の上面には10cm前後の厚さで炭・焼土層(4層)が堆積しており、塔の廃絶時に火災が伴ったことがわかる。ただし、この炭・焼土層からは軒瓦や壁土などが出土するものすべて小片であり、塔が焼失したままの状態が放置されたとはいえない。とくに塔基壇の外装付近は裏込めが見えるほどに削られた上に炭などが堆積している。つまり、塔は廃寺の際に解体等による片付け行為が行われ、再利用できるものはすべて持ち出されたのち、

えられるので、この時期に塔は修理されなかったと判断している。この事実を重く見るならば、塔の乱石積基壇外装への変更も別の時期を考えるか、あるいは塔は当初から乱石積基壇であったことも考えておく必要があるだろう。

■ 金堂の廃絶と塔の存続 そして、13世紀後半から14世紀前半頃に金堂が廃絶した。これは先述したとおり、金堂基壇南面側では屋根からすべり落ちたような状態の瓦が大量に出土し、金堂建物は倒壊したようである。大量に出土した瓦からは、単弁5型式の単弁蓮華文軒丸瓦と唐草4型式の均整唐草文軒平瓦による10世紀以降のものがなく、それを最後に大規模修理が行われなかったようで、朽損による倒壊が考えられる。また、基壇南側の倒壊瓦の他にも金堂では10世紀以降の瓦が出土しないので、金堂は再建されることなくこのときで廃絶した。廃絶の時期は、倒壊瓦の堆積層(7層)から出土した瓦器碗の年代による。

この金堂の倒壊に伴う瓦の堆積層の直上では、水成堆積の砂層(6層)が認められた。おそらく豪雨等によって舟戸山から谷筋に沿って雨水とともに土砂が流れ込んだものと推定される。水成堆積砂層は塔と金堂の間から塔の東面付近以外には認められず、部分的な土砂の流れ込みだったようであるものの、約30~50cmの厚さで堆積して相当量の土砂が流入した。この土砂のレベルに合わせるようにして塔の南面を盛土(5層)し、境内地を整備したようである。金堂が倒壊して土砂が流入するまではほとんど時間的な経過がなく、盛土による境内整備もほぼ同時期に一連して行われたようである。西安寺は金堂が倒壊したのち、塔だけを整備して存続した。塔は出土瓦から、11世紀後半から12世紀と14世紀前半の2回修理されていることがわかっている。

■ 寺院の廃絶 しかし、やがて塔も15世紀に廃絶する。塔基壇の上面には10cm前後の厚さで炭・焼土層(4層)が堆積しており、塔の廃絶時に火災が伴ったことがわかる。ただし、この炭・焼土層からは軒瓦や壁土などが出土するものすべて小片であり、塔が焼失したままの状態が放置されたとはいえない。とくに塔基壇の外装付近は裏込めが見えるほどに削られた上に炭などが堆積している。つまり、塔は廃寺の際に解体等による片付け行為が行われ、再利用できるものはすべて持ち出されたのち、

最終的に不要なものが塔基壇上で焼却されたと推測される。舟戸神社境内における塔・金堂跡の発掘調査では、瓦は多く出土するが仏具や埴仏などの遺物がほとんど出土しないのはそのためであると考えられる。

西安寺跡から出土する最も新しい軒瓦が唐草23型式の均整唐草文軒平瓦で、その年代である15世紀が塔の最後の修理であった。塔が廃絶して西安寺が廃寺になったのは、あるいは16世紀になってからであったかもしれない。西安寺に関する文献史料に永正10年(1513)「西安寺水田地作職売券」があり、そこに「西安寺」の肩書が見えるが、発掘調査の成果からいえば、この頃には西安寺は存続していなかった可能性が高い。

■ 舟戸神社の造成 西安寺が廃寺となった後、塔付近では炭・焼土層が長らく地表面にあったままで、17世紀になって舟戸神社の造成に伴う盛土(2層)が堆積した。塔より北側の金堂ではそれまでに礎石が抜き取られたことなどによる堆積(3層)も見られる。舟戸神社の創立は明らかでないが、近世には王寺村のうち舟渡組という集落の氏神であったと考えられるので、17世紀にはすでに存在したはずである。おそらく西安寺の廃寺と交代するように、あるいは西安寺に祀られた鎮守社を引き継ぐように氏神として創立されたのではないだろうか。

近代には、西安寺の礎石が大和川に架かっていた信光橋の基礎に利用されたり、庭石にするために掘り出されたりもした。王寺町出身で古瓦の収集家・寺院研究者として知られる保井芳太郎(1881-1945)は、西安寺跡でも掘削を伴う瓦の収集を行っていたと見られ⁽¹⁾、発掘調査では近代の土坑、とくに金堂跡で礎石の位置を的確に予測し、抜き取るようとして掘ったものの、深すぎて途中で断念したような土坑もあった。

■ 推定できる寺域 西安寺跡における第3次から第11次までの確認調査は、舟戸神社の境内地を中心に行ってきた。その結果、塔、金堂、回廊の遺構が確認でき、中心伽藍の様相が明らかになったが、一方で、中門がどこに位置するのか、講堂があったのか、北回廊がどこでどのように閉じるのかなど課題も多い。これらの課題については、今後、舟戸神社周辺で発掘調査を継続することで明らかにしていきたいと考えているが、合わせて西安寺の寺域についても視野に入れておく必要がある。そこで、現時点での

西安寺の寺域を推定しておくことにしたい。

西安寺の寺域を考えるのに、まず参考になるのが第1次調査で検出された南北方向の溝である。この溝は幅約3.4m、深さ約60cmで、その位置から寺院をめぐる築地塀の内側に沿った溝ではないかと指摘されている⁽²⁾。昭和23年(1948)撮影の空中写真(写真201)を見ると、ちょうど水田の区画になっているところである。

したがって、その築地塀が推測されるラインを寺域の西端とし、伽藍中心軸を起点に東端を想定してみると、同じく道路や水田で区画される南北のラインとおおよそ重なることがわかる。西安寺で使用された造営尺は1尺=30.0cmであるので、仮に方1町(360尺)として寺域の東西幅を108mで地形図に落とし込んでみると、図42のようになる。東端が道路・水田の区画ラインからややはずれているが参考になるだろう。東端を区画すると見られる水田には、南に張り出す丘陵によって長方形に近いかたちのものがあり、これが寺域の東南角に相当するのではないかと推定した。寺域の南北幅も方1町の108mで考えると、金堂建物の中心を基準にすることで、その地形に合わせることができる。西安寺の南北の中心軸がどこにあるのかもまだわかっていないので、あくまで現時点での推定である。

西安寺跡の周辺では、東に隣接するように瓦窯があったとされている。遺構が存在するのもまったくわかっていないが、南面する溜池は瓦谷池という名称で、西安寺の創建や伽藍造営に当たって瓦を供給した可能性が大いに考えられる。また、西安寺からは、かつて骨壺が出土したことも知られている⁽³⁾。高さ約18cmの把手の付いた須恵器短頸壺で、内面に骨灰粉があるという。奈良時代のものと考えられている。中心伽藍はもちろん、西安寺の寺域や周辺も含めて調査を継続し、実態を把握していく必要がある。

[注：2 伽藍の復元と推移]

- (1) 岡島永昌「保井芳太郎のコレクション形成とその背景」87-89頁。
- (2) 伊藤勇輔「北葛城郡王寺町西安寺跡発掘調査概報」。
- (3) 角田文衛「西安寺出土陶製骨壺について」。

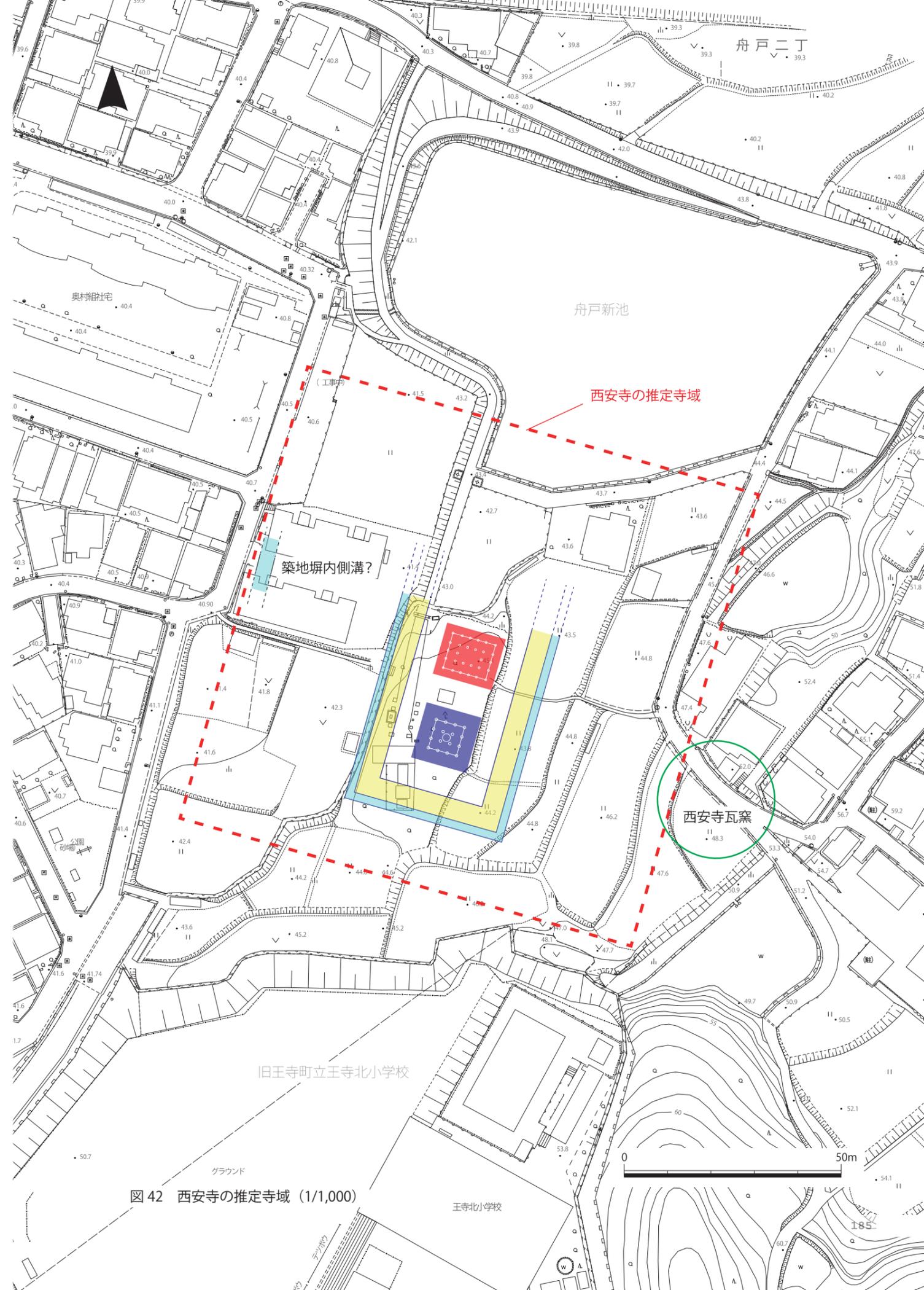


図42 西安寺の推定寺域 (1/1,000)

3 西安寺跡の歴史的意義

■ **西安寺の変遷** 西安寺跡の歴史的意義を考えるに当たり、ここまでの報告と検討によって明らかになった西安寺の変遷を改めてまとめておく。

飛鳥時代の7世紀前半に金堂が建立されたことで西安寺が創建され、7世紀後半から8世紀初頭にかけて金堂の修理、塔の建立、金堂北方の造成、回廊の整備、木製灯籠の建立などが継続的に営まれることで伽藍が完成した。

その後、平安時代の10世紀に基壇外装の改修を伴う金堂の大規模修理、11世紀後半から12世紀に塔の修理が行われ、鎌倉時代の13世紀後半から14世紀前半に朽損により金堂が倒壊し、以後、西安寺は塔のみで存続した。そして、室町時代の14世紀前半に再度、塔が修理されるものの、15世紀末以降に廃絶したことで西安寺は廃寺となった。

■ **大和川周辺の飛鳥時代寺院** 西安寺跡は大和川から南に約200mの位置にある。大和川は河内と大和、とりわけ飛鳥時代においては政治の中心地

である飛鳥と外交拠点である難波を結ぶ重要な水路で、生駒・金剛山地の東方にあって、大和川を通じた大和国の玄関口に当たる要地には、飛鳥時代から数多くの寺院が建立された。その1つが西安寺であり、他に大和川より北の斑鳩に法隆寺、中宮寺、法起寺、法輪寺、平隆寺が、大和川より南の片岡に片岡王寺、尼寺北麿寺、尼寺南麿寺、長林寺がある。

これらの寺院は、大和川の水路とともに陸路とも密接に関わっており、例えば、平隆寺は龍田道沿いに、法隆寺は龍田道と筋違道（太子道）の結節点にあって、西安寺と片岡王寺、尼寺北麿寺・南麿寺は斑鳩と当麻方面を結ぶ当麻道沿いにある。西安寺が建立された場所は舟戸山の西麓で、飛鳥時代の当麻道がどこを通過していたのかにもよるが、近世の当麻街道から見れば舟戸山を背にしている。

これらの寺院で最も早く創建されたのは、いうまでもなく法隆寺で、7世紀初頭に聖徳太子によって建立された。若草伽藍と呼ばれるそれは天智9年（670）に焼失し、7世紀後半から8世紀初頭にかけて西院伽藍が再建された。これと同じように、法



図43 大和川周辺の飛鳥時代寺院 (1/50,000)



写真201 昭和23年（1948）の西安寺跡周辺

*国土地理院の航空写真に加筆

写真202 平成20年（2008）の西安寺跡周辺

*国土地理院の航空写真に加筆



起寺や法輪寺、平隆寺、尼寺北廂寺・南廂寺、長林寺でも7世紀前半から寺院の創建が想定されるものの、伽藍が本格的に整備されるのは7世紀後半以降となる例が多い。

■ **西安寺の造営氏族** 西安寺がどの氏族によって創建され、維持されたのか。これまで文献史学から様々に検討されているが、その評価が定まるとはいえない。

昭和12年(1937)刊行の『大和王寺文化史論』では、西安寺が太子建立46か寺に数えられることを紹介しながら、大和川交通の要所にあるので豪族が居住していたはずであり、その氏寺であったとしている。

その後、昭和44年(1969)刊行の『王寺町史』でも同様に記述されるだけだったが、平成12年(2000)刊行の『新訂王寺町史』本文編では、西安寺を創建したのは渡来系の大原史氏おほはらのふひとであるとした。それは、仁安3年(1168)「大和国大原吉宗田地売券」において大原吉宗という人物が広瀬郡久度の条里のなかの西安寺の土地を先祖から相伝してきたとあること、奈良時代中頃の「勘籍断簡」において法隆寺門前あたりに相当する平群郡坂門郷に大原史氏が住人として見えること、それに渡来人がもたらした竈の神を祀る神社が久度にあり、西安寺の地を含む久度に渡来系氏族が居住したと考えられることを根拠にしている。

『新訂王寺町史』本文編では、西安寺の造営氏族を大原史氏としたことで、同寺から南西約900mにあった片岡王寺おほはらのまひとのそれを敏達天皇系王族の後裔である大原真人氏おほはらのまひとと見ている。それまで片岡王寺は、例えば『王寺町史』がそうであるように、持統8年(694)の紀年をもつ「金堂僧徳聰等造像記」から大原史氏を造営氏族と見ていたが、『新訂王寺町史』本文編では、近接する寺院の両方を同じ氏族が創建することは困難であるとして新説が提起された。具体的な論点としては、「金堂僧徳聰等造像記」の他に、葛下郡・広瀬郡が敏達天皇系王族の宮や墳墓が営まれ伝領される地域であったこと、放光寺(片岡王寺)に大原神殿があり、そこには臣籍降下して大原を賜姓された敏達天皇の孫・門部王を祀ると『放光寺古今縁起』に記されることなどがある。

さらに、『放光寺古今縁起』では、敏達天皇の第3皇女である片岡姫が宮を寺に改めて片岡王寺を創建したと記されることから、片岡姫とは『法隆寺



写真203 片岡王寺の系譜を引く放光寺

伽藍縁起并流記資財帳』に「金泥銅灌頂かたおかのみおやのみこと(金銅灌頂幡)を納めた人物として登場する「片岡御祖命」のことであり、それは舒明天皇の母である糠手姫皇女ぬかてひめのひめみことする説、つまり片岡王寺は彼女によって創建されたという説も出されている⁽¹⁾。

これに対して、やはり片岡王寺の造営氏族は、渡来系の大原史氏であるとの考えも改めて提唱されている⁽²⁾。「金堂僧徳聰等造像記」によって、片岡王寺に大原史氏の僧侶がいたことがわかるのを手がかりに、中世に撰述された『放光寺古今縁起』は細部まで信頼できるものではなく、大原神殿に関する記述は大原史氏が真人姓を假冒したものであると事例をあげつつ述べている。また、片岡御祖命の「御祖命」とは皇女でない女性と解釈するのが正しく、法隆寺に灌頂幡を納めた関係性からも、これも従来から指摘のあったとおり、片岡姫は聖徳太子の娘である片岡女王に当たるとして、片岡王寺は大原史氏が片岡女王を戴いて創建したと見ている。

西安寺に関しては、『新訂王寺町史』本文編の大原史氏の他にも、久度神社の祭祀を担っていたのが土師氏であるとの見解から西安寺も土師氏の氏寺であったとする説⁽³⁾、また、天長10年(833)『続日本後紀』で西安寺が僧綱の管轄となったのは、仁明天皇の外戚を顕彰するためであったとして、敏達天皇系後裔の難波皇子に関わる王族でのちの橘朝臣氏が創建したとする説も出されている⁽⁴⁾。

■ **発掘調査の成果から** ここまで述べてきた西安寺・片岡王寺の創建者に関する説は、西安寺跡で発掘調査を行う前の研究、または文献史学からの研究である。発掘調査の成果から、こうした議論をいかに



写真204 片岡王寺跡出土の片岡王寺式軒瓦

に発展させることができるのか、整理しておかなければならない。

西安寺は7世紀前半、日本の仏教寺院が飛鳥寺から法隆寺・四天王寺へと展開し、建立が広がり始めた端緒に創建された。このとき、西安寺にあったのは金堂だけであったが、盛土地業が広範囲であるように、伽藍を整備する意図は当初からもたれていた。この時期で注目されるのは、西安寺金堂に使用された軒丸瓦が法隆寺若草伽藍出土の6B・7Abと同範であることである。瓦当と丸瓦の接合方法の違いから、範だけが斑鳩から移動してきたと考えられ、聖徳太子が創建したとはいえないまでも、のちに太子建立46か寺に数えられるだけの関係性はあったと推測される。斑鳩・片岡の飛鳥時代寺院と同様、大和川の周辺に建立されたことに意味があり、交通と関わりつつ日本仏教の伝播・定着に寄与したと考えられる。西安寺跡から出土した素弁4型式の素弁蓮華文軒丸瓦と同範と見られるものが、片岡王寺跡から出土していることも見逃せない。

7世紀後半になると、西安寺は伽藍の完成に向けて動き出し、8世紀初頭には完成した。このときの伽藍整備に関わった氏族を明らかにすることはできないが、法隆寺を中心とする斑鳩の寺院とは異なる契機があったと考えられる。7世紀後半から始まった法隆寺の再建では、法隆寺式と称される複弁蓮華文軒丸瓦・均整忍冬唐草文軒平瓦が使用され、同様のものは中宮寺、法起寺、法輪寺、平隆寺、長林寺から出土するが、西安寺、片岡王寺、尼寺北廂寺・南廂寺では出土しない。同時期に西安寺、片岡王寺、尼寺北廂寺・南廂寺の片岡の寺院で使用されたのは

単弁蓮華文軒丸瓦で、反対にこちらは法隆寺など斑鳩の寺院では出土しない⁽⁵⁾。法隆寺の再建は、聖徳太子の顕彰の意味もあったと考えられるが、片岡ではそれと異なる意図でもって伽藍が整えられていった。

片岡地域特有の単弁蓮華文軒丸瓦は16弁で、片岡王寺式と称されるように片岡王寺に代表されるものとして理解されていた。しかし、西安寺跡の発掘調査によって単弁1a型式から同1b型式、そして同2型式へ推移することが明らかになり、片岡王寺式は西安寺の単弁2型式と同範であるので、単弁蓮華文の源流は西安寺にあるといえる⁽⁶⁾。西安寺における7世紀後半の伽藍整備は、金堂の屋根葺き替えの修理から始められ、それによって金堂の軒先は、素弁蓮華文と無文軒平瓦から単弁1a型式の単弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦に変更され、軒丸瓦の文様でいえば斑鳩の影響が単弁蓮華文という片岡地域特有のものに刷新されたのである。このとき新しく建立された塔も単弁蓮華文と三重弧文の組み合わせであった⁽⁷⁾。

また、単弁16弁蓮華文が西安寺、片岡王寺、尼寺北廂寺・南廂寺に共通すると述べたが、細かく見れば、西安寺と片岡王寺では軒丸瓦の外縁が素縁であるのに対して、尼寺北廂寺・南廂寺の出土品は鋸歯文である点で異なる。さらにいえば、尼寺北廂寺・南廂寺で多く出土する坂田寺式の単弁8弁蓮華文軒丸瓦は、西安寺と片岡王寺では出土しない。同じ片岡地域であっても西安寺・片岡王寺と尼寺北廂寺・南廂寺とで差違が認められるのである。

これまで文献史学では、西安寺と片岡王寺の造営氏族を分けて考えられてきたが、以上のような単弁蓮華文のあり様が明らかになったことからすると、むしろ両寺院は同じ氏族が関わっていると考えた方が自然である。

片岡における1つの文化ともいえる単弁蓮華文は、西安寺では金堂の8世紀後半と10世紀に行われた修理でも引き継がれていった。弁は16弁から11弁に変更されるものの、平安後期から巴文が使用されるまで続いた。10世紀の修理では、凝灰岩切石積基壇外装が花崗岩を中心とする乱石積に改修されたと考えているが、造営尺は7世紀の金堂・塔の建立に用いた1尺=30.0cmが利用されていると見られる。こうした流れを文献史料とも照らし合わせるならば、中世に興福寺一乗院の末寺となるまで

は、同じ造営氏族が維持し続けた可能性がある。同じく興福寺一乗院領となった西安寺と放光寺の荘園が、非常に近い関係で文献史料に見えるのも、古代からの関係性が続いているためと推測できる。『放光寺古今縁起』では、焼失した鐘を興福寺が放光寺から奪い取り、今度は放光寺が西安寺から奪い取った。武力でもって強奪したというよりは、それまでの3寺の関係性を前提にした「奪取」であり「押取」ではなかったかと考えられる。

7世紀後半以降に伽藍を完成させ、以後も維持し続けた造営氏族が7世紀前半に西安寺を創建したのかといえば、慎重な検討が必要である。なぜなら、斑鳩の素弁蓮華文から片岡の単弁蓮華文への変化を、同じ氏族による仏教文化の端緒から成熟への変化と見ることもできれば、造営氏族そのものが交代したと見ることもできるからである。

■ **西安寺跡の歴史的意義** 西安寺の遺跡が現代にまで保存されてきたのは、そこが舟戸神社の境内地となり、水田や宅地の開発から守られてきたからである。今、私たちは、西安寺跡という遺跡から、斑鳩の聖徳太子との関係・影響をもちながら日本仏教が伝播し、定着する過程を見ることができ、そこには大和川・当麻道による交通が深く関係していたことも知ることができる。その後、西安寺は単弁蓮華文という斑鳩と異なる軒丸瓦の文様を生み出し、片岡王寺とともに片岡地域特有の仏教文化をかたちづくっていく。このことは、大和から周辺の国々へ、また、中央から地方氏族への仏教の広がりを見るうえで重要な事例となる。

その意味でも、西安寺跡に建立当初からの礎石と改修後の乱石積基壇が金堂跡・塔跡の双方で良好に保存されていることは貴重で、この地域の歴史や文化にとってばかりでなく、広く飛鳥・奈良時代の仏教文化の展開を考えるうえにも、極めて意義深いものがある。舟戸山、大和川といった周辺の環境や関連する片岡王寺跡などとともに保存・活用を図っていくべきである。

【注：3 西安寺跡の歴史的意義】

- (1) 吉川敏子「片岡王寺創建者についての考察」、吉川真司「片岡四寺考証—片岡王寺・西安寺・尼寺南北麿寺—」43-48頁。
- (2) 東野治之「聖徳太子伝承と斑鳩」（『新修斑鳩町史』上巻、古代編第2章第3節）606-617頁。

- (3) 東野治之「聖徳太子伝承と斑鳩」611頁。
- (4) 吉川真司「片岡四寺考証—片岡王寺・西安寺・尼寺南北麿寺—」49-56頁。
- (5) 保井芳太郎『大和上代寺院志』、『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』、『三郷町平隆寺—（付）奈良市高畑町八王子神社出土懸仏一』、『長林寺』、『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』、『尼寺麿寺Ⅰ』、『尼寺麿寺Ⅱ』による。

なお、『大和上代寺院志』図版第42には、法隆寺の軒丸瓦として単弁2型式と同じ単弁蓮華文軒丸瓦が掲載されている。保井が収集品を誤って掲載したのではないかと推察するが、斑鳩の寺院で単弁蓮華文がまったく出土しないのかどうかは注視していきたい。

また、大和川より南に所在する長林寺では法隆寺式の軒丸瓦が使用されており、ここでいう片岡とは長林寺を除く大和川南岸の寺院を指していることを断っておく。

- (6) 現在のところ、片岡王寺跡で単弁1a型式・同1b型式の出土はないが、今後の発掘調査の成果によっては変わる可能性がある。
- (7) ただし、西安寺では単弁蓮華文の他に忍冬蓮華文軒丸瓦も使用されている。西安寺の文様とは異なるものの、忍冬蓮華文は中宮寺や法隆寺若草伽藍で出土しており、斑鳩文化の流入も認められる。

第6章 付論

- 1 西安寺出土重弧紋軒平瓦の系譜と年代
- 2 西安寺跡の石材の石種と採石推定地
- 3 出土柱材(木製灯籠)の樹種同定

西安寺出土重弧紋軒平瓦の系譜と年代

大脇 潔

1 重弧紋軒平瓦とは

古代の桶巻作り軒平瓦の中には、粘土円筒の分割前に、挽き型と回転運動を利用して瓦当面に複数の凹凸からなる弧線を重ねたものがある。これを型挽き（型引き・押し挽きなど）重弧紋軒平瓦と呼ぶのが一般的であるが、これとは別に、粘土円筒の分割後に挽き型で施紋したものもある。また一枚作りで挽き型を利用したものや、弧線を陰刻した木製の型（范）を押したものなど、一見、単純に見える重弧紋も、その製作技法は様々である。

東アジアの瓦の歴史を遡ると、重弧紋軒平瓦の起源は、北魏の都、洛陽に西暦 516 年に創建された永寧寺に求められ、これが百済の都、扶余の軍守里廢寺に伝えられた（大脇 2005）。いずれも厚さ 1～3 cm ほどの平瓦の広端面に回転運動を利用して二重弧紋を施し、凸弧線の下端にヘラや指頭を押して波状にしたものであり、両者ともに直線顎である。

一方、わが国の重弧紋軒平瓦の始まりは、桜井市の吉備池廢寺（639 年発願の百済大寺か）に萌芽的な三重弧紋をもつ直線顎の例が出現し（奈良文化財研究所 2003、以下、奈文研）、641 年の同山田寺例で段顎をもつ四重弧紋軒平瓦が登場した（奈文研 2002）。また明日香村川原寺例の段顎の四重弧紋軒平瓦は、およそ 660 年代という年代の定点をもち（奈文研 1960）、単弁蓮華紋を飾る山田寺式軒丸瓦や、複弁蓮華紋の川原寺式軒丸瓦の流行にともない、7 世紀後半から 8 世紀前半にかけて各地に広まった。

2 軒平瓦製作技法の研究小史

では、こうした重弧紋軒平瓦は、どのようにして作られたのであろうか。型挽き重弧紋軒平瓦は桶巻作りで作った平瓦の粘土円筒を母体とするので、その製作技法や、范で施紋する法隆寺の均整唐草紋軒平瓦などの研究史とともにたどる必要がある。以下、主要なものを発表順に紹介する。なお桶巻作りの桶とは、

細長い短冊形の板を綴じ合わせた円錐台形、ないしは円筒形を呈する桶状の内型（『天工開物』で円桶、『营造法式』で札圈）であり、以下、円錐台形桶、円筒形桶、あるいは単に桶と略称する。いずれも一か所の合せ目があり、そこをずらせば、桶の径を縮めることができる開閉式の構造になっている。

1 佐原真 1972 「B 瓦類」『船橋 I・II』平安学園考古学クラブ 真陽社

その詳細な註が 2 の論文の原型となった報告書。四重弧紋軒平瓦 B 類の写真図版第一七一 11・14・15 を見ると、凸面に叩きしめの円弧が明瞭に認められる。しかし、まだその製作技法には触れていない。

2 佐原真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第 58 巻 2 号 日本考古学会

この論文では、円筒形の桶の存在について述べたあと、その註 8 で「重弧紋軒平瓦に多い。懸案である重弧紋の施紋方法とも関連して追及の必要がある」と述べている。これから、1972 年頃には重弧紋が回転運動を利用して施紋されたことは認められながらも、まだその具体的な方法やタイミングが解明されていなかったことがわかる。

3 岡本東三 1983 「法隆寺天智 9 年焼亡をめぐって一瓦からみた西院伽藍創建年代―」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集 同朋舎

法隆寺の范施紋の均整唐草紋軒平瓦 216A 型式に、紋様の左右端が重なる例があることから、円錐台形桶と鑄造の環状范利用説を主張。

4 花谷浩・佐川正敏 1991 「飛鳥・白鳳の軒平瓦について」『伊珂留我』法隆寺昭和資財帳調査概報 13 法隆寺昭和資財帳編纂所 小学館

飛鳥時代を花谷、白鳳時代を佐川が執筆。花谷は、型紙使用の手彫り唐草紋軒平瓦 A は円錐台形桶に上方（瓦当側）が厚い粘土板を巻きつけた桶巻作り説、型紙を使わない B は円錐台形桶に下方（瓦当側）が厚い粘土板を巻きつけた桶巻作り説、蓮華紋の范を

押す 214 型式は円筒形桶使用説を提示した。佐川は製作実験の成果を踏まえ、范施紋の均整唐草紋軒平瓦 216A 型式について逆円錐台形桶を使用したと推定した。なお中川あやも二人の説を踏襲する（中川 2007）。

5 山本忠尚 1991「軒平瓦の創作」『研究論集IX』奈良国立文化財研究所

法隆寺の 216A 型式について、円錐台形桶に粘土板を巻きつけ、桶ごと上下反転させ施紋するという仮説を提示。

6 毛利光俊彦・佐川正敏・花谷浩 1992『法隆寺の至宝 瓦』昭和資財帳 15 小学館

手彫り唐草紋軒平瓦 206～211・305 と、紋様一単位分を彫り込んだ押し型を型押しする唐草紋軒平瓦 213、蓮華紋の范を押す軒平瓦 214、范施紋均整唐草紋軒平瓦 215・216 型式などが粘土板桶巻作りであると説明。技法の復元については紙数の関係から触れていない。

7 佐川正敏 1992「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える—東アジアの造瓦技術の比較研究 I」『日本中国考古学会会報』第二号 日本中国考古学会

北魏洛陽城と東魏・北齊の鄴城の波状重弧紋軒平瓦について、円錐台形桶に粘土紐を巻きつけ、桶ごと上下反転させ施紋するという仮説を提示。翌年の講演でもほぼ同じ説を述べている（佐川 1993）。

8 山崎信二 1993「桶巻作り軒平瓦の製作工程」『考古論集（潮見浩先生退官記念論文集）』

藤原宮の范施紋の偏行唐草紋軒平瓦について、円錐台形桶に粘土紐を巻きつけ、桶ごと上下反転させ施紋するという仮説を述べた。また奈良市姫寺廃寺出土の段顎の四重弧紋軒平瓦については、後述する須藤説を踏まえ、円筒形桶に粘土板を巻きつけ、桶を抜き取った粘土円筒を上下反転させて回転を利用して施紋したと説明する。

9 花谷浩 2001「たかが重弧、されど重弧—飛鳥地域出土重弧紋軒平瓦様式区分の一企図」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』Ⅲ 帝塚山大学考古学研究所

山田寺出土の四重弧紋軒平瓦について、瓦当面と平瓦部凸面に残る砂粒の動きの違いから、桶を抜き取った粘土円筒を一旦乾燥させ、上下反転して回転利用して施紋したという結論を導き出した。

10 山崎信二 2003「桶巻作り軒平瓦の製作

工程（再論）」『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社 8 の改訂版。前説を訂正し、藤原宮の偏行唐草紋軒平瓦は円錐台形桶に粘土紐を巻きつけ、桶を抜き取った粘土円筒を上下反転させ施紋するという方法を提示した。姫寺廃寺例については前説と同じ。

11 大脇潔 2005「老北京胡同薺紀行—東アジアにおける軒平瓦の変遷—」『古代撰河泉寺院論叢集』第 2 集 撰河泉古代寺院研究会 撰河泉文庫 北京市内の「重唇板瓦」の観察結果と製作実験に基づき、円錐台形桶に粘土板を巻きつけ、桶を抜き取った粘土円筒を上下反転させて重弧紋を施紋したという技法を提示。

12 佐川正敏 2006「宋・金時代における「粘土円筒上方范型押圧施文による軒平瓦」の発見」『アジア文化史研究』第 6 号 東北学院大学

中国の宋・金代の范施紋と重弧紋軒平瓦、および法隆寺の范施紋均整唐草紋軒平瓦を紹介し、7 と同じ円錐台形桶に粘土紐を巻きつけ、桶ごと上下反転させ施紋するという仮説を再説したもの。

なお、これ以外に姫寺廃寺出土の重弧紋軒平瓦片 53 点に関する須藤隆の口頭発表がある。これは 1975 年の奈良国立文化財研究所における中間発表であり、その後、諸般の事情で活字化されなかったが、瓦当面と、平瓦部や顎の凸面に残る砂粒の動きの違いから、粘土円筒の上下反転という工程の存在を初めて指摘した重要な観察記録である。その一部は、山崎 1993・2003 に紹介されている。

以上、半世紀に及ぶ研究史を駆け足で振り返ってみた。痕跡の解説から仮説が示され、実験を重ねつつ、しだいに正解に近づく様子が見えてきた。

3 重弧紋軒平瓦の製作工程の復元

重弧紋軒平瓦は、その平瓦部の凹凸面を削り、またナデて丁寧に仕上げ、第 1 次成形時の痕跡を消し去った例が多い。そもそも痕跡には残りやすいものと残りにくいもの、残らないものがあり、全工程を復元することは至難の業である。そこで必要となるのが東アジア各地における造瓦民俗例の観察記録と、それを参考にした工程や作業動作の洞察である。

こうした点に留意して各地の出土例を渉猟すると、まれに平瓦部の凸面の調整を省略し、叩きしめの円弧を残した例にめぐりあうことがある。一方、凸面や瓦当面に残る砂粒の動きを明記した例はほとんどな

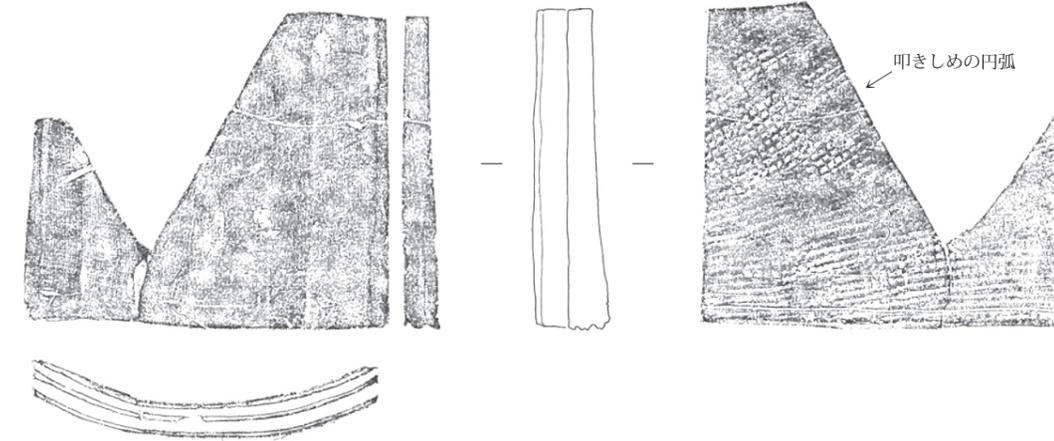


図 44 穴太廃寺出土三重弧紋軒平瓦 (1/6)

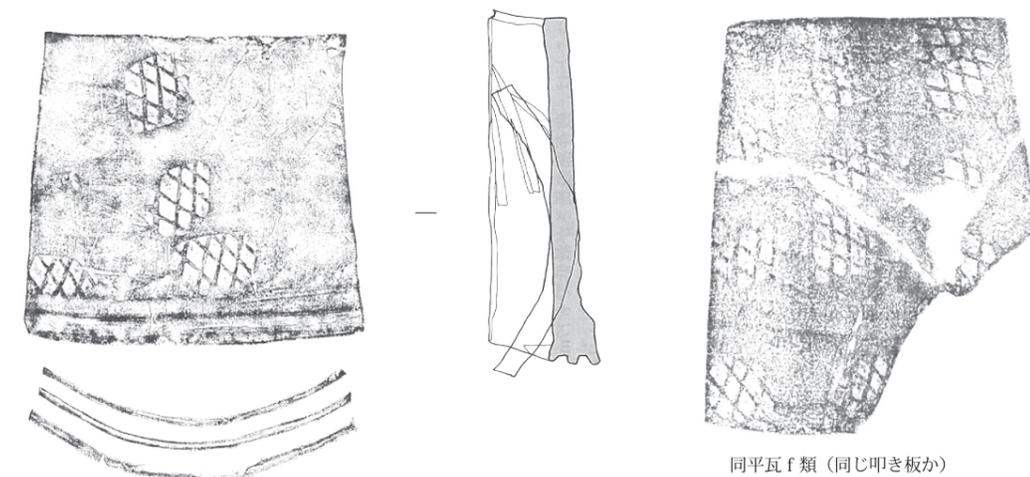


図 45 梶原瓦窯出土三重弧紋軒平瓦 (1/6)

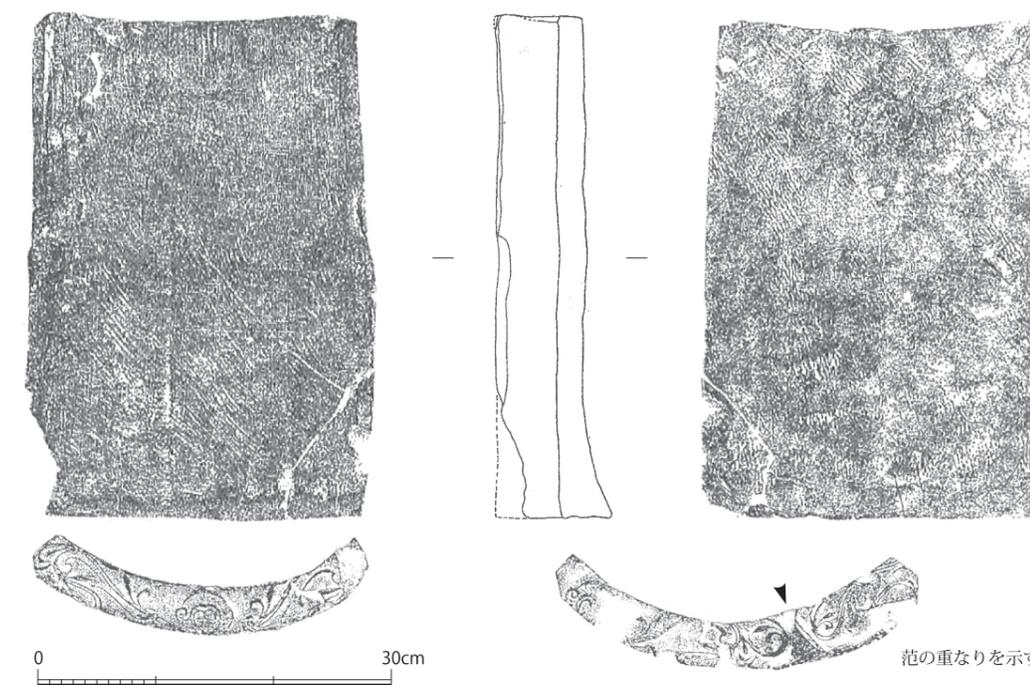


図 46 虚空蔵寺窯出土均整唐草紋軒平瓦 (1/6)

い。そこで、今回は手元の報告書の中から叩きしめの円弧を残す例を集め、また中国雲南省における造瓦民俗例の観察結果（大脇 2002・2003）と、研究史を踏まえると重弧紋軒平瓦の基本的な製作工程はつぎのように復元できる。ただし当然のことながら時代や地域による変異も多い。以下の記述は、わかりやすい痕跡を残し、併せて平瓦部の凹凸面の拓本や図が掲載されている大津市穴太廃寺の三重弧紋軒平瓦 31A 型式（図 1、滋賀県教育委員会 2001）と、高槻市梶原瓦窯の B 型式（図 2、名神高速道路内遺跡調査会 1997）、宇佐市の虚空蔵寺窯跡の法隆寺式軒平瓦 I 類（図 3、真野 2009）と、図 4 の山田寺の四重弧紋軒平瓦を例に図解を用いて説明する。いずれも右利きの工人が、粘土板を素材にした桶巻 4 枚作りである。

1 細長い短冊形の板（枠板・側板、この板、あるいはその痕跡を模骨・模骨痕と呼ぶのは誤用）に小孔を穿ち、撚り紐で連結した円筒形、あるいは円錐台形を呈する開閉可能な桶を回転台上に据える。

2 桶に平瓦 2 枚分の大きさの粘土板 2 枚を巻きつけ、叩き板で叩き、またナデで円筒形、あるいは円錐台形の粘土円筒を作る。穴太廃寺の三重弧紋軒平瓦 31A 型式は円筒形桶、梶原瓦窯の三重弧紋軒平瓦 B 型式と、虚空蔵寺窯跡の法隆寺式の均整唐草紋軒平瓦は円錐台形桶で、いずれも叩きしめの円弧を良好に残す。

3 直線顎の場合はそのまま、段顎の場合は広端部に粘土を接合して顎とし、叩きしめる。この際、ヘラで斜格子などのキズをつけて接合する場合もある。平瓦部の凸面や顎面をナデた部分には、右から左へ砂粒が動いた痕跡が残り、回転台は左回り（逆時計回り）に回されたことがわかる。

4 桶ごと粘土円筒を乾燥場まで運び、桶の合せ目を外し、その径を縮めて上に抜く。粘土円筒を天日、あるいは日陰で乾燥させる（第 1 次乾燥）。

5 粘土円筒は上（狭端部）からしだいに乾く。もちろん気候や天候による影響も大きいので、よく見張りながら上半部が持ち上げてもよいほどの強度に達したら、粘土円筒を上下反転し、広端面を上にして乾燥させる（第 2 次乾燥）。この時、広端部が潰れたり歪んだ場合は、当て具と叩き板で叩き円弧を補正する場合がある（補正の叩きしめ、大脇 2018）。両

手でこれを行う場合もあったと思われるが、その痕跡の確認はむづかしい。粘土円筒を作る瓦工以外に、この見張りや円弧の補正に当たる工人も必須である。

6 5 の直後、広端面を上にした粘土円筒を再び回転台上にのせる。回転軸を合わせるために粘土円筒の下端を固定するなどの目印や装置があったほうが便利であろう。この時、広端面が乾燥しすぎていれば、水を刷毛などで打って湿らせ、さらに広端面をヘラで削り、またナデたりして平滑にし、施紋に備える。重弧紋の表面を観察すると、かなり水分を含んだ柔らかい状態で施紋していることがわかる。瓦の成形には常に水が必要であり、含水率の調整が重要なのだ。

7 右手に断面櫛歯状、あるいは波状に加工した挽き型（引き型・回し型・木型・型板など）を持ち、左手で回転台を手前に引いて逆時計回り（左回転）に回しながら挽き型を粘土円筒の広端面に押し付け、回転運動を利用して重弧紋を施紋する。滑らかに仕上げられた重弧紋の場合は観察が難しいが、基本的には砂粒が右から左へ動いた痕跡が残る。3 と 7 の工程で生じた砂粒の動きが左右逆になるのは、粘土円筒を上下反転させたためであり、この痕跡が残る重弧紋軒平瓦は、粘土円筒を上下反転させて作ったことが証明できる。軒平瓦が広端面を下にして葺くようになったのは、以上の製作技法と関連する可能性が高い。

8 施紋し終った粘土円筒を変形しないように狭端部を持ち上げ、乾燥場に運び乾燥させる（第 3 次乾燥）。8 の直後、あるいは全体が変形しないところまで乾燥したら、分割界線を目安に分割線を入れ、さらに乾燥させる。

9 ほぼ乾燥し終わったら、粘土円筒を外側から叩くなどすると、分割線に沿って 4 枚に割れ、軒平瓦 4 枚ができる。分割破面や側縁を削って形を整える（最終調整）。

10 瓦当面向上に向けた状態で並べ乾燥させる（第 4 次の最終乾燥）。完全に乾いた軒平瓦（白地）を屋内に保管し、焼成に備える。

このように、重弧紋軒平瓦は粘土円筒の乾き具合と湿り具合をこまめに見極め、最適の状態ですべて上下反転し、施紋、調整という工程を経て完成する。そもそも瓦は型を利用して同形態、同曲率の粘土製品を量産する必要があり、以上の工程はこうした目的を合理的に追求する過程で編み出されたのであろう。したがっ

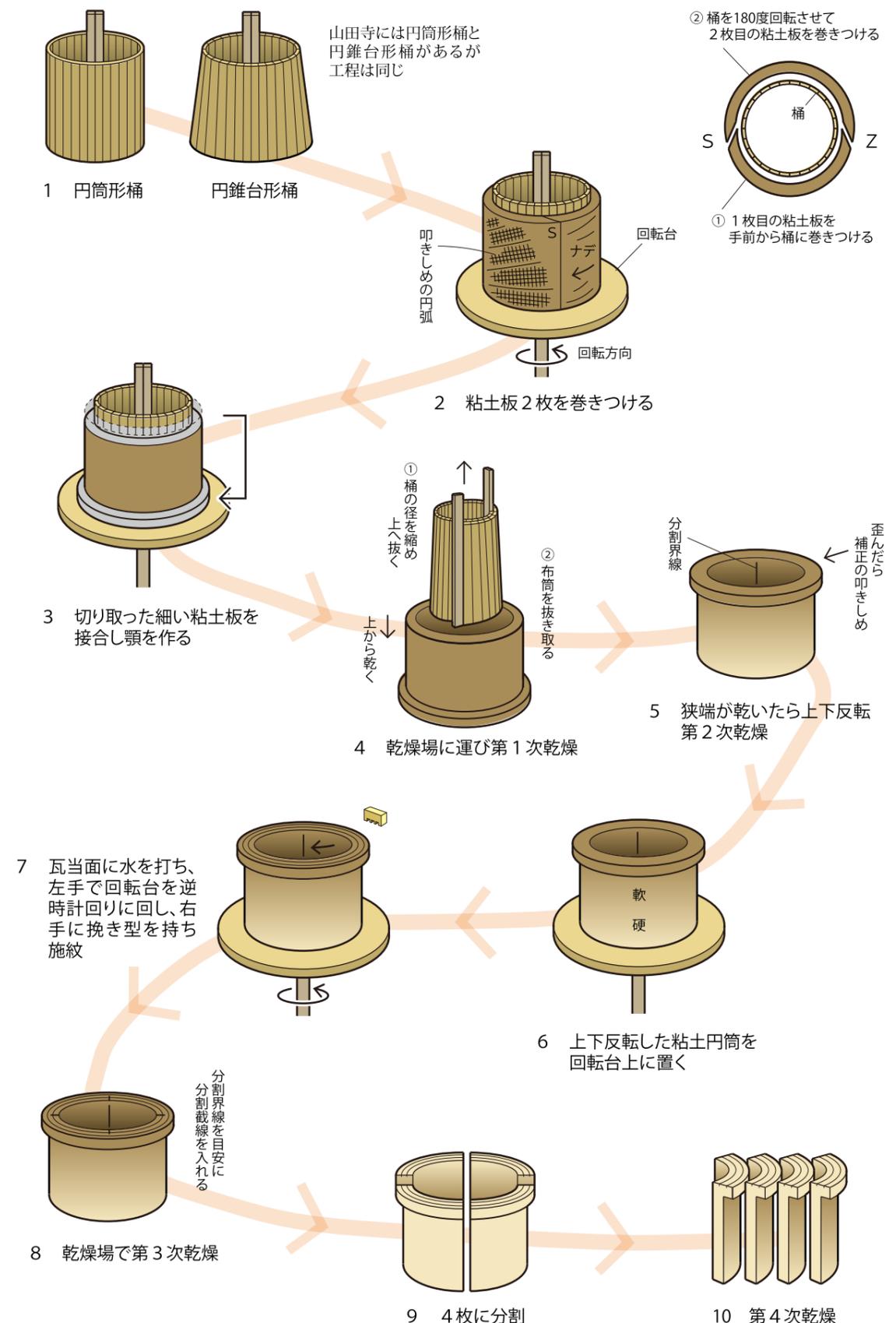


図 47 図解 山田寺出土四重弧紋軒平瓦の製作工程

て、研究小史で回顧した逆円錐台形桶使用説の4や、桶ごと粘土円筒を上下反転させる5・8・12の説は、乾燥のタイミングや量産に適しているかなどの観点からの再検討が必要となろう。

4 西安寺出土重弧紋軒平瓦の観察と組み合わせ軒丸瓦

西安寺出土の重弧紋軒平瓦はすべて三重弧紋である（以下、細部の観察は本報告書第4章参照のこと）。凹凸の深さや幅の違いによって6種類の挽き型の存在が識別できる。挽き型は木製で片手で持ちやすい厚さの板に波状の刻みを削り出したものと思われ、広端部の凹凸面には、挽き型が深く被ったことを示す痕跡が残る。挽き型は使用中に急速にすり減り凹凸に変化が生じる。粘土中の微細な砂粒は、挽き型に引っ掛って向かって右→左への動きを示す。

西安寺出土の重弧紋軒平瓦の特徴は、その縦断面形によく表れており、あらかじめ用意した、広端面と狭端面の厚さに差がない粘土板で作られている（図27-61）。これを直線顎と呼び、段顎や曲線顎と区別する。

凹面の観察 縦方向のケズリとナデを施す例が多いが、側板の段差や、粘土板の合せ目Z、布筒の綴じ合わせ目（佐原1972）、糸切り痕Ur（大脇2018）などが確認できる。

凸面の観察 ナデによって叩き目は観察できない。茅負と瓦座に塗ったベンガラが筋状に残る例がある。西安寺例は、凸面調整が徹底しており、その全工程を復元することはむづかしい。しかし3で述べた重弧紋軒平瓦の製作技法と矛盾する点はなく、基本的に同じ技法で作られたと推定できる。

組み合わせ軒丸瓦 肉眼観察による胎土や焼成・色調の特徴や、出土量の多さから、三重弧紋軒平瓦と同時に同じ工房で生産され、セットとして用いられた軒丸瓦は単弁16弁蓮華紋軒丸瓦（以下単弁1a型式、図26-10~12）と思われる。

この単弁1a型式は、その中房の蓮子の配置が1+4+8であること、ほぼ垂直の外縁の立ち上がりの上に凸線がめぐること、斜縁が無紋であるという特徴が飛鳥寺出土のXIV型式に類似する。このXIV型式は、天武9年（680）に飛鳥寺が官寺に準じる扱いを受けて行われた修理用の瓦と考えられており（上原1997、花谷2018）、西安寺の単弁1a型式は、そ

れに後続するものと思われる。また、ほぼ同型式でやや大型の単弁1b型式や同2型式、同3型式の軒丸瓦の時期にも重弧紋軒平瓦は引き続き生産され、塔や金堂の屋根を飾ったものであろう。

後述するように、直線顎の三重弧紋軒平瓦は7世紀中頃のものが多い。西安寺例もその頃のもので、素弁蓮華紋軒丸瓦の素弁1型式（図26-1・2）や同5型式（図26-8・9）と組み合わせることも考えてみたが、胎土や焼成を見る限りその可能性は低い。したがって、西安寺例は680年を上限とし、7世紀末から8世紀初めにかけてという、直線顎三重弧紋軒平瓦の年代の下限を示す貴重な存在といえる。

5 重弧紋軒平瓦の拡散史の 中に占める位置

西安寺出土の三重弧紋軒平瓦とおなじ特徴をもつ例を集め、その製作技法や組み合わせ軒丸瓦に注目しながら概観してみよう。

吉備池廃寺での独自発生 吉備池廃寺（奈文研2003）と藤原京左京六条三坊（木之本廃寺）の調査（奈文研2017）、およびその周辺で出土した型押し唐草紋と、三重弧紋に型押し唐草紋を重ねて押した軒平瓦は計43点を数える。うち4点（10.7%）に三重弧紋が残るが、あとはすべて型押し唐草紋である。これが吉備池廃寺の主要な軒平瓦であり、浅い三重弧紋を型挽きしたあとに唐草紋を型押しして、重弧紋が消えかけている例があるなど、三重弧紋軒平瓦はあくまでも少数で後続的な存在であった。

型押し唐草紋軒平瓦の中には、施紋の工程に先立ち、回転運動を利用して瓦当面にヘラケズリを施した際の砂粒の動きによる細かい凹線を残すものが3点ほどある。これは、かつて述べたように（大脇2000）、吉備池廃寺の瓦作り中に、この細かい凹線に注目した星組の系譜を引く瓦工が、軒丸瓦外縁をめぐる重弧紋との類縁性から、軒平瓦にも同様の重弧紋を施すことを考えだすヒントになったと推定できる。吉備池廃寺の重弧紋軒平瓦は、北魏の永寧寺から百済の軍守里廃寺へ伝播した波状重弧紋軒平瓦とは無関係に、独自発生したものであることを再度強調しておきたい。

四天王寺への伝播と、海会寺・来住廃寺の場合 四天王寺出土の素紋軒平瓦（軒先用平瓦）と重弧紋軒平瓦については、以下の研究が詳しく（網2000・谷崎2014・2020）、直線顎の三重弧紋軒

平瓦と、吉備池廃寺と同范の単弁8弁蓮華紋軒丸瓦Ⅱa1、Ⅱa2が組み合わせることは動かない。したがって、これすでに指摘されているように、吉備池廃寺の造営を担った星組系の瓦工が、大阪府と京都府の境界に位置する楠葉・平野山瓦窯に移動して生産したものであり、大化元年（645）の難波長柄豊碕宮への遷都に伴う伽藍整備期のものと思われる。なお同范の軒丸瓦が出土した泉南市海会寺では重弧紋軒平瓦を欠き、軒丸瓦や丸瓦の製作技法にも違いがあり、軒丸瓦の范だけが運ばれたものと推定できる（泉南市教育委員会1987）。

松山市来住廃寺（久米高畑遺跡）の素弁10弁蓮華紋軒丸瓦Ⅰ型式は、四天王寺の整備期に単弁8弁蓮華紋軒丸瓦Ⅱa1、Ⅱa2から派生したとみられる単弁10弁蓮華紋軒丸Ⅱc型式によく似ており、その関係が注目されている（上原1997、亀田2000）。この素弁10弁蓮華紋軒丸Ⅰ型式とセットになると思われる段顎の三重弧紋軒平瓦は、型挽きが不安定であり、また3枚分割で、分割界線が棒痕跡であるなど、別系統の工人による製品とみられる。したがって、吉備池廃寺から四天王寺へ移動した工人の系譜は、そこで途絶えたことになる。

軽寺と坂本寺の場合 橿原市の軽寺跡からは、多数の直線顎の三重弧紋軒平瓦が出土している（平岩2003）。これとセットになる軒丸瓦は、弁端の反転を強調した「軽寺式」と呼ばれる2種類の素弁8弁蓮華紋軒丸瓦であり、その年代は7世紀中頃と思われる（大脇2005）。同じ和泉市の坂本寺出土の軽寺式軒丸瓦には、西安寺例によく似た三重弧紋軒平瓦がセットで知られている（和泉の国歴史館で観察）。

河内寺廃寺 東大阪市の河内寺廃寺からは、素弁蓮華紋軒丸瓦とセットになる三重弧紋軒平瓦が出土している。この軒丸瓦の年代はなかなか決めがたいが、7世紀中葉であることは、大方の認めるところであろう（東大阪市2022）。

この他にも直線顎の三重弧紋軒平瓦はいくつかあるが、その検討は今後の課題とし、とりあえずその年代を集約すると、639年頃から8世紀初めにかけてという年代が得られ、西安寺例はその後半の年代幅を示す資料になる。また山田寺で641年に始まる段顎の四重弧紋軒平瓦とは、吉備池廃寺式や軽寺式など、組み合わせ軒丸瓦を異にする例が多く、系譜を異にする工人集団によって伝えられたと思われる点もその特徴の一つとなろう。

6 まとめにかえて

7世紀から8世紀初めにかけての各種軒平瓦の系列をまとめると、若草伽藍の手彫りと型押しの偏行唐草紋、吉備池廃寺の型挽き重弧紋、法隆寺の范施紋均整唐草紋、本薬師寺の范施紋偏行唐草紋、大官大寺の范施紋均整唐草紋がおもなものとなる。紋様はいうまでもなく、施紋方法や施紋具も異なるが、これを成型技法という観点から見ると、基本的には円錐台形、ないしは円筒形を呈する桶を利用した軒平瓦の桶巻作りで、粘土円筒の上下反転1回と、4回にわたる乾燥を繰り返す技法を採用する点が共通する。

西安寺から出土した直線顎の型挽き三重弧紋軒平瓦の製作技法は、639年を年代の定点とする吉備池廃寺の創建時に生まれ、星組の系譜を引く瓦工によって、外縁に三重圈紋をめぐる単弁8弁蓮華紋軒丸瓦の范とともに四天王寺の瓦生産地である楠葉・平野山瓦窯にまずもたらされた。

一方、吉備池廃寺の直後に発願された山田寺では、軒丸瓦外縁の四重圈紋と意匠を統一した四重弧紋軒平瓦が、これまた星組の系譜を引く別の瓦工によって考案された。その際、それまでの直線顎では全体に平瓦部が厚くなり重量も増えるため、通常の平瓦に段顎をつけることで軽量化を実現した。

軒平瓦の段顎は、このようにして生まれ、以後、川原寺の四重弧紋軒平瓦や、後続する本薬師寺や藤原宮の范施紋の偏行唐草紋軒平瓦に継承され、大官大寺の范施紋均整唐草紋軒平瓦を経て、奈良時代になってその変形で、顎が外れにくい曲線顎を生み出したのである。一方、直線顎の軒平瓦はしだいに少数派になりつつも、法隆寺などでは平安時代中期Ⅱ（995～1047年）まで復古瓦として残り、その伝統を示す属性の一つとなった。西安寺の三重弧紋軒平瓦も、こうした観点からその製作に当たった工人の系譜を考える必要がある。

重弧紋軒平瓦には、直線顎の三重弧紋軒平瓦と段顎の四重弧紋軒平瓦以外に、挽き型を断続的に押す簾状重弧紋、顎や凸面にも回転を利用した重弧紋や波状紋などを施紋した顎面施紋軒平瓦、最下段の重弧紋に指頭によるひねりを加えた波状重弧紋軒平瓦などが次々と生まれ、各地で地域的流行をみた。その広がりを明らかにし、それぞれの誕生から展開の過程を明らかにする必要があるが、与えられた紙数を大幅に超えたのでそれは今後の課題とし擱筆する。

【主要参考報告書】

(軒平瓦の製作技法中、粘土円筒の上下反転に関する情報が多いものを集めた)

梶原瓦窯 名神高速道路内遺跡調査会 1997『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う梶原瓦窯跡発掘調査報告書』(軒平瓦B類、図38、p62と、平瓦f類、図63、p99)

穴太廃寺 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 2001『一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』(三重弧紋軒平瓦31A型式、図130-96、p175)

山田寺 奈良文化財研究所 2002『山田寺発掘調査報告』(本文編、四重弧紋軒平瓦C I 1型式、p221、図版編Ph111)

吉備池廃寺 奈良文化財研究所 2003『吉備池廃寺発掘調査報告 百済大寺の調査』(軒平瓦I型式、p82~87、PL38)

虚空蔵寺窯跡 真野和夫 2009「9 豊前の法隆寺式軒瓦」『古代瓦研究 IV—法隆寺式軒瓦の成立と展開—』(本文、p96、第57図-1・4、第60図)

美濃山廃寺 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2013『1. 美濃山廃寺第6次・美濃山廃寺下層遺跡第9次 2. 美濃山廃寺第7次・美濃山廃寺下層遺跡第10次』(波状四重弧紋軒平瓦I b型式、p66~67、図版第31)

木之本廃寺 奈良文化財研究所 2017『飛鳥・藤原宮発掘調査報告 V 藤原京左京六条三坊の調査』(本文編、軒平瓦I A・B型式、p105~108、図版編Ph56)

周山廃寺 京都市埋蔵文化財研究所 2019『周山廃寺』(四重弧紋軒平瓦SzH22C型式、p26、図版6、瓦6)

飛鳥池遺跡 奈良文化財研究所 2021『飛鳥池遺跡発掘調査報告』〔I〕—生産工房関係遺物—(本文編、へら施紋の三重弧紋軒平瓦I A1型式、p260、図版編、PL151~158)

河内寺廃寺 仲林篤史 2022「第6節 軒平瓦KWH2と平瓦II -1-2類の検討—「同布筒瓦」の発見」『第1期史跡整備事業に伴う国指定史跡河内寺廃寺跡発掘調査報告書』東大阪市(軒平瓦KWH2と平瓦II -1-2類、p106~108)

【主要参考文献】

網伸也 2000「四天王寺の「百済大寺式」軒丸瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで—』奈良国立文化財研究所

上原真人 1997『瓦を読む』歴史発掘11 講談社

大脇潔 2000「討議、p363~364」中の発言、「船橋廃寺式軒丸瓦と百済大寺の創建瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで—』

奈良国立文化財研究所

大脇潔 2002「雲南蕨紀行」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』IV

大脇潔 2003「雲南蕨紀行II 聞き取り調査の結果と若干の考察—雲南の土と牛と「弓」と—」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』V

大脇潔 2005「軽寺考—軽寺とその周辺の遺跡—」『古代東国の考古学 大金宣亮氏追悼論文集』同刊行会

大脇潔 2018「7世紀の瓦生産—花組・星組から荒坂組まで—」『古代』第141号 早稲田大学考古学会

亀田修一 2000「9 瀬戸内の船橋廃寺式と百済大寺式軒丸瓦」『古代瓦研究 I—飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで—』奈良国立文化財研究所

佐川正敏 1993「日本の瓦作りの独自性と外来の影響」第8号 日本伝統瓦技術保存会

泉南市教育委員会 1987『海会寺 海会寺遺跡発掘調査報告書』

谷崎仁美 2014「重弧紋軒平瓦の二大様相—七世紀の寺院における瓦の受容とその背景—」『ヒストリア』第247号 大阪歴史学会

谷崎仁美 2020「四天王寺飛鳥時代軒瓦の再検討」『龍谷大学考古学論集』III—岡崎晋明先生喜寿記念論文集— 同刊行会

中川あや 2007「若草伽藍の軒丸瓦・軒平瓦」『法隆寺若草伽藍跡発掘調査報告』奈良文化財研究所

花谷浩 2018「瓦からみた飛鳥寺造営、そして飛鳥池遺跡」『古代』第141号 早稲田大学考古学会

平岩欣太 2003「軽寺出土の瓦について」『続文化財学論集』同刊行会

毛利光俊彦 1991「平城宮・京出土軒瓦編年の再検討」『平城宮発掘調査報告』13 奈良国立文化財研究所

山崎信二 2011『古代造瓦史—東アジアと日本—』雄山閣

西安寺跡の石材の石種と採石推定地

奥田 尚

西安寺の塔跡に出土した礎石と塔跡・金堂跡に出土した南・東・北面の基壇外装の積石の石材を裸眼で観察した。それらの石材の石種とその特徴、石種と粒径、形状、採石推定地について述べる。

1 石種とその特徴

識別した石種は、アプライト、ペグマタイト、ペグマタイト質黒雲母花崗岩、白雲母黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、斑禰岩、玢岩、角閃石安山岩、ガラス質溶結凝灰岩、火山礫凝灰岩である。

石種の特徴について述べる。

■ **アプライト** 色は淡茶灰色で、石英・長石が噛み合っている。石英は淡茶色透明で、粒径が3~5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が3~5mm、量が多い。

■ **ペグマタイト** 色は淡赤茶色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は淡赤茶色透明で、粒径が10~40mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が10~50mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が10~20mm、量が僅かである。

■ **ペグマタイト質黒雲母花崗岩** 色は淡赤茶色で、石英・長石・白雲母・黒雲母が噛み合っている。石英は淡赤茶色透明で、粒径が8~20mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が5~15mm、量在中である。白雲母は無色透明、板状で、粒径が2~3mm、量がごく僅かである。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2~3mm、量がごくごく僅かである。

■ **白雲母黒雲母花崗岩** 色は灰色で、石英・長石・白雲母・黒雲母が噛み合っている。石英は淡赤茶色透明で、粒径が2~6mm、量が非常に多い。長石は灰白色、粒径が2~4mm、量が僅かである。白雲母は無色透明、板状で、粒径が1~2mm、量在中である。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~1.5mm、量がごく僅かである。

■ **黒雲母花崗岩** 色は灰白色で、石英・長石・

黒雲母が噛み合っている。石英は淡茶色透明で、粒径が3~5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が2~5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が2~4mm、量が僅かである。

■ **細粒黒雲母花崗岩** 色は灰白色で、石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は褐色透明で、粒径が0.5~1.5mm、量が多い。長石は灰白色、粒径が0.5~1.5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が1~1.5mm、量が僅かである。

■ **片麻状黒雲母花崗岩** 色は灰白色で、顕著な片麻状を呈する。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は灰色透明で、粒径が3~5mm、量が僅かである。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5~1.5mm、量在中である。集合して1~2cmの紐状をなす。

■ **花崗閃緑岩** 色は淡茶灰色で、石英・長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2~4mm、量在中である。長石は灰白色、粒径が2~8mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が1~5mm、量在中である。角閃石は黒色、粒径が2~6mm、量がごく僅かである。

■ **閃緑岩** 色は灰色で、長石・黒雲母・角閃石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2~6mm、量が多い。黒雲母は黒色、粒状で、粒径が2~5mm、量在中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が2~6mm、量在中である。

■ **斑禰岩** 色は暗灰緑色で、長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が3~8mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が3~5mm、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒径が4~6mm、量が多い。

■ **玢岩** 色は淡茶灰緑色で、斑晶鉱物が長石、黒雲母、角閃石である。長石は灰白色、短柱状で、粒径が2~10mm、量在中である。黒雲母は灰緑色、粒状で、粒径が0.5~1mm、量在中である。角閃石は黒色、柱状で、粒径が1~6mm、量が多い。

石基はやや粒状、ガラス質である。

■ **角閃石安山岩** 色は灰色で、板状節理が顕著である。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は灰白色、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。角閃石は黒色、柱状で、粒径が0.5～1mm、量がごく僅かである。石基はガラス質である。

■ **ガラス質溶結凝灰岩** 色は灰白色、石基がガラス質である。石英の斑晶があり、その粒径が1～3mmである。

■ **火山礫凝灰岩** 色は灰白色で、構成粒が溶結凝灰岩、軽石である。溶結凝灰岩は黒色、粒形が角、粒径が1～6mm、量が多く、基質がガラス質である。軽石は灰白色、粒形が角、粒径が3～8mm、量が中である。基質は緻密である。

2 石材の石種と粒径

塔の基壇、金堂の基壇・基壇外装にみられる石材の石種と粒径について述べる。粒径はみかけの長径である。

■ **塔跡の礎石** 礎石は礎石1と3の石種が片麻状黒雲母花崗岩、礎石2の石種が花崗閃緑岩である。長径は礎石1が144cm、礎石2が150cm、礎石3が112cmである。

■ **塔跡基壇外装の石材** 基壇外装の積石材の観察個数は141個である。その石種と個数は、アプライトが10個（7%）、ペグマタイトが1個（1%）、黒雲母花崗岩が7個（5%）、細粒黒雲母花崗岩が1個（1%）、片麻状黒雲母花崗岩が72個（51%）、花崗閃緑岩が8個（6%）、閃緑岩が2個（1%）、玢岩が2個（1%）、角閃石安山岩が1個（1%）、ガラス質溶結凝灰岩が1個（1%）、火山礫凝灰岩が36個（26%）である。片麻状黒雲母花崗岩が半分を占める。

基壇外装の積石材の見かけの長径は、10cm以上20cm未満の石が39個（28%）、20cm以上40cm未満の石が57個（40%）、40cm以上60cm未満の石が36個（26%）、60cm以上80cm未満の石が6個（4%）、80cm以上100cm未満が1個（1%）、100cm以上120cm未満の石が1個（1%）である。

■ **金堂跡基壇外装の石材** 基壇外装の積石材の調査個数は73個である。その石種と個数は、アプライトが3個（4%）、ペグマタイト質黒雲母花崗岩が

1個（1%）、白雲母黒雲母花崗岩13個（18%）、片麻状黒雲母花崗岩が35個（48%）、花崗閃緑岩が11個（15%）、斑糲岩が1個（1%）、玢岩が1個（1%）、角閃石安山岩が6個（8%）、火山礫凝灰岩が2個（3%）である。片麻状黒雲母花崗岩が約半分を占める。

基壇外装の積石材のみかけの長径は、10cm以上20cm未満の石が14個（19%）、20cm以上40cm未満の石が41個（56%）、40cm以上60cm未満の石が16個（22%）、60cm以上80cm未満の石が2個（3%）である。

3 石材の形状

塔基壇上の礎石1と3は、石の上面に円形の柱座があり、側面はザラザラした自然面で、川原石様に滑らかでない。節理に沿って剥がしたような面がなく、谷の転石に似ている。

基壇外装の積石に使用されているアプライト、ペグマタイト、ペグマタイト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、細粒黒雲母花崗岩、白雲母黒雲母花崗岩、片麻状黒雲母花崗岩、花崗閃緑岩、閃緑岩、斑糲岩、玢岩は、表面がザラザラした自然面のみの石、剥がした面が部分的に残る石である。

角閃石安山岩はハツリ痕跡があり、明神山付近で露岩を剥がして採石されたか、自然石を用途に応じてハツリ加工して利用されたかのいずれかと推定される石である。

ガラス質溶結凝灰岩は粒形が垂円で、表面が滑らかな川原石様である。

火山礫凝灰岩は風化しており、部分的に加工面が残るもの、割れ目があるもの等がある。もとは方形の加工石で、再利用された石と推定される。

4 石材の採石推定地

西安寺跡は、東方に馬見丘陵の北端にあたる山地、西に葛下川、北に大和川があり、これらに囲まれた段丘上に位置する。東方の山地には顕著な片麻状を呈する黒雲母花崗岩が分布し、その中に部分的にレンズ状をなすアプライト質岩や閃緑岩質岩、斑糲岩質岩が含まれる。葛下川を越えた西方の明神山から香芝市にかけての付近には新第三紀の角閃石安山岩等の火山岩が分布する。また、葛下川の川原には上流

表12 基壇外装石材の石種と粒径

使用箇所	石種	アプライト	ペグマタイト	ペグマタイト質黒雲母花崗岩	黒雲母花崗岩	細粒黒雲母花崗岩	白雲母黒雲母花崗岩	片麻状黒雲母花崗岩	花崗閃緑岩	閃緑岩	斑糲岩	玢岩	角閃石安山岩	ガラス質溶結凝灰岩	火山礫凝灰岩	合計	
		粒径（みかけの長径の数値）															
塔跡基壇外装の積石材	東面（第7次）	10cm以上20cm未満				1		7	2						12	22	
		20cm以上40cm未満	5					25	1				1		5	37	
		40cm以上60cm未満	1					19	2								22
		60cm以上80cm未満						4	1								5
		80cm以上100cm未満											1				1
	南面（第10次2区）	10cm以上20cm未満	2					1		1					1	7	12
		20cm以上40cm未満		1		2		1		1						4	9
		40cm以上60cm未満				5											5
		60cm以上80cm未満						1									1
		100cm以上120cm未満							1								1
	北面（第7次）	10cm以上20cm未満	1													4	5
		20cm以上40cm未満						6	2							3	11
		40cm以上60cm未満	1					6					1			1	9
		60cm以上80cm未満						1									1
		80cm以上100cm未満															
小計		10	1		7	1	72	8	2			2	1	1	36	141	
金堂跡基壇外装の積石材	南面（第9次3区）	10cm以上20cm未満						2								2	
		20cm以上40cm未満	3					7				1	1			12	
		40cm以上60cm未満						6						3		9	
		60cm以上80cm未満						1								1	
	南面（第8次1区）	10cm以上20cm未満						1	1							2	4
		20cm以上40cm未満			1			3	2	4		1		2			13
		40cm以上60cm未満						2	1	2							5
	東面（第8次2区）	10cm以上20cm未満						3	3								6
		20cm以上40cm未満							7								7
		40cm以上60cm未満							1								1
60cm以上80cm未満							1									1	
北面（第8次1区）	10cm以上20cm未満							2								2	
	20cm以上40cm未満						4	2	3							9	
	40cm以上60cm未満								1							1	
小計		3		1			13	35	11		1	1	6		2	73	
合計		13	1	1	7	1	13	107	19	2	1	3	7	1	38	214	

域に分布する二上火山岩類の礫がみられる。北方の大和川の川原には主として領家花崗岩類、僅かに室生火山岩やガラス質溶結凝灰岩等の礫がみられる。

以上のような石が周辺に分布する。石材の採石推定地は近距離で同様の石材を採取できる地とする。

観察石材の約半分を占める片麻状黒雲母花崗岩は山地の谷にみられる礫の形状を呈し、岩相は当地東方の山地に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相に似ていることから、当地東方の山地や谷に転在する礫を採取されたと推定される。また、アプライト・ペグマタイト・ペグマタイト質黒雲母花崗岩・白雲母黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩は、東方に分布する片麻状黒雲母花崗岩の岩相の一部に同様の岩相がみられる。これら石種の石材も東方の山地や谷に転在する礫を採取されたと推定される。

また、東方の山地に分布する片麻状黒雲母花崗岩には、レンズ状に閃緑岩質岩や斑糲岩質岩の岩相の部分が含まれる。閃緑岩や斑糲岩はこれらの岩相の一部と似ている。これらも東方の山地で採石されたと推定される。

玢岩は岩脈で産する石である。東方の山地に産する石だろうか。採石地を推定し難い。

角閃石安山岩は明神山から香芝市旭ヶ丘にかけての付近に分布する角閃石安山岩の岩相の一部に似ている。明神山の山麓付近で採石されたと推定される。

火山礫凝灰岩は二上山西南麓に分布する二上層群下部ドンズルボー層の凝灰岩の岩相の一部に似ている。採石地としては太子町の鹿谷寺跡北方付近が推定される。

ガラス質溶結凝灰岩は当地北方の大和川の川原石にみられるガラス質溶結凝灰岩に形状と岩相が似ている。大和川の川原石を採石されたと推定される。

5 おわりに

塔跡・金堂跡の石材の採石地は、西安寺跡の第7・8・9・10次発掘調査時に出土した石材の石種がアプライト・ペグマタイト・ペグマタイト質黒雲母花崗岩・白雲母黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、玢岩、角閃石安山岩、ガラス質溶結凝灰岩、火山礫凝灰岩であり、これら石材のアプライト・ペグマタイト・ペグマタイト質黒雲母花崗岩・白雲母黒雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・細粒黒雲母花崗岩、閃緑岩、斑糲岩の採石地が東方の山

地と推定され、その石材量が個数的に8割を占める。角閃石安山岩は僅か7個で、採石地が西方の山麓、ガラス質溶結凝灰岩は僅か1個で、採石地が北方の大和川の川原と推定される。火山礫凝灰岩は個数的に約2割を占め、太子町の鹿谷寺跡北方付近で採石されたと推定される石材で、石材の出土状況から再利用された石材と推定される。

奈良市西ノ京にある薬師寺東塔の基壇の場合、奈良時代に本薬師寺から移築された時には基壇に鹿谷寺跡北方付近と推定される火山礫凝灰岩の加工石が使用され、中・近世には花崗岩類の自然石が積まれている。法隆寺中門の基壇では、中・近世に花崗岩類の加工石で改修された基壇石材の内側に鹿谷寺跡北方付近と推定される火山礫凝灰岩の加工石片が埋め込まれている。両者の場合、鹿谷寺跡北方付近と推定される火山礫凝灰岩の加工石を使用して基壇が最初に造られ、中・近世の改修時に花崗岩類の石材が使用されている。

西安寺の塔と金堂跡調査時、積石の上方に凝灰岩の転用材が使用され、基壇の積石材は花崗岩類である。薬師寺や法隆寺の例からすれば、出土している花崗岩類の積石は中世以降のものであると推定される。

以上のような類例から西安寺は、創建時、礎石材に片麻状黒雲母花崗岩等、基壇の石材に鹿谷寺跡北方付近の火山礫凝灰岩が使用された塔と金堂であったと推定される。

出土柱材（木製灯籠）の樹種同定

福田 さよ子

■ ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

ヒノキ科 (Cupressaceae)

針葉樹。仮道管と樹脂細胞および放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行は緩やかで晩材部幅は狭いものが多い。樹脂細胞は、晩材部や晩材部近くの早材部に接線状に並ぶか点在する(図49-1)。分野壁孔はヒノキ型で1分野に2個(まれに3個)存在する(図49-2)。放射組織はほぼすべてが単列で、高さは1~20細胞高である(図49-3)。

■ コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)

コウヤマキ科 (Sciadopityaceae)

針葉樹。仮道管と放射柔細胞とのみからなり、樹脂道や樹脂細胞は認められない。早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部幅はやや狭い(図49-4・7・10・13)。分野壁孔は特徴的な窓状を呈する(図49-5・8・11・14)。放射組織は単列で、1~6細胞高と低いものが多い(図49-6・9・12・15)。

[参考文献]

王寺町 2021『西安寺跡第9次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第16集、王寺町
島地謙・伊東隆夫 1982『図説 木材組織』地球社

ここでは、奈良県王寺町の西安寺跡第9次調査で出土した柱材(木製灯籠)の樹種を調査したので、その結果を報告する。

令和元年(2019)12月16日に現地出土状況を実見し、その場でサンプルの採取をおこなった。柱材は、金堂の北方およそ7mのあたりで検出した南北1.33m・東西1.44m以上の隅丸方形の掘方の中央に、直径30cm強の主柱を中心にして、この四方を囲むように4本の添柱が配されていた。この掘方内からは8世紀前後の土器が出土しており、これが立柱の時期を示すと考えられている(王寺町2021)。これらの柱材から剃刀を使って、直接サンプルブロックを採取した。サンプルを採取した位置は図48に示した。

サンプルブロックは水道水で洗浄した後、徒手により両刃の剃刀で木口・柃目・板目の各薄片を切削し、オイキットで封入してプレパラートに仕上げた。これを透過光の生物顕微鏡下で顕鏡、観察し、樹種の同定をおこない、顕微鏡写真を撮影した。観察時には、島地 他1982の記載や材鑑試料のプレパラートを参照した。

同定の結果、主柱はヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* Endl.)、添柱4本はすべてコウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.)であった。以下に同定に至った観察の結果をまとめ、結果の一覧を掲載しておく。

表13 出土柱材(木製灯籠)の樹種

柱材名	樹種		科	
主柱	ヒノキ	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ科	Cupressaceae
添柱1	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ科	Sciadopityaceae
添柱2	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ科	Sciadopityaceae
添柱3	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ科	Sciadopityaceae
添柱4	コウヤマキ	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ科	Sciadopityaceae

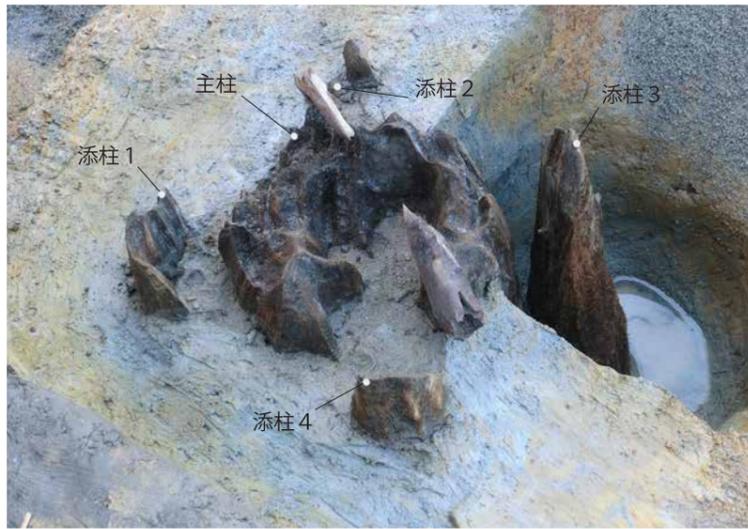
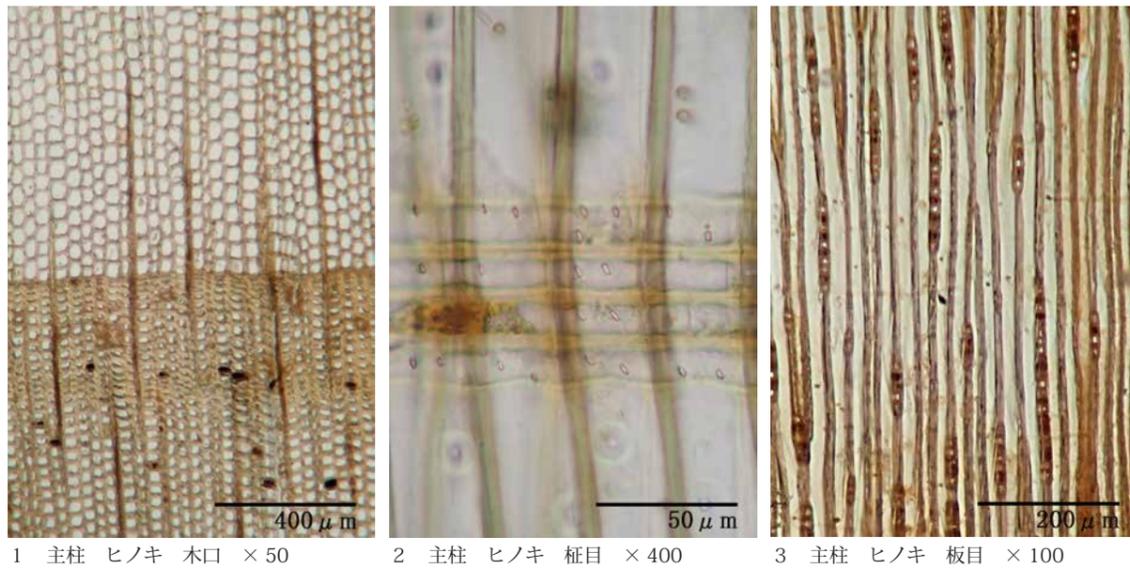


図48 サンプルの採取箇所

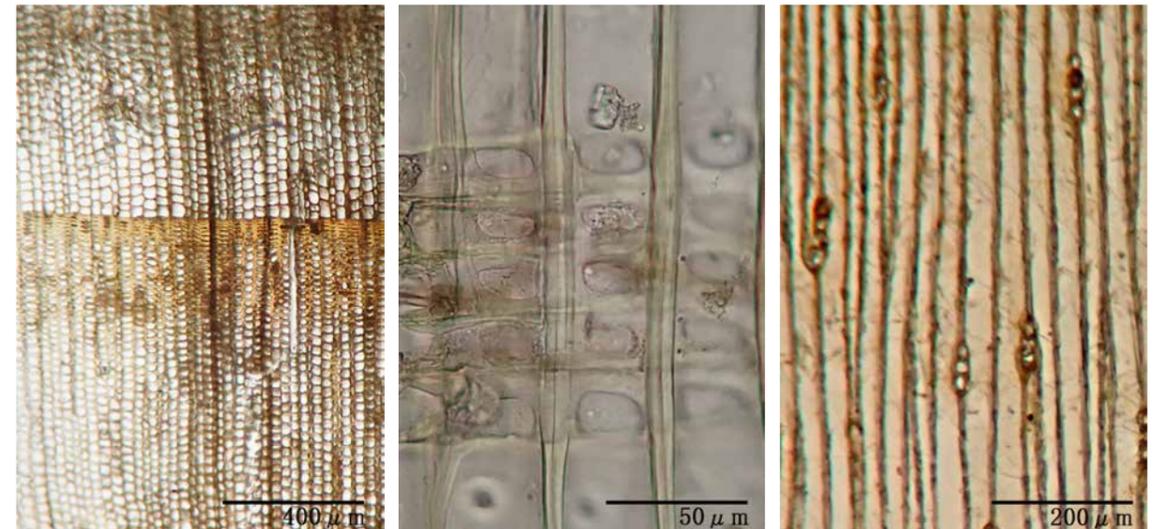


1 主柱 ヒノキ 木口 ×50 2 主柱 ヒノキ 柁目 ×400 3 主柱 ヒノキ 板目 ×100

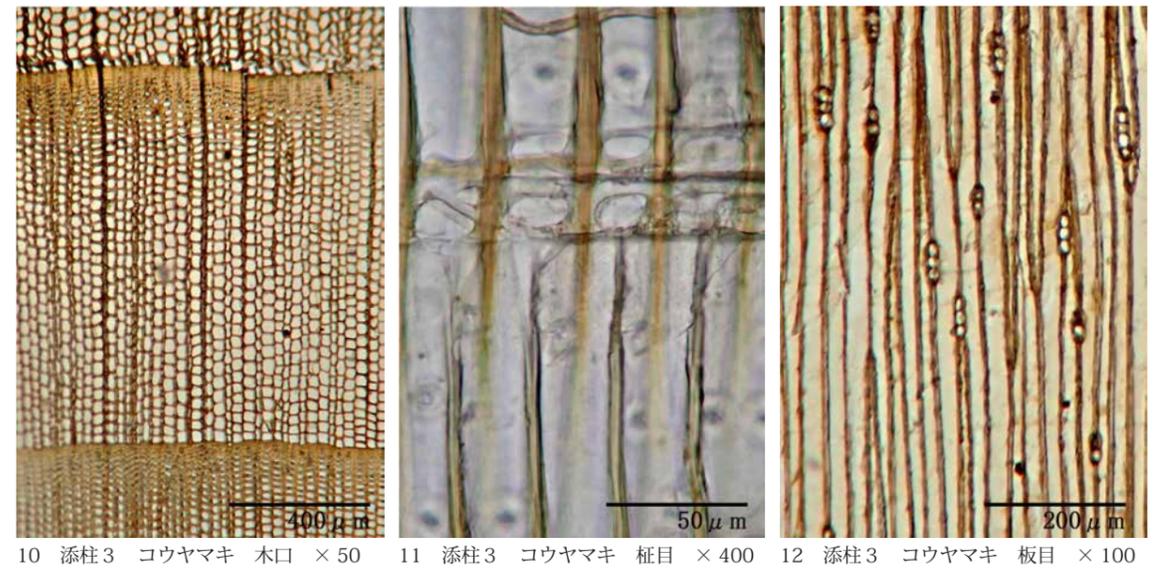


4 添柱1 コウヤマキ 木口 ×50 5 添柱1 コウヤマキ 柁目 ×400 6 添柱1 コウヤマキ 板目 ×100

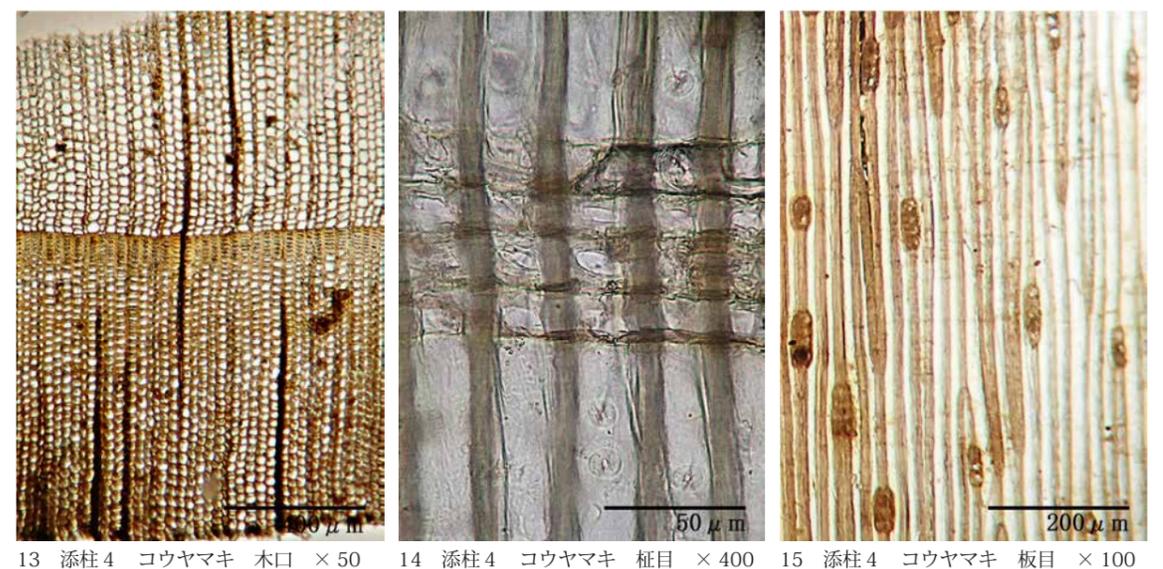
図49 出土柱材（木製灯籠）の樹種頭微鏡写真



7 添柱2 コウヤマキ 木口 ×50 8 添柱2 コウヤマキ 柁目 ×400 9 添柱2 コウヤマキ 板目 ×100



10 添柱3 コウヤマキ 木口 ×50 11 添柱3 コウヤマキ 柁目 ×400 12 添柱3 コウヤマキ 板目 ×100



13 添柱4 コウヤマキ 木口 ×50 14 添柱4 コウヤマキ 柁目 ×400 15 添柱4 コウヤマキ 板目 ×100



写真 205 出土柱材（木製灯籠）からのサンプル採取

第7章 資料

- 1 調査体制
- 2 西安寺跡史跡整備活用委員会
- 3 掲載図表一覧
- 4 掲載写真一覧
- 5 参考文献

1 調査体制

■ 第3次調査

調査・整理期間	平成27年(2015)2月～平成28年(2016)3月
調査主体	王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄(2015.4～) 教育次長 吉川 亨(～2015.4)、乾 清(2015.4～) 生涯学習課 課長 谷口 誠 社会教育係 係長 青山幾一
調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 主任 岡島永昌 臨時職員 櫻井 恵
発掘作業	有限会社ワーク
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、王寺観光ボランティアガイドの会 [個人] 荒木浩司、石橋忠治、市本芳三、江浦洋、大脇潔、高妻洋成、清水昭博、菅谷文則、鈴木嘉吉、関川尚功、田邊征夫、塚口義信、平田政彦、平林章仁、安村俊史、山下隆次、吉岡正行、脇谷草一郎

■ 第4次調査

調査・整理期間	平成28年(2016)2月～平成29年(2017)3月
調査主体	王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄 教育次長 乾 清 生涯学習課 課長 谷口 誠(～2016.3)、西本貴至(2016.4～) 社会教育係 係長 青山幾一 同係 主事 中俣遼太 文化財係 主事 田中宏幸(2016.4～)
調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 主任 岡島永昌(2016.4～ 文化財係 係長) 臨時職員 櫻井 恵(2016.4～ 文化財係 臨時職員)
遺物整理	福井彩乃(王寺町教育委員会 生涯学習課 文化財係 臨時職員) 井田 葵(奈良大学 文化財学科 学生) 松森多恵(奈良大学 文化財学科 学生)
発掘作業	安西工業株式会社
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、王寺観光ボランティアガイドの会、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 荒木浩司、石橋忠治、江浦洋、大脇潔、狭川真一、清水昭博、鈴間智子、関川尚功、竹内亮、田邊征夫、平田政彦、山下隆次、吉岡正行、吉村公男

■ 第5次調査

調査・整理期間	平成28年(2016)6月～平成30年(2018)3月
調査主体	王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄 教育次長 乾 清(～2017.3)、中井一喜(2017.4～) 生涯学習課 課長 西本貴至 文化財係 係長 岡島永昌(2017.7～ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 係長) 同係 主事 田中宏幸(～2017.3) 同係 主査 木下さおり(2017.4～6、2017.7～ 地域交流課 文化資源活用係 主査)

調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 文化財係 臨時職員 櫻井 恵 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員) 臨時職員 福井彩乃 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員)
調査補助 遺物整理	井田 葵 (奈良大学 文化財学科 学生) 松森多恵 (奈良大学 文化財学科 学生)
発掘作業	株式会社アイデイエイ
測 量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 中川伸二

■ 第6次調査	
調査・整理期間	平成 29 年 (2017) 3 月~平成 30 年 (2018) 3 月
調査主体	王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄 教育次長 乾 清 (~2017.3)、中井一喜 (2017.4~) 生涯学習課 課長 西本貴至 文化財係 係長 岡島永昌 (2017.7~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用 係長) 同係 主事 田中宏幸 (~2017.3) 同係 主査 木下さおり (2017.4~6、2017.7~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 主査)
調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 文化財係 臨時職員 櫻井 恵 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員) 臨時職員 福井彩乃 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員)
調査補助員	松森多恵 (奈良大学 文化財学科 学生)
発掘作業	有限会社ワーク
測 量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 清水昭博、竹田政弘、吉川孝文

■ 第7次調査	
調査・整理期間	平成 29 年 (2017) 11 月~令和元年 (2019) 3 月
調査主体	王寺町教育委員会 教育長 梅野満雄 (~2018.3)、中野 衛 (2018.4~) 教育次長 中井一喜 生涯学習課 課長 西本貴至 (~2018.3)、藤本忠司 (2018.4~) 文化財係 係長 岡島永昌 (2017.7~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用 係長) 同係 主査 木下さおり (2017.7~2018.3 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 主査)
調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 文化財係 臨時職員 櫻井 恵 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員) 臨時職員 福井彩乃 (2017.7~生涯学習課 社会教育係 臨時職員)
遺物整理	青木佐和 (王寺町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 臨時職員)
発掘作業	株式会社春山組
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、奈良県教育委員会事務局、奈良県立橿原考古学研究所、王寺観光ボランティアガイドの会、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 青木勘時、江浦洋、大塚慎也、大村浩司、岡田雅彦、押木弘己、奥田尚、甲斐弓子、近藤康司、清水昭博、下大迫幹洋、鈴木嘉吉、関川尚功、高橋香、嶽充紀、田中一廣、田邊征夫、西垣遼、箱崎和久、平田政彦、平林章仁、丸山香代、光石鳴巳、森先一貴、安村俊史、吉村公男

■ 第8次調査	
調査・整理期間	平成 30 年 (2018) 11 月~令和 2 年 (2020) 3 月
調査主体	王寺町教育委員会 (~2019.3) 教育長 中野 衛 教育次長 中井一喜 生涯学習課 課長 藤本忠司 社会教育係 係長 青山幾一 王寺町 (2019.4~) 町長 平井康之 地域整備部 部長 植野善信 (~2019.9) 地域交流課 課長 前田日出高 (2019.10~ 地域整備部 参事) 文化資源活用係 係長 岡島永昌 同係 主事補 寺農織苑 (2019.10~)
調査担当者	王寺町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 臨時職員 櫻井 恵 (2019.4~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 臨時職員) 臨時職員 福井彩乃 (2019.4~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 臨時職員)
遺物整理	青木佐和 (王寺町教育委員会 生涯学習課 社会教育係 臨時職員、2019.4~ 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 臨時職員)
発掘作業	安西工業株式会社
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県教育委員会事務局 (奈良県地域振興部)、奈良県立橿原考古学研究所、王寺観光ボランティアガイドの会、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 荒木浩司、池田博、石橋忠治、泉森皎、伊藤純、江浦洋、大橋泰夫、岡田雅彦、奥田尚、甲斐弓子、北川咲子、近藤康司、齋藤希、狭川真一、清水昭博、鈴木嘉吉、鈴木裕明、関川尚功、高橋香、嶽充紀、田邊征夫、寺沢知子、箱崎和久、橋本裕行、東影悠、林正憲、菱田哲郎、平田政彦、平林章仁、廣岡孝信、松田真一、丸山香代、光石鳴巳、三好清超、山下隆次、山田隆文、吉村公男

■ 第9次調査	
調査・整理期間	令和元年 (2019) 11 月~令和 3 年 (2021) 3 月
調査主体	王寺町 町長 平井康之 地域整備部 参事 前田日出高 地域交流課 文化資源活用係 係長 岡島永昌 同係 主任 梅野麻衣子 (2020.11~) 同係 主事 清川正治 (2020.11~) 同係 主事 寺農織苑
調査担当者	王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 臨時職員 櫻井 恵 (2020.4~ 同係 会計年度任用職員) 臨時職員 福井彩乃 (2020.4~ 同係 会計年度任用職員)
遺物整理	青木佐和 (王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 臨時職員、2020.4~ 同係 会計年度任用職員)
発掘作業	株式会社アイデイエイ
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	[団体] 宗教学法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県地域振興部 (文化・教育・くらし創造部)、奈良県立橿原考古学研究所、王寺観光ボランティアガイドの会、西安寺跡史跡整備活用委員会 [個人] 石田由紀子、市本芳三、井上さやか、岩永玲、上原真人、浦蓉子、江浦洋、大西貴夫、大橋泰夫、岡田雅彦、奥田尚、甲斐弓子、亀井聡、北山峰生、郭家龍、齊藤慶史、齋藤希、清水昭博、鈴木嘉吉、鈴木裕明、清野陽一、関川尚功、高橋香、嶽充紀、田邊征夫、中川二美、西垣遼、丹羽崇史、箱崎和久、原田憲二郎、馬場基、平田政彦、廣岡孝信、苗凌毅、福嶋啓人、福田さよ子、藤間温子、吉村公男、渡辺晃宏

■ 第10次調査

調査・整理期間	令和2年（2020）11月～令和4年（2022）3月
調査主体	王寺町 町長 平井康之 地域整備部 参事 前田日出高 地域交流課 文化資源活用係 係長 岡島永昌 同係 主任 梅野麻衣子 同係 主事 清川正治（～2021.3） 同係 会計年度任用職員 岡島颯斗（2021.4～）
調査担当者	王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 主事 寺農織苑（～2021.3） 会計年度任用職員 櫻井 恵 会計年度任用職員 福井彩乃
遺物整理	青木佐和（王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 会計年度用職員）
発掘作業	株式会社春山組
空撮・写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	〔団体〕 宗教学法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県文化・教育・くらし創造部、奈良県立橿原考古学研究所、西安寺跡史跡整備活用委員会 〔個人〕 乾将太郎、上田喜江、上原真人、大西貴夫、奥田尚、小田裕樹、甲斐弓子、北川咲子、黒濟玉恵、近藤康司、狭川真一、清水昭博、下大迫幹洋、白木原僚太、鈴木嘉吉、関川尚功、塚口義信、西垣遼、箱崎和久、馬場基、平田政彦、平林章仁、山下隆次、吉村公男、吉村武彦

■ 第11次調査

調査・整理期間	令和4年（2022）1月～令和5年（2023）3月
調査主体	王寺町 町長 平井康之 地域整備部 参事 前田日出高 地域交流課 課長 片岡 篤（2022.4～） 文化資源活用係 係長 岡島永昌 同係 主任 梅野麻衣子
調査担当者	王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 会計年度任用職員 櫻井 恵 会計年度任用職員 福井彩乃 会計年度任用職員 岡島颯斗（～2022.11）
遺物整理	青木佐和（王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 会計年度用職員） 三宅裕子（王寺町 地域整備部 地域交流課 文化資源活用係 会計年度用職員）
発掘作業	株式会社島田組
写真測量	株式会社アクセス
調査協力・助言	〔団体〕 宗教学法人舟戸神社、文化庁、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県文化・教育・くらし創造部、奈良県立橿原考古学研究所、西安寺跡史跡整備活用委員会 〔個人〕 大西貴夫、岡田雅彦、齋藤希、芝康次郎、清水昭博、鈴木裕明、中野咲、竹内亮、廣岡孝信、光石鳴巳

■ 瓦調査

平成28年（2016）11月11日	保井芳太郎収集鬼瓦との接合確認調査（天理大学附属天理参考館） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵 受入担当：藤原郁代、太田三喜
平成30年（2018）3月7日	西上氏旧蔵忍冬蓮華文軒丸瓦との同範確認調査（帝塚山大学附属考古学研究所） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵 受入担当：清水昭博
令和元年（2019）9月19日	法隆寺出土素弁蓮華文軒丸瓦との同範確認調査 （独立行政法人国立文化財機構奈良分文化財研究所） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵、大脇 潔（西安寺跡史跡整備活用委員会） 受入担当：林 正憲
令和4年（2022）10月3日	平城京跡出土軒丸瓦・軒平瓦との同範確認調査（奈良市埋蔵文化財調査センター） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵 受入担当：原田憲二郎
令和4年（2022）10月7日	片岡王寺跡出土軒丸瓦・軒平瓦との同範確認調査（奈良県立橿原考古学研究所） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵 受入担当：杉山拓己、岡田雅彦、廣岡孝信、大西貴夫
令和4年（2022）10月9日	西安寺跡出土瓦検討会（王寺町文化資源活用係事務所） 参加者：網 伸也、大西貴夫、大脇潔、岡島永昌、岡島颯斗、岡田雅彦、奥田利伽、古閑正浩、近藤康司、櫻井 恵、清水昭博、高橋 香、谷崎仁美、西垣 遼、原田憲二郎、平野 宙、廣岡孝信、福井彩乃、本村充保
令和4年（2022）10月17日	興福寺出土巴文軒丸瓦との同範確認調査（興福寺） 調査担当：岡島永昌、櫻井 恵 受入担当：藪中五百樹
令和4年（2022）11月4日	薬師寺・平城宮跡出土軒丸瓦との同範確認調査 （独立行政法人国立文化財機構奈良分文化財研究所） 調査担当：櫻井 恵、福井彩乃 受入担当：田中龍一、森下しのぶ

2 西安寺跡史跡整備活用委員会

■ 平成28年（2016）度

〔第1回〕		委員			
開催日	平成29年（2017）2月17日	◎	考古学	菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所 所長
議 題	1 委員長及び副委員長の選出	○	考古学 （寺院・瓦）	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員
	2 西安寺跡発掘調査の概要報告				元 近畿大学 教授
場 所	王寺町やわらぎ会館		建築史	山岸常人	京都大学大学院 教授
			文献史学	東野治之	奈良大学 教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都造形芸術大学 教授
			行政 （考古学）	入倉徳裕	奈良県教育委員会事務局 文化財保存課 主幹兼課長補佐
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代

◎は委員長、○は副委員長 *奈良県職員はオブザーバー

■平成29年(2017)度

[第2回]		委員			
開催日	平成29年(2017)10月13日	◎	考古学	菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所 所長
議題	1 西安寺跡第6次発掘調査の概要報告	○	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	2 平成29年度の発掘調査 その他 出土壁土片の保存科学分析				
			建築史	山岸常人	京都大学大学院 教授
場所	王寺町やわらぎ会館		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
[第3回]		委員			
開催日	平成29年(2017)11月21日		行政 (考古学)	岡林孝作	奈良県教育委員会事務局 文化財保存課 課長補佐
議題	1 西安寺跡第7次発掘調査		地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代
場所	西安寺跡				

◎は委員長、○は副委員長 *奈良県職員はオブザーバー

■平成30年(2018)度

[第4回]		委員			
開催日	平成30年(2018)8月30日	◎	考古学	菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所 所長
議題	1 平成29年度第7次発掘調査の報告	○	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	2 平成30年度第8次発掘調査の計画				
			建築史	山岸常人	京都大学 名誉教授
場所	奈良県立橿原考古学研究所		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都造形芸術大学 教授
			行政 (考古学)	坂 靖	奈良県教育委員会事務局 文化財保存課 課長補佐
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代

◎は委員長、○は副委員長 *奈良県職員はオブザーバー

■令和元年(2019)度

[第5回]		委員			
開催日	令和元年(2019)8月28日		考古学	菅谷文則	奈良県立橿原考古学研究所 所長
議題	1 平成30年度第8次発掘調査の報告	●	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	2 令和元年度第9次発掘調査の計画				
			建築史	山岸常人	京都大学 名誉教授
場所	王寺町役場		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都造形芸術大学 教授
			行政 (考古学)	坂 靖	奈良県 地域振興部 文化財保存課 主幹
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代

●は委員長代理、 *奈良県職員はオブザーバー

■令和2年(2020)度

[第6回]		委員			
開催日	令和2年(2020)9月		考古学	前園実知雄	奈良芸術短期大学 教授
議題	1 令和元年度第9次発掘調査の報告	●	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	2 令和2年度第10次発掘調査の計画				
			建築史	山岸常人	京都大学 名誉教授
場所	新型コロナウイルス対策として書面開催		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都造形芸術大学 教授
			行政 (考古学)	光石鳴巳	奈良県 文化・教育・くらし創造部 文化財保存課 課長補佐
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代

●は委員長代理、 *奈良県職員はオブザーバー

■令和3年(2021)度

[第7回]		委員			
開催日	令和3年(2021)10月27日	◎	考古学	前園実知雄	奈良芸術短期大学 教授
議題	委員長及び副委員長の選出	○	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	1 令和2年度第10次発掘調査の報告				
	2 令和3年度第11次発掘調査の計画		建築史	山岸常人	京都大学 名誉教授
場所	王寺町役場		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都造形芸術大学 教授
			行政 (考古学)	光石鳴巳	奈良県 文化・教育・くらし創造部 文化財保存課 課長補佐
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代

◎は委員長、○は副委員長、 *奈良県職員はオブザーバー

■令和4年(2022)度

[第8回]		委員			
開催日	令和4年(2022)8月26日	◎	考古学	前園実知雄	奈良芸術短期大学 特任教授
議題	1 令和3年度第11次発掘調査の報告	○	考古学 (寺院・瓦)	大脇 潔	奈良文化財研究所 名誉研究員 元 近畿大学 教授
	2 西安寺跡の評価と総括報告書 *オブザーバー参加 芝康次郎(文化庁 文化財第二課)				
			建築史	山岸常人	京都大学 名誉教授
場所	王寺町やわらぎ会館		文献史学	東野治之	奈良大学 名誉教授 大阪大学 名誉教授
			遺跡整備	仲 隆裕	京都芸術大学 教授
			行政 (考古学)	鈴木裕明	奈良県 文化・教育・くらし創造部 文化財保存課 課長補佐
			地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代
[第9回]		委員			
開催日	令和4年(2022)12月16日		行政 (考古学)	鈴木裕明	奈良県 文化・教育・くらし創造部 文化財保存課 課長補佐
議題	1 『西安寺跡発掘調査報告書』の内容		地域	中川忠儀	舟戸神社 氏子惣代
場所	王寺町やわらぎ会館				

◎は委員長、○は副委員長、 *奈良県職員はオブザーバー

3 掲載図表一覧

No.	タイトル	スケール	作成・引用	ページ
図 1	王寺町の位置		王寺町作成	13
図 2	王寺町の地形区分		王寺町作成	13
図 3	西安寺跡周辺の遺跡	1/50,000	王寺町作成、下図は国土地理院が昭和59年(1984)に発行した地形図「大阪東南部」をモノクロにして使用	15
図 4	『大和国条里復原図』関係部分	1/10,000	奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』奈良県教育委員会、1980年	19
図 5	石田氏が想定した伽藍配置		石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会、1936年	23
表 1	西安寺跡におけるこれまでの発掘調査		王寺町作成	24
図 6	西安寺跡発掘調査位置図	1/500	王寺町作成、下図は王寺町下水道台帳の地形図を使用	25
表 2	各次の調査報告との層序対照		王寺町作成	32, 33
図 7	基本層序模式図	任意	王寺町作成	32, 33
図 8	塔跡調査位置図	1/250	王寺町作成	39
図 9	塔基壇外装立面図	1/50	王寺町作成	44
図 10	塔遺構平面図	1/100	王寺町作成	45
図 11	塔土層断面図	1/50	王寺町作成	46
図 12	塔北面基壇外周土層断面図	1/50	王寺町作成	47
図 13	塔4層及び6層上面遺構平面図	1/100	王寺町作成	47
図 14	金堂跡調査位置図	1/250	王寺町作成	52
図 15	金堂遺構平面図	1/100	王寺町作成	54
図 16	金堂基壇外装立面図	1/50	王寺町作成	55
図 17	金堂土層断面図	1/50	王寺町作成	58
図 18	金堂基壇外装土層断面図	1/50	王寺町作成	60, 61
図 19	南面基壇外周の瓦出土状況平面図	1/50	王寺町作成	62
図 20	回廊跡調査位置図	1/500	王寺町作成	70
図 21	東回廊遺構平面図及び土層断面図	1/100	王寺町作成	70
図 22	塔基壇南面から南回廊遺構平面図及び土層断面図	1/50	王寺町作成	71
図 23	金堂北方の調査位置図	1/500	王寺町作成	77
図 24	木製灯籠の遺構平面図及び土層断面図	1/25	王寺町作成	78
図 25	金堂北方の遺構平面図及び土層断面図	1/100	王寺町作成	80
表 3	瓦の成形・調整技法の用語		王寺町作成	85
図 26	軒丸瓦実測図	1/4	王寺町作成	96-101
表 4	単弁1型式の範傷進行		王寺町作成	97

No.	タイトル	スケール	作成・引用	ページ
表 5	軒丸瓦の型式一覧		王寺町作成	102, 103
図 27	軒平瓦実測図	1/6	王寺町作成	114-120
図 28	軒平瓦実測図	1/4	王寺町作成	121
表 6	軒平瓦の型式一覧		王寺町作成	122, 123
表 7	丸瓦・平瓦の分類記号と基準		王寺町作成	124
図 29	行基丸瓦実測図	1/6	王寺町作成	126, 128
図 30	玉縁丸瓦実測図	1/6	王寺町作成	130, 132
図 31	桶巻作り平瓦実測図	1/6	王寺町作成	136, 138
図 32	一枚作り平瓦実測図	1/6	王寺町作成	140
表 8	鬼瓦の分類と出土点数		王寺町作成	143
図 33	A種蓮華文鬼瓦の復元案	1/4	王寺町作成	144
図 34	鷗尾・鬼瓦実測図	1/4	王寺町作成	150, 151
図 35	隅木蓋瓦・博実測図	1/6	王寺町作成	152
図 36	線刻・刻印瓦拓本	およそ 1/2	王寺町作成	153
図 37	土器実測図	1/4	王寺町作成	156
図 38	金属製品実測図	1/2, 1/4, 1/5	王寺町作成	164
表 9	軒丸瓦・軒平瓦型式ごとの層別出土数		王寺町作成	168, 169
表 10	西安寺造営に伴う瓦の変遷		王寺町作成	174, 175
図 39	西安寺の立地	1/5,000	王寺町作成、下図は昭和33年(1958)測図「王寺町都市計画図」を使用	176
図 40	塔と金堂の寸法復元	1/200	王寺町作成	177
図 41	西安寺跡伽藍平面図	1/200	王寺町作成	178, 179
表 11	塔・金堂規模の比較		王寺町作成	181
図 42	西安寺の推定寺域	1/1,000	王寺町作成、下図は王寺町下水道台帳の地形図を使用	185
図 43	大和川周辺の飛鳥時代寺院	1/50,000	王寺町作成、下図は国土地理院が昭和59年(1984)に発行した地形図「大阪東南部」を使用	186
図 44	穴太廃寺出土三重弧紋軒平瓦	1/6	滋賀県教育委員会編『一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書IV』財団法人滋賀県文化財保護協会、2001年	195
図 45	梶原瓦窯出土三重弧紋軒平瓦	1/6	名神高速道路内遺跡調査会編『中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う梶原瓦窯跡発掘調査報告書』名神高速道路内遺跡調査会、1997年	195
図 46	虚空蔵寺窯出土均整唐草紋軒平瓦	1/6	真野和夫「豊前の法隆寺式軒瓦」(『古代瓦研究IV—法隆寺式軒瓦の成立と展開—』2009年)	195
図 47	図解 山田寺出土四重弧紋軒平瓦の製作工程		大脇潔氏作成	197

No	タイトル	スケール	作成・引用	ページ
表 12	基壇外装石材の石種と粒径		奥田尚氏作成	203
表 13	出土柱材（木製灯籠）の樹種		福田さよ子氏作成	205
図 48	サンプルの採取箇所		福田さよ子氏作成	206
図 49	出土柱材（木製灯籠）の樹種顕微鏡写真		福田さよ子氏作成	206, 207

4 掲載写真一覧

No	タイトル	撮影・提供	ページ
中表紙	舟戸神社（北から）	王寺町撮影	1
写真 1	塔東面の側柱礎石列（第3次南から）	王寺町撮影	3
写真 2	金堂東面の側柱礎石列（第4次北から）	王寺町撮影	4
写真 3	塔基壇と礎石（第7次北から）	王寺町撮影	5
写真 4	金堂基壇南面からの瓦出土状況（第8次南から）	王寺町撮影	6
写真 5	西安寺跡周辺航空写真（南から）	王寺町撮影	16
写真 6	西安寺跡周辺航空写真（東から）	王寺町撮影	16
写真 7	西安寺跡周辺航空写真（北から）	王寺町撮影	17
写真 8	西安寺跡周辺航空写真（西から）	王寺町撮影	17
写真 9	『大乘院寺社雑事記』文明 11 年 5 月 13 日条	国立公文書館デジタルアーカイブ	19
写真 10	旧王寺北小学校内の礎石	王寺町撮影	23
写真 11	正光寺の礎石	王寺町撮影	23
写真 12	第3次調査で初めて確認された西安寺の礎石（塔跡）	王寺町撮影	26
写真 13	第4次調査の金堂跡礎石検出作業	王寺町撮影	26
写真 14	第5次調査区と舟戸神社	王寺町撮影	28
写真 15	第6次調査の古代溝と近代造成通路	王寺町撮影	28
写真 16	第7次調査の現地説明会	王寺町撮影	28
写真 17	第8次調査の報道発表	王寺町撮影	28
写真 18	第9次調査の現地説明会	王寺町撮影	30
写真 19	第10次調査の現地説明会	王寺町撮影	30
写真 20	第11次調査の保護砂による埋め戻し	王寺町撮影	30
写真 21	1層の表土と2層の神社造成土（第8次1区東壁）	王寺町撮影	34
写真 22	3層の瓦の带状堆積（第8次1区東壁）	王寺町撮影	34
写真 23	4層の炭・焼土（第3次北東から）	王寺町撮影	34
写真 24	4層の炭・焼土（第10次2区東壁）	王寺町撮影	34
写真 25	5層の塔修理整地土（第10次2区西壁）	王寺町撮影	34
写真 26	6層の水成堆積砂層（第8次1区東壁）	王寺町撮影	34

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 27	7層の金堂廃絶時堆積（第9次3区南壁・東壁）	王寺町撮影	35
写真 28	8層の南回廊雨落溝埋没後堆積（第10次2区東壁）	王寺町撮影	35
写真 29	9層の金堂基壇外装改修（第11次1区西壁）	王寺町撮影	35
写真 30	10層の塔基壇外周整地土（第10次2区東壁）	王寺町撮影	35
写真 31	11層の南回廊基壇土（第10次2区東壁）	王寺町撮影	35
写真 32	12層の版築状整地土（第9次1区西壁）	王寺町撮影	35
写真 33	13層の塔基壇土（第3次1区北東から）	王寺町撮影	36
写真 34	14層の金堂基壇版築（第4次南から）	王寺町撮影	36
写真 35	14層の金堂基壇版築（第4次東壁・南壁）	王寺町撮影	36
写真 36	15層の地業盛土（第10次1区南壁）	王寺町撮影	36
写真 37	16層の自然流路（第9次1区西壁）	王寺町撮影	36
写真 38	17層の地山（第6次2区北西から）	王寺町撮影	36
写真 39	塔心礎・四天柱採取穴（第3次1区西から）	王寺町撮影	39
写真 40	塔東面の側柱礎石（第7次南西から）	王寺町撮影	40
写真 41	礎石 1（第7次西から）	王寺町撮影	41
写真 42	礎石 2（第7次西から）	王寺町撮影	41
写真 43	礎石 3（第7次西から）	王寺町撮影	41
写真 44	塔北面・東面の乱石積基壇外装（第7次北東から）	王寺町撮影	42
写真 45	塔南面の乱石積基壇外装（第10次2区南西から）	王寺町撮影	42
写真 46	塔北東面角の犬走り（第7次北東から）	王寺町撮影	48
写真 47	塔東面基壇外周の6層上面遺構（第7次南東から）	王寺町撮影	48
写真 48	基壇外装に挟まれた軒丸瓦（第7次南東から）	王寺町撮影	49
写真 49	塔基壇上に堆積する4層（第3次1区南東から）	王寺町撮影	50
写真 50	塔基壇上に堆積する4層（第7次南から）	王寺町撮影	50
写真 51	塔基壇上の焼土（第3次1区南から）	王寺町撮影	50
写真 52	塔基壇（第7次北東から）	王寺町撮影	51
写真 53	塔の調査前（第7次南東から）	王寺町撮影	51
写真 54	金堂基壇版築（第4次南から）	王寺町撮影	53
写真 55	礎石 1（第4次西から）	王寺町撮影	53
写真 56	礎石 1 掘付穴（第4次東から）	王寺町撮影	53
写真 57	礎石 2（第4次西から）	王寺町撮影	53
写真 58	礎石採取穴 1（第4次南から）	王寺町撮影	53
写真 59	礎石採取穴 2（第8次1区南西から）	王寺町撮影	53
写真 60	礎石採取穴 4 の土層断面（第8次1区西壁）	王寺町撮影	53

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 61	礎石抜取穴5 (第8次4区北から)	王寺町撮影	53
写真 62	金堂基壇と東面側柱列 (第8次1区・2区・4区北から)	王寺町撮影	56
写真 63	基壇西端付近の削平状況 (第8次3区南西から)	王寺町撮影	59
写真 64	土坑1 (第4次南から)	王寺町撮影	59
写真 65	北面の基壇外装と断ち割り (第11次北から)	王寺町撮影	59
写真 66	外装改修による基壇版築の切断部 (第11次北東から)	王寺町撮影	59
写真 67	金堂基壇版築と乱石積による版築 (第11次北西から)	王寺町撮影	59
写真 68	金堂基壇と東面側柱列 (第8次1区・2区南から)	王寺町撮影	63
写真 69	南面の基壇外周で組み合わさって出土した丸瓦 (第8次1区北西から)	王寺町撮影	64
写真 70	南面の基壇外周で瓦当面を基壇方向に向けて出土した唐草4型式の軒平瓦 (第9次3区北から)	王寺町撮影	64
写真 71	南面の基壇外周 (第9次3区東から)	王寺町撮影	65
写真 72	東面の乱石積基壇外装 (第8次2区東から)	王寺町撮影	65
写真 73	北面の乱石積基壇外装と土坡 (第8次1区北から)	王寺町撮影	65
写真 74	北面の乱石積基壇外装と土坡 (第11次1区北東から)	王寺町撮影	66
写真 75	足場穴1 (第8次1区南から)	王寺町撮影	66
写真 76	東回廊の基壇と雨落溝 (第9次2区東から)	王寺町撮影	69
写真 77	西回廊想定地の調査 (第10次1区東から)	王寺町撮影	69
写真 78	塔基壇南面と南回廊基壇 (第10次2区北から)	王寺町撮影	69
写真 79	西回廊想定地内の地外 (第6次2区・3区東から)	王寺町撮影	69
写真 80	東回廊の基壇と雨落溝 (第9次2区西から)	王寺町撮影	72
写真 81	東回廊の基壇と内側雨落溝 (第9次2区南東から)	王寺町撮影	73
写真 82	南回廊の基壇と内側雨落溝 (第10次2区北から)	王寺町撮影	73
写真 83	金堂と東回廊の調査前 (第8次東から)	王寺町撮影	74
写真 84	金堂と金堂北方の調査前 (第8次北から)	王寺町撮影	74
写真 85	推定西回廊の調査前 (第10次1区北から)	王寺町撮影	75
写真 86	推定西回廊の調査前 (第10次1区南から)	王寺町撮影	75
写真 87	南回廊の調査前 (第10次2区北から)	王寺町撮影	75
写真 88	金堂北方の調査前 (第9次1区南から)	王寺町撮影	77
写真 89	金堂北方の自然流路堆積 (第9次1区北東から)	王寺町撮影	77
写真 90	金堂北方の版築状整地 (第9次1区西壁)	王寺町撮影	77
写真 91	木製灯籠の検出状況 (第9次1区北西から)	王寺町撮影	78
写真 92	木製灯籠の遺構断ち割り状況 (第9次1区北西から)	王寺町撮影	79
写真 93	木製灯籠の遺構断ち割り状況 (第9次1区東から)	王寺町撮影	79

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 94	柱穴1 (第9次1区北西から)	王寺町撮影	81
写真 95	溝 (第9次1区南西から)	王寺町撮影	81
写真 96	柱穴2 (第9次1区西から)	王寺町撮影	81
写真 97	柱穴3 (第9次1区西から)	王寺町撮影	81
写真 98	金堂北方の柱穴列と木製灯籠 (第9次1区北から)	王寺町撮影	82
写真 99	素弁1型式	王寺町撮影	87
写真 100	素弁2型式	王寺町撮影	87
写真 101	素弁3型式	王寺町撮影	87
写真 102	素弁4型式	王寺町撮影	87
写真 103	素弁5型式	王寺町撮影	87
写真 104	単弁1a型式	王寺町撮影	89
写真 105	単弁1b型式	王寺町撮影	89
写真 106	単弁2型式	王寺町撮影	89
写真 107	単弁3型式	王寺町撮影	89
写真 108	単弁4a型式	王寺町撮影、奈良県立橿原考古学研究所蔵	89
写真 109	単弁4b型式	王寺町撮影	89
写真 110	単弁5型式	王寺町撮影	91
写真 111	忍蓮1型式	王寺町撮影	91
写真 112	複弁1型式	王寺町撮影	91
写真 113	重圏1型式	王寺町撮影	91
写真 114	梵字1型式	王寺町撮影	91
写真 115	左二巴1型式	保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1937年、図版第61	93
写真 116	左二巴2型式	王寺町撮影	93
写真 117	左三巴1型式	王寺町撮影	93
写真 118	左三巴2型式	王寺町撮影	93
写真 119	左三巴3型式	王寺町撮影	93
写真 120	左三巴4型式	王寺町撮影	93
写真 121	左三巴5型式	王寺町撮影	93
写真 122	左三巴6型式	王寺町撮影	95
写真 123	左三巴7型式	王寺町撮影	95
写真 124	右三巴1型式	王寺町撮影	95
写真 125	右三巴2型式	王寺町撮影	95
写真 126	右三巴3型式	王寺町撮影	95

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 127	右三巴 4 型式	王寺町撮影	95
写真 128	軒丸瓦の細部	王寺町撮影	104
写真 129	軒平瓦の細部	王寺町撮影	105
写真 130	無文 1 型式	王寺町撮影	107
写真 131	無文 2 型式	王寺町撮影	107
写真 132	無文 3 型式	王寺町撮影	107
写真 133	三重弧 1 型式	王寺町撮影	107
写真 134	三重弧 2 型式	王寺町撮影	107
写真 135	三重弧 3 型式	王寺町撮影	109
写真 136	三重弧 4 型式	王寺町撮影	109
写真 137	三重弧 5 型式	王寺町撮影	109
写真 138	三重弧 6 型式	王寺町撮影	109
写真 139	唐草 1 型式	王寺町撮影	109
写真 140	唐草 2 型式	王寺町撮影	109
写真 141	唐草 3 型式	王寺町撮影	109
写真 142	唐草 4a 型式	王寺町撮影	111
写真 143	唐草 4b 型式	王寺町撮影	111
写真 144	唐草 5 型式	王寺町撮影	111
写真 145	唐草 6 型式	王寺町撮影	111
写真 146	唐草 7 型式	王寺町撮影	113
写真 147	唐草 8 型式	王寺町撮影	113
写真 148	唐草 20 型式	王寺町撮影	113
写真 149	唐草 21 型式	王寺町撮影	113
写真 150	唐草 22 型式	王寺町撮影	113
写真 151	唐草 23 型式	王寺町撮影	113
写真 152	丸瓦 I B1-a	王寺町撮影	127
写真 153	丸瓦 I C1-a	王寺町撮影	127
写真 154	丸瓦 I C1-a	王寺町撮影	127
写真 155	丸瓦 I D-a1	王寺町撮影	129
写真 156	丸瓦 I D-a1	王寺町撮影	129
写真 157	丸瓦 I D-a2	王寺町撮影	129
写真 158	丸瓦 II C1-a1	王寺町撮影	131
写真 159	丸瓦 II C1-a2	王寺町撮影	131
写真 160	丸瓦 II C1-a3	王寺町撮影	131

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 161	丸瓦 II C1-b	王寺町撮影	133
写真 162	丸瓦 II D-a1	王寺町撮影	133
写真 163	丸瓦 II D-a2	王寺町撮影	133
写真 164	平瓦 I A1-a	王寺町撮影	137
写真 165	平瓦 I A2-b	王寺町撮影	137
写真 166	平瓦 I B1-c	王寺町撮影	137
写真 167	平瓦 I C1-a	王寺町撮影	137
写真 168	平瓦 I C1-a	王寺町撮影	137
写真 169	平瓦 I D-a1	王寺町撮影	139
写真 170	平瓦 I D-a1	王寺町撮影	139
写真 171	平瓦 I D-a2	王寺町撮影	139
写真 172	平瓦 II A3-c	王寺町撮影	141
写真 173	平瓦 II C1-c1	王寺町撮影	141
写真 174	平瓦 II C1-c2	王寺町撮影	141
写真 175	平瓦 II C2-c	王寺町撮影	141
写真 176	平瓦 II C3-c	王寺町撮影	141
写真 177	平瓦の細部	王寺町撮影	142
写真 178	鷗尾	王寺町撮影	143
写真 179	鬼瓦 A 種 (蓮華文鬼瓦)	王寺町撮影	144
写真 180	鬼瓦 B ~ D 種	王寺町撮影	144
写真 181	鬼瓦 D 種・E 種	王寺町撮影	145
写真 182	隅木蓋瓦 A 種・B 種	王寺町撮影	146
写真 183	塼	王寺町撮影	147
写真 184	線刻・刻印瓦	王寺町撮影	148, 149
写真 185	4 層出土土器	王寺町撮影	155
写真 186	5 層出土土器	王寺町撮影	155
写真 187	6 層出土土器	王寺町撮影	155
写真 188	7 層出土土器	王寺町撮影	155
写真 189	8 層出土土器	王寺町撮影	157
写真 190	東回廊雨落溝出土土器	王寺町撮影	157
写真 191	12 層出土土器	王寺町撮影	157
写真 192	木製灯籠掘方出土土器	王寺町撮影	157
写真 193	第 5 次調査出土土器	王寺町撮影	159
写真 194	金属製品	王寺町撮影	161

No	タイトル	撮影・提供	ページ
写真 195	炭化した塔の建築部材 1	王寺町撮影	162
写真 196	炭化した塔の建築部材 2	王寺町撮影	162
写真 197	被熱した様々な壁土	王寺町撮影	163
写真 198	加工痕跡のある凝灰岩	王寺町撮影	163
写真 199	塔建立の単弁 2 型式と三重弧 3 型式	王寺町撮影	171
写真 200	北向きに祀られる舟戸神社	王寺町撮影	182
写真 201	昭和 23 年（1948）の西安寺跡周辺	国土地理院ウェブサイトの写真に加筆	187
写真 202	平成 20 年（2008）の西安寺跡周辺	国土地理院ウェブサイトの写真に加筆	187
写真 203	片岡王寺の系譜を引く放光寺	王寺町撮影	188
写真 204	片岡王寺跡出土の片岡王寺式軒瓦	奈良県立橿原考古学研究所提供	189
写真 205	出土柱材（木製灯籠）からのサンプル採取	王寺町撮影	208

5 参考文献

安堵町史編纂委員会編『安堵町史』史料編下巻、安堵町、1991 年

飯田瑞穂『聖徳太子伝の研究』飯田瑞穂著作集 1、吉川弘文館、2000 年

斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター編『史跡中宮寺跡発掘調査報告書』斑鳩町文化財調査報告書第 11 集、斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター、2013 年

斑鳩町史編さん委員会編『新修斑鳩町史』上巻、斑鳩町、2022 年

石田茂作『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会、1936 年

石田茂作「西安寺址」（保井芳太郎編『大和王寺文化史論』大和史学会、1937 年）

伊藤勇輔「北葛城郡王寺町西安寺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報 1984 年度』奈良県立橿原考古学研究所、1985 年）

上原真人「燈籠始原－石が先か、木が先か－」（『辻尾榮市氏古稀記念歴史・民族・考古学論攷（I）』大阪・郵政考古学会、2019 年）

王寺町編『西安寺跡第 8 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 15 集、王寺町、2020 年

王寺町編『西安寺跡第 9 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 16 集、王寺町、2021 年

王寺町編『西安寺跡第 10 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 17 集、王寺町、2022 年

王寺町編『西安寺跡第 11 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 18 集、王寺町、2023 年

王寺町教育委員会編『舟戸・西岡遺跡第 5 次、片岡王寺第 8 次・第 9 次―2007 年度発掘調査報告書―』王寺町文化財調査報告書第 9 集、王寺町教育委員会、2009 年

王寺町教育委員会編『西安寺跡第 3 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 11 集、王寺町教育委員会、2016 年

王寺町教育委員会編『西安寺跡第 4 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 12 集、王寺町教育委員会、2017 年

王寺町教育委員会編『西安寺跡第 5 次・第 6 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 13 集、王寺町教育委員会、2018 年

王寺町教育委員会編『西安寺跡第 7 次発掘調査報告書』王寺町文化財調査報告書第 14 集、王寺町教育委員会、2019 年

王寺町史編集委員会編『王寺町史』王寺町、1969 年

王寺町史編集委員会編『新訂王寺町史』本文編・資料編、王寺町、2000 年

太田博太郎編『塔婆 I』日本建築史基礎資料集成 11、中央公論美術出版、1984 年

大脇潔「鷓尾の変遷」（『瓦塔・鷓尾』東京国立博物館所蔵重要考古資料学術調査報告書、東京国立博物館 2002 年）

大脇潔「7 世紀の瓦生産―花組・星組から荒坂組まで―」（『古代』第 141 号、早稲田大学考古学会、2018 年）

岡島永昌「保井芳太郎のコレクション形成とその背景」（久留島浩ほか編『文人世界の光芒と古都奈良―大和の生き字引・水木要太郎―』思文閣出版、2009 年）

岡島永昌「西安寺からみた大和川の古代寺院―法隆寺若草伽藍同范瓦の検討をつうじて―」（『聖徳』第 244 号、聖徳宗教学部、2020 年）

香芝市二上山博物館編『尼寺廃寺 I ―北廃寺の調査―』香芝市文化財調査報告書第 4 集、香芝市教育委員会、2003 年

香芝市教育委員会編『尼寺廃寺 II』香芝市文化財調査報告書第 16 集、香芝市教育委員会、2016 年

川越俊一「大和地方出土の瓦器碗をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会、

1983 年）

河野一也「相模宗元寺の西安寺式鏡瓦について」（『日本考古学協会第 66 回総会研究発表要旨』日本考古学協会、2000 年）

木村捷三郎「王寺出土の古瓦」（保井芳太郎編『大和王寺文化史論』大和史学会、1937 年）

京都大学文学部国史研究室『一乗院文書（抄）―京都大学国史研究室蔵―』京都大学文学部国史研究室、1981 年

國平健三「忍冬交飾蓮華文軒丸瓦をめぐる」（『瓦が語る―かながわの古代寺院』神奈川県立博物館、2008 年）

小林謙一・佐川正敏「平安時代～近世の軒丸瓦」（法隆寺昭和資財帳編纂所編『伊珂留我―法隆寺昭和資財帳調査概報― 10』小学館、1989 年

佐原真「平瓦桶巻作り」（『考古学雑誌』第 58 巻第 2 号、日本考古学会、1972 年）

三郷町史編集委員会編『三郷町史』上巻、三郷町役場、1976 年

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」（『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立 30 周年記念論文集刊行会、1983 年）

田中重久『聖徳太子御聖蹟の研究』全国書房、1944 年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店、1981 年

中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社、1995 年

角田文衛「西安寺出土陶製骨壺について」（保井芳太郎編『大和王寺文化史論』大和史学会、1937 年）

奈良県立橿原考古学研究所編『大和国条里復原図』奈良県教育委員会、1980 年

奈良県立橿原考古学研究所編『三郷町平陸寺―（付）奈良市高畑町八王子神社出土懸仏―』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第 47 冊、奈良県立橿原考古学研究所、1984 年

奈良県立橿原考古学研究所編『長林寺』河合町文化財調査報告第 3 集、河合町教育委員会、1990 年

奈良県立橿原考古学研究所編『片岡王寺跡・達磨寺旧境内』奈良県文化財調査報告書第 159 集、奈良県立橿原考古学研究所、2013 年

奈良県橿原考古学研究所附属博物館編『蓮華百相―瓦からみた初期寺院の成立と展開―』橿原考古学研究所附属博物館特別展図録第 51 冊、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1999 年

奈良国立文化財研究所『飛鳥寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第 5 冊、奈良国立文化財研究所、1958 年

奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告Ⅶ―内裏北外郭の調査―』奈良国立文化財研究所学報第 26 冊、奈良国立文化財研究所、1976 年

奈良国立文化財研究所編『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ―藤原宮西方官衙地域の調査―』奈良国立文化財研究所学報第 31 冊、奈良国立文化財研究所、1978 年

奈良国立文化財研究所編『葉師寺発掘調査報告書』奈良国立文化財研究所学報第 45 冊、奈良国立文化財研究所、1987 年

奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ―内裏の調査Ⅱ―』奈良文化財研究所学報第 50 冊、奈良国立文化財研究所、1991 年

奈良国立文化財研究所ほか編『平城京・藤原京出土軒瓦型式一覧』奈良国立文化財研究所、1996 年

奈良市埋蔵文化財調査センター編『南都出土中近世土器資料集―奈良町高天町遺跡（HJ 第 559 次調査）出土資料―』奈良市埋蔵文化財センター資料№.05、奈良市教育委員会、2014 年

奈良文化財研究所編『東アジア古代寺址比較研究（Ⅱ）―金堂址編―（日本語版）』国立扶余文化財研究所学術研究叢書第 54 輯、奈良文化財研究所、2015 年

奈良文化財研究所編『韓・中・日古代寺址比較研究（Ⅰ）―木塔址編―（日本語版）』国立扶余文化財研究所学術研究叢書第 49 輯、奈良文化財研究所、2017 年

奈良文化財研究所編『飛鳥池遺跡発掘調査報告 本文編〔Ⅰ〕―生産工房関係遺物―』奈良文化財研究所学報第 71 冊、奈良文化財研究所、2021 年

奈良文化財研究所都城発掘調査部考古第 2 研究室編『飛鳥時代の土器編年再考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会共催シンポジウム、奈良文化財研究所・歴史土器研究会、2019 年

花谷浩「飛鳥寺軒瓦拾遺」（『奈良国立文化財研究所年報 1995』奈良国立文化財研究所、1996 年）

原田憲二郎「大安寺旧境内から出土した平安時代以降の軒瓦」（『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成 18（2006）年度』奈良市教育委員会、2009 年）

原田憲二郎「平城京の重圏文軒丸瓦」（『古代瓦研究Ⅳ - 大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開―重圏文系軒瓦の展開―』古代瓦研究会、2014 年

平林章仁『七世紀の古代史―王宮・クラ・寺院―』白水社、2002 年

法隆寺昭和資財帳編集委員会編『法隆寺の至宝』第 15 巻瓦、小学館、1992 年

星野猷二「鏡瓦製作と分割型」（『考古学雑誌』第 67 巻第 2 号、日本考古学会、1981 年）

毛利光俊彦「日本古代の鬼面文鬼瓦― 8 世紀を中心として―」（『研究論集Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報第 38 冊、奈良国立文化財研究所、1980 年）

毛利光俊彦「軒丸瓦の製作技法に関する一考察―範型と枷型―」（『畿内と東国の瓦』京都国立博物館、1990 年）

保井芳太郎『大和上代寺院志』大和史学会、1932年

藪中五百樹「平安時代に於ける興福寺の造営と瓦」（『仏教芸術 194』毎日新聞社、1991年）

山崎信二『中世瓦の研究』奈良国立文化財研究所学報第59冊、奈良文化財研究所、2000年

山田幸一『壁』ものと人間の文化史45、法政大学出版、1981年

吉川真司「片岡四寺考証—片岡王寺・西安寺・尼寺南北廡寺—」（菱田哲郎編『聖地霊場の成立についての分野横断的研究』京都府立大学文化遺産叢書第25集、京都府立大学文学部歴史学科、2022年）

吉川敏子「片岡王寺創建者についての考察」（『文化財学報』第34集、奈良大学文学部文化財学科、2016年）

渡辺丈彦「平城宮の重圏文軒瓦」（『古代瓦研究Ⅳ - 大官大寺式・興福寺式・鴻臚館式軒瓦の展開—重圏文系軒瓦の展開—』古代瓦研究会、2014年）

報告書抄録

ふりがな	さいあんじあととはくつちょうさほうこくしょ ふなとじんじゃけいだいへん							
書名	西安寺跡発掘調査報告書—舟戸神社境内編—							
シリーズ名	王寺町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	福井彩乃、岡島永昌、櫻井恵、大脇潔、奥田尚、福田さよ子							
編集機関	王寺町							
所在地	〒636-0002 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号							
発行年月日	令和5（西暦2023）年3月30日							
しゅうろくいせきめい 収録遺跡名	しやういち 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村番号	遺跡番号					
さいあんじあと 西安寺跡	なげんきたかつらぎ 奈良県北葛城郡 王寺町舟戸2丁目	29425	10B1	34° 35′ 35″	135° 42′ 46″	(第3次) 2015.2.16.～3.12. (第4次) 2016.2.1.～2.24. (第5次) 2016.6.20.～7.4. (第6次) 2017.3.6.～3.25. (第7次) 2017.11.6.～12.26. (第8次) 2018.11.1.～12.28. (第9次) 2019.11.6.～12.20. (第10次) 2020.11.9.～12.17. (第11次) 2022.1.24.～2.22.	28㎡ 23㎡ 56㎡ 30㎡ 70㎡ 58㎡ 85㎡ 20㎡ 9㎡	範囲確認
しゅうろくいせきめい 収録遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
さいあんじあと 西安寺跡	寺院	古代～中世	盛土地業、塔、金堂、乱石積基壇外装、回廊、雨落溝、版築状整地、	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼、焼土、凝灰岩、土師器、須恵器、瓦器、炭化材、相輪部材		範囲確認調査。調査後は砂で保護して埋め戻し。		

西安寺跡発掘調査報告書
—舟戸神社境内編—

王寺町文化財調査報告書 第19集

2023年3月30日

編集 王 寺 町
発行 奈良県北葛城郡王寺町王寺2丁目1番23号

印刷 株式会社 近畿印刷センター
